山元町文化財調査報告書第 12 集

谷 原 遺 跡 Ⅰ

－町道 24 号山下山寺線道路改良工事に係る発掘調査報告書－

谷原遺跡 1 次調査　A 区で発見された平安時代の大溝跡（東から撮影）

平 成 ２８ 年 ５ 月

宮城県亘理郡山元町教育委員会

序　　文

山元町は古くから身近に豊かな海と山を擁し、人々は恵まれた自然の中で生活を営んできました。その足跡は埋蔵文化財として、町内各地に散在しております。埋蔵文化財は、文献などには記録されていない地域の歴史を解明できる貴重な歴史資料であります。これらの遺跡は、先人が残した生活の証でもあり、かけがえのない文化遺産として将来の人々に継承するとともに、現在の生活の中において積極的に活用していくことが、私たちに課せられた責務であると考えております。

しかし、土地利用と深く結びつきの強い埋蔵文化財は、絶えず開発事業によって破壊・消滅の危機にさらされております。このため、当教育委員会としては、開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

今回の谷原遺跡の調査は、山元町山寺地区の町道 24 号山下山寺線道路改良工事に際し、事業主との協議・調整に基づき、平成 20 年度に当教育委員会が実施したものであります。今回の発掘によって、縄文時代・古代・中世と考えられる人々の生活の跡が確認され、山元町の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、この調査成果を収録したもので、地域における歴史解明の資料として広く活用され、埋蔵文化財の保護と理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力をいただいた関係機関の方々、また、直接調査にあたられました皆様に心から感謝申し上げます。

平成２８年５月

山元町教育委員会
教育長　森　憲一

例　　言

1．本書は、宮城県亘理郡山元町山寺字谷原地内に所在する谷原遺跡（1 次調査）の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の発掘調査は、町道24号山下山寺線道路改良工事に伴う事前調査として行ったものである。発掘調査・整理作業・報告書作成に係る一連の業務は、調査原因となった事業主体者である山元町まちづくり整備課から執行委任をうけた平成 20 ～ 28 年度に業務委託を受けた山元町教育委員会が実施した。

3．本遺跡の発掘調査と整理作業は、山元町教育委員会が主体となり、文化財担当部局のある生涯学習課が担当した。谷原遺跡（1 次調査 ）の現地発掘調査を行った平成 20 年度・報告書刊行を行った平成 28 年度の上半期の職員の体制は下記のとおりである。

［ 平成 20 年度 ］

教　育　長　　横山 俊二
課　　長　　阿部 英一
班　　長　　岩佐 洋一
主　　査　　齋藤 哲
主　　事　　菊地 里奈　　森 慎一郎　　山田 隆博★
発掘作業員　　阿部 大、太田 千佳子、小野 正文、作間 拓也、関沼 邦彦、寺嶋 嗣徳、寺嶋 満、増川 悠記、三浦 利伸、三戸部 美恵
整理作業員　　太田 千佳子、小野 正文、作間 拓也、関沼 邦彦、寺嶋 嗣徳、寺嶋 満、増川 悠記、三浦 利伸、三戸部 美恵

［ 平成 28 年度上半期 ］

教　育　長　　森　憲一
課　　長　　齋藤 三郎
班　　長　　阿部 正憲
副　参　事　　小淵 忠司（任期付職員）
主　　事　　山田 隆博★
主　　事　　清水 勇樹（任期付職員）
技術副参事　　星野 惠美（福岡県福岡市派遣 /H28.4 ～ 9）
技術　主査　　城門 義廣★（福岡県 派遣 /H27.4 ～ H28. 9 ）　　※★印：現地調査担当職員
調査補助員　　佐伯 奈弓★、千尋 美紀
整理作業員　　渡邊 洋子★

4．発掘調査、報告書作成に際して、以下の方々からご指導・ご助言・ご協力を賜った。
村田 晃一（宮城県教育庁文化財保護課）、佐藤 洋（仙台市教育委員会）、日下 和寿（白石市教育委員会）
藤田 祐（青森県埋蔵文化財調査センター）、宮城県教育庁文化財保護課、㈱クリワダ、山寺区（敬称略）

5．石器の石材については、実測者が肉眼観察を行った。

6．陶器の産地については、仙台市教育委員会の佐藤洋氏にご教示いただいた。

7．現地発掘調査について、指揮・監督・写真撮影・平面図作成・土層断面図の作成を山田が担当し、現地作業を発掘作業員が行った。

8．本書の整理・作成にあたり、遺物の洗浄・注記・接合・復元・拓本は、山田・佐伯が中心となり整理作業員がこれを助けた。遺物抽出については山田が担当した。
遺物の実測図作成は山田、土器実測図のトレースは佐伯、石器実測図のトレースは城門が行った。
遺構整理については、全般を山田が担当し、断面図トレース、データ入力・校正、図面修正・データ照合を佐伯・渡邊が行った。遺物の写真撮影・加工は㈱アートプロフィールに委託した。

９．本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ｘ系による。調査区の測量原点は以下のとおりである。方位は座標北を表している。なお、今回使用した座標値は、東日本大震災前の値を基本としており、震災後のＸ・Ｙ座標の補正データは（　）内の数値のとおりである。
（基準点の位置については第６図参照）。

Y16:X=-225592.958（-225593.6314）　Y=2919.722（2922.7699）　Z=25.597m（標高値）

※補正データの計算は、地殻変動に伴う座標値補正を行う座標補正ソフトウェア「PatchJGDtouhokutaiheiyouoki2011.par」による。

10．本書の第２図は、土地分類基本調査における 1/50,000 地形分類図「角田」をもとに作成したものである。

11．本書の第３図は、国土交通省国土地理院発行の 1/50,000 の地形図を複製して作成したものである。

12．本書で使用した土色の記述にあたっては、「新版標準土色帖 2010 年版」（小山・竹原 1973）を参照した。

13．本書で使用した遺構略号は、「発掘調査の手引き」（文化庁文化財部記念物課 2010）を参考にし、以下の通りとした。

ＳＢ：掘立柱建物跡、ＳＫ：土坑、ＳＤ：溝跡、ＳＸ：焼成遺構、Ｐ：柱穴・小穴

14．出土遺物の登録番号は、以下の通りとした。

Ａ：縄文土器、Ｃ：土師器、Ｅ：須恵器、Ｉ：中世陶器、Ｋ：石器

15．遺構・遺物実測図の主な縮尺は下記のとおりで、それぞれ図中にスケールを付して示した。

調査区全体図：1/500、調査区部分図：1/100・1/200、掘立柱建物跡：1/100・1/200、
溝跡：1/80、土坑：1/40、焼成遺構：1/40、断面図：1/40・1/50、遺物実測図：土器類 1/3、石器 2/3

16．遺物実測図において、土器類の実測図については、須恵器断面を黒塗り、その他の土器を白抜きとした。また、黒色処理が施された土師器については、スクリーントーンにより示した。

17．本書の出土遺物のうち、土師器については、成形にロクロを使用したものをロクロ成形・ロクロ土師器、ロクロを使用していないものを非ロクロ成形・非ロクロ土師器と呼ぶこととした。

18．基本層序は、ローマ数字とアルファベット小文字を組み合わせて表記した。

19．標高は、水準点を基にした海抜高度で示した。

20．遺構内の傾斜の部分は「 ┯┯ 」、後世の撹乱は「撹」と表記し、その傾斜部は「 ╤ 」で示した。

21．その他、発掘調査の方法等については、第Ⅲ章第１節にまとめた。

22．本書の執筆・編集については、整理を担当した調査員の協議を経て、山田が執筆した。図版の版組は山田・佐伯・渡邊、編集は山田・佐伯が行った。

23．発掘調査に伴う出土遺物および写真等の調査記録資料については、山元町教育委員会が保管している。

調　査　要　項

遺　　跡　　名：**谷原（たにはら）遺跡**　（宮城県遺跡地名表登載番号 14067　遺跡記号 TH）
所　　在　　地：宮城県亘理郡山元町山寺字谷原
調 査 原 因：町道 24 号山下山寺線道路改良工事に係る本調査
調 査 期 間：平成 20(2008)年 10 月 21 日～12 月 18 日
調査対象面積：約 2,300 ㎡
調 査 面 積：本調査　約 1,885 ㎡
調 査 主 体：山元町教育委員会
調 査 担 当：山元町教育委員会生涯学習課
山田　隆博　【山元町教育委員会　生涯学習課　主事】
調 査 協 力：山元町まちづくり整備課、山寺区

目　　次

序文
例言・調査要項・目次・挿図目次・表目次
第Ⅰ章　遺跡の概要 …… 1
第１節　遺跡の位置と地理的環境 …… 1
第２節　周辺の遺跡 …… 1
第３節　谷原遺跡のこれまでの発掘調査 …… 9

第Ⅱ章　調査に至る経緯と経過 …… 10
第１節　発掘調査に至る経緯 …… 10
第２節　谷原遺跡(1 次調査)発掘調査の経過 …… 11
（１）確認調査の経過 …… 11
（２）本発掘調査の経過 …… 11
（３）整理・報告書作成作業の経過 …… 12

第Ⅲ章　発掘調査 …… 14
第１節　発掘調査の方法 …… 14
１．現地調査 …… 14
２．室内整理 …… 14
３．東日本大震災に伴う埋蔵文化財専門職員の自治法派遣・短期出張による支援 …… 15
第２節　基本層序 …… 16
第３節　発見された遺構と遺物の概要 …… 16
1.　掘立柱建物跡、その他の柱穴・ピット …… 26
（１）掘立柱建物跡 …… 26
（２）その他の柱穴・ピット …… 34
（３）掘立柱建物跡、その他の柱穴・ピット出土遺物 …… 45
２．溝跡・土坑・焼成遺構 …… 48
（１）溝跡 …… 50
（２）土坑 …… 55
（３）焼成遺構 …… 67
３．遺物包含層（基本層出土遺物） …… 70
（１）基本層Ⅲ層出土遺物 …… 71
（２）基本層Ⅴ層出土遺物 …… 71
（３）基本層Ⅶ層出土遺物 …… 71
４．遺構外出土遺物 …… 87

第Ⅳ章　総括 …… 88
第１節　出土遺物の特徴と時期 …… 88
１．縄文土器 …… 88
２．土師器・須恵器 …… 91
（１）土師器 …… 91
（２）須恵器 …… 92
（３）土師器・須恵器の所属時期 …… 94
３．中世陶器 …… 95
４．鉄製品・製鉄関連遺物 …… 96
５．石器 …… 96
第２節　検出遺構の特徴と時期 …… 97
１．今回の調査区(A～D 区)で検出した各遺構の時期 …… 97
（１）掘立柱建物跡、その他の柱穴・ピット …… 97
（２）溝跡 …… 97
（３）土坑 …… 98
（４）焼成遺構 …… 98
（５）まとめ …… 98
２．各時代の遺構の特徴と変遷 …… 99
（１）縄文時代の遺構 …… 99
（２）平安時代の遺構 …… 100
（３）中世の遺構 …… 100
第３節　まとめ …… 102

註
引用・参考文献
報告書抄録

挿　図　目　次

第　1　図　山元町と谷原遺跡の位置 …… 1
第　2　図　谷原遺跡及び山元町内の地形分類図 …… 2
第　3　図　谷原遺跡の位置と山元町内の遺跡分布 …… 4
第　4　図　谷原遺跡調査箇所 …… 13
第　5　図　谷原遺跡１次調査（A～D 区）基本層序 …… 17・18
第　6　図　谷原遺跡(1 次調査)　遺構配置図(全体図)…… 19・20
第 7-1 図　谷原遺跡(1 次調査)　遺構配置図(１)
－A・C 区①－ …… 21
第 7-2 図　谷原遺跡(1 次調査)　遺構配置図(２)
－A・C 区②－ …… 22
第 7-3 図　谷原遺跡(1 次調査)　遺構配置図(３)
－B・D 区①－ …… 23
第 7-4 図　谷原遺跡(1 次調査)　遺構配置図(４)
－B・D 区②－…… 24
第　8　図　谷原遺跡 A～D 区　調査区全景 …… 25
第　9　図　SB1～6 掘立柱建物跡　遺構配置図 …… 27
第 10 図　SB1 掘立柱建物跡 …… 28
第 11 図　SB2 掘立柱建物跡 …… 29
第 12 図　SB3 掘立柱建物跡 …… 30
第 13 図　SB4 掘立柱建物跡 …… 31
第 14 図　SB5 掘立柱建物跡 …… 32
第 15 図　SB6 掘立柱建物跡 …… 32
第 16 図　SB1～6 掘立柱建物跡(写真図版) …… 33
第 17-1 図　谷原遺跡(1 次調査)　その他の柱穴・ピット
遺構配置図（１）…… 36
第 17-2 図　谷原遺跡(1 次調査)　その他の柱穴・ピット
遺構配置図（２）…… 37
第 17-3 図　谷原遺跡(1 次調査)　その他の柱穴・ピット
遺構配置図（３）…… 38
第 17-4 図　谷原遺跡(1 次調査)　その他の柱穴・ピット
遺構配置図（４）…… 39
第 17-5 図　谷原遺跡(1 次調査)　その他の柱穴・ピット
遺構配置図（５）…… 40
第 18 図　その他のピット・柱穴　断面図（１）
－P1～84－ …… 41
第 19 図　その他のピット・柱穴　断面図（２）
－P86～132－ …… 42
第 20 図　その他のピット・柱穴　断面図（３）
－P133～166－ …… 43
第 21 図　その他のピット・柱穴（写真図版）…… 44
第 22 図　掘立柱建物跡、その他のピット・柱穴
出土遺物（１）…… 46
第 23 図　掘立柱建物跡、その他のピット・柱穴
出土遺物（２）…… 47
第 24 図　掘立柱建物跡、その他のピット・柱穴
出土遺物（写真図版）…… 47
第 25 図　谷原遺跡(1 次調査) SD・SK・SX 遺構配置図 …… 49
第 26 図　SD1・2 溝跡（１）…… 50
第 27 図　SD1・2 溝跡（２）…… 51
第 28 図　SD2 出土遺物 …… 52
第 29 図　SD1・2 溝跡（３）…… 53
第 30 図　SD3 溝跡 …… 54
第 31 図　SK1～3 土坑 …… 55
第 32 図　SK4 土坑 …… 56
第 33 図　SK5～7 土坑 …… 57
第 34 図　SK8 土坑 …… 58
第 35 図　SK9･10 土坑 …… 59
第 36 図　SK11・12 土坑 …… 60
第 37 図　SK13・14 土坑 …… 61
第 38 図　SK15 土坑 …… 62
第 39 図　SK16 土坑 …… 63
第 40 図　SK4・8・9・12～16 土坑出土遺物(写真図版) …… 64
第 41 図　SK1～8 土坑(写真図版) …… 65
第 42 図　SK9～16 土坑(写真図版) …… 66
第 43 図　SX1・2 焼成遺構 …… 67
第 44 図　SX3 焼成遺構（１）…… 68
第 45 図　SX3 焼成遺構（２）…… 69
第 46 図　SX3 焼成遺構（３）…… 69
第 47 図　基本層Ⅲ層出土遺物 …… 72
第 48 図　基本層Ⅴ層出土遺物（１）…… 73
第 49 図　基本層Ⅴ層出土遺物（２）…… 74
第 50 図　基本層Ⅴ層出土遺物（３）…… 75
第 51 図　基本層Ⅴ層出土遺物（４）…… 76
第 52 図　基本層Ⅴ層出土遺物（５）…… 77
第 53 図　基本層ⅥA 層出土遺物 …… 78
第 54 図　基本層Ⅶ層出土遺物（１）…… 78
第 55 図　基本層Ⅶ層出土遺物（２）…… 79
第 56 図　基本層Ⅶ層出土遺物（３）…… 80
第 57 図　基本層Ⅶ層出土遺物（４）…… 81
第 58 図　基本層Ⅶ層出土遺物（５）…… 82
第 59 図　基本層Ⅲ・Ⅴ層出土遺物(写真図版) …… 83
第 60 図　基本層Ⅴ層出土遺物(写真図版) …… 84
第 61 図　基本層Ⅴ・ⅥA・Ⅶa 層出土遺物(写真図版) …… 85
第 62 図　基本層Ⅶa・b 層出土遺物(写真図版) …… 86
第 63 図　遺構外出土遺物 …… 87
第 64 図　谷原遺跡(1 次調査)出土 主要縄文土器集成図 …… 89
第 65 図　谷原遺跡(1 次調査)出土 土師器集成図 …… 92
第 66 図　谷原遺跡(1 次調査)出土 須恵器集成図 …… 93
第 67 図　谷原遺跡(1 次調査)出土 中世陶器集成図 …… 95
第 68 図　谷原遺跡(1 次調査)出土 石器集成図 …… 96
第 69 図　谷原遺跡(1 次調査)縄文時代の遺構配置図 …… 99
第 70 図　谷原遺跡(1 次調査)平安時代の遺構配置図 ……101

表　目　次

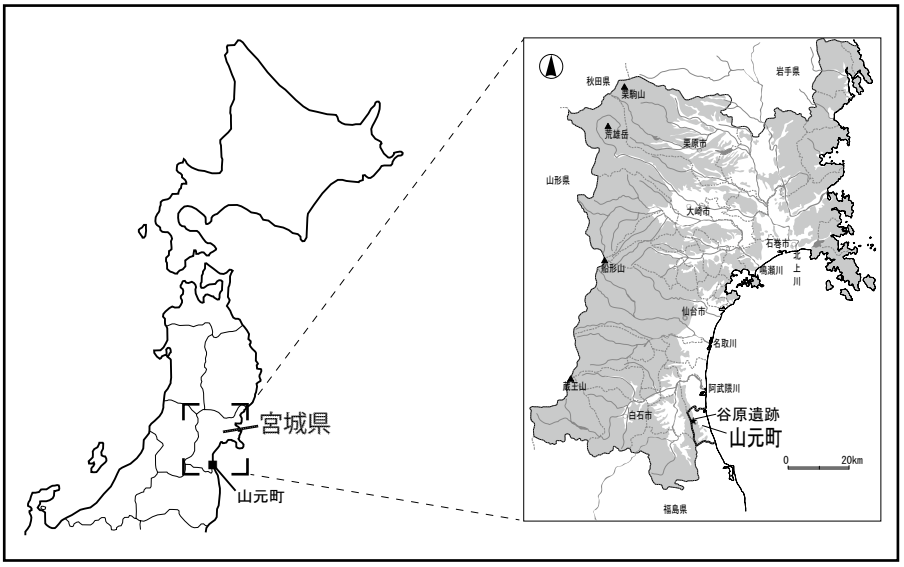
第　1　表　山元町遺跡一覧 …… 5
第　2　表　谷原遺跡発掘調査箇所一覧 …… 9
第　3　表　山元町への埋蔵文化財専門職員の派遣状況（直接派遣） …… 16
第　4　表　山元町への埋蔵文化財専門職員の派遣状況（宮城県経由・出張扱い） …… 16
第　5　表　谷原遺跡(1 次調査)　掘立柱建物跡(SB1～6)一覧表 …… 27
第 6-1 表　谷原遺跡 1 次調査(A～D 区)ピット・柱穴跡属性表（１）－P1～110－ …… 34
第 6-2 表　谷原遺跡 1 次調査(A～D 区)ピット・柱穴跡属性表（２）－P111～167－ …… 35
第　7　表　谷原遺跡 1 次調査　掘立柱建物跡、その他の柱穴・ピット　出土遺物一覧 …… 45
第　8　表　谷原遺跡(1 次調査)　溝跡(SD1～3)・土坑(SK1～16)・焼成遺構(SX1～3)一覧表 …… 48
第　9　表　谷原遺跡 1 次調査　溝跡・土坑・焼成遺構　出土遺物一覧 …… 48
第 10 表　谷原遺跡 1 次調査　基本層出土遺物一覧 …… 70
第 11 表　谷原遺跡 1 次調査　遺構外出土遺物一覧 …… 87
第 12 表　谷原遺跡(1 次調査)出土遺物一覧 …… 88
第 13 表　谷原遺跡(1 次調査)出土石器・石材組成 …… 96
第 14 表　谷原遺跡 A～D 区(1 次調査)　主要遺構の所属時期 …… 98

第Ⅰ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の位置と地理的環境

宮城県亘理郡山元町は、仙台市から南南東に約 40km 離れた県南東部に位置し、地理的には仙台平野南端にあたる(第 1 図)。町の西側は福島県から延びる阿武隈山地の支脈、東側は太平洋で、これらの間には沖積地が広がっている。町内を北上する阿武隈山地は、標高 200～300m の山地・丘陵地で、北端では阿武隈川と接する。丘陵縁辺は、阿武隈山地に源を発する小河川によって開析された櫛状の谷地形となり、谷底には谷中平野が形成されている。丘陵の東側には、沖積地を挟んで海岸線に平行した 4 列の浜堤（第Ⅱ浜堤列・第Ⅲa～c 浜堤列）が認められる(伊藤 2006、藤本・松本 2012)。

谷原遺跡は、平成 19・20 年度に実施された分布調査により発見された遺跡で、亘理郡山元町山寺字谷原に所在し、山元町役場の北北西約 1.0km に位置する(第 1～3 図)。遺跡は、阿武隈山地から東に延びる丘陵東側の谷原川と山寺川に挟まれた標高 17～20m の中低段丘上段に立地する（第 2 図)。遺跡の範囲は、東西 220m、南北 140m ほどの広がりをもつ。現況は、道路、宅地、畑地、荒地である。



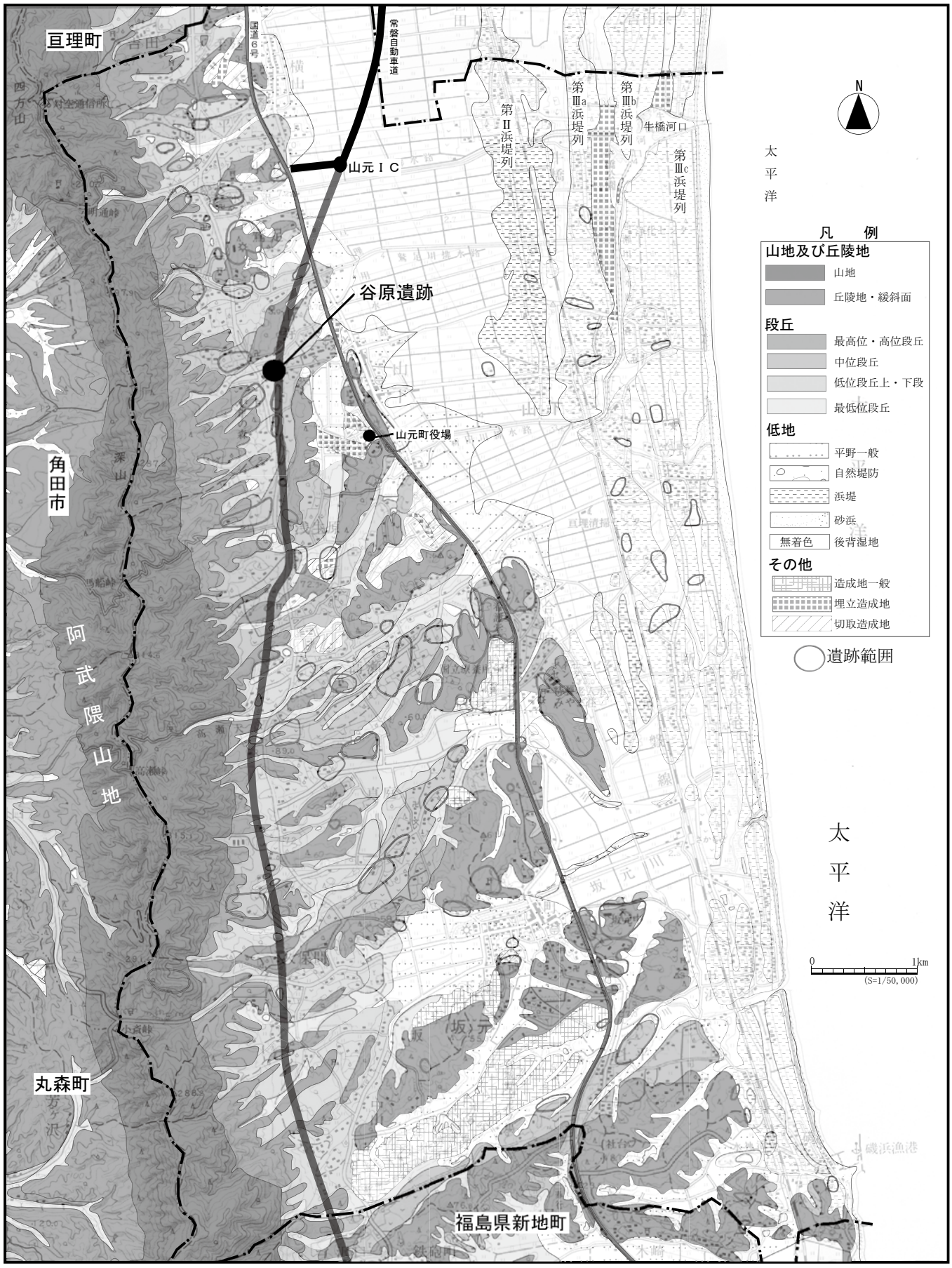
第１図　山元町と谷原遺跡の位置

第２節　周辺の遺跡

山元町には、現在まで 100 余りの遺跡が登録されている（第 3 図、第 1 表)。その分布は、地形的に阿武隈山地裾部、そこから延びる丘陵縁辺部、浜堤列周辺の大きく 3 つに分けられる。阿武隈山地裾部には縄文時代から中世に至る各時代の遺跡がある。丘陵縁辺部には縄文時代から近世までの遺跡が分布するが、その主体は古代と中世である。浜堤列周辺は近年の分布調査により発見された遺跡がほとんどで、古代以降の遺跡が分布している。

近年、山元町内では、常磐自動車道山元 IC 開通に伴う周辺地区の開発や、常磐自動車道（県境－山元間）建設工事、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災の復興事業などに伴う大規模な発掘調査が継続的に進められており、これまで知られていなかった山元町の歴史が少しずつ明らかになってきている。

以下、これまでに調査された代表的な遺跡について、時代ごとに記述する。



第２図　谷原遺跡及び山元町内の地形分類図

【縄文時代の遺跡】

前期の北経塚遺跡（10）、上宮前北遺跡（109）、前期～中期の西石山原遺跡(84)、中期後半の南山神B遺跡（89）、中期末～後期前葉の谷原遺跡(67)、中期～晩期の中島貝塚(4)、後・晩期の涌沢遺跡（107）、晩期の中筋遺跡(80)などがある。

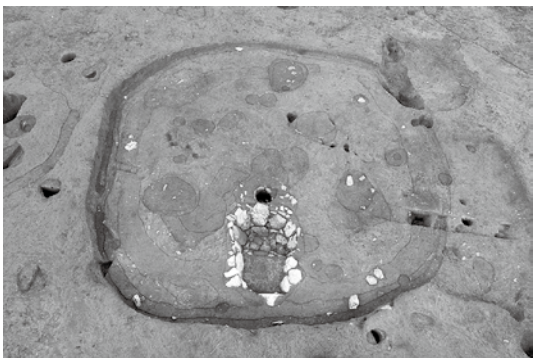
北経塚遺跡では、平成15・21・23年度に調査が行われ、前期初頭の竪穴住居跡、土坑、遺物包含層、ピット群などが検出され、前期初頭の上川名Ⅱ式の古い段階の土器群や石器が出土した（関2004、山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013）。

上宮前北遺跡では、平成24年度の調査で、早期末～前期初頭の遺物包含層・竪穴状遺構・集石遺構が検出され、前期前葉の上川名Ⅱ式の土器群が中心に出土した（初鹿野ほか2015）。

西石山原遺跡では、平成22・23年度に調査が行われ、前期の土坑、中期末葉の竪穴住居跡などが検出され、前期前葉の上川名Ⅱ式、後期後葉～末葉の大木10式の土器群が出土している（初鹿野ほか2012）。

南山神B遺跡では、平成23・24年度の調査で、中期後半の遺物包含層・柱穴・土坑が検出され、中期後半の大木9式後半の土器群が出土した（初鹿野ほか2015）。

谷原遺跡では、平成22・24年度の調査で、中期末～後期前葉の掘立柱建物跡のみで構成される南北40m・東西35mの環状集落、その周囲で同時期の土坑・土器埋設遺構、遺物包含層などが検出され、後期末の大木10式、後期初頭～前葉の綱取Ⅰ・Ⅱ式の土器群が出土した（山田・藤田2016）。


西石山原遺跡　縄文時代の竪穴住居跡（縄文時代中期末）

中島貝塚では、昭和53年に調査が行われ、後期～晩期の縄文土器・石器とともに貝殻、魚骨・獣骨が数多く出土した（山元町誌編纂委員会編1986）。

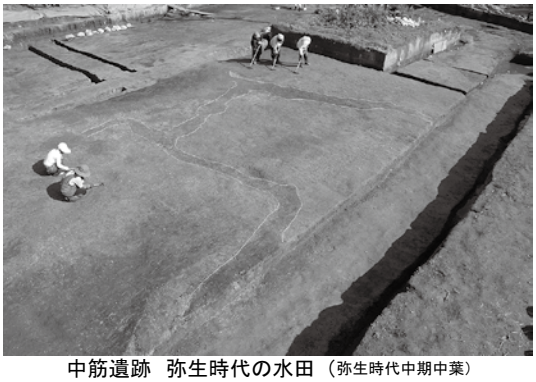
涌沢遺跡では、平成24年度の調査で、後・晩期の遺物包含層が検出され、後期後半の瘤付土器・晩期前葉の大洞B～BC式の土器群が出土した（初鹿野ほか2015）。

中筋遺跡では、平成24年度の調査で、晩期の遺物包含層が検出され、晩期前葉～末の大洞BC式・大洞C2式・大洞A～A´式の土器群が出土したほか、後期前葉～後葉の土器もわずかに出土している（山田・藤田・佐伯2015）。

【弥生時代の遺跡】

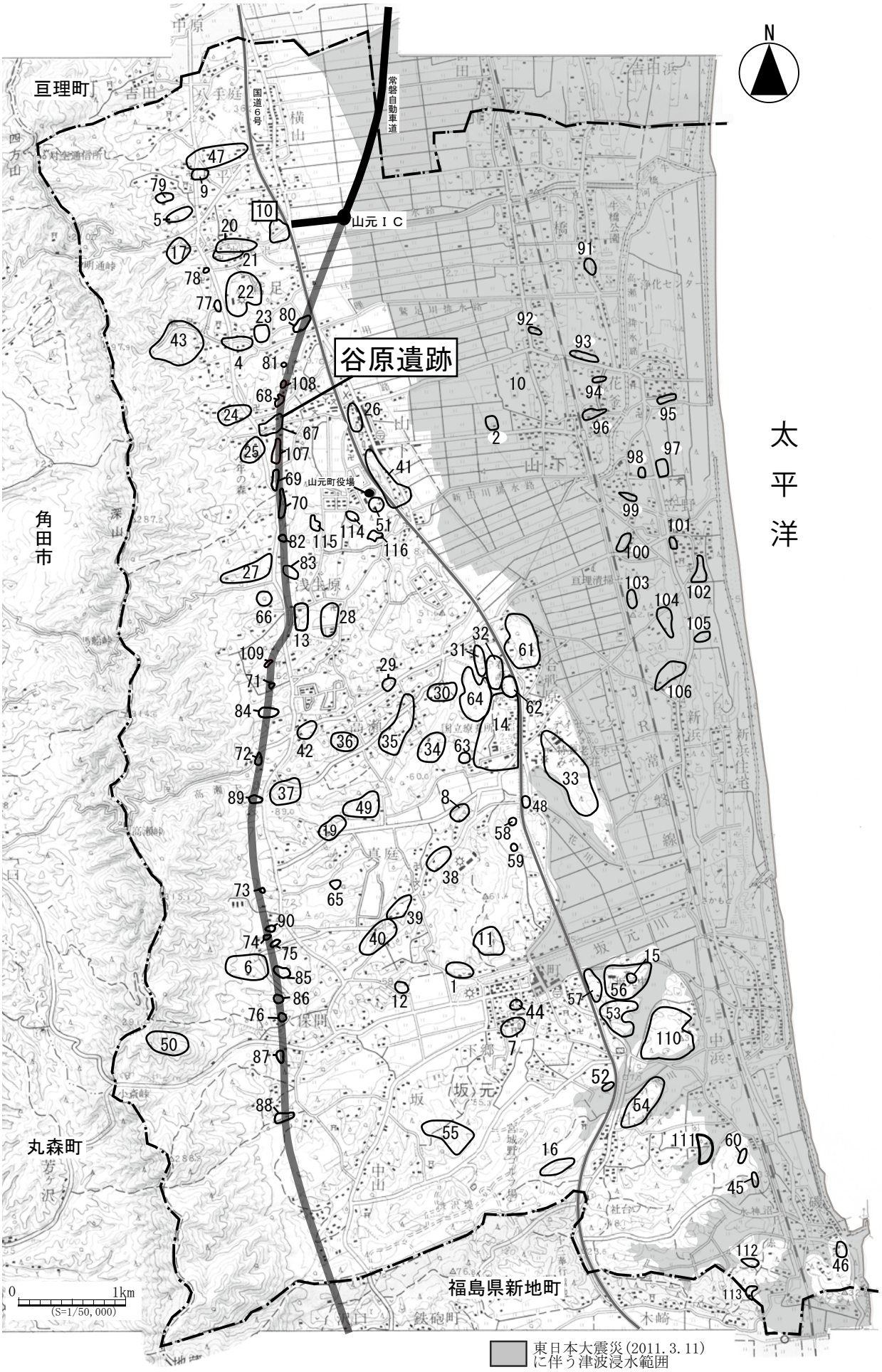
中筋遺跡(80)、狐塚遺跡(56)、館の内遺跡(9)、北経塚遺跡(10)、谷原遺跡(67)、日向遺跡(68)などがある。

中筋遺跡では、平成24年度の調査で、水田跡や遺物包含層などが検出され、中期前葉の鱸沼式～中期中葉の枡形囲式を中心とする土器群や石包丁、板状石器などが出土した。また、同時期の津波痕跡の可能性のある砂層も確認されている(山田・藤田・佐伯2015、山田2015a)。


中筋遺跡　弥生時代の水田（弥生時代中期中葉）

狐塚遺跡では、平成5年度の調査で、溝跡が確認され、中期後半の十三塚式の土器が出土している（窪田1995）。

北経塚遺跡・館の内遺跡・谷原遺跡・日向遺跡では、弥生時代の遺構は確認されていないが、遺物が出土している。北経塚遺跡では、平成21・23年度の調査で、



第３図　谷原遺跡の位置と山元町内の遺跡分布

第１表　山元町遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代
1	井戸沢横穴墓群	横穴墓	古墳後
2	新田遺跡	散布地	古墳後・古代
3	欠番	—	—
4	中島貝塚	貝塚	縄文中～晩
5	味曽野横穴墓群	横穴墓	古墳後
6	影倉遺跡	散布地	縄文後・晩
7	蓑首城跡	城館	中世・近世
8	上台遺跡	散布地	弥生・平安
9	館の内遺跡	集落	古代
10	北経塚遺跡	集落・古墳・経塚	縄文前、古墳前・中中世
11	愛宕山館跡	城館	中世
12	日向遺跡	散布地	古墳中・後
13	浅生原遺跡	散布地	縄文中・後、中世
14	合戦原遺跡	集落・横穴墓 須恵器窯跡・製鉄	古墳中・後、古代
15	狐塚古墳群	古墳	古墳後
16	一の沢遺跡	散布地	弥生
17	清水遺跡	散布地	弥生
18	欠番	—	—
19	北鹿野遺跡	散布地	古墳
20	小平館跡	城館・散布地	古墳前・古代・中世
21	舘横穴墓群	横穴墓	古墳後
22	山崎横穴墓群	横穴墓	古墳後
23	中道遺跡	散布地	縄文・古墳後
24	石堂遺跡	散布地	古代
25	山寺館跡	城館	中世
26	作田山館跡	城館	中世
27	入山遺跡	散布地	縄文・古代
28	下大沢遺跡	散布地	縄文前
29	宮後遺跡	散布地	古代
30	大久保遺跡	散布地	縄文・古墳・古代
31	舘下窯跡	須恵器窯	古代
32	中島館跡	城館	中世
33	戸花山遺跡	古墳・須恵器窯・ 製鉄・散布地	縄文・古墳・古代
34	北名生東窯跡	須恵器窯	古代
35	室原遺跡	散布地	古代
36	北の原遺跡	散布地	縄文早・前・後
37	南山神遺跡	散布地	縄文早・前
38	原遺跡	散布地	古墳
39	浅生遺跡	散布地	古代
40	南権現遺跡	散布地	縄文早・前、古墳
41	山下館跡	城館	中世
42	石山原遺跡	散布地	縄文
43	鷲足館跡	城館	中世
44	館下遺跡	散布地	弥生
45	大壇小壇十三壇	塚	近世
46	唐船番所跡	番所	近世
47	大平館跡	集落・城館	平安・中世
48	貝吹城跡	城館	中世
49	真庭館跡	城館	中世
50	新城山古館跡	城館	中世
51	日向窯跡	窯跡	古代
52	作田横穴墓群	横穴墓	古墳後
53	熊の作遺跡	集落	古墳後・古代
54	駒場原遺跡	散布地	古代
55	川内遺跡	製鉄	古代
56	狐塚遺跡	集落･生産	古墳中～古代
57	向山遺跡	集落・生産	古墳・古代
58	卯月崎塚	塚	中世・近世
60	東作経塚	経塚	中世
61	合戦原B遺跡	製鉄	古代
62	合戦原C遺跡	古墳	古墳中
63	北名生東B窯跡	窯跡	古代
64	大久保B遺跡	散布地	古代
65	北権現遺跡	製鉄	古代
66	山王遺跡	製鉄	古代？
67	**谷原遺跡**	集落	縄文後・弥生～中世
68	日向遺跡	集落	古墳後～中世
69	石垣遺跡	集落	縄文・古墳前 平安・近世
70	的場遺跡	集落	縄文前・古墳前 平安・近世
71	上宮前遺跡	散布地	平安・中世
72	北山神遺跡	散布地	縄文
73	新田B遺跡	散布地	古代
74	影倉B遺跡	散布地	縄文
75	影倉C遺跡	散布地	古代
76	荷駄場遺跡	散布地	縄文
77	北遺跡	散布地	古代
78	北ノ入遺跡	散布地	古代
79	味噌野遺跡	散布地	古代
80	中筋遺跡	水田・包含層 墓域？	縄文晩・弥生中 古墳前
81	赤坂遺跡	散布地	縄文・弥生
82	山王B遺跡	集落・散布地	縄文・近世
83	内手遺跡	製鉄・生産	平安
84	西石山原遺跡	集落	縄文前・中、平安
85	影倉D遺跡	製鉄	古代
86	荷駄場B遺跡	散布地	古代
87	上小山遺跡	散布地	古代・中世
88	法羅遺跡	散布地	縄文
89	南山神B遺跡	散布地	縄文・古代
90	影倉E遺跡	散布地	縄文・古代・中世
91	北泥沼遺跡	散布地	古代
92	泥沼遺跡	散布地	古代
93	畑合遺跡	散布地	古代
94	北頭無遺跡	散布地	古代
95	浜遺跡	散布地	古代
96	頭無遺跡	散布地	古代
97	花笠遺跡	散布地	古代
98	西北谷地A遺跡	散布地	古代
99	西北谷地B遺跡	散布地	古代
100	西須賀遺跡	散布地	古代
101	笠野A遺跡	散布地	古代
102	笠野B遺跡	散布地	古代
103	北中須賀遺跡	散布地	古代
104	狐須賀遺跡	散布地	古代
105	笠浜遺跡	散布地	古代
106	新浜遺跡	散布地	古代
107	涌沢遺跡	集落	縄文・古代～近世
108	日向北遺跡	集落	古墳後・中世～近世
109	上宮前北遺跡	集落	古代
110	犬塚遺跡	製鉄	古代
111	新中永窪遺跡	集落・須恵器窯 製鉄	古代
112	雷神遺跡	集落・生産	古代
113	山ノ上遺跡	散布地・生産	古代
114	作田山遺跡	製鉄	古代
115	内手B遺跡	製鉄・須恵器窯	古代
116	作田山B遺跡	生産	古代

中期後半の十三塚式・後期の天王山式の土器のほか、石包丁が出土した（山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013）。館の内遺跡では、平成 13 年度の調査で、中期後半の十三塚式の土器が出土した（引地 2002）。谷原遺跡では、平成 22・24 年度の調査で、中期前半～中期中葉の土器が出土した（山田・藤田 2016）。日向遺跡では平成 23 年度の調査で、中期後半の十三塚式の土器や石包丁が出土した（山田・藤田 2015）。

【古墳時代の遺跡】

前期の中筋遺跡(80)・石垣遺跡(69)・的場遺跡(70)・犬塚遺跡(110)、前期～中期の北経塚遺跡(10)、中期～終末期の合戦原遺跡(14)、後期～終末期の狐塚遺跡(56)・日向北遺跡(108)・日向遺跡(68)・谷原遺跡(67)・熊の作遺跡（53）・井戸沢横穴墓群(1) などがある。

中筋遺跡では、平成 24 年度の調査で、前期の土坑墓群が検出された（山田・藤田・佐伯 2015）。

石垣遺跡では、平成 23 年度の調査で、前期の竪穴住居跡が検出された（山田・藤田 2014）。

的場遺跡では、平成 23 年度の調査で、前期の竪穴住居跡・土坑・溝跡が検出された（山田・藤田・佐伯 2014）。

犬塚遺跡では、平成 27 年度の調査で、前期の方形周溝を伴う墳丘が確認されている（宮城県考古学会 2015）。

北経塚遺跡では、平成 21・23 年度の調査で、前期の竪穴住居跡・方形周溝跡、中期の古墳周溝跡が検出された（山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013）。

合戦原遺跡では、平成 2 年度に調査が行われ、南小泉式期の大型の竪穴住居跡が検出された（岩見ほか 1991）ほか、平成 8・9 年の測量調査で前方後円墳を含む古墳群が確認されている（青山ほか 2000）。また、平成 26～28 年度の調査では、終末期の横穴墓群や竪穴住居跡が確認されており、特に横穴墓群の調査では、玄室奥壁に線刻画が描かれた横穴墓が発見されたほか、副葬品として土師器、須恵器、玉類、直刀・鉄鏃・馬具などの多くの鉄製品が出土しており、大きな成果が得られている（山田 2015b・宮城県考古学会 2015）。

合戦原遺跡の横穴墓群（平成 26 ～ 28 年度調査）

日向北遺跡では、平成 24 年度の調査で、終末期前後の竪穴住居跡が検出された（山田・丹野 2014）。

日向遺跡では、平成 23 年度の調査で、後期の竪穴住居跡、終末期の遺物包含層が検出された（山田・藤田 2015）。

谷原遺跡では、平成 22・24 年度の調査で、終末期頃の竪穴住居跡が検出された（山田・藤田 2016）。

狐塚遺跡では、平成 4・5 年度の調査で、後期の竪穴住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡が検出された（千葉 1993、窪田 1995）。

熊の作遺跡では、平成 25・26 年度の調査で、後期～終末期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡が検出された（宮城県考古学会 2013、初鹿野 2014・2015a～c）。

井戸沢横穴墓群は、昭和 44 年に調査が行われ、調査された数基の横穴墓の特徴が福島県浜通り地方に点在する横穴墓群と類似することから、その関連性が指摘されている（佐々・志間・氏家 1971）。

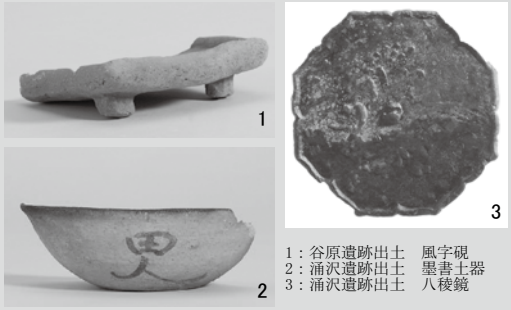
【奈良・平安時代の遺跡】

館の内遺跡(9)、合戦原遺跡(14)、狐塚遺跡(56)、涌沢遺跡(107)、日向遺跡(68)、谷原遺跡(67)、石垣遺跡(69)、的場遺跡(70)、内手遺跡(83)、上宮前北遺跡(109)、向山遺跡(57)、熊の作遺跡（53）、北名生東窯跡（34）、犬塚遺跡（110）、新中永窪遺跡（111）、雷神遺跡（112）、内手 B 遺跡（115）、作田山遺跡（114）などがある。

館の内遺跡では、平成 13 年度の調査で、規格的に配置された掘立柱建物跡や竪穴住居跡が検出され、墨書土器や製塩土器などが出土している（引地 2002）。

合戦原遺跡では、平成 2 年度の調査で奈良時代～平安時代の須恵器窯跡（岩見ほか 1991）、平成 26・27 年度の調査で製鉄炉跡・木炭窯跡・焼成土坑が確認されている（山田 2015b・宮城県考古学会 2015）。

涌沢遺跡では、平成 24 年度の調査で、8 世紀末～10 世紀後半の竪穴住居跡・竪穴状遺構・土器廃棄土坑や 8 世紀末～9 世紀初頭の鍛冶関連遺構などが検出され、「田人」・「十万」・「千万」の墨書土器や 10 世紀後半の八稜鏡などが出土した（宮城県考古学会 2012、初鹿野 2013a、初鹿野ほか 2015）。



1：谷原遺跡出土　風字硯
2：涌沢遺跡出土　墨書土器
3：涌沢遺跡出土　八稜鏡
谷原遺跡・涌沢遺跡出土遺物

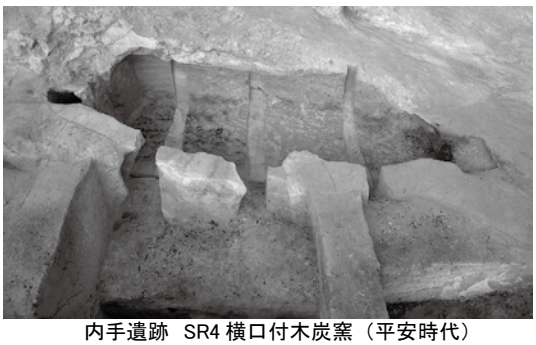
日向遺跡では、平成 23 年度の調査で、8 世紀末～9 世紀初頭・9 世紀後半の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・遺物包含層が検出された（山田・藤田 2015）。

谷原遺跡では、平成 22・24 年度の調査で、7 世紀末～8 世紀前葉、8 世紀後半～9 世紀前葉、9 世紀後半の竪穴住居跡などが検出され、風字硯・円面硯、墨書土器などが出土した（山田・藤田 2016）。

石垣遺跡では、平成 23 年度の調査で、9 世紀後半の竪穴住居跡・竪穴状遺構、土器廃棄土坑が検出され、土器廃棄土坑からは墨書土器（「田」・「人」）が出土した（山田・藤田 2014）。

的場遺跡では、平成 23・25 年度の調査で、9 世紀後半の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・焼成遺構が検出された（山田・藤田・佐伯 2014）。

内手遺跡では、平成 23 年度の調査で、9 世紀代の地下式木炭窯跡 7 基・横口付木炭窯跡 1 基が検出されている（初鹿野 2013b・初鹿野ほか 2015）。


内手遺跡　SR4 横口付木炭窯（平安時代）

上宮前北遺跡では、平成 24 年度の調査で、9 世紀の製鉄炉跡 4 基が検出されている（初鹿野 2013b・初鹿野ほか 2015）。

向山遺跡では、平成 25 年度の調査で、奈良～平安時代の竪穴住居跡や鍛冶工房が検出されている（宮城県考古学会 2013、初鹿野 2015a・b）。

上宮前遺跡　SW2 製鉄炉跡（平安時代）

熊の作遺跡では、平成 25・26 年度の調査で、奈良時代～平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、四脚門跡が検出され、「坂本願」・「大領」・「子弟」などの墨書土器や風字硯、石帯、木簡、木製品などが出土するなど大きな成果が得られており、陸奥国亘理郡に関連する役所跡と推定されている（宮城県考古学会 2013、初鹿野 2014・2015a～c、吉野 2015）。

北名生東窯跡では、昭和 37・38・52 年度に須恵器窯跡の調査が行われ、8 世紀後半～9 世紀初頭の須恵器が出土した（鍛冶 1971）。

犬塚遺跡では、平成 25～27 年度の調査で、奈良時代前半を中心とする竪穴住居跡・木炭窯跡・横口式木炭窯跡・製鉄炉跡が検出された（初鹿野 2015a・b、宮城県考古学会 2015）。

新中永窪遺跡では、平成 26 年度の調査で、奈良～平安時代初期の竪穴住居跡・製鉄炉跡・須恵器窯跡・木

炭窯跡・横口付木炭窯跡が検出された(宮城県考古学会 2014、初鹿野 2015a・b)。

雷神遺跡では、平成 25・26 年度の調査で、奈良時代の竪穴住居跡が検出された。

内手 B 遺跡では、平成 26 年度の試掘調査で、奈良時代の須恵器窯跡などが検出された。

作田山遺跡では、平成 25 年度の試掘調査で、古代の製鉄関連遺構が検出された。

【中世の遺跡】

北経塚遺跡(10)、小平館跡(20)、日向遺跡(68)、谷原遺跡(67)、山下館跡 (41)、鷲足館跡(43)などがある。

北経塚遺跡では、平成 21・23 年度の調査で、13 世紀後半～14 世紀以降の掘立柱建物跡・井戸跡・土坑が確認され、中世の集落の存在が明らかになった（山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013)。

小平館跡は、室町時代の天文年間(1532～1555 年)に亘理要害 14 世亘理宗隆が居館したとされている館跡で（紫桃 1974)、平成 24・25・27 年度に調査が行われ、掘立柱建物跡・溝跡が検出された（山田 2015c)。

日向遺跡では、平成 23 年度の調査で、13 世紀後半～16 世紀の掘立柱建物跡・井戸跡が確認された（山田・藤田 2015)。

谷原遺跡では、平成 22・24 年度の調査で、掘立柱建物跡多数・井戸跡・土坑・溝跡などが検出され、中世の大規模な屋敷跡の存在が確認された(山田・藤田 2016)。

山下館跡では、平成 26 年度に調査が行われ、平場・土塁・堀切が良好な状態で確認され、平場では掘立柱建物跡や柱穴列が検出された（宮城県考古学会 2014)。

鷲足館跡では、平成 24～26 年度に調査が行われ、腰郭と柱穴列で区画された曲輪が確認され、掘立柱建物跡が多数検出された。

山下館跡の平場・土塁・堀切（平成 26 年度調査）

【近世の遺跡】

石垣遺跡(69)、的場遺跡(70)、山王 B 遺跡(82)、蓑首城跡(7)などがある。

石垣遺跡では、平成 23 年度の調査で、近世の掘立柱建物跡・柱穴列跡・土坑・井戸跡で構成される屋敷跡が検出された（山田・藤田 2014)。

的場遺跡では、平成 23・25 年度の調査で、17～19 世紀の掘立柱建物跡・土坑・溝跡・井戸跡で構成される屋敷跡が検出された（山田・藤田・佐伯 2014)。

山王 B 遺跡では、平成 22 年度の調査で、掘立柱建物跡・溝跡・土坑が検出された（初鹿野ほか 2012)。

蓑首城跡は、戦国時代末期に築城され、元和 2 (1616) 年以降、大條氏が長期間にわたり居城した城で、平成 25 年度に二ノ丸跡の調査が行われ、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡などが検出された(宮城県考古学会 2013)。

蓑首城跡　二ノ丸跡の遺構（平成 25 年度調査）

第３節　谷原遺跡のこれまでの発掘調査

谷原遺跡は、平成 19・20 年度の分布調査で発見されて以降、本発掘調査・確認調査を含めると、これまで 8 度にわたる発掘調査が実施されている（平成 28 年 3 月現在)。それぞれの調査年度・調査原因・調査面積・調査成果等は下記のとおりである（第 2 表・第 4 図)。

第 2 表　谷原遺跡発掘調査箇所一覧（H28.3 現在）

	調査年度	調査原因	調査内容	調査面積	主な調査成果
1 次調査	平成 20 年度	町道 山寺山下線改修	本調査	約 1,885 ㎡	縄文・古代・中世 掘立柱建物・大溝・溝跡・遺物包含層 文献：本報告
2 次調査	平成 22・24 年度	常磐自動車道建設	本調査	約 5,740 ㎡	縄文～中世 竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝跡・井戸 遺物包含層など 文献：山元町文化財調査報告書第 13 集
3 次調査	平成 23 年度	個人住宅	確認調査	約 25 ㎡	中世？ 柱穴・土坑 報告書未刊
4 次調査	平成 25 年度	店舗兼住宅 （復興事業）	確認調査	約 165 ㎡	古代～中世 竪穴住居・掘立柱建物 報告書未刊
5 次調査	平成 25 年度	個人住宅 （復興事業）	本調査	約 345 ㎡	古代～中世 掘立柱建物・大溝・溝 報告書未刊
6 次調査	平成 26 年度	個人住宅 （復興事業）	確認調査	約 70 ㎡	古代～中世？ 柱穴・井戸 報告書未刊
7 次調査	平成 26 年度	工場造成	本調査	約 120 ㎡	古代～中世 竪穴住居・掘立柱建物 報告書未刊
8 次調査	平成 26 年度	太陽光パネル設置	確認調査	約 30 ㎡	遺構なし 報告書未刊

谷原遺跡 2 次調査で発見された縄文時代の環状集落（北から）

谷原遺跡 5 次調査で発見された古代の掘立柱建物跡（西から）

第Ⅱ章　調査に至る経緯と経過

第１節　発掘調査に至る経緯

谷原遺跡は、常磐自動車道建設に伴い、平成 20 年 2 月に実施された分布調査において発見された遺跡である。今回の調査は、町道 24 号山下山寺線改良工事に伴うものであるが、本件は、本来行うべき文化財保護法（以下、法という）に基づく事前協議・届出等の手続きが行われない状態での工事施工発見に伴い、急遽、発掘調査が実施された案件にあたる。具体的には、分布調査で発見された谷原遺跡の登録手続き（法 97 条に基づく遺跡発見届の提出）の遅滞、町関係課の内部調整不足（周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事案件の未調整、法 94 条に基づく発掘通知の未届による工事の実施）等の結果、発生した案件である。

その具体的な経緯については、以下のとおりである。

【発掘調査に至るまでの経緯】

〇平成 20 年 2 月 26～28 日

常磐自動車道建設工事に先立ち、路線内の分布調査を実施。谷原遺跡を発見。

※分布調査にあたっては、県教委、町教委、町道路工事担当課、NEXCO 東日本担当職員が出席。

〇平成 20 年 10 月 8 日

県教委・町教委担当者による常磐自動車道建設工事に伴う現地確認を行っていた際、谷原遺跡推定範囲内で無届による道路工事が行われていることが判明。工事範囲内において、遺構・遺物を確認したことから、同日、急遽、道路工事担当課と三者協議を実施。

→県教委より、「平成 20 年 2 月に遺跡を発見したにも関わらず、遺跡登録手続きを速やかに行わなかった町教委への厳重注意」、「常磐自動車道の分布調査に立ち会い、遺跡の存在を把握していたにも関わらず、遺跡推定地内での無届の工事を実施した道路工事担当課への厳重注意」があり、町に対し、「工事の中止」、「法 97 条に基づく遺跡発見届の提出」、「法 94 条に基づく発掘通知の提出」、「始末書の提出」が指示される。併せて、工事施工範囲内の確認調査を実施し、遺跡とのかかわりについて早急に明確にするよう指導がある。

→これを受け、同日、道路工事を中止する。

法 94 条・無届による工事施工発見時の状況（平成 20 年 10 月 8 日撮影）

確認調査の作業状況（平成 20 年 10 月 10 日撮影）

〇平成 20 年 10 月 9～16 日

町教委により、今回の道路工事範囲内の確認調査を実施。本調査必要箇所を確定。

〇平成 20 年 10 月 14・17 日

確認調査の結果を受け、工事範囲内の遺跡の取り扱いについて、県教委・町教委・町道路工事担当課と協

議。工事計画地内の遺構が確認された範囲について、本調査を実施することとなる。その後、町から県教委へ法 97 条に基づく遺跡発見届、法 94 条に基づく発掘届、始末書を提出。道路工事中止に伴い、町内関係各課との協議の結果、今回の道路工事が補助事業で、かつ、工期が間近にせまっていたことから、早急に本調査に係る諸手準備（予算確保・作業員雇用・物品調達等）、本調査の体制整備を行う。

○平成 20 年 10 月 21 日

町教委により、本調査開始。発掘に係る費用については、当面の間、予備費による対応とし、同年 10 月 30 日の山元町第２回臨時議会において、補正予算を計上し予算措置。

○平成 20 年 12 月 18 日

本調査終了。現地引き渡し。

第２節　谷原遺跡（1 次調査）発掘調査の経過

（１）確認調査の経過

確認調査は、平成 20 年 10 月 9・10・15・16 日の 4 日間実施した。調査主体は町教委である。調査は、既に工事が実施され、表土が掘削されていた道路拡幅部分を対象とした。工事により既に地山が露出していた範囲については人力による表面精査、遺構確認面まで掘削が及んでいない範囲についてはバックホウにより表土等の掘削を行った上で人力による表面精査を行い、遺構の有無を確認した。その結果、事業計画範囲のうち、谷原遺跡範囲のほぼ全面約 1,900 ㎡の範囲に遺構が残存していることが判明した。

この結果を受け、宮城県発掘調査基準（平成 12 年 4 月 1 日）に基づき、事業主・県教委・町教委の三者で再度協議した結果、遺構が確認された範囲内について、本格的な調査を行うこととなった。

（２）本発掘調査の経過

本発掘調査は、町教委が主体となり実施した。本発掘調査は、前述のとおり、平成 20 年 10 月 17 日から調査に入る準備を開始し、平成 20 年 10 月 21 日～平成 20 年 12 月 18 日の 37 日間実施した。谷原遺跡の発掘調査体制は、調査員 1 名、作業員 10 名である。

調査面積は事業計画面積の約 2,300 ㎡のうち、遺構が確認された約 1,885 ㎡（A～D 区）である（第 4 図）。調査にあたっては、道路工事担当課であるまちづくり整備課より、平成 20 年 10 月に現地調査業務に係る執行委任を受け、調査を実施した。調査にあたっては、調査箇所近隣に所在する山寺生活センターを借用し、作業員の詰所及び発掘機材の保管場所とした。調査は、平成 20 年 10 月 21 日から開始した。まず、既に工事が実施されていた道路の拡張範囲（A・B 区）の遺構の検出・精査に着手した。A・B 区の調査は 12 月 1 日に完了し、その後、道路の切り廻し工事完了後、12 月 15 日から既存道路部分（C・D 区）の調査を実施した。C・D 区は、既存の道路下ということもあり、過去の工事

本調査の作業状況（A 区遺構検出）

本調査の作業状況（A 区掘立柱建物跡の遺構精査）

により、その大部分が撹乱を受けており、残存していた遺構は少量であった。C・D 区の調査は 12 月 18 日に完了した。その後、現場事務所の資材撤収を行い、現地を道路工事担当課に引き渡した。なお、調査区の埋戻しについては、事前の協議により、工事担当課が実施することとなっていたことから、現地は埋戻しをせず引き渡した。

発掘調査完了後、平成 20 年 12 月 19 日に遺失物法に基づく「埋蔵物発見届」を亘理警察署に提出、同年 12 月 22 日に出土遺物の文化財認定に係る書類を県教委に提出した。

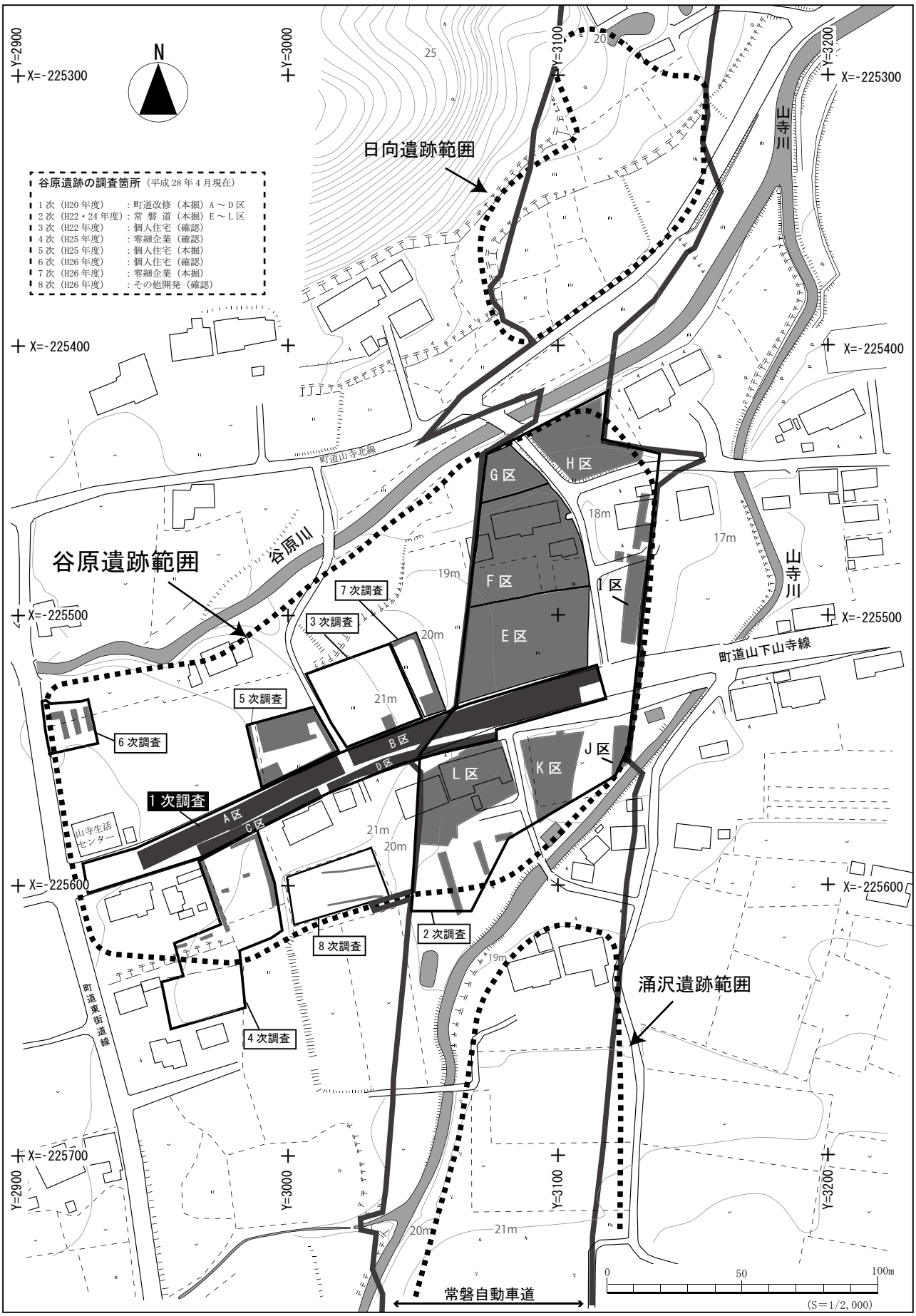
本調査の作業状況（A 区 SD2 溝跡の精査）

（３）整理・報告書作成作業の経過

谷原遺跡（1 次調査）で出土した遺物、現地の記録類の整理・報告書作成作業は、発掘調査終了後、山元町役場敷地内に設置した整理室内で行った。

整理作業については、まず、発掘調査完了後の平成 20 年度中（平成 20 年 12 月末、平成 21 年 3 月）に遺物の洗浄・注記作業を実施した。当初は、翌年度（平成 21 年度）中に発掘調査報告書の刊行を予定していたことから、平成 21 年 5 月～8 月までの間に、出土遺物の抽出・実測図作成作業、図面類の照合作業・記録写真の整理作業を実施した。その後、報告書刊行に向けた各種作業を実施する予定であったが、同年度下半期に別件の民間開発に伴う本調査案件（北経塚遺跡第 2 次調査）が急遽発生したため、平成 21 年度中の報告書刊行を断念する形となった。加えて、平成 22 年度から常磐自動車道建設に伴う発掘調査が開始され、その後も東日本大震災（平成 23 年 3 月 11 日発生）に伴う復興事業等に関連する発掘調査対応が継続的に続いた事情もあり、谷原遺跡 1 次調査の整理作業は、その合間に断続的に行う形となった。結果として、報告書の刊行は平成 28 年度となった。各年度の具体的な作業内容は以下のとおりである。

【平成 20 年度の作業内容】
　○出土遺物の洗浄・保存処理・注記
【平成 21 年度の作業内容】
　○出土遺物の抽出、出土遺物の実測図作成・拓本の作成
　○図面類の照合作業、記録写真のネーミング
【平成 24 年度の作業内容】
　○出土遺物の復元
【平成 25 年度の作業内容】
　○出土遺物の写真撮影
【平成 27 年度の作業内容】
　○平面図、断面図のトレース、遺物実測図のトレース、各種遺構の基礎データの作成
【平成 28 年度の作業内容】
　○報告書用写真の抽出、平面図・写真類の版組み、報告書執筆、出土遺物、記録類の収納



第４図　谷原遺跡調査箇所

第Ⅲ章　発 掘 調 査

第１節　発掘調査の方法

今回の調査は町道 24 号山下山寺線道路改良工事に伴う発掘調査であり、その現地調査・整理作業は下記の方法により実施した。

１．現地調査

【調査区の設定】

谷原遺跡の 1 次調査は、道路の拡張工事及び既存道路の路盤改良に伴うものであり、調査実施にあたり既存道路の通行止め等の対応をとることができなかった。そこで、まず拡張予定箇所について A・B 区の調査区を設定し、調査を実施した。A・B 区の調査完了後、道路の切り廻し工事を待った後、既存道路箇所を C・D 区とし調査を行った。

【表土除去・遺構精査】

表土除去作業はバックホウ（0.45 ㎥）、遺構検出以降の作業は人力により行った。なお、遺構検出作業については、基本層Ｘ層上面で行った。

【遺構番号】

遺構番号は、現地調査の段階で、001 から通し番号（001～）を振り、各種記録類を作成した（仮番号方式）。その後、整理作業の段階で再度振り直した。遺構の性格ごとの略記号については例言に示したとおりである。

【遺構測量】

検出した遺構や調査区の平面図については、平板を用い実測図を作成し、その縮尺は個別遺構図を 1／20、全体図を 1/100 とした。その際、調査対象範囲に設置した国家座標系に基づく基準杭を利用した。遺構断面図は手実測により縮尺 1／20 で実測した。測量基準杭の国家座標については、例言に示したとおりである。

【遺構の記録作成】

今回の調査で検出した遺構のうち、原則として、すべての記録作成（平面図・断面図・写真撮影）を行った。なお、後世に撹乱等により遺構の大部分が削平を受けている遺構については、平面図作成・土層注記の記録作成のみを行った。この他、今回の調査で掘り込みを行った遺構の底面標高はすべて記録した。

【遺物の記録・取り上げ】

遺物の記録については、遺構から出土した遺物のうち、出土状況の平面記録の対象としたものは、遺構に伴う遺物または残存状況のよいもののみとした。遺物の取り上げについては、原則として遺構出土遺物は出土層位ごと、遺構外出土遺物は基本層・検出面等として記録し取り上げた。ただし、遺構出土の遺物のうち、半裁時（分層前）に出土した遺物で出土層位が明確でないものは、「堆積土」として取り上げた。

【写真撮影】

記録写真には、デジタルカメラ(Fine Pix S9000)を使用した。

２．室内整理

①遺物の整理作業

【遺物洗浄・接合・復元】

遺物の洗浄は、水洗により作業を行い、比較的脆い遺物（縄文土器・土師器）については、土器強化剤（使用薬剤：バインダー17）による処理を施した。遺物の接合は、まず同一遺構内の出土遺物の接合を行い、その後、別々の遺構間、その他（検出面・基本層・攪乱など）から出土した遺物の接合を行った。遺物の復元は、実測図作成が可能なものを対象として作業を行った。

【注記作業】

遺物の注記は、手作業により行った。遺物の注記内容は、原則として遺跡名の略号・調査年・出土遺構・

出土層位とし、遺物の内面等に注記した。なお、注記した出土遺構名は、現場調査で付した番号とした。

【遺物抽出・登録】

遺物の抽出・登録は調査員が行った。遺物抽出に際しては、原則として遺構に伴う遺物を中心に抽出し、遺構に伴わないものや遺構外（基本層出土遺物も含む）出土のものについても図化が可能なものは抽出の対象とした。遺物の登録に際しては、それぞれの種別ごとに登録を行った。遺物種別の略記号は、例言に示したとおりである。土器類については、残存状態のよいものを優先的に抽出した。この他、小破片であっても、文様や器形などが特徴的なものや時期・産地推定が可能なものについても抽出の対象とした。抽出した資料は原則として報告書掲載遺物として扱い、それぞれ種別１点ごとに登録番号を付し、非抽出遺物は種別・出土遺構・層位ごとに分け袋詰めし、袋ごとに非抽出遺物の登録を行った。石器は原則として全点を登録の対象とし、全点登録番号を付したが、このうち報告書掲載としたものは完形品を優先し掲載した。

【遺物の実測図作成】

遺物の実測図作成は調査員が行った。実測図は原則として手実測により作成した。

【拓本図作成】

遺物の拓本作成は整理作業員、報告書用の拓本図作成は調査補助員が担当した。拓本図の作成は、墨拓と画仙紙を使用し拓本を作成した後、スキャナーでPCに画像を取り込み、報告書掲載用に加工した。

【実測図トレース、掲載遺物の写真撮影】

遺物の実測図のトレース図は､素図をスキャナーで取り込み､PC上でのデジタルトレースを行い作成した。報告書に掲載する遺物の写真撮影・写真加工作業は、調査員が担当した。

②図面・記録写真の整理・報告書作成

遺構図の整理作業は、平面図修正、断面図修正・トレース、土層注記等のデータ入力を行ったのち、図版作成、図面収納の手順で行った。記録写真の整理作業は、撮影年月日ごとにデータを整理し、それらのデータをコピーしたものに対しリネームを行った。その後、各種遺構ごとに分け収納した。報告書の版組み・執筆は、調査員が担当した。なお、遺物・断面図のトレース図作成、写真画像処理、遺構図等の図版作成、報告書版組みは、遺構くんcubic 2016 12.03、Adobe Illustrator CS6、Adobe Photoshop CS6、Adobe InDesign CS6、表データ・報告書原稿の作成はMicrosoft Office Word ・Excelのソフトウェアを使用した。

３．東日本大震災に伴う埋蔵文化財専門職員の自治法派遣・短期出張による支援

平成23年3月11日、東日本大震災が発生し、岩手・宮城・福島の三県では甚大な被害を受けた。被災三県では、震災からの復旧・復興事業に関連した工事に伴う発掘調査が急増した。これを受け、震災復興事業に関連した復興調査に迅速に対応するため、文化庁を通じて、埋蔵文化財専門職員の自治法派遣や県内内陸市町村からの短期出張による、被災3県の発掘調査体制の強化が図られた（宮城県教育委員会2014・2015・2016）。

[山元町における復興調査等の現状]

山元町では､平成22年度から開始された常磐道関連遺跡の発掘調査を機に､町内での遺跡調査が増加した。そして、東日本大震災後の平成24年度以降、公共事業や個人住宅建設などの震災復興事業に関連した発掘調査が町内各所で行われるようになり、町内遺跡の発掘調査件数はここ数年で劇的に増加した。加えて、最近では、土砂採取事業等といった復興事業に関連した民間開発の案件も発生している。

具体的な実績でみてみると、平成22年4月から平成28年3月末の段階で、山元町内において発掘調査が実施された遺跡は、58遺跡72地点で、その調査総面積は約185,000㎡にのぼる。

[山元町における発掘調査体制と派遣職員受入状況]

常磐道関連遺跡の調査が開始された平成22年度当時､山元町では､発掘調査に対応する専門職員(町職員)が１名のみの配置だったため、町単独でその調査に対応することが困難な状況にあった。このことから、常磐道関連遺跡の調査は、県教委の全面的な協力を得て対応していた。こうした状況の中、平成23年3月11日に東日本大震災が発生したことにより、常磐道以外の各種復興関連事業や民間開発に関連した発掘調査がさらに増加し、専門職員の不足はさらに悪化した。

これを受け、町では、平成 25 年度から、前述の手法による専門職員の派遣を本格的に受けることができ、激増する発掘調査に対応することができた。

具体的な山元町での専門職員受け入れ状況は第 3・4 表のとおりで、平成 25 年 4 月～平成 28 年 3 月の 3 カ年でのべ 27 名の派遣を受けることができ、今回報告する谷原遺跡（1 次調査）の本報告書作成業務にあたっては、町担当職員の報告書刊行に係る業務時間確保のために、派遣職員による他の現場対応といった支援を受けることができ、町担当職員の負担軽減につながった。[町への直接派遣のべ 10 名（平成 25 年度 4 名、平成 26 年度 2 名、平成 27 年度 4 名）/県教委経由による職員派遣のべ 17 名（平成 26 年度 8 名、平成 27 年度 9 名）]。

第 3 表　山元町への埋蔵文化財専門職員の派遣状況（直接派遣）　（H25 年 4 月～H28 年 3 月末現在）

派遣年度	氏名	派遣元	派遣期間	備考
H25 年度	森　秀之	北海道恵庭市	H25.4.1～H26.3.31	文化財業務全般（埋蔵文化財事前協議・確認調査等対応・事務手続き、有形文化財修繕、標柱整備ほか）
	草場　啓一	福岡県筑紫野市	H26.12.1～12.31	合戦原遺跡確認調査
	小鹿野　亮	福岡県筑紫野市	H26.1.1～2.28	合戦原遺跡確認調査
	日下　和寿	宮城県白石市	H25.12.1～H26.3.31	週 1 日程度の支援　中筋・谷原遺跡の弥生土器遺物整理
H26 年度	小南　裕一	福岡県北九州市	H27.1.1～2.28	犬塚遺跡（民間・土砂採取）本調査対応
	中村　昇平	福岡県春日市	H27.3.1～3.31	犬塚遺跡（民間・土砂採取）本調査対応
H27 年度	木下　晴一	香川県	H27.4.1～H28.3.31	各種業務全般支援、復興事業・民間開発の支援
	城門　義廣	福岡県	H27.4.1～H28.3.31	各種業務全般支援、犬塚遺跡（民間・土砂採取）本調査対応
	熊代　昌之	福岡県久留米市	H27.6.1～7.31	犬塚遺跡（民間・土砂採取）本調査対応
	川口　陽子	福岡県筑紫野市	H27.8.1～10.9	北経塚遺跡（民間・店舗開発）本調査対応

第 4 表　山元町への埋蔵文化財専門職員の派遣状況（宮城県経由・出張扱い）　（H25 年 4 月～H28 年 3 月末現在）

派遣年度	人数	派遣職員（派遣元）	備考
H26 年度	8 名	大友 邦彦・佐藤 則之（宮城県）、 長橋 至（山形県）、石川 智紀（新潟県）、小淵 忠司（岐阜県）、東影 悠（奈良県）、御嶽 貞義（福井県）、 守岡 正司（島根県）	復興事業の支援
H27 年度	9 名	高橋 洋彰・下山 貴生・長内 祐輔・佐藤 則之（宮城県）、 長橋 至（山形県）、伊藤 智樹（千葉県）、飯坂 盛泰（新潟県）、小淵 忠司（岐阜県）、杉山 一雄（岡山県）	復興事業の支援

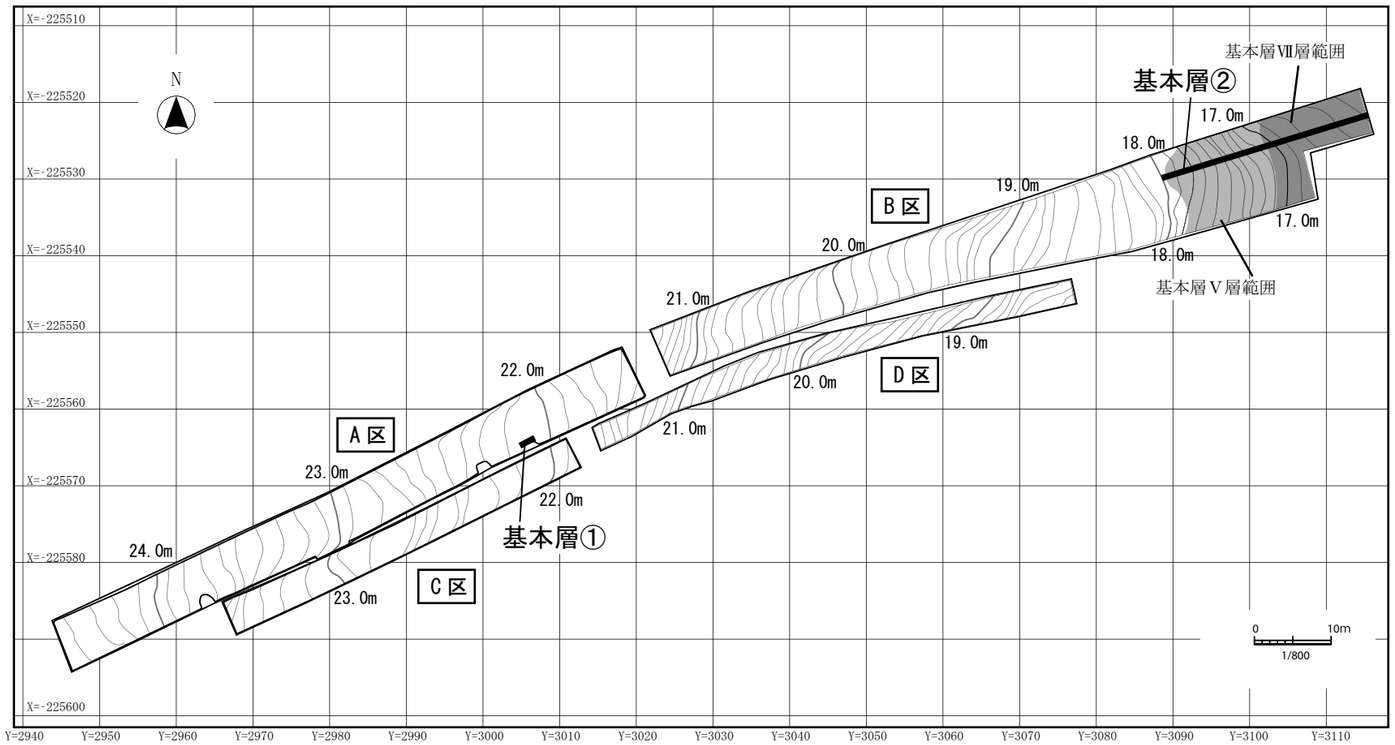
第２節　基本層序

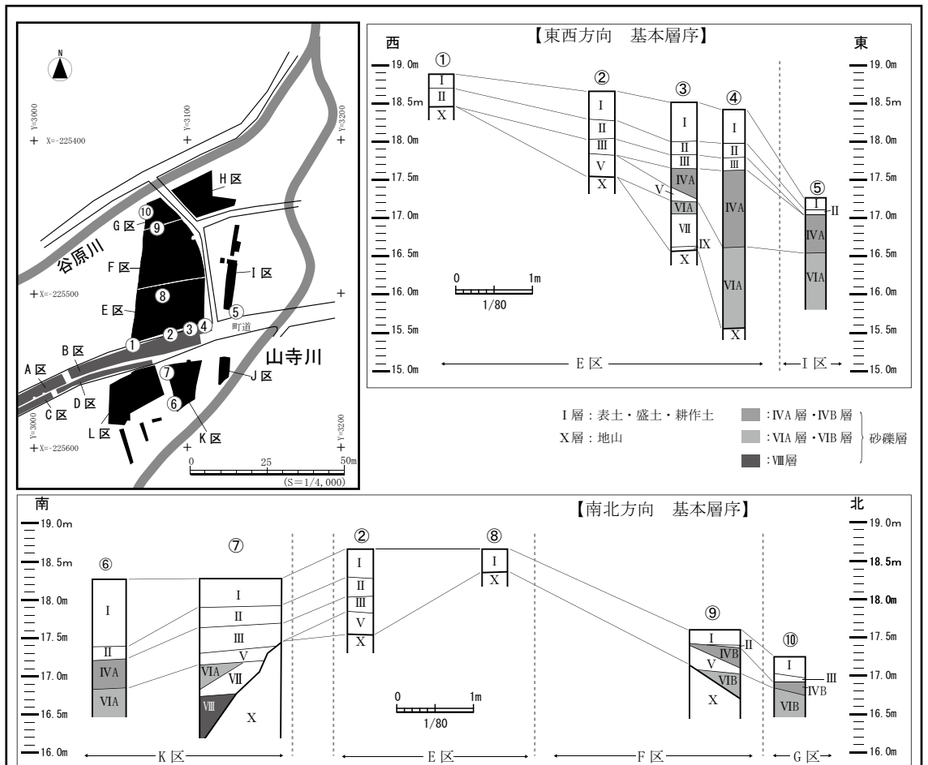
今回の調査区（A～D 区）は、現在の谷原川と山寺川に挟まれた標高 16.6～24.4m の緩やかな平坦面に位置する（第 4 図）。谷原川は調査区北側を西から東に向かって流れ、山寺川は調査区南・東側を南西方向から北方向に向かって流れる。この谷原川と山寺川は、遺跡北東付近で合流し、さらに東に流れる。調査区の標高は、A 区西部の標高 24.4mで最も高く、そこから東に緩やかに傾斜し、B 区東端に至る。発掘調査実施前の調査区の土地利用状況は、町道及び畑地である。

谷原遺跡は、今回報告する 1 次調査のほかに、常磐道建設工事に伴う調査（2 次調査）や個人住宅建設工事など数回にわたる発掘調査が実施されている（第 4 図）。したがって、ここでは、これまでの調査成果を踏まえ、A～D 区の基本層序について提示することとする。なお、今回の調査で確認した基本層序の概略については第 5 図にまとめた。

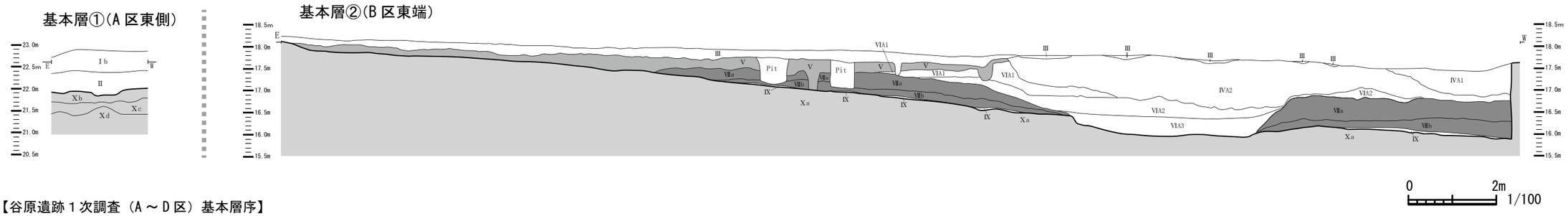
第３節　発見された遺構と遺物の概要

今回の調査区（A～D 区）で検出した遺構は、掘立柱建物跡 6 棟、溝跡 3 条、土坑 16 基、焼成遺構 3 基、柱穴・ピット 167 個（掘立柱建物跡を構成する柱穴も含む）、遺物包含層である（第 6～8 図）。これらの遺構から出土した遺物は、遺物収納箱（長 59cm×幅 38cm×深 20cm）で 11 箱出土しており、その内訳は、縄文土器、土師器（非ロクロ・ロクロ成形）、須恵器、中世陶器、鉄滓、鉄製品、石器である。以下、発見された遺構・遺物について、遺構の種別ごとに記述する。





参考：谷原遺跡２次調査（Ｅ～Ｌ区）の基本層序模式図



【谷原遺跡１次調査（Ａ～Ｄ区）基本層序】

Ⅰ層：現代の表土・盛土・耕作土。調査地点の土地利用状況により状況が異なり、Ⅰａ～Ⅰｄ層に細別。
　１次調査ではⅠｂ層のみ確認。
　Ⅰｂ層：黒褐色（10YR3/2）・褐色（10YR4/4）シルト土。現代の表土・耕作土。

Ⅱ層：近世以降の堆積層。暗褐色（10YR3/3・10YR3/4）シルト土。小礫を少量・近世以降の磁器等を含む。

Ⅲ層：中世以降の堆積層。黒褐色（10YR2/2・10YR2/3・10YR3/2）シルト土。
　小礫・焼土粒子・炭化物片・縄文時代～中世の遺物含む。

ⅣA 層：洪水砂層。旧山寺川を起源とする堆積層。古代～中世以前の洪水砂層。
　ⅣA1 層：灰黄褐色（10YR4/2）・にぶい黄褐色（10YR4/3）・褐色（10YR4/4）。
　　小礫・角礫・中粒砂を多く含む。古代の土師器片を含む。礫主体の層。
　ⅣA2 層：にぶい黄褐色（10YR4/3・5/3）。中粒砂を多く、小礫を少量含む。砂主体の層。

Ⅴ層：弥生時代～古代の堆積層。暗褐色（10YR3/4）シルト土。小礫・焼土粒子・炭化物片・地山ブロック等を含む。
　縄文時代～古代の遺物を包含。

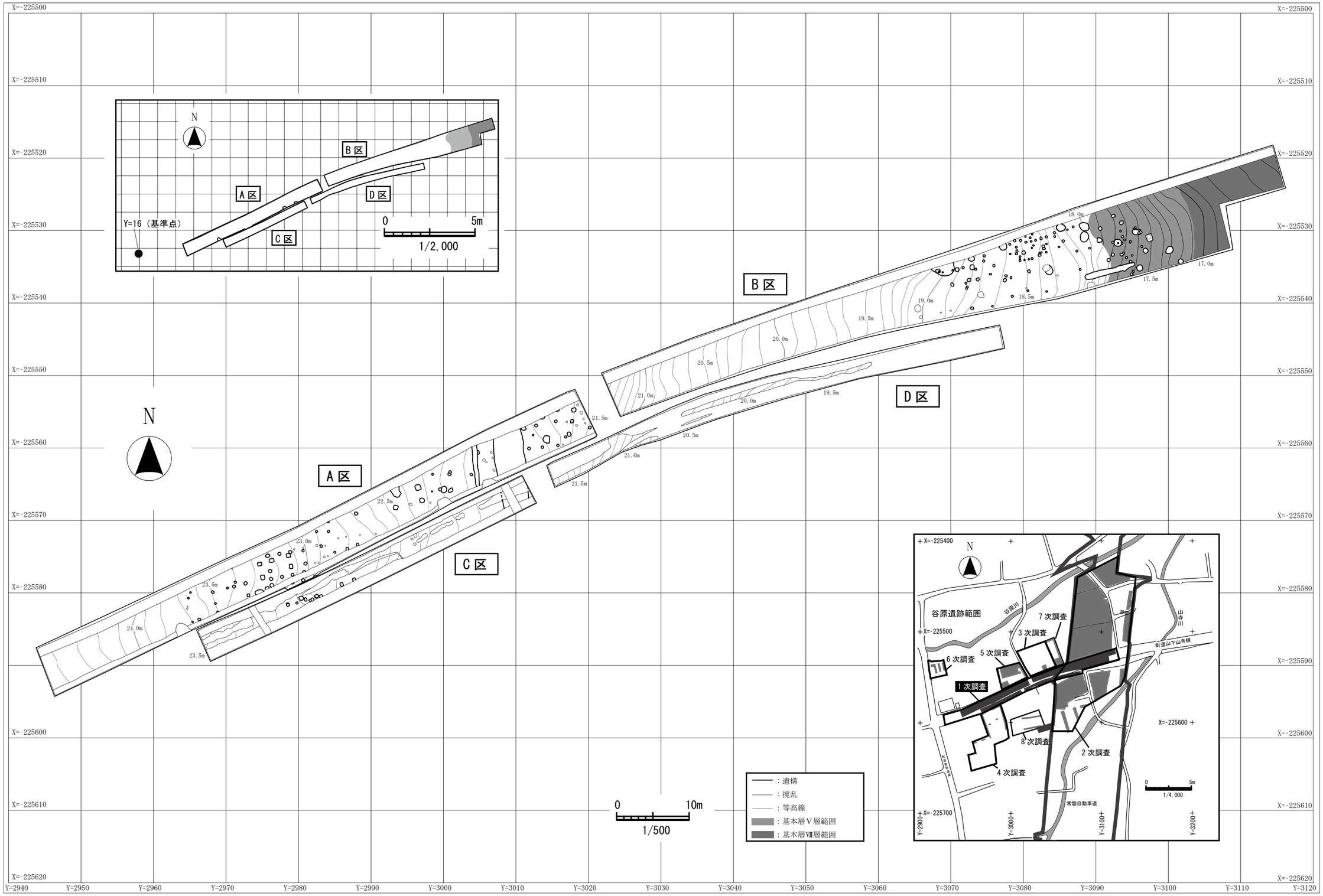
ⅥA 層：洪水砂層。旧山寺川を起源とする堆積層。
　ⅥA1 層：灰黄褐色（10YR4/2）・褐色（10YR4/4）。小礫を少量、中粒砂を多量含む。砂主体の層。
　ⅥA2 層：暗褐色（10YR3/3）・褐色（10YR4/6）。小礫・礫を多量含む。礫主体の層。
　ⅥA3 層：にぶい黄褐色（10YR4/3）・褐色（10YR4/6）。小礫を少量、中粒砂を多量含む。砂主体の層。

Ⅶ層：縄文時代中期～後期の堆積層。縄文時代中期末～後期前葉の遺物を含む層。Ⅶa 層とⅦb 層に細別。
　Ⅶa 層：黒褐色（10YR2/3）粘土質シルト土。小礫・焼土粒子・炭化物片・地山ブロック等を含み、縄文時代の遺物を多く包含。
　Ⅶb 層：黒褐色（10YR2/2・10YR3/2）粘土シルト土。小礫・焼土粒子・炭化物片を含み、縄文時代の遺物を少量包含。

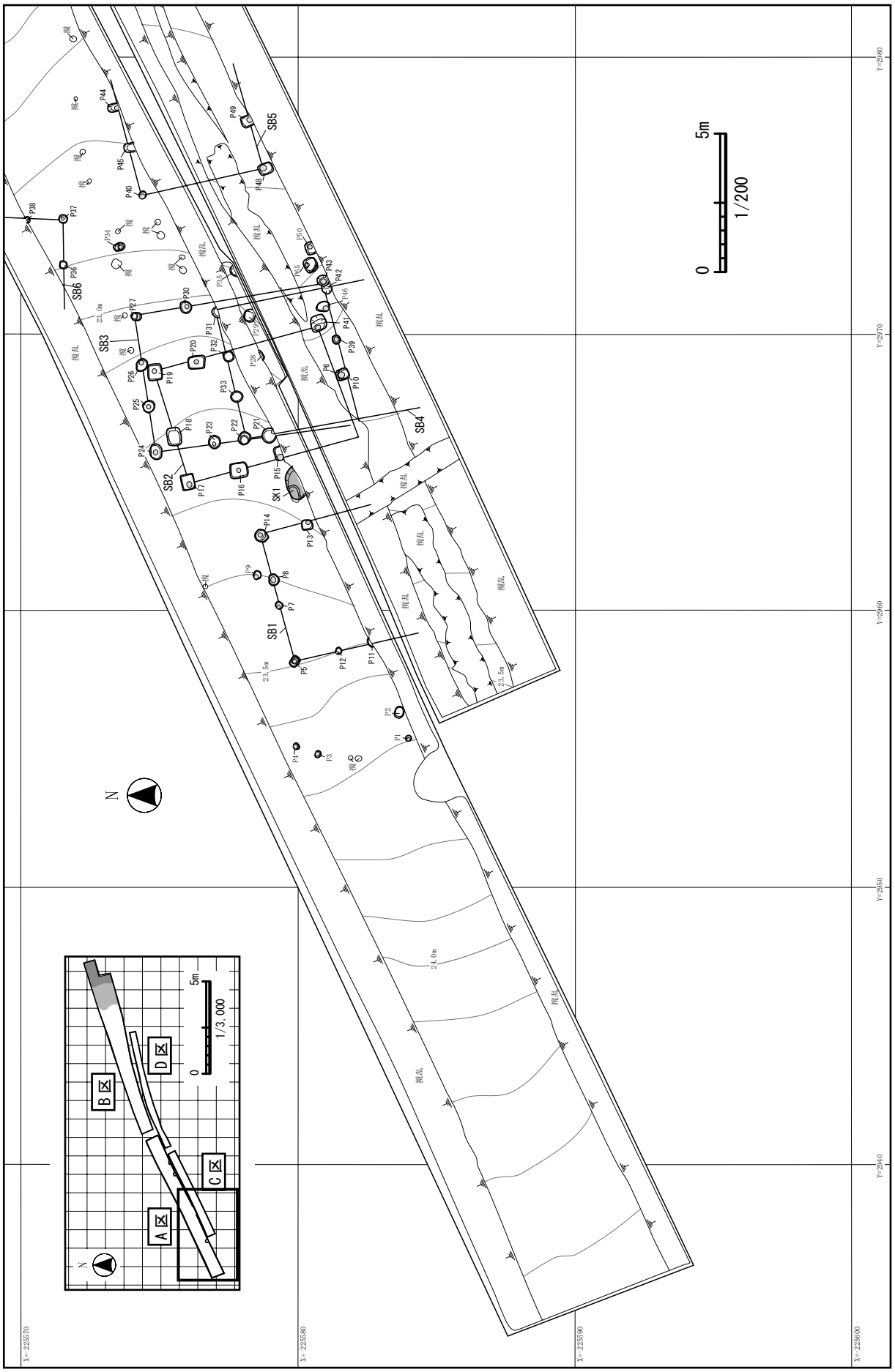
Ⅸ層：Ⅶ層からⅩ層（地山）への漸移層。褐色（10YR4/4）粘土質シルト土。

Ⅹ層：地山。各地点により異なる種類の地山を確認。基本的にはⅩｄ層→Ⅹｃ層→Ⅹｂ層→Ⅹａ層の順に堆積。
　Ⅹａ層：黄褐色（10YR5/6）粘土質シルト土。均一な層。
　Ⅹｂ層：明黄褐色（10YR6/6）・褐色（10YR4/6）粘土質シルト土。小礫・黒色粒子を含む。
　Ⅹｃ層：にぶい黄橙色（10YR6/4）・明黄褐色（10YR7/6）シルト土。小礫・黒色粒子を含む。
　Ⅹｄ層：褐色（7.5YR4/6）・にぶい橙色（7.5YR6/4）シルト土。小礫を含む

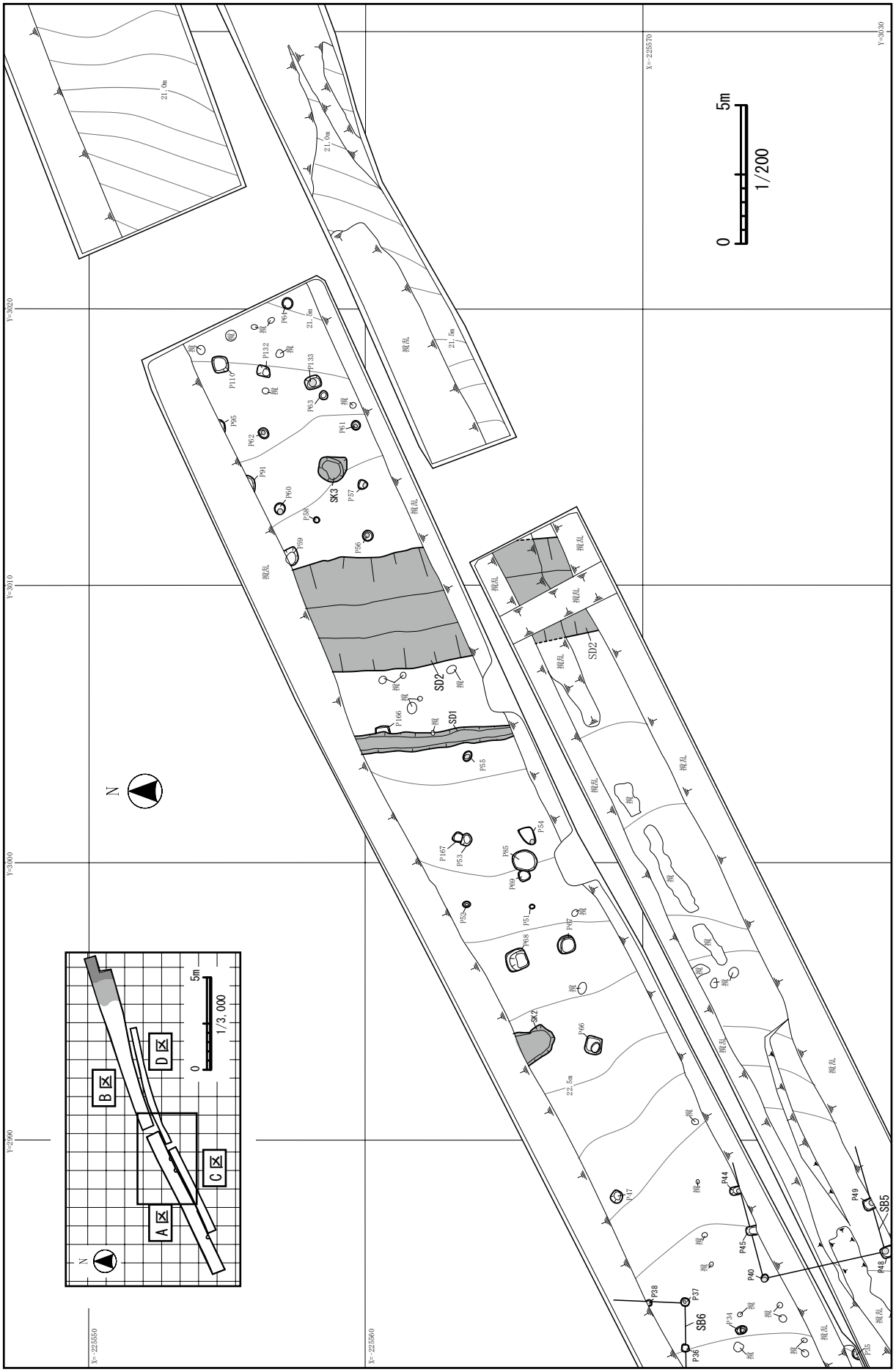
第５図　谷原遺跡１次調査（Ａ～Ｄ区）基本層序



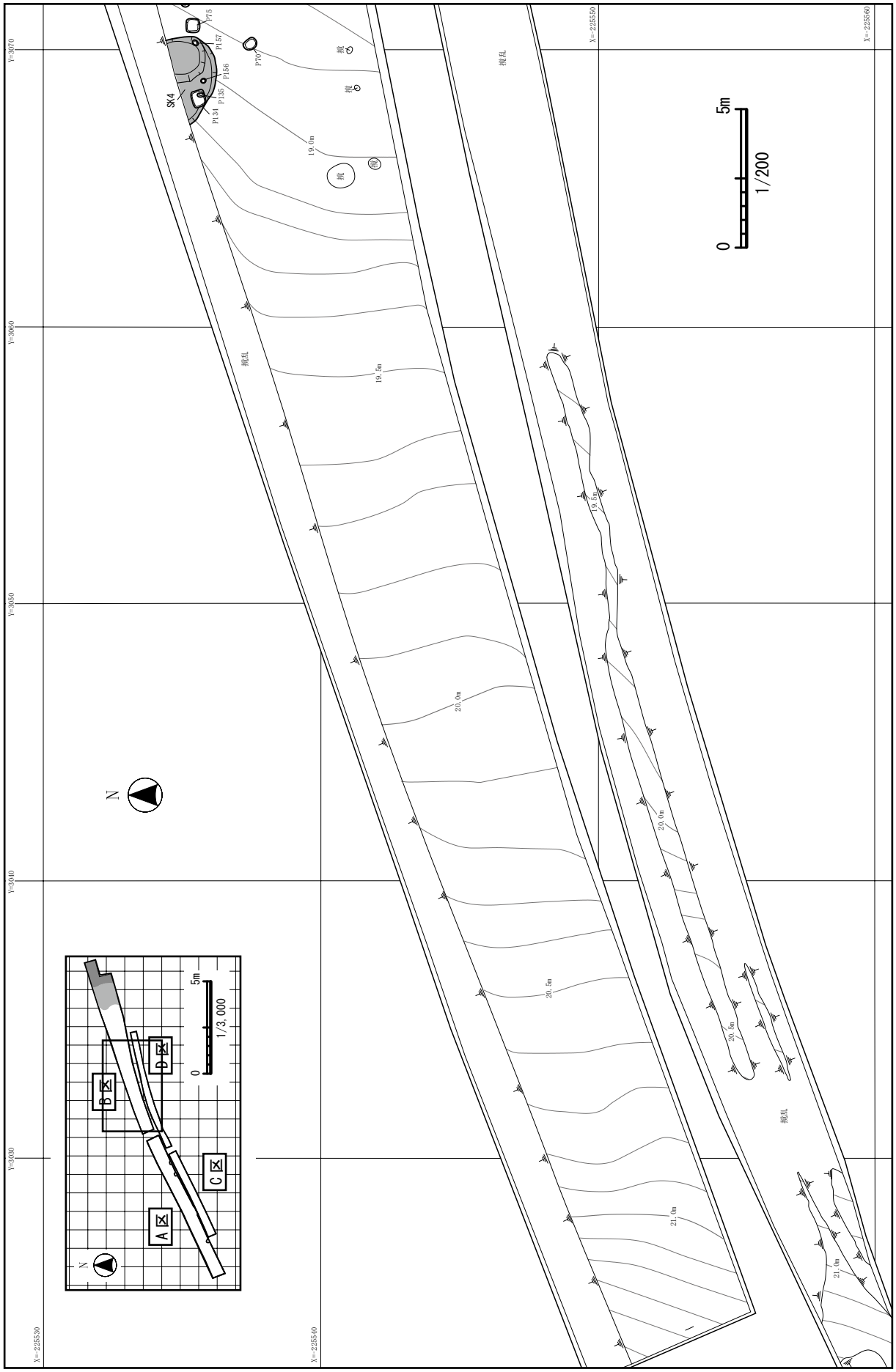
第6図　谷原遺跡（1次調査）遺構配置図（全体図）



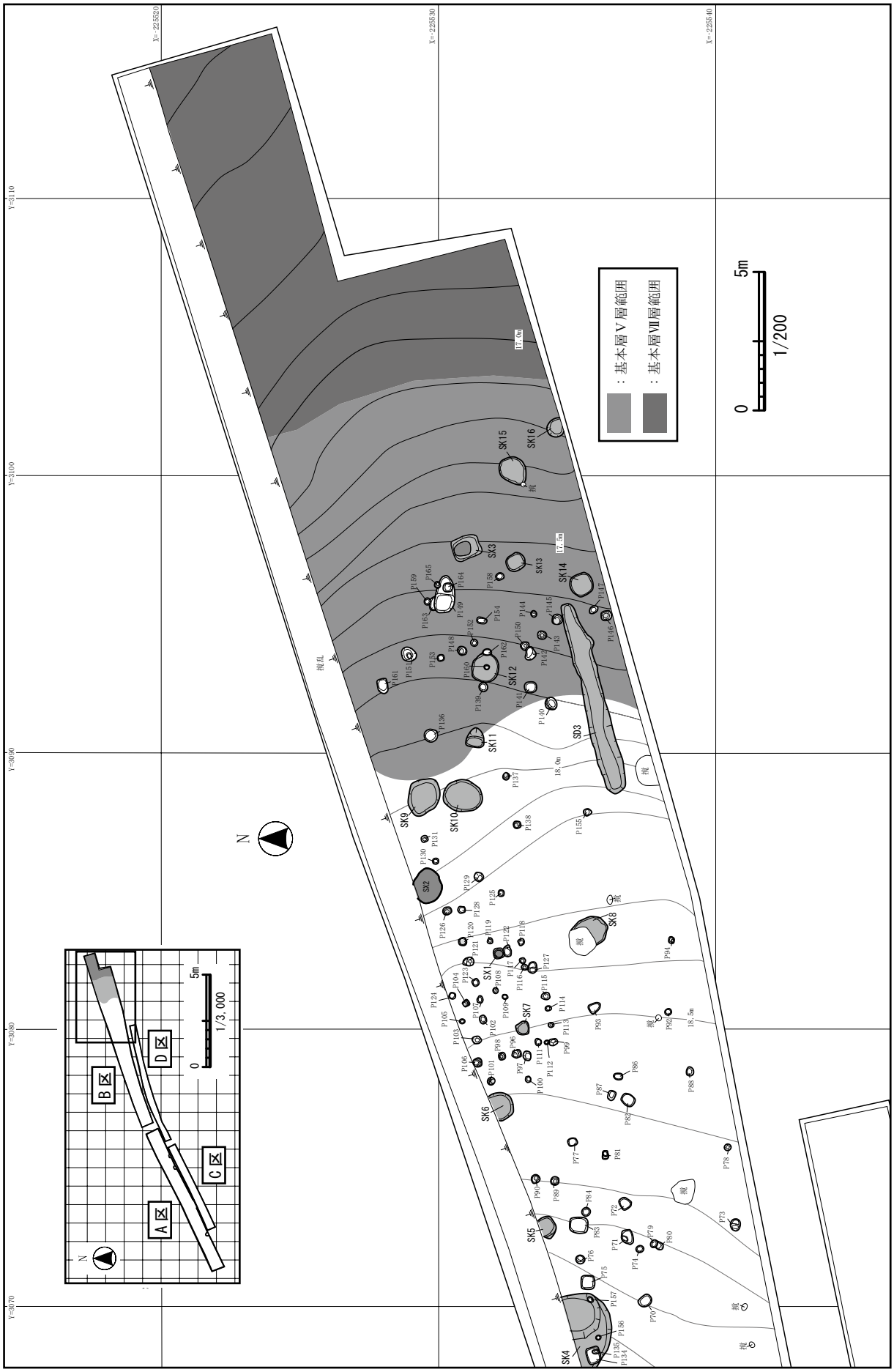
第7-1図　谷原遺跡（1次調査）遺構配置図（１）―A・C区①―



第7-2図　谷原遺跡（1次調査）遺構配置図（２）―A・C区②―



第7-3図　谷原遺跡（1次調査）遺構配置図（３）―B・D区①―



第7-4図　谷原遺跡（1次調査）遺構配置図（4）―B・D区②―

1. 谷原遺跡 A 区 調査区全景（東から）

2. 谷原遺跡 B 区 調査区全景（東から）

3. 谷原遺跡 C 区 調査区全景（東から）

4. 谷原遺跡 D 区 調査区全景（東から）

第8図　谷原遺跡 A～D区 調査区全景

１．掘立柱建物跡、その他の柱穴・ピット

今回の調査では、167 個の柱穴跡・ピット（小穴）を検出した（第 17 図）。これらの柱穴・ピットの多くは、掘立柱建物跡や柱穴列跡などを構成する柱穴であったと考えられる。検出した 167 個の柱穴・ピットを検討した結果、掘立柱建物跡 6 棟(SB1～6)を抽出することができた（第 9 図）。以下、それぞれ特徴と出土遺物について記載する。

（１）掘立柱建物跡

今回の調査では、掘立柱建物跡 6 棟(SB1～6)を検出した（第 9～16・22・24 図、第 5 表）。建物の柱穴は、基本層Ｘb～Ｘc 層上面において確認した。

掘立柱建物跡を構成する柱穴として判断できたものは 167 個中 38 個（全体の 2 割程度）である。建物として認定できなかった柱穴・ピットの多くは、本来、建物等を構成する柱穴であったと考えられ、今回の調査区内ではさらに建物・柱穴列などが存在したと推定される。また、建物として認定したものの中には、調査区外に延びていると想定したものもあり、実際には建物ではない可能性があるものも含まれている。これらのことから、今回報告する建物については、今後の周辺の発掘調査や掘立柱建物研究の進展、建物群の再検討等により、変更・追加する可能性があることを申し添えておきたい。

以下、掘立柱建物跡として認定した 6 棟の建物の特徴について記載する。なお、本項での掘立柱建物跡の情報掲載にあたっては、柱穴規模・柱間寸法・傾きなどの各計測値、柱穴の土層などの観察表の表記方法は以下のとおりとした。

［各柱穴・ピットの個別情報の記載方法］

（例）SB1 掘立柱建物跡　構成 Pit 属性表

遺構番号		柱穴・ピット掘方（長軸・短軸：cm、底面標高：m）						柱痕跡				柱類型	備考（重複・出土遺物等）
		平面形	長軸	短軸	残存深	底面標高	埋土 堆土	平面形	長軸	短軸	堆土		
SB1	P5	隅丸方形	40	31	11	23.3	4Aa・m	円形	15	14	3A	あ	堆m:焼土、炭片
SB1	P7	円形	27	27	11	23.3	掘埋1：5Am 掘埋2：9Am	円形	15	12	3A	あ	堆m:黒色土ブ少量
SB1	P8	楕円形	41	37	8	23.3	掘埋1：5Am 掘埋2：5Aa	楕円形	22	18	3A	い	堆m:黒色土ブ
SB1	P11	円形？	38	(11)	34	23.2	抜穴1：4Ac 抜穴2：3Aa	－	－	－	－	－	柱抜取 土師器
SB1	P12	円形	24	22	6	23.4	11Cm	円形	10	8	3A	あ	堆m：黒色土ブ多量
SB1	P13	隅丸方形	40	36	16	23.2	掘埋1：4Ac 掘埋2：9Aa	円形	16	14	3A	う	土師器
SB1	P14	円形	48	43	19	23.2	掘埋1：4Aa・m 掘埋2：4Ac	円形	16	15	3A	い	堆m：炭片 土師器

※() 内の数値は推定値

①類型表により記号化

②その他の記載事項参照

①ピット（柱穴・小穴）類型

【柱類型】

あ：柱痕跡が柱穴掘方底面に接するもの

い：柱痕跡が柱穴掘方底面まで至らないもの

う：柱痕跡が柱穴掘方底面よりさらに下に延びるもの

【柱痕跡・堀方の埋土・堆積土類型】

■土色

1: 黒褐色 (10YR3/1)　2: 黒褐色 (10YR3/2)　3: 暗褐色 (10YR3/3)
4: 暗褐色 (10YR3/4)　5: 灰黄褐色 (10YR4/2)　6: にぶい黄褐色 (10YR4/3)
7: にぶい黄褐色 (10YR5/3)　8: にぶい黄褐色 (10YR5/4)　9: 褐色 (10YR4/4)
10: 褐色 (10YR4/6)　11: 黄褐色 (10YR5/6)　12: 暗褐色 (7.5YR3/3)
13: 暗褐色 (7.5YR3/4)　14: 褐色 (7.5YR4/3)　15: 暗赤褐色 (10R3/3)
16: 赤褐色 (5YR4/6)　17: 黒褐色 (10YR2/2)　18: 褐灰色 (10YR4/1)
19: 明黄褐色 (10YR6/6)　20: 黒褐色 (10YR2/3)

■土性

A: シルト　B: 砂質シルト　C: 粘土質シルト

■混入物

a: 地山ブロック多く含む　b: 地山ブロック含む　c: 地山ブロック少量含む
d: 地山ブロック微量含む　e: 地山粒子多く含む　f: 地山粒子含む
g: 地山粒子少量含む　h: 地山粒子微量含む　i: 小礫多く含む
j: 小礫含む　k: 小礫少量含む　l: 小礫微量含む
m: その他（上記以外のもの※）

※m を選択した場合は備考欄に堆積土混入物を記載

※備考欄幅の関係から、下記の内容については記載を省略した

炭化物片→炭片　焼土ブロック→焼土ブ　黒色土ブロック→黒色土ブ

【記載例】

1Aa・・・土色：黒褐色 (10YR3/1)、土性：シルト、混入物：地山ブロック多く含む

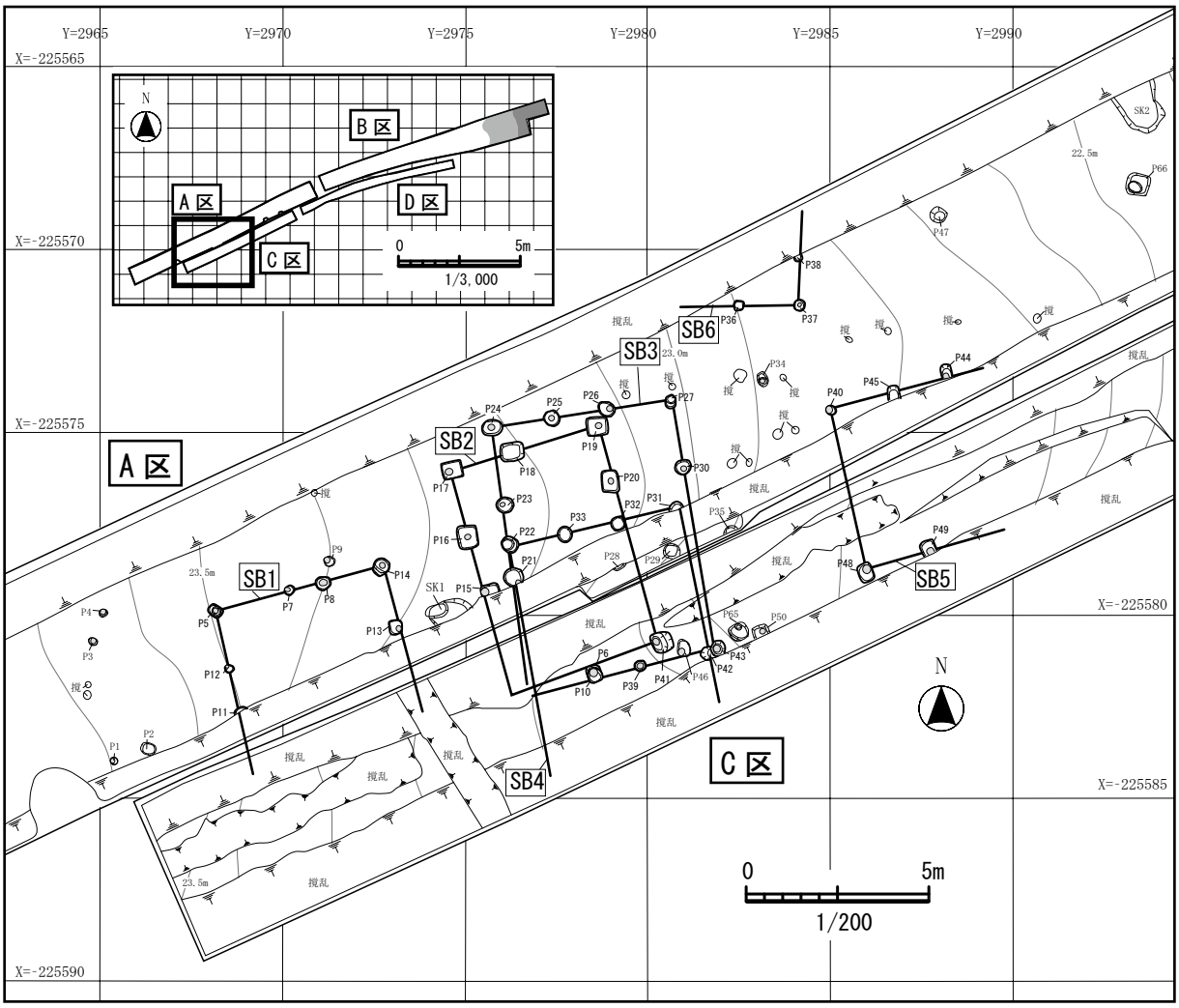
②その他の記載事項

■柱穴・ピットの計測値
・(数値) は推定値を示す
■柱穴・ピット掘欄の「埋土・堆土（堆積土）」記載事項
・柱穴の場合は「掘方埋土」を意味する
・「1 層・2 層」等の記載：「柱穴・小穴」の埋土等が 2 層以上に分層した場合を示す
・「抜穴」：柱抜き取り穴の埋土・堆積土／「抜穴 1」：抜き取り穴 1 層の埋土・堆積土
・「切穴」：柱切り取り穴の埋土・堆積土／「切穴 1」：切き取り穴 1 層の埋土・堆積土
■備考欄の記載事項
・柱抜取：柱が抜き取られているもの　・柱切取：柱が切り取られているもの
・この他、重複関係・出土遺物を記載

第5表　谷原遺跡（1次調査）　掘立柱建物跡（SB1～6）　一覧表

遺構No.	建物間数		棟方向	平面規模（m）　※（ ）内：推定値/[ ]内：庇・張出の計測値						建物の方向		建物面積（㎡）	備考
	桁行	梁行		桁行総長/測定柱列/柱間寸法			梁行総長/測定柱列/柱間寸法			建物傾斜角度/真北基準			
SB 1	2以上	3	南北?	2.9 以上	西	1.7＋1.2＋○～	4.7	北	2.1＋0.9＋1.7	西15°	N-15°-W	13.6㎡ 以上	構成Pit：P5.7.8.11～14 ※建物南半の柱穴現代の攪乱により削平
SB 2	(4)	2	南北	(6.2)	西	1.8＋1.7＋○＋○	4.2	北	1.7＋2.5	西15°	N-15°-W	26.04㎡	構成Pit：P6.15～20. 41 （すべて掘方が隅丸方形の柱穴で構成） 重複：SB2→SB3
SB 3	(4)	3	南北	(6.9)	西	2.1＋2.0＋○＋○	5.0	北	1.7＋1.5＋1.8	西10°	N-10°-W	34.5㎡	構成Pit：P10.21.23～27.30.39.43 （すべて掘方が円形の柱穴で構成） 重複：SB2・4→SB3
SB 4	－	3	南北?	4.1 以上	－	－	4.7	北	1.5＋1.5＋1.7	西12°	N-12°-W	19.27㎡ 以上	構成Pit：P22.31～33.42 （すべて掘方が円形の柱穴で構成） 重複：SB4→SB3 ※SB3と同等規模の建物か？ ※建物南半調査区外へ延びる
SB 5	2以上	1	東西	3.3 以上	北	1.8＋1.5＋○～	4.5	西	4.5	西13°	N-13°-W	14.85㎡ 以上	構成Pit：P40.44.45.48.49 ※建物東半の柱穴現代の攪乱により削平
SB 6	1以上	1以上	―	1.6 以上	南	～○＋1.6	1.3 以上	東	～○＋1.3	西0°（真北）	N-0°-W	－	構成Pit：P36～38 ※建物北半調査区外へ延びる

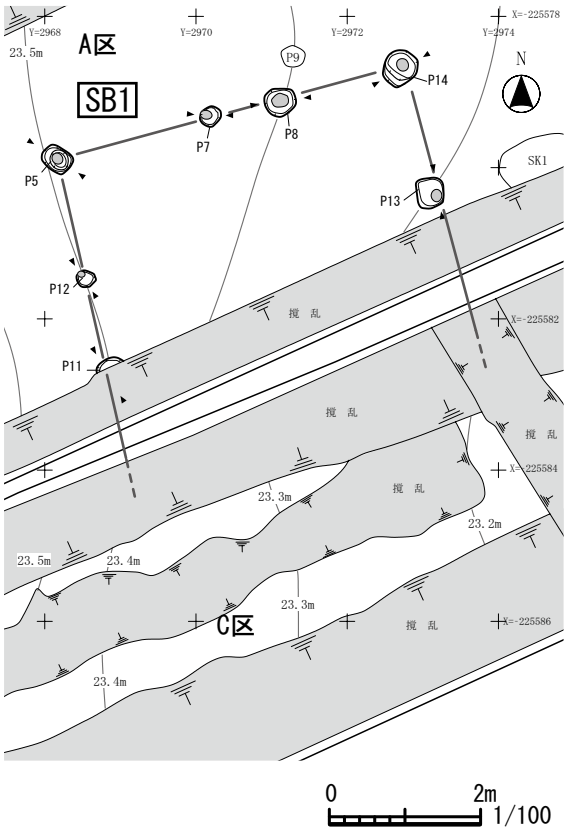
※（ ）内の数値は推定値を示す。
※柱間寸法は、東西方向のものは西から、南北方向のものは北から順に記した。
※建物が調査区外に延びているため、規模が不明な建物や柱の一部が残存していない建物については、下記のとおり表記した。
　○調査区外に延びる建物・・・建物間数：「●（数値）以上×１間」、　平面規模：総長を「●（数値）m以上」と表記と表記。
　○柱穴の一部が残存していない建物・・・総長・柱間寸法のうち、実際の計測値は「●（数値）」、不明な場合は「○」または「○～」と表記。

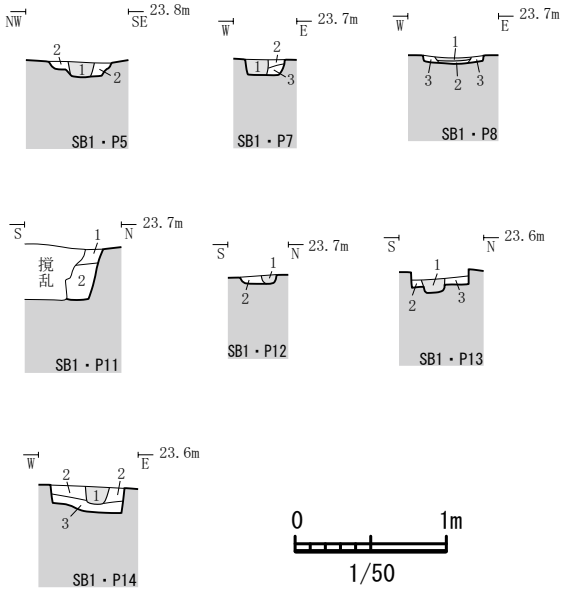


第9図　SB1～6掘立柱建物跡 遺構配置図

【SB1 掘立柱建物跡】

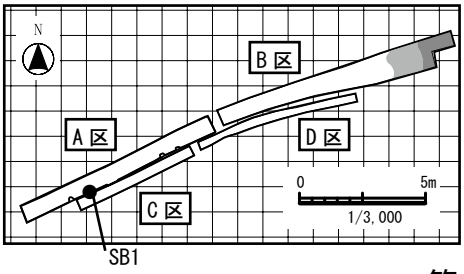
［位　　置］A・C 区西部、標高 23.3 ～ 23.5m の平坦面、検出面：基本層Xb ～Xc 層上面
［建物間数］桁行 2 間以上 × 梁行 3 間 / 南北棟建物跡か？
［建物方向］N-15°-W
［構成 Pit ］P5.7.8.11 ～ 14
［平面規模］桁行 2.9m 以上 × 梁行 4.7m（身舎面積 13.6 ㎡以上）
［柱間寸法］桁行 1.2 ～ 1.7m・梁行 0.9 ～ 2.1m
［出土遺物］土師器（P11.13.14）
［重　　複］なし ※現代の撹乱により南半の柱穴は残存していない





【P5・12】１層：柱痕跡　２層：掘方埋土
【P7・8・13・14】１層：柱痕跡　２・３層：掘方埋土
【P11】1・2 層：柱抜取

※平面図 S=1/100　断面図 S=1/50

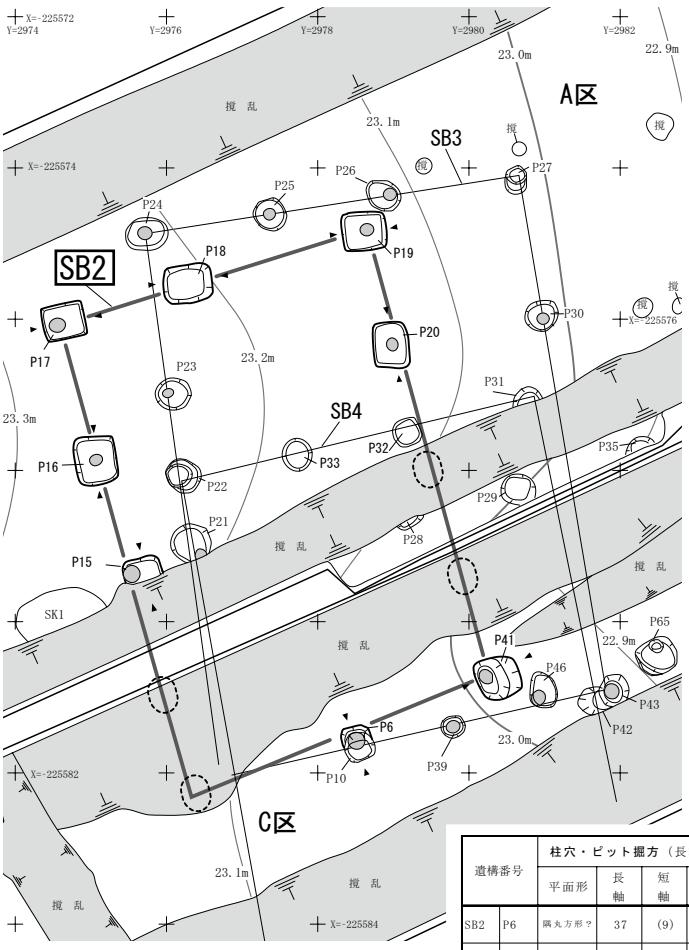


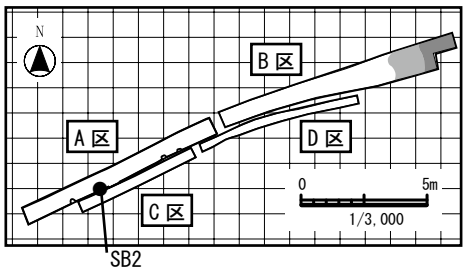
遺構番号		柱穴・ピット掘方（長軸・短軸：cm、底面標高：m）						柱　痕　跡				柱類型	備　考（重複・出土遺物等）
		平面形	長軸	短軸	残存深	底面標高	埋土 堆土	平面形	長軸	短軸	堆土		
SB1	P5	隅丸方形	40	31	11	23.3	4Aa・m	円形	15	14	3A	あ	堆m:焼土、炭片
SB1	P7	円形	27	27	11	23.3	掘埋1：5Am 掘埋2：9Am	円形	15	12	3A	あ	堆m:黒色土ブ少量
SB1	P8	楕円形	41	37	8	23.3	掘埋1：5Am 掘埋2：5Aa	楕円形	22	18	3A	い	堆m:黒色土ブ
SB1	P11	円形？	38	(11)	34	23.2	抜穴1：4Ac 抜穴2：3Aa	—	—	—	—	—	柱抜取 土師器
SB1	P12	円形	24	22	6	23.4	11Cm	円形	10	8	3A	あ	堆m：黒色土ブ多量
SB1	P13	隅丸方形	40	36	16	23.2	掘埋1：4Ac 掘埋2：9Aa	円形	16	14	3A	う	土師器
SB1	P14	円形	48	43	19	23.2	掘埋1：4Aa・m 掘埋2：4Ac	円形	16	15	3A	い	堆m：炭片 土師器

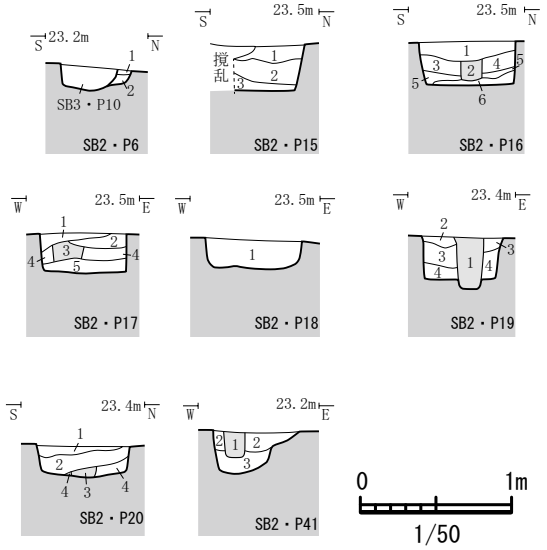
第 10 図　SB1 掘立柱建物跡

【SB2 掘立柱建物跡】

［位　　置］A・C 区西部、標高 23.0 ～ 23.2m の平坦面、検出面：基本層Ｘb ～Ｘc 層上面
［建物間数］桁行 4 間（推定）× 梁行 2 間 / 南北棟建物跡
［建物方向］N-15°-W
［構成 Pit ］P6.15 ～ 20.41
［平面規模］桁行 6.2m× 梁行 4.2m（身舎面積 26.04 ㎡）
［柱間寸法］桁行 1.5 ～ 1.8m・梁行 1.7 ～ 2.5m
［出土遺物］土師器・須恵器（P15 ～ 20）、石器（P16）
　　/ うち P16 柱切取穴出土土師器坏（ロクロ成形・内黒坏）を図示（第 22 図 1）
［重　　複］SB2・P6→SB3・P10【SB2→SB3】
　　※現代の撹乱により南半の柱穴の多くは残存していない







※平面図 S=1/100　断面図 S=1/50

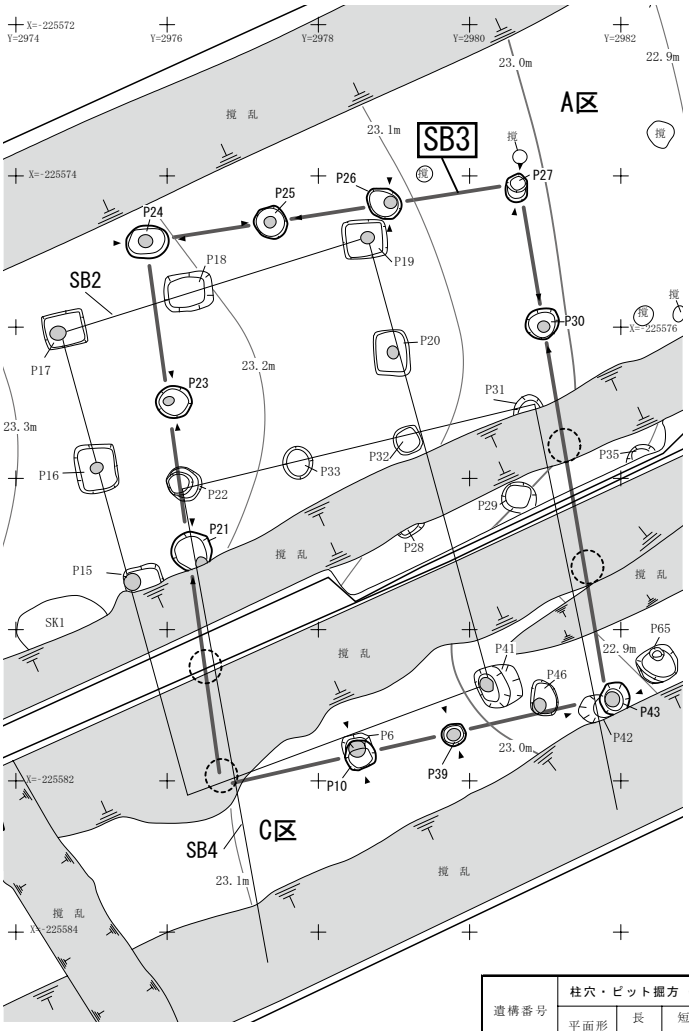
【P6】１・２層：柱抜取
【P15】１層：柱切取　２・３層：掘方埋土
【P16】１層：柱切取　２層：柱痕跡　３～６層：掘方埋土
【P17】１・２層：柱切取　３層：柱痕跡　４・５層：掘方埋土
【P18】１層：柱抜取
【P19】１層：柱痕跡　２～４層：掘方埋土
【P20】１・２層：柱切取　３層：柱痕跡　４層：掘方埋土
【P41】１層：柱痕跡　２・３層：掘方埋土

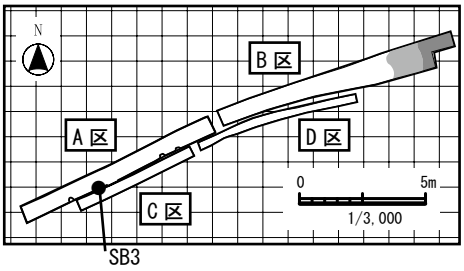
遺構番号		柱穴・ピット掘方（長軸・短軸：cm、底面標高：m）						柱痕跡				柱類型	備考（重複・出土遺物等）
		平面形	長軸	短軸	残存深	底面標高	埋土 堆土	平面形	長軸	短軸	堆土		
SB2	P6	隅丸方形？	37	(9)	10	22.8	抜穴1：4Ab・m 抜穴2：9Aa	―	―	―	―	―	SB3・P10より古/柱抜取/堆m：焼土、炭片
SB2	P15	隅丸方形？	51	(31)	31	22.9	切穴：4Ac・m 掘埋1：3Am 掘埋2：9Ab	円形	22	22	2A	う	堆m(掘埋1)：炭片、焼土微量/堆m(掘埋2)：炭片微量、焼土ブ少量/柱切取/土師器・須恵器
SB2	P16	隅丸方形	64	54	29	23.0	切穴：4Ab・m 掘埋1：4Ab 掘埋2：10Aa 掘埋3：4Aa 掘埋4：10Ca・m	楕円形	18	15	3A	い	堆m(切穴)：焼土粒子、炭片/堆m(掘埋4)：黒色土ブ多量/土師器、須恵器・石器/柱切取
SB2	P17	隅丸方形	55	47	28	23.0	切穴1：4Aa 切穴2：4Am 掘埋1：4Aa 掘埋2：9Am	円形	22	18	3A	い	堆m(切穴2)：焼土粒子、炭片/堆m(掘埋2)：黒色土ブ多量/土師器・須恵器/柱切取
SB2	P18	隅丸方形	64	50	20	23.0	抜穴：4Ab・m	―	―	―	―	―	堆m：炭片、焼土ブ/柱抜取/土師器・須恵器
SB2	P19	隅丸方形	59	51	35	22.7	掘埋1：9Am 掘埋2：4Ab・m 掘埋3：10Am	円形	18	17	3A	う	堆m：焼土ブ、炭片/土師器、須恵器
SB2	P20	隅丸方形	60	48	22	22.9	切穴1：4Aa 切穴2：4Ab・m 掘埋：3Aa・m	円形	18	15	3A	あ	堆m(切穴2)：焼土、炭片/堆m(掘埋)：黒色土ブ、炭片多量/柱切取/土師器・須恵器
SB2	P41	隅丸方形	57	55	30	22.5	掘埋1：4Aa 掘埋2：9Aa・m	円形	20	17	3A	い	堆m：黒色土ブ多量

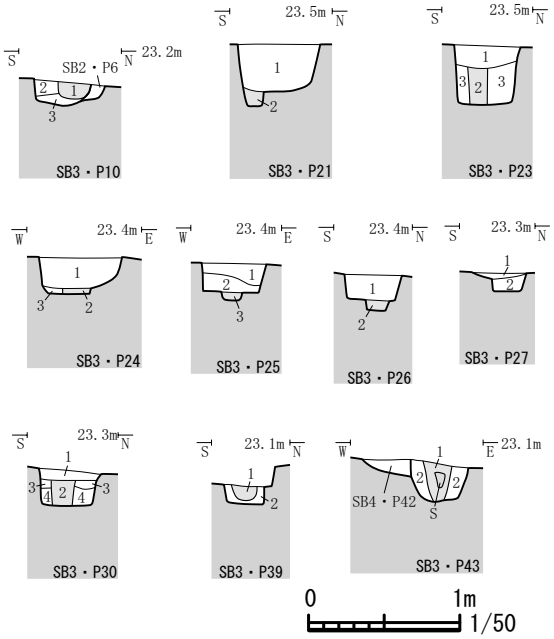
第 11 図　SB2 掘立柱建物跡

【SB3 掘立柱建物跡】

［位　　置］A・C 区西部、標高 23.0 ～ 23.2m の平坦面、検出面：基本層Xb ～Xc 層上面
［建物間数］桁行 4 間（推定）× 梁行 3 間 / 南北棟建物跡
［建物方向］N-10°-W
［構成Pit ］P10.21.23 ～ 27.30.39.43
［平面規模］桁行 6.9m× 梁行 5.0m（身舎面積 34.5 ㎡以上）
［柱間寸法］桁行 1.6（推定）～ 2.1m・梁行 1.3 ～ 2.2m
［出土遺物］縄文土器・土師器（P24）
［重　　複］SB2・P6→SB3・P10/SB4・P42→SB3・P43【SB2・4→SB3】
※現代の撹乱により南半の柱穴のうち残存していないものが多い







【P10】１層：柱痕跡　２・３層：掘方埋土
【P21】１層：柱切取　２層：柱痕跡
【P23・24】１層：柱切取　２層：柱痕跡　３層：掘方埋土
【P25】１・２層：柱切取　３層：柱痕跡
【P26】１層：柱切取　２層：柱痕跡　【P27】１・２層：柱抜取
【P30】１層：柱切取　２層：柱痕跡　３・４層：掘方埋土
【P39・43】１層：柱痕跡　２層：掘方埋土

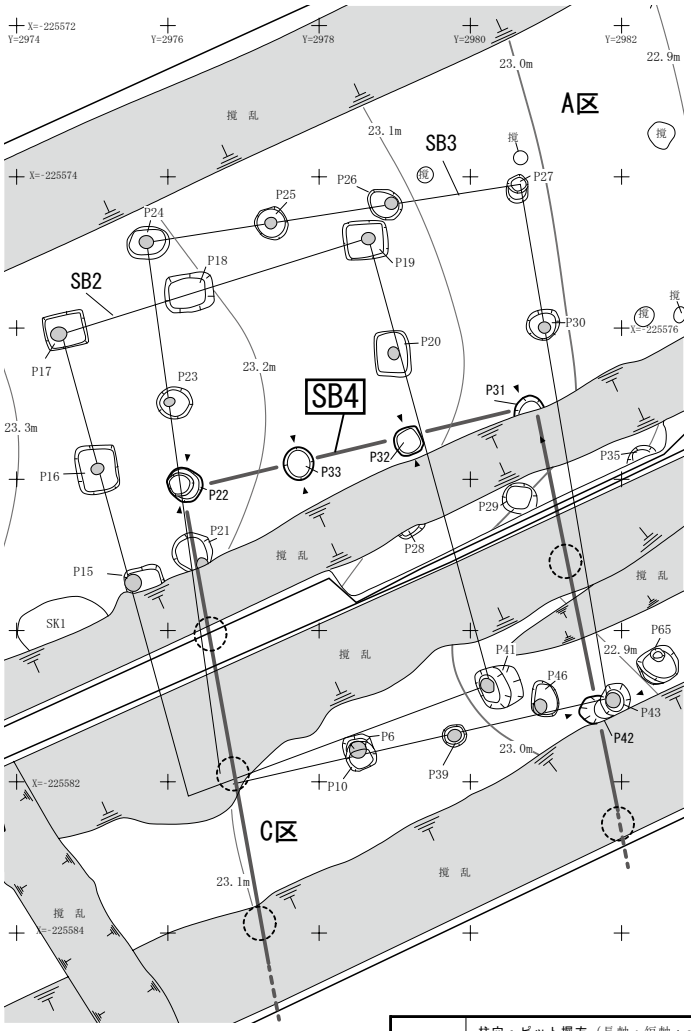
※平面図 S=1/100　断面図 S=1/50

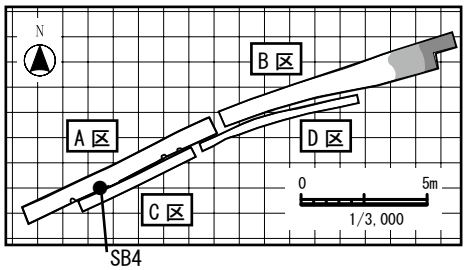
遺構番号		柱穴・ピット掘方（長軸・短軸：cm、底面標高：m）						柱痕跡				柱類型	備考（重複・出土遺物等）
		平面形	長軸	短軸	残存深	底面標高	埋土 堆土	平面形	長軸	短軸	堆土		
SB3	P10	円形	40	39	18	22.8	掘埋1：4Ab・m 掘埋2：9Aa	円形	23	22	3A	い	SB2・P6より新 堆m：焼土、炭片
SB3	P21	円形？	55	(49)	41	22.8	切穴：5Aa	円形？	15	(11)	3A	う	柱切取
SB3	P23	円形	48	48	40	22.8	切穴：5Aa・m 掘埋：4Aa	楕円形	15	11	3A	あ	堆m：焼土、炭片微量 柱切取
SB3	P24	楕円形	56	43	25	22.9	切穴：5Aa・m 掘埋：4Aa	円形	19	17	3A	う	堆m：炭片、柱切取 縄文土器、土師器
SB3	P25	円形	43	42	25	22.9	切穴1：5Aa 切穴2：6Aa	円形	16	15	9A	う	柱切取
SB3	P26	楕円形	45	39	24	22.8	切穴：5Aa	円形	18	16	3A	う	柱切取
SB3	P27	楕円形	38	29	13	22.8	抜穴1：5Aa 抜穴2：3Aa	－	－	－	－	－	柱抜取
SB3	P30	円形	44	42	25	22.8	切穴：5Aa 掘埋1：4Aa 掘埋2：10Aa・m	円形	16	16	3A	あ	堆m：黒色土ブ多量 柱切取
SB3	P39	円形	31	29	14	22.7	4Aa	円形	19	16	3A	い	
SB3	P43	円形？	(40)	39	28	22.7	4Ab・m	円形	21	20	3A	あ	SB4・P42より新 堆m：焼土、炭片

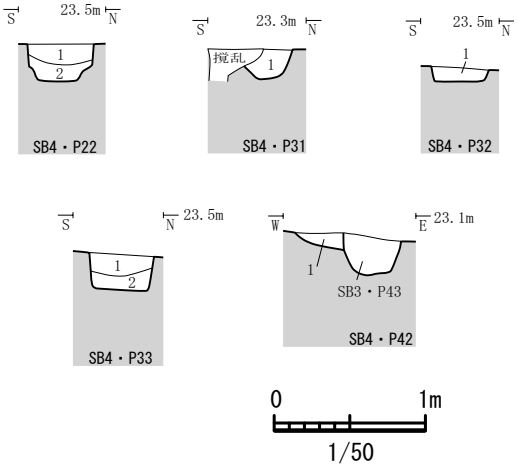
第 12 図　SB3 掘立柱建物跡

【SB4 掘立柱建物跡】

［位　　置］A・C 区西部、標高 23.0 ～ 23.2m の平坦面、検出面：基本層Ｘb ～Ｘc 層上面
［建物間数］桁行 2 間以上 × 梁行 3 間 / 南北棟建物跡か？
［建物方向］N-12°-W
［構成 Pit ］P22.31 ～ 33.42
［平面規模］桁行 4.1m 以上 × 梁行 4.7m（身舎面積 19.27 ㎡以上）
［柱間寸法］桁行不明・梁行 1.5 ～ 1.7m
［出土遺物］なし
［重　　複］SB4・P42→SB3・P43【SB4→SB3】
※現代の撹乱により南半の柱穴は残存していない







【P22・33】１・２層：柱抜取
【P31・32・42】１層：柱抜取

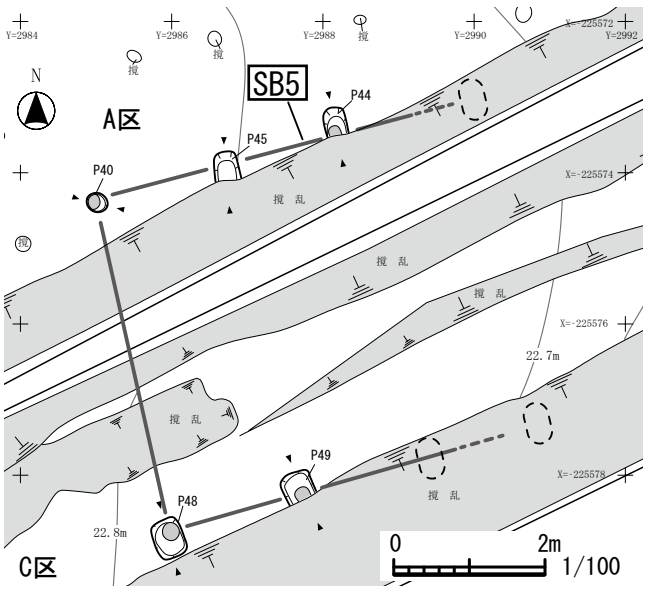
※平面図 S=1/100　断面図 S=1/50

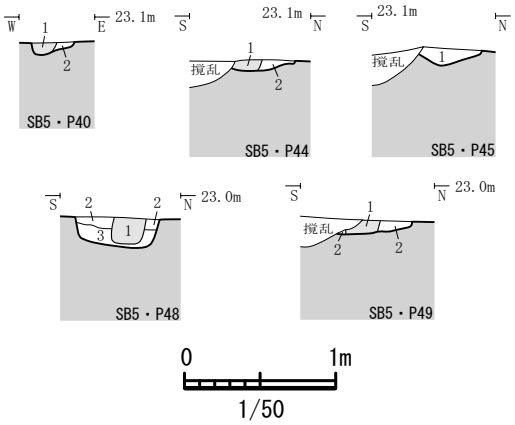
遺構番号		柱穴・ピット掘方（長軸・短軸：cm、底面標高：m）						柱痕跡				柱類型	備考（重複・出土遺物等）
		平面形	長軸	短軸	残存深	底面標高	埋土 堆土	平面形	長軸	短軸	堆土		
SB4	P22	円形	47	44	25	23.0	抜穴1：5Aa 抜穴2：6Aa	－	－	－	－	－	柱抜取
SB4	P31	円形？	38	(20)	19	22.9	抜穴：5Aa	－	－	－	－	－	柱抜取
SB4	P32	円形	37	37	10	23.1	抜穴：5Aa	－	－	－	－	－	柱抜取
SB4	P33	円形	42	40	25	23.0	抜穴1：5Aa 抜穴2：6Aa	－	－	－	－	－	柱抜取
SB4	P42	円形？	(36)	(31)	11	22.8	抜穴：4Aa	－	－	－	－	－	柱抜取、SB3・P43より古

第 13 図　SB4 掘立柱建物跡

【SB5 掘立柱建物跡】

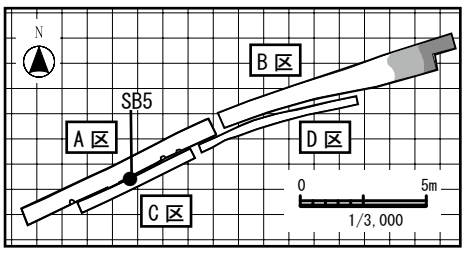
［位　　置］A・C 区西部、標高 22.7 ～ 22.8m の平坦面、検出面：基本層Ｘb ～Ｘc 層上面
［建物間数］桁行 2 間以上 × 梁行 1 間 / 東西棟建物跡　　［建物方向］N-13°-W
［構成 Pit ］P40.44.45.48.49　［平面規模］桁行 3.3m 以上 × 梁行 4.5m（身舎面積 14.85 ㎡以上）
［柱間寸法］桁行 1.6 ～ 1.8m・梁行 4.5m　［出土遺物］なし
［重　　複］なし ※現代の撹乱により東半の柱穴は残存していない





【P40・44・48・49】1 層：柱痕跡　2・3 層：掘方埋土
【P45】1 層：柱抜取

※平面図 S=1/100　断面図 S=1/50

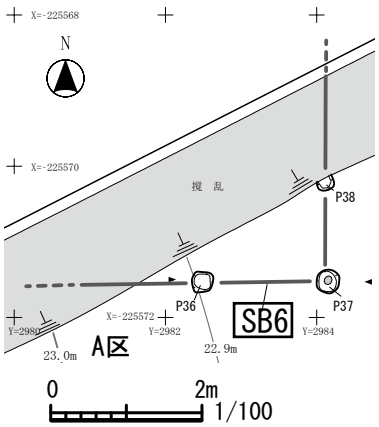


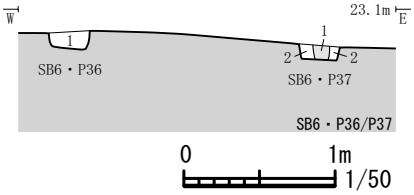
遺構番号		柱穴・ピット掘方（長軸・短軸：cm、底面標高：m）						柱痕跡				柱類型	備考（重複・出土遺物等）
		平面形	長軸	短軸	残存深	底面標高	埋土 堆土	平面形	長軸	短軸	堆土		
SB5	P40	円形	28	26	9	22.8	4Ab	楕円形	22	17	3A	あ	
SB5	P44	隅丸方形？	(36)	29	6	22.7	4Aa	円形？	16	(11)	3A	あ	
SB5	P45	隅丸方形？	(38)	32	11	22.7	抜穴：4Aa・m	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子微量 柱抜取
SB5	P48	隅丸方形	52	40	21	22.6	掘埋1：4Aa 掘埋2：6Ae	円形	25	22	3A	い	
SB5	P49	隅丸方形？	40	(38)	10	22.6	4Aa	円形？	19	(15)	3A	あ	

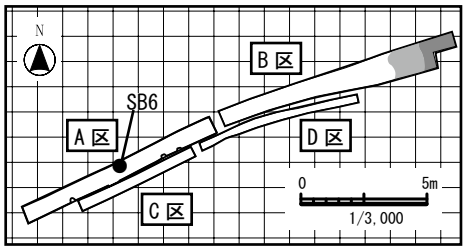
第 14 図　SB5 掘立柱建物跡

【SB6 掘立柱建物跡】

［位　　置］A 区西部、標高 22.9m の平坦面、検出面：基本層Ｘb ～Ｘc 層上面
［建物間数］桁行 1 間以上 × 梁行 1 間以上 / 棟方向不明 ※調査区外（北側）へ延びる
［建物方向］N-0°-W　［構成 Pit ］P36 ～ 38
［平面規模］桁行 1.6m 以上 × 梁行 1.3m 以上（身舎面積 不明）
［柱間寸法］桁行 1.6m・梁行 1.3m　［出土遺物］土師器（P36）
［重　　複］なし※現代の撹乱により西側の柱穴は残存していない





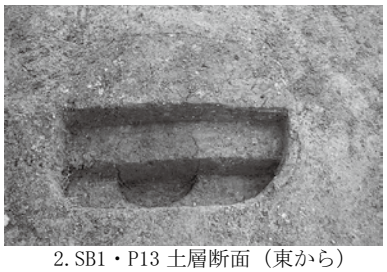


【P36】1 層：柱抜取
【P37】1 層：柱痕跡　2 層：掘方埋土
※平面図 S=1/200　断面図 S=1/50

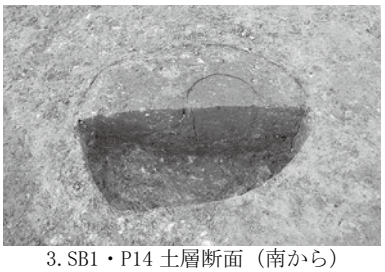
遺構番号		柱穴・ピット掘方（長軸・短軸：cm、底面標高：m）						柱痕跡				柱類型	備考（重複・出土遺物等）
		平面形	長軸	短軸	残存深	底面標高	埋土 堆土	平面形	長軸	短軸	堆土		
SB6	P36	円形	28	27	13	22.8	抜穴：4Aa	－	－	－	－	－	柱抜取、土師器
SB6	P37	円形	31	30	11	22.7	9Aa	円形	11	10	3A	あ	
SB6	P38	円形？	33	(17)	10	－	抜穴：4Aa	－	－	－	－	－	柱抜取

第 15 図　SB6 掘立柱建物跡

1. SB2 ～ 4 掘立柱建物跡　完掘状況（北から）



2. SB1・P13 土層断面（東から）



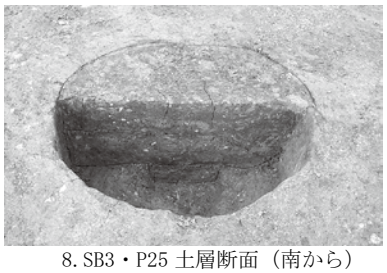
3. SB1・P14 土層断面（南から）

4. SB2・P16 遺物出土状況（北東から）

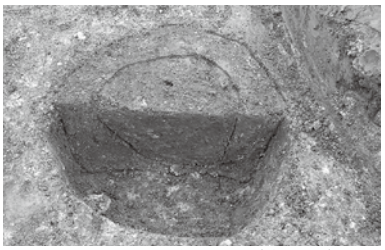
5. SB2・P18 土層断面（南から）

6. SB2・P19 土層断面（南から）

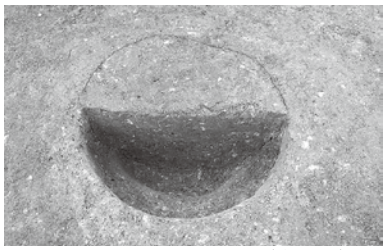
7. SB2・P20 土層断面（東から）



8. SB3・P25 土層断面（南から）



9. SB3・P39 土層断面（東から）



10. SB4・P22 土層断面（東から）

11. SB4・P33 土層断面（東から）

12. SB5・P49 土層断面（東から）

13. SB6・P37 土層断面（南から）

第16図　SB1～6 掘立柱建物跡　（写真図版）

（２）その他の柱穴・ピット（第 17～24 図、第 6 表）

本項では、建物として認定できなかった柱穴・ピット 129 個について若干の記載を行う。なお、柱穴・ピット個別の情報は、今後もさらなる検討が加えられるよう、平面図を第 17-1～5 図、断面図を第 18～20 図、規模・堆積土・出土遺物などのデータを第 6 表に掲載した。

柱穴・ピットは、基本層Ｘb～c 層において確認した。柱穴・ピットは、A 区の西端を除くほぼ全域、B 区東半、C 区西側の範囲に分布するが、特に B 区東半部分に多くのピットが分布している。検出した柱穴・ピットの規模・平面形は、長軸 17～131cm、短軸 15～75cm の円形・楕円形・隅丸方形を呈し、残存深は 4～54cm ほどである。検出した 129 個のうち、33 個で直径 11～28cm の円形・楕円形を呈する柱痕跡を確認した。全体として、今回確認した柱穴・ピットは、平面形が円形・楕円形、掘方規模が長軸 20～40cm 前後、柱痕跡が 15cm 前後のものが主体といえる。

第6-1表　谷原遺跡1次調査（A～D区）　ピット・柱穴跡属性表（1）-P1～110-

遺構番号	種類	柱穴・ピット掘方（長軸・短軸：cm、底面標高：m）						柱痕跡				柱類型	備考（重複・出土遺物等）
		平面形	長軸	短軸	残存深	底面標高	埋土 堆土	平面形	長軸	短軸	堆土		
P1	柱穴	円形	22	21	16	23.5	4Ae	楕円形	14	12	3A	あ	
P2	小穴	楕円形	41	33	8	23.5	1層：4Ab 2層：6Am	－	－	－	－	－	堆m：黒色土ブ多量
P3	柱穴	楕円形	26	20	6	23.5	9Ab	円形	15	15	4A	あ	
P4	柱穴	円形	23	21	11	23.5	9Ab	円形	18	15	4A	あ	
P9	柱穴	円形	30	28	7	23.3	4Aa	円形	17	16	3A	あ	
P28	小穴	円形？	39	(12)	33	22.8	5Aa	－	－	－	－	－	
P29	小穴	円形？	46	41	28	22.7	5Aa	－	－	－	－	－	
P34	柱穴	楕円形	40	29	20	22.7	4Aa	円形	14	12	3A	あ	土師器
P35	小穴	円形？	40	(14)	20	22.7	5Aa	－	－	－	－	－	
P46	柱穴	楕円形	46	35	12	22.8	4Aa	円形	20	18	3A	あ	
P47	小穴	円形	44	42	8	22.4	4Ab	－	－	－	－	－	
P50	柱穴	隅丸方形？	45	(30)	38	22.4	4Aa	円形	16	15	3A	あ	土師器
P51	小穴	楕円形	20	16	11	22.1	3Aa・m	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子 土師器、須恵器
P52	柱穴	楕円形	29	22	17	22.0	5Aa	円形	12	10	3A	あ	
P53	小穴	楕円形	44	36	16	21.9	20Ab・m	－	－	－	－	－	P167より新、 堆m：焼土、炭片 土師器
P54	柱穴	楕円形	69	45	24	21.9	掘埋1：5Ab 掘埋2：5Aa	円形	17	16	3A	う	
P55	柱穴	楕円形	39	29	20	21.9	切穴：4Ab・m 掘埋：5Aa	楕円形	21	15	3A	あ	堆m：焼土、炭片 柱切取
P56	柱穴	円形	38	38	28	21.5	4Aa・m	円形	17	16	3A	あ	堆m：黒色土ブ多量 須恵器
P57	柱穴	円形	34	34	22	21.5	4Aa・m	楕円形	19	14	3A	あ	堆m：黒色土ブ多量
P58	小穴	円形	22	21	23	21.5	3Am	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子、炭片 土師器
P59	小穴	円形？	64	(41)	33	21.5	4Aa	－	－	－	－	－	土師器、須恵器
P60	柱穴	円形	41	39	20	21.5	掘埋1：4Aa 掘埋2：9Aa	円形	22	20	3A	あ	土師器
P61	柱穴	円形	34	32	19	21.1	4Aj・h	円形	14	12	3A	あ	
P62	柱穴	楕円形	40	36	31	21.4	掘埋1：4Aa 掘埋2：9Aa	円形	16	13	3A	あ	土師器
P63	小穴	円形	32	31	10	21.1	4Aj・h	－	－	－	－	－	
P64	小穴	円形	41	39	14	20.9	1層：4Ag・m 2層：5Af	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子 縄文土器
P65	小穴	隅丸方形	52	47	25	22.7	1層：3Aa・m 2層：2Aa 3層：3Aa	－	－	－	－	－	堆m：焼土、炭片多量 土師器
P66	小穴	隅丸方形	63	59	8	22.3	4Ab・m	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子、炭片 土師器、須恵器、石器
P67	小穴	円形	64	63	11	23.1	4Aa・m	－	－	－	－	－	堆m：焼土ブ、炭片
P68	小穴	隅丸方形	78	75	24	23.0	4Aa・m	－	－	－	－	－	堆m：黒色土ブ多量、炭片・焼土粒子微量 土師器
P69	小穴	隅丸方形？	42	(37)	7	22.1	5Aa・m	－	－	－	－	－	P85より古、土師器 堆m：焼土ブ多量
P70	小穴	楕円形	49	40	13	18.7	1層：20Ab・m 2層：6Ag 3層：9Bh	－	－	－	－	－	堆m：礫、焼土ブ 縄文土器、石器
P71	小穴	円形	51	42	9	18.6	20Ab・m	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子、炭片、礫 縄文土器
P72	小穴	円形	42	38	11	18.6	1層：2Am 2層：2Ae・m	－	－	－	－	－	堆m(1層)：焼土粒子、炭片、礫 堆m(2層)：黒色土粒子多量 縄文土器、須恵器、石器
P73	小穴	楕円形	42	35	19	18.4	1層：2Am 2層：3Ac	－	－	－	－	－	堆m：焼土ブ、炭片微量 土師器
P74	小穴	円形	28	25	9	18.6	1層：2Am 2層：4Af	－	－	－	－	－	堆m：焼土ブ、炭片 縄文土器
P75	小穴	隅丸方形	49	49	11	18.7	3Am	－	－	－	－	－	堆m：炭片・焼土粒子・黒色土ブ、縄文土器
P76	小穴	円形	32	31	19	18.6	1層：2Am 2層：3Ah	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子、炭片
P77	小穴	楕円形	34	28	10	18.5	1層：4Af・j 2層：6Ae	－	－	－	－	－	
P78	小穴	円形	25	24	7	18.5	2Am	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子 縄文土器、土師器、須恵器
P79	小穴	楕円形	29	24	11	18.6	2Am	－	－	－	－	－	P80より新、縄文土器 堆m：焼土粒子
P80	小穴	楕円形？	27	(23)	12	18.6	1層：2Ag 2層：3Af	－	－	－	－	－	P79より古
P81	柱穴	隅丸方形	30	22	12	18.5	掘埋1：20Aa 掘埋2：9Aa	円形	19	18	3A	あ	縄文土器
P82	小穴	楕円形	51	41	8	18.4	2Aj・m	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子、炭片
P83	小穴	隅丸方形	65	59	10	18.6	3Am	－	－	－	－	－	堆m：黒色土ブ、焼土粒子、炭片、縄文土器
P84	小穴	円形	31	31	9	18.6	1層：2Ab・m 2層：5Aa	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子
P85	小穴	円形	89	75	10	22.0	4Aa・m	－	－	－	－	－	P69より新、土師器・須恵器 堆m：焼土ブ微量
P86	小穴	楕円形	32	25	11	18.4	1層：2Am 2層：6Af	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子、炭片 縄文土器
P87	小穴	楕円形	35	26	13	18.4	1層：4Af・j 2層：6Ae	－	－	－	－	－	
P88	小穴	楕円形	32	27	12	18.4	3Ab	－	－	－	－	－	縄文土器
P89	柱穴	円形	31	29	11	18.5	4Aa	円形	15	14	3A	あ	
P90	柱穴	円形	31	31	12	18.6	掘埋1：4Aa 掘埋2：10Ab	円形	15	14	3A	あ	縄文土器、須恵器
P91	小穴	円形？	65	(17)	10	21.6	4Aa	－	－	－	－	－	
P92	小穴	円形	23	23	12	18.3	1層：4Af・j 2層：6Ae	－	－	－	－	－	
P93	小穴	楕円形	45	31	11	18.3	1層：3Ab・m 2層：2Aj・m 3層：3Ae	－	－	－	－	－	堆m：焼土ブ 縄文土器
P94	柱穴	楕円形	23	20	16	18.2	2Aa	円形	24	21	3A	あ	
P95	小穴	円形？	48	(11)	10	21.6	4Aa	－	－	－	－	－	
P96	小穴	楕円形	33	27	22	18.2	1層：3Am 2層：3Aa 3層：2Ab	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子、炭片 縄文土器、土師器
P97	小穴	楕円形	33	27	26	18.2	1層：3Aa 2層：4Ab・m 3層：5Am	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子、炭片 縄文土器、土師器、須恵器
P98	柱穴	隅丸方形	26	24	21	18.2	5Aa	円形	11	11	2A	あ	縄文土器
P99	小穴	楕円形	30	25	34	18.1	5Ab・m	－	－	－	－	－	堆m：焼土、炭片 縄文土器
P100	小穴	円形	21	19	14	18.3	1層：3Af・m 2層：6Ae	－	－	－	－	－	堆m：炭片 須恵器
P101	柱穴	円形	27	27	21	18.3	掘埋1：4Ab・m 掘埋2：2Am	円形	16	13	20A	あ	堆m：焼土、炭片 縄文土器
P102	小穴	楕円形	30	25	29	18.1	5Ab・m	－	－	－	－	－	堆m：焼土、炭片
P103	小穴	楕円形	31	26	54	17.9	2Am	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子、炭片 縄文土器
P104	柱穴	隅丸方形	23	22	45	18.0	6Aa	円形	14	12	2A	う	
P105	小穴	楕円形	20	17	15	18.3	4Af	－	－	－	－	－	縄文土器
P106	小穴	円形	32	31	24	18.2	1層：6Aa 2層：5Am	－	－	－	－	－	堆m：黒色土ブ
P107	小穴	楕円形	26	20	10	18.3	5Ab・m	－	－	－	－	－	堆m：焼土、炭片
P108	小穴	円形	21	19	21	18.2	3Aa	－	－	－	－	－	
P109	小穴	円形	19	17	11	18.2	3Ab	－	－	－	－	－	
P110	小穴	隅丸方形	57	55	23	20.9	1層：4Aa 2層：4Ac・m 3層：5Ah	－	－	－	－	－	堆m：焼土少量 土師器

第6-2表　谷原遺跡1次調査（A～D区）　ピット・柱穴跡属性表（2）-P111～167-

遺構番号	種類	柱穴・ピット掘方（長軸・短軸：cm、底面標高：m）						柱痕跡				柱類型	備考（重複・出土遺物等）
		平面形	長軸	短軸	残存深	底面標高	埋土 堆土	平面形	長軸	短軸	堆土		
P111	小穴	円形	25	22	12	18.3	5Ab・m	－	－	－	－	－	堆m：焼土、炭片
P112	小穴	円形	17	15	7	18.4	3Ab	－	－	－	－	－	
P113	小穴	円形	20	18	23	18.2	5Ab・m	－	－	－	－	－	堆m：焼土、炭片 縄文土器
P114	小穴	楕円形	21	18	10	18.4	5Ab・m	－	－	－	－	－	堆m：焼土、炭片
P115	小穴	楕円形	30	26	12	18.2	1層：5Ab・m 2層：6Ab	－	－	－	－	－	堆m：焼土、炭片 縄文土器
P116	小穴	円形	22	20	17	18.2	1層：4Af 2層：5Ac	－	－	－	－	－	
P117	小穴	円形	21	21	9	18.2	3Ab	－	－	－	－	－	
P118	小穴	円形	23	21	12	18.2	2Am	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子、炭片 縄文土器
P119	小穴	円形	20	19	15	18.2	5Ab・m	－	－	－	－	－	堆m：焼土、炭片/縄文土器
P120	柱穴	円形	28	28	37	17.9	5Am	円形	20	18	2A	あ	堆m：黒色土ブ/縄文土器
P121	小穴	楕円形	40	30	35	18.0	1層：3Ab・m 2層：2Am	－	－	－	－	－	堆m(1層)：焼土粒子 堆m(2層)：焼土粒子・炭片、縄文土器
P122	小穴	楕円形	41	28	22	18.1	1層：13Am 2層：5Aa・m	－	－	－	－	－	SX1より新、縄文土器 堆m(1層)：焼土、炭片多量 堆m(2層)：黒色土ブ多量
P123	小穴	円形	25	25	13	18.2	2Am	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子、炭片
P124	小穴	円形	23	22	12	18.3	4Af	－	－	－	－	－	
P125	小穴	円形	24	21	12	18.1	4Ab・m	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子、炭片
P126	柱穴	円形	32	28	37	17.9	4Ab	円形	16	14	2A	あ	縄文土器
P127	小穴	楕円形	40	32	20	18.2	1層：4Af 2層：5Ac	－	－	－	－	－	
P128	小穴	円形	27	24	17	18.1	1層：4Ab・m 2層：9Ab	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子、炭片 縄文土器
P129	小穴	円形	33	31	37	17.7	1層：4Am 2層：5Ab	－	－	－	－	－	堆m：焼土、炭片 縄文土器、土師器
P130	小穴	円形	22	21	15	17.9	3Ag・m	－	－	－	－	－	堆m：炭片
P131	小穴	円形	24	23	31	17.6	3Ag・m	－	－	－	－	－	堆m：炭片
P132	小穴	隅丸方形	48	36	26	20.9	4Ab・j	－	－	－	－	－	土師器
P133	柱穴	隅丸方形	58	46	35	20.8	3Aa・m	円形	28	28	3A	う	堆m：炭片
P134	小穴	隅丸方形	60	49	18	18.8	2Aa・m	－	－	－	－	－	SK4より新 堆m：焼土粒子、炭片
P135	小穴	楕円形	26	15	4	18.7	2Am	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子 SK4より新、石器
P136	小穴	円形	47	45	36	17.4	1層：4Af・m 2層：5Ab 3層：6Am	－	－	－	－	－	堆m(1層)：焼土ブ、炭片 堆m(3層)：黒色土ブ多量 縄文土器、土師器
P137	柱穴	円形	26	24	32	17.6	5Am	円形	16	14	3A	あ	堆m：黒土粒子、焼土
P138	柱穴	円形	26	25	28	17.8	5Am	円形	16	13	3A	あ	堆m：黒土粒子、焼土 縄文土器
P139	小穴	円形	32	31	22	17.6	1層：5Aj・m 2層：4Af 3層：3Ab	－	－	－	－	－	堆m：焼土 縄文土器、土師器
P140	小穴	円形	46	41	30	17.6	1層：4Af・m 2層：5Ab 3層：6Am	－	－	－	－	－	堆m(1層)：焼土ブ、炭片 堆m(3層)：黒色土ブ多量 縄文土器、須恵器
P141	小穴	円形	44	39	28	17.5	1層：4Af・m 2層：5Ab 3層：6Am	－	－	－	－	－	堆m(1層)：焼土ブ、炭片 堆m(3層)：黒色土ブ多量 縄文土器、土師器、須恵器
P142	小穴	楕円形	44	37	24	17.5	1層：3Am 2層：2Ac	－	－	－	－	－	P150より新、縄文土器 堆m：焼土、炭片
P143	柱穴	円形	32	30	18	17.6	4Aa	円形	14	13	2A	あ	縄文土器
P144	小穴	円形	23	20	24	17.4	1層：4Ab 2層：2Ab・m	－	－	－	－	－	堆m：炭片 縄文土器、土師器
P145	柱穴	円形	37	35	36	17.4	4Aa	円形	27	24	2A	あ	縄文土器、土師器
P146	柱穴	円形	39	34	35	17.5	4Aa	円形	19	16	2A	あ	須恵器
P147	小穴	楕円形	33	24	17	17.6	1層：3Am 2層：2Aa	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子少量
P148	柱穴	円形	33	31	39	17.3	9Am	円形	18	15	2A	あ	堆m：黒色土ブ
P149	小穴	楕円形	131	70	48	17.1	1層：4Am 2層：3Am	－	－	－	－	－	P164、P165より古 P163より新 堆m：焼土ブ、炭片多量 縄文土器、土師器、須恵器
P150	柱穴	円形	30	30	45	17.3	切穴：4Ab・m 掘埋：9Am	円形	11	11	2A	あ	P142より古、柱切取 堆m：炭片・焼土・黒色土ブ、土師器
P151	小穴	円形	53	49	44	17.2	1層：5Am 2層：5Ab 3層：4Ab・m 4層：2Ab	－	－	－	－	－	堆m：焼土ブ、炭片、焼土粒子 縄文土器、土師器
P152	小穴	円形	25	25	37	17.3	2Ab・m	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子、炭片
P153	小穴	円形	25	22	31	17.4	2Ab・m	－	－	－	－	－	堆m：焼土粒子、炭片
P154	小穴	楕円形	36	22	25	17.3	2Am	－	－	－	－	－	堆m：礫/縄文土器
P155	小穴	円形	29	26	23	17.9	3Aa・m	－	－	－	－	－	堆m：炭片多量/須恵器
P156	小穴	円形	19	16	7	18.7	5Ae	－	－	－	－	－	SK4より新
P157	小穴	楕円形	23	18	11	18.6	2Ab	－	－	－	－	－	SK4より新、縄文土器
P158	小穴	円形	29	25	17	17.3	2Af・m	－	－	－	－	－	堆m：炭片
P159	小穴	円形	24	23	37	17.2	2Ab・m	－	－	－	－	－	P163より新 堆m：焼土粒子、炭片 縄文土器、土師器
P160	小穴	円形	18	18	25	17.5	2Am	－	－	－	－	－	SK12より新 堆m：焼土ブ、炭片
P161	小穴	楕円形	54	37	41	17.3	1層：4Af・m 2層：5Ab 3層：6Am	－	－	－	－	－	堆m(1層)：焼土ブ、炭片 堆m(3層)：黒色土ブ多量
P162	小穴	楕円形	31	23	18	17.6	2Am	－	－	－	－	－	SK12より新 堆m：焼土ブ、炭片
P163	小穴	円形？	48	(18)	10	17.5	2Ab	－	－	－	－	－	P149、P159より古、平面 縄文土器・石器・須恵器
P164	小穴	円形	33	32	35	17.2	2Ab・m	－	－	－	－	－	P149より新 堆m：焼土粒子、炭片
P165	柱穴	円形	23	22	11	17.4	2Ab	円形	11	9	3A	あ	P149より新
P166	小穴	隅丸方形？	51	(21)	16	21.9	1層：4Aa 2層：9Aa	－	－	－	－	－	SD1より古
P167	小穴	円形？	35	(33)	12	22.0	5Aa	－	－	－	－	－	P53より古

●ピット（柱穴・小穴）類型

【柱類型】

あ：柱痕跡が柱穴掘方底面に接するもの

い：柱痕跡が柱穴掘方底面まで至らないもの

う：柱痕跡が柱穴掘方底面よりさらに下に延びるもの

【柱痕跡・堀方の埋土・堆積土類型】

■土色

1：黒褐色（10YR3/1）　2：黒褐色（10YR3/2）　3：暗褐色（10YR3/3）
4：暗褐色（10YR3/4）　5：灰黄褐色（10YR4/2）　6：にぶい黄褐色（10YR4/3）
7：にぶい黄褐色（10YR5/3）　8：にぶい黄褐色（10YR5/4）　9：褐色（10YR4/4）
10：褐色（10YR4/6）　11：黄褐色（10YR5/6）　12：暗褐色（7.5YR3/3）
13：暗褐色（7.5YR3/4）　14：褐色（7.5YR4/3）　15：暗赤褐色（10R3/3）
16：赤褐色（5YR4/6）　17：黒褐色（10YR2/2）　18：褐灰色（10YR4/1）
19：明黄褐色（10YR6/6）　20：黒褐色（10YR2/3）

■土性

A：シルト　B：砂質シルト　C：粘土質シルト

■混入物

a：地山ブロック多く含む　b：地山ブロック含む　c：地山ブロック少量含む
d：地山ブロック微量含む　e：地山粒子多く含む　f：地山粒子含む
g：地山粒子少量含む　h：地山粒子微量含む　i：小礫多く含む
j：小礫含む　k：小礫少量含む　l：小礫微量含む
m：その他（上記以外のもの※）

※m を選択した場合は備考欄に堆積土混入物を記載

※備考欄幅の関係から、下記の内容については記載を省略した

炭化物片→炭片　焼土ブロック→焼土ブ　黒色土ブロック→黒色土ブ

【記載例】

1Aa・・・土色：黒褐色（10YR3/1）、土性：シルト、混入物：地山ブロック多く含む

●その他の記載事項

■柱穴・ピットの計測値

・（数値）は推定値を示す

■柱穴・ピット掘欄の「埋土・堆土（堆積土）」記載事項

・柱穴の場合は「掘方埋土」を意味する

・「1 層・2 層」等の記載：「柱穴・小穴」の埋土等が 2 層以上に分層した場合を示す

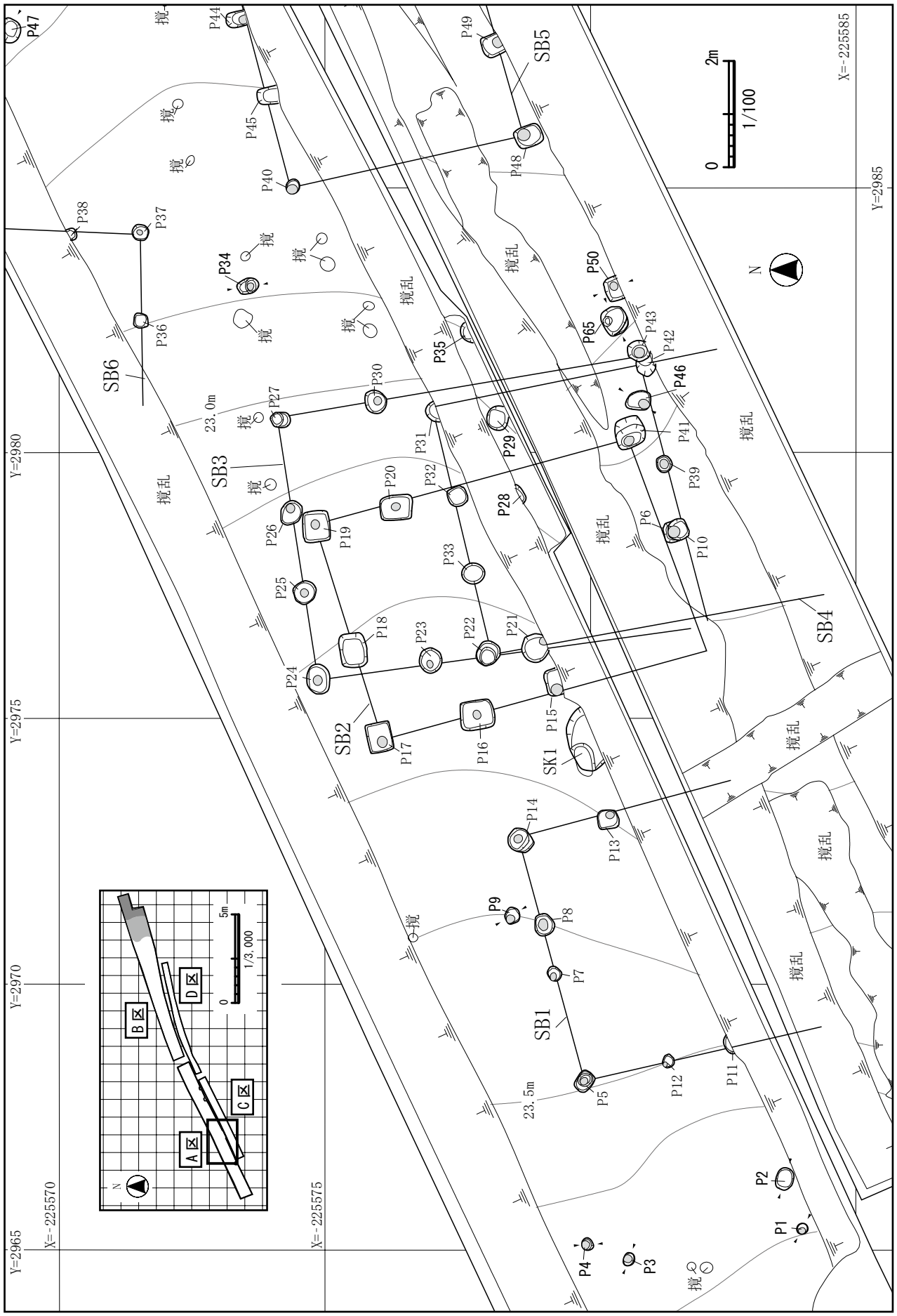
・「抜穴」：柱抜き取り穴の埋土・堆積土 /「抜穴 1」：抜き取り穴 1 層の埋土・堆積土

・「切穴」：柱切り取り穴の埋土・堆積土 /「切穴 1」：切き取り穴 1 層の埋土・堆積土

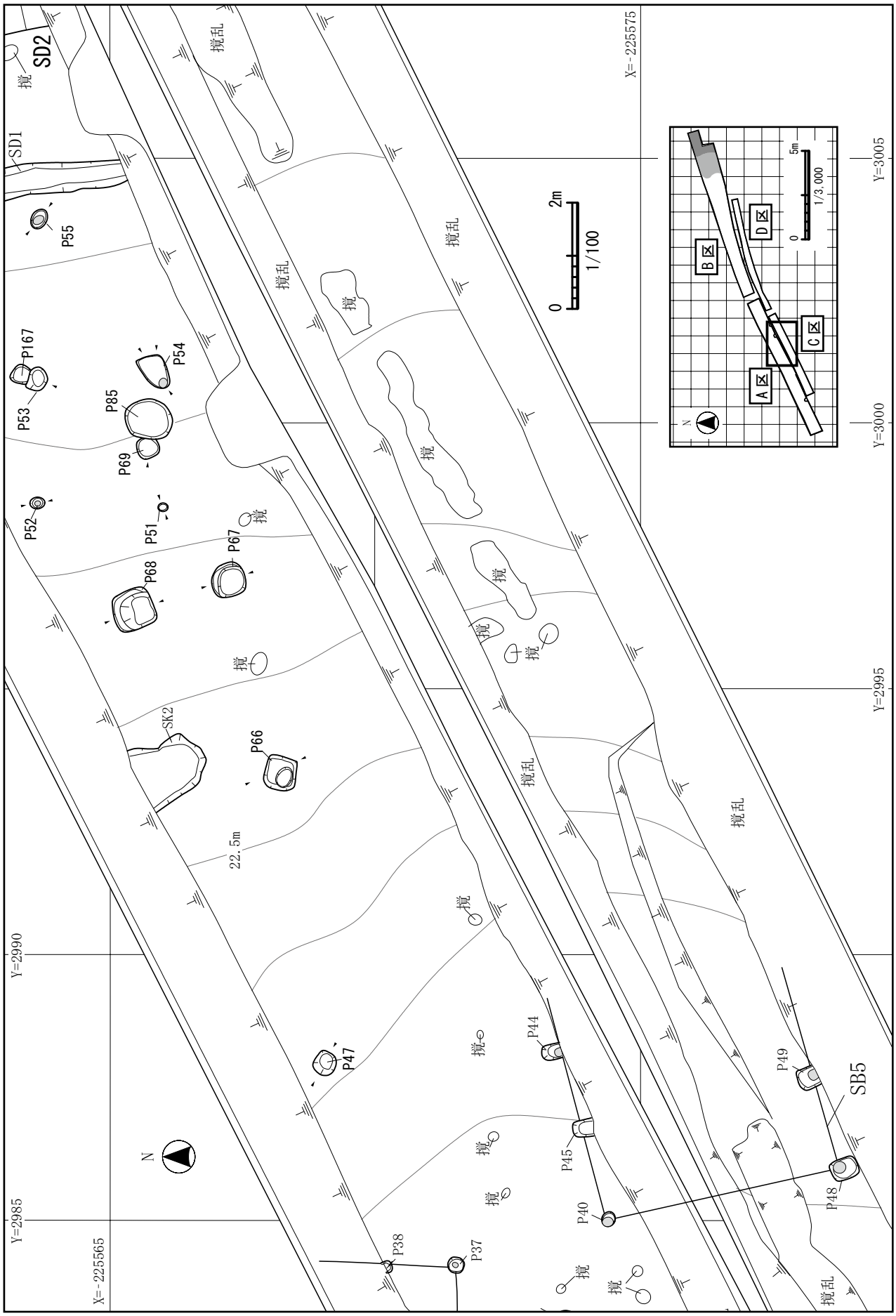
■備考欄の記載事項

・柱抜取：柱が抜き取られているもの　・柱切取：柱が切り取られているもの

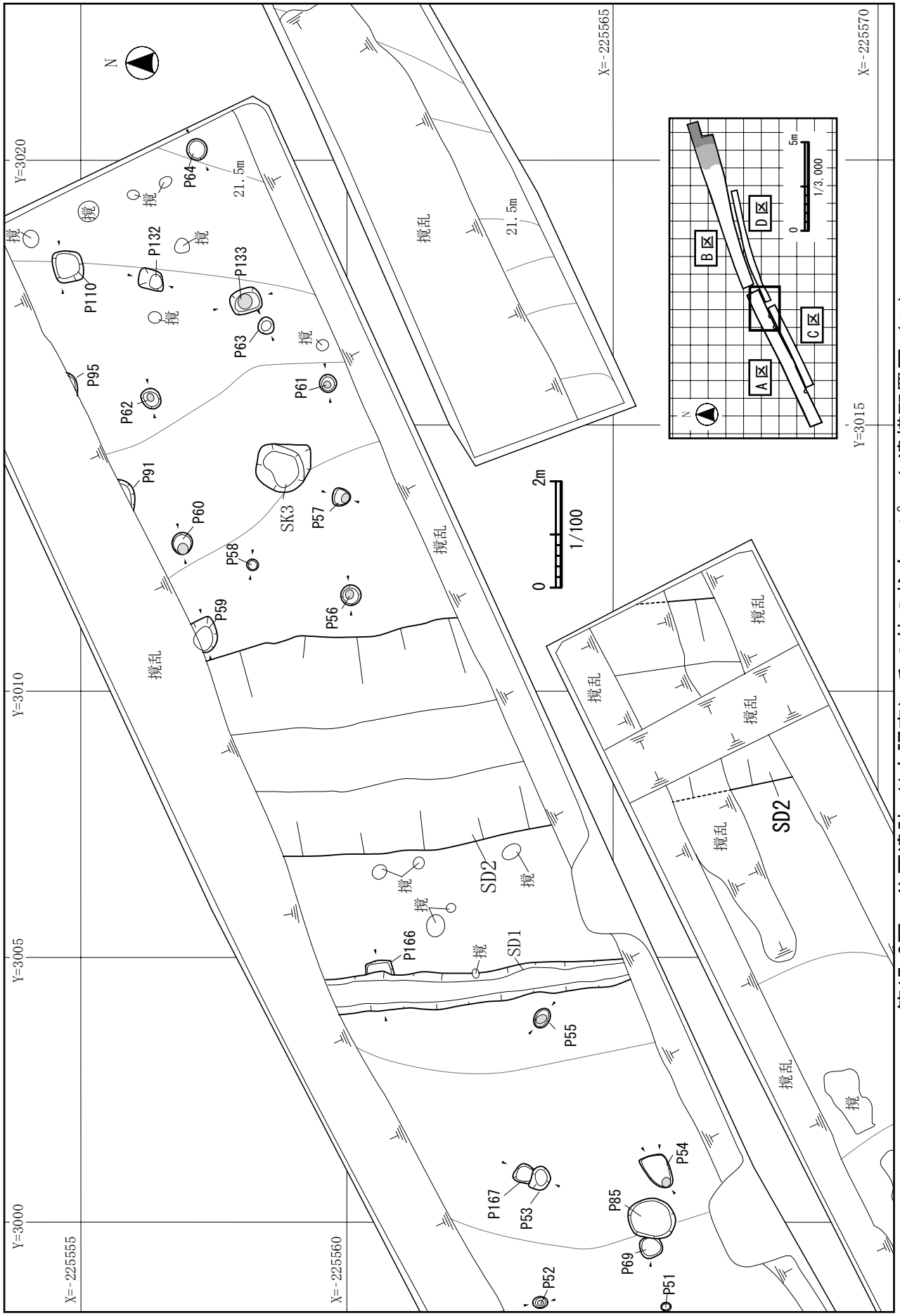
・この他、重複関係・出土遺物を記載



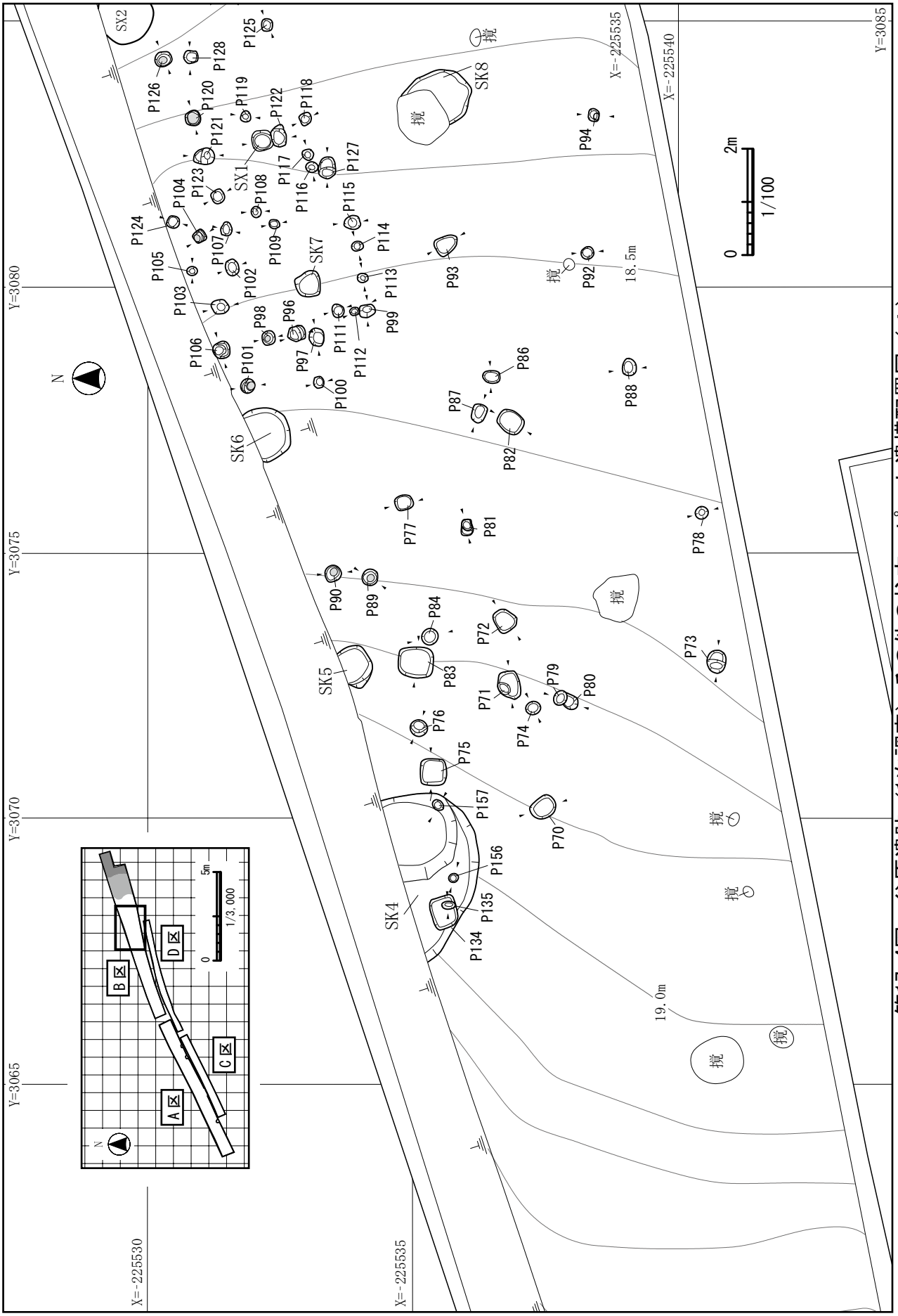
第17-1図　谷原遺跡（1次調査）その他の柱穴・ピット遺構配置図（1）



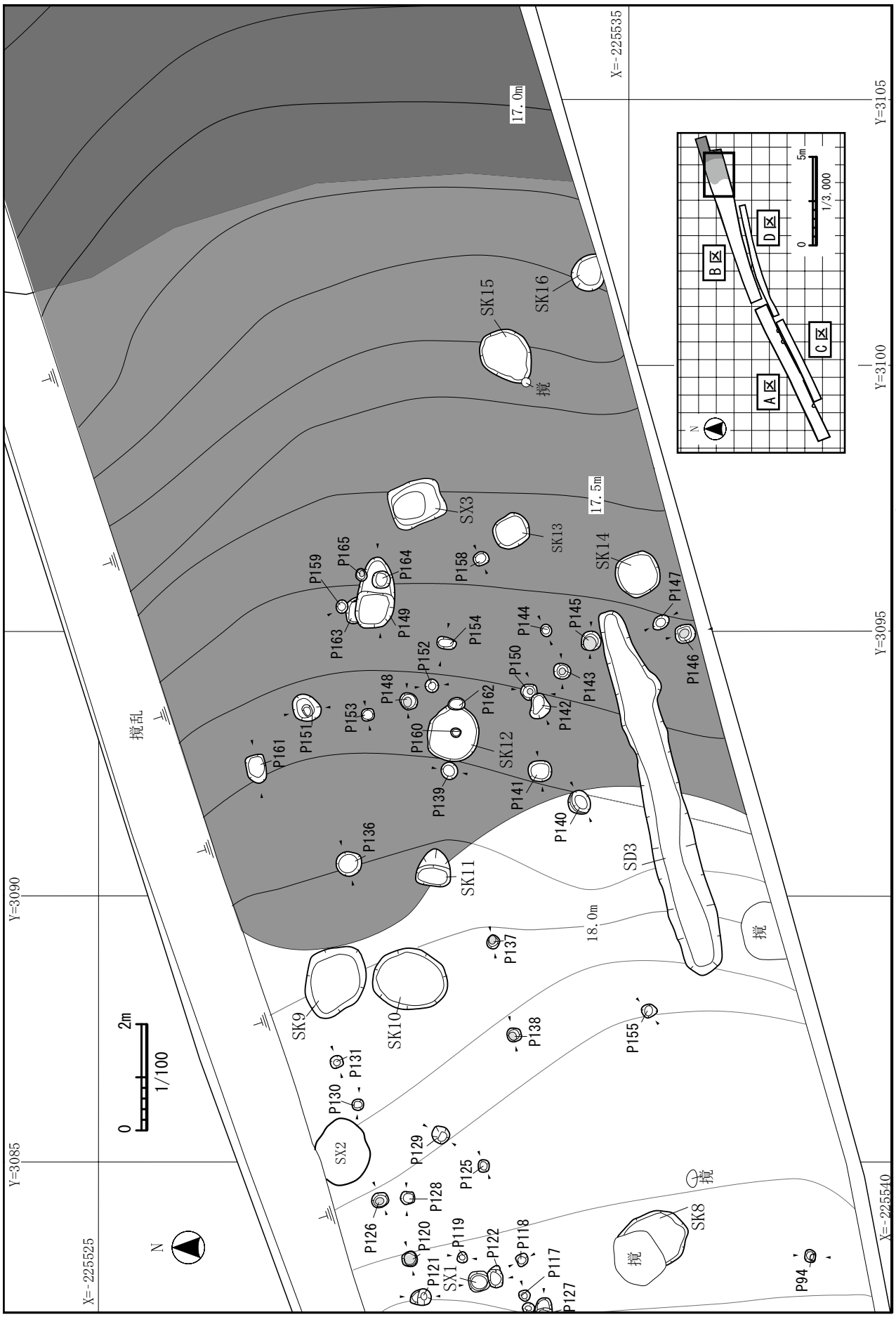
第17-2図　谷原遺跡（1次調査）その他の柱穴・ピット遺構配置図（2）



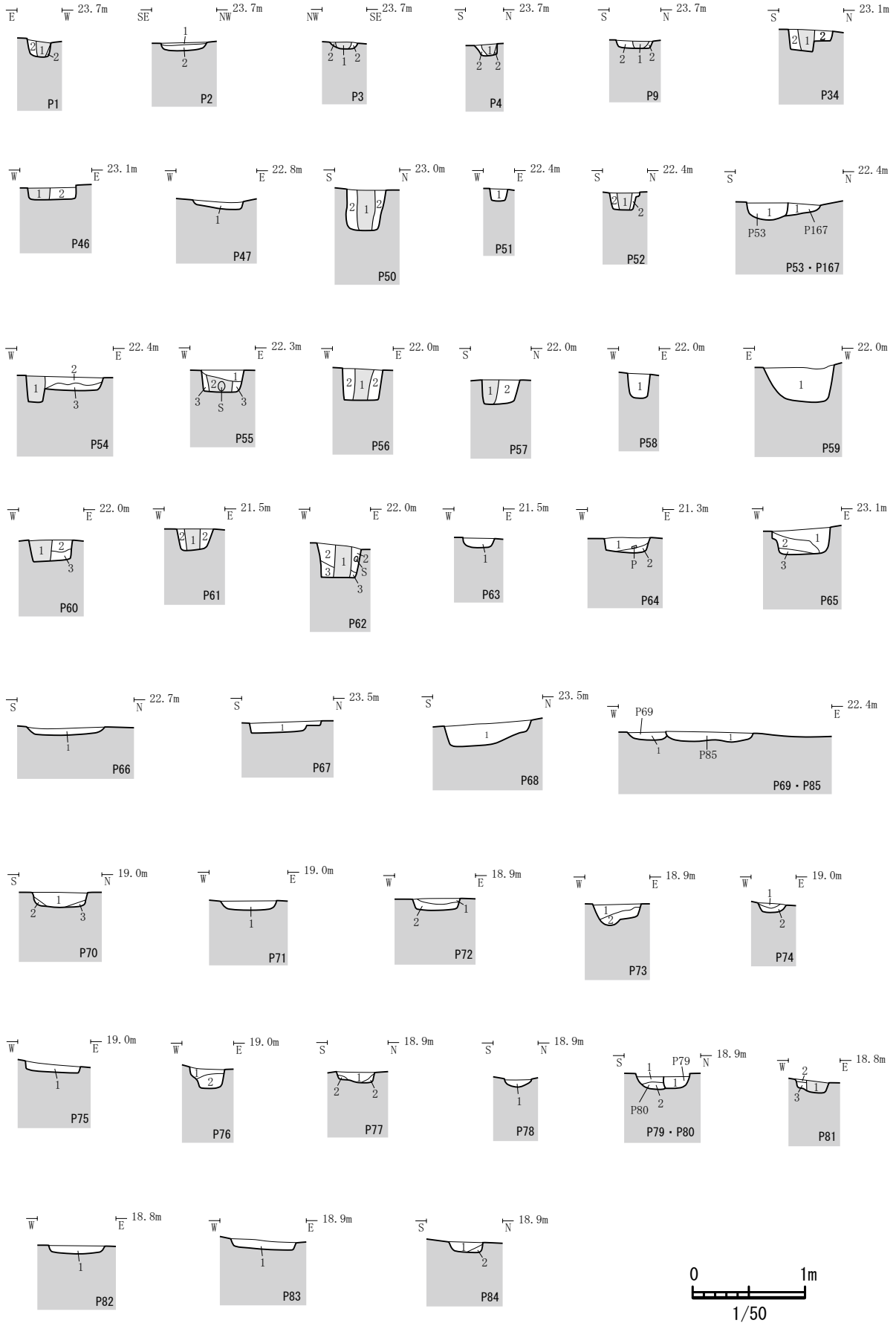
第17-3図　谷原遺跡（1次調査）その他の柱穴・ピット遺構配置図（3）



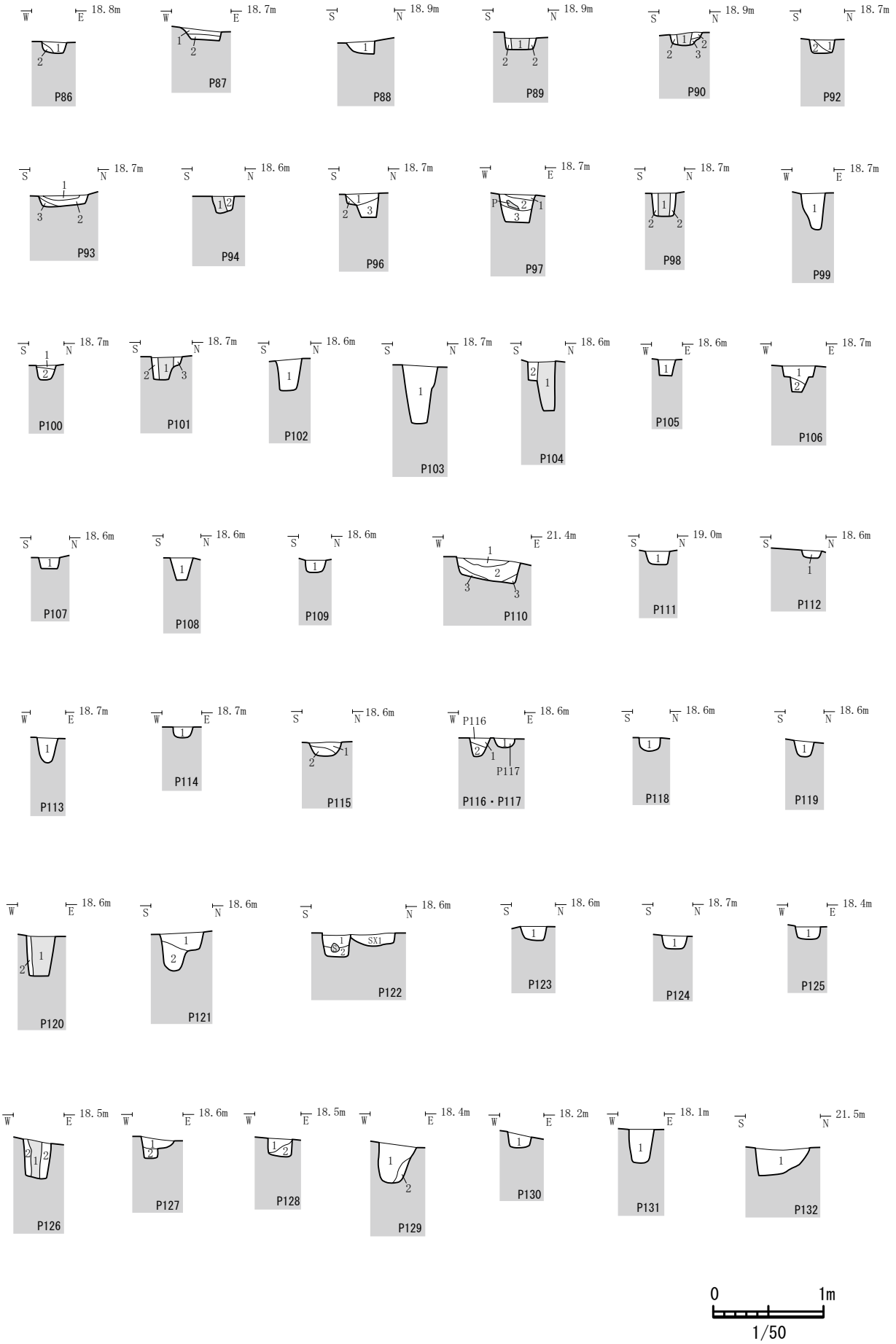
第17-4図　谷原遺跡（1次調査）その他の柱穴・ピット遺構配置図（4）



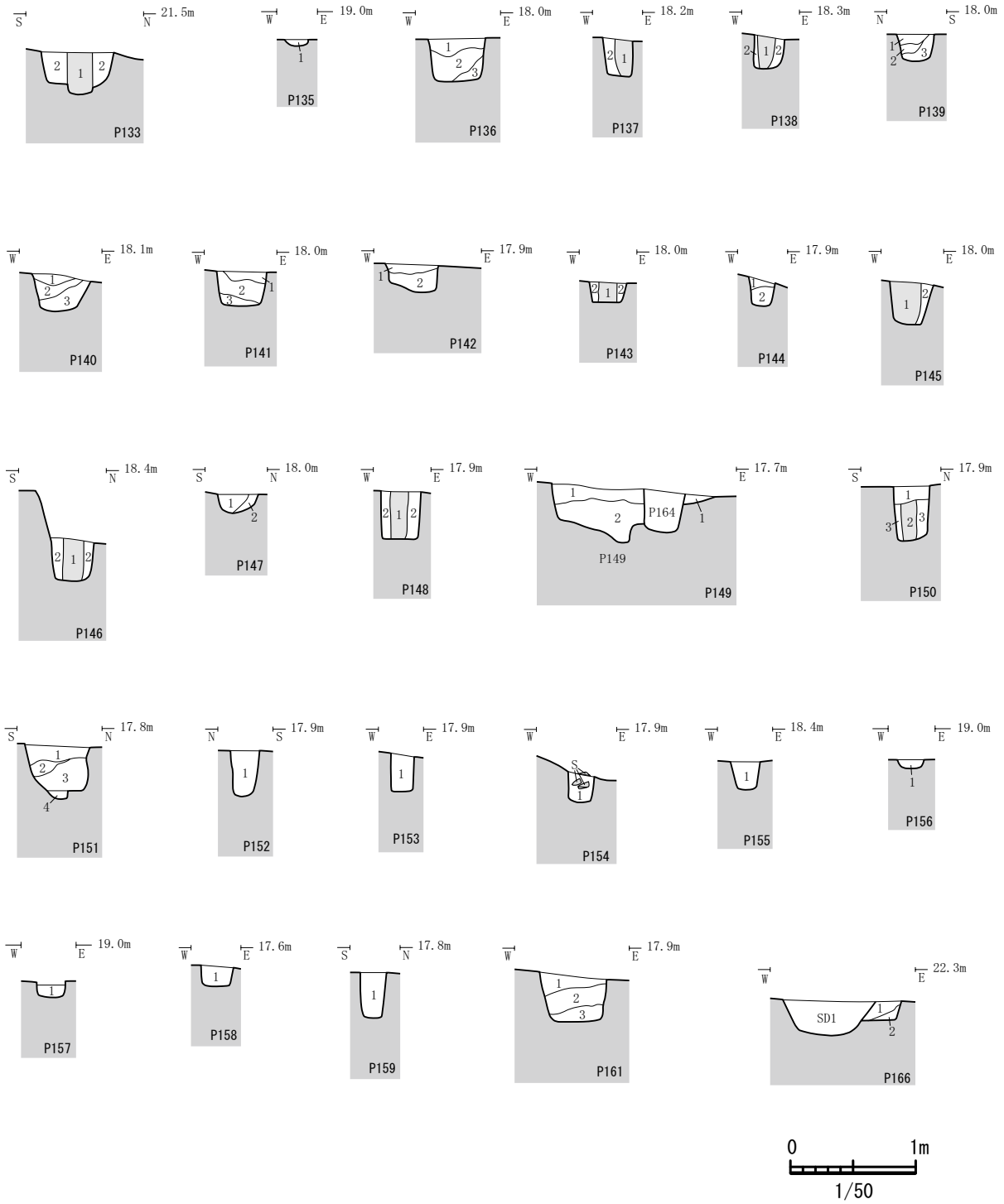
第17-5図　谷原遺跡（1次調査）その他の柱穴・ピット遺構配置図（5）



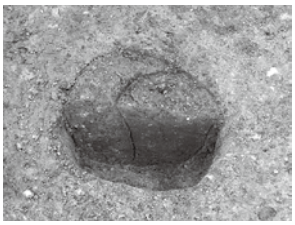
第18図　その他のピット・柱穴 断面図（１）－ P1～84 －

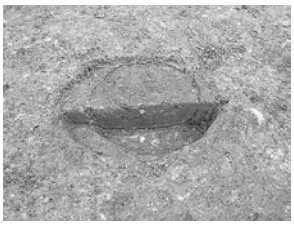


第19図　その他のピット・柱穴 断面図（２）－ P86～132 －



第20図　その他のピット・柱穴 断面図（３）－ P133～166 －

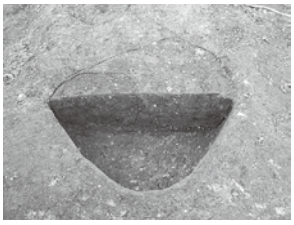

1. P1 土層断面（北から）


2. P3 土層断面（南から）

3. P4 土層断面（東から）

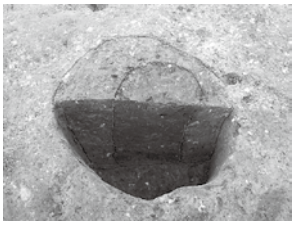
4. P9 土層断面（東から）

5. P34 土層断面（東から）


6. P46 土層断面（南から）

7. P50 土層断面（東から）

8. P52 土層断面（東から）

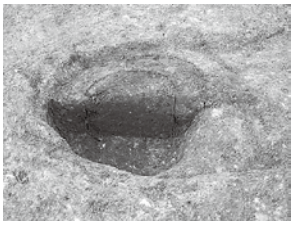

9. P56 土層断面（南から）

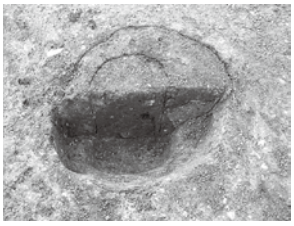
10. P57 土層断面（東から）

11. P60 土層断面（南から）

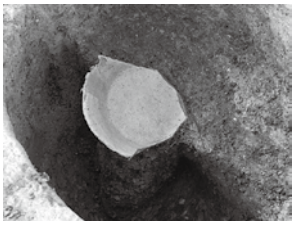
12. P61 土層断面（南から）

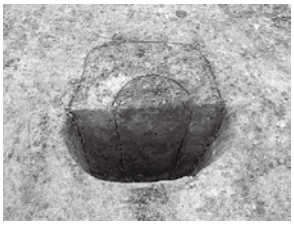
13. P62 土層断面（南から）


14. P89 土層断面（東から）


15. P90 土層断面（東から）

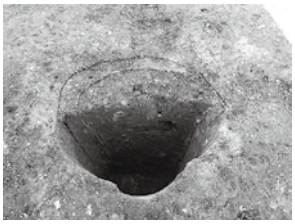
16. P97 土層断面（南から）

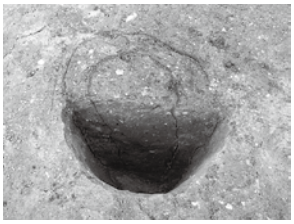

17. P97 遺物出土状況（南から）


18. P98 土層断面（東から）

19. P101 土層断面（東から）

20. P104 土層断面（東から）

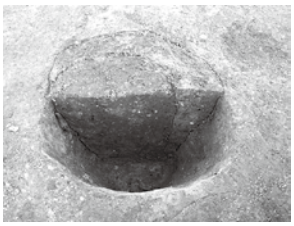

21. P120 土層断面（南から）


22. P126 土層断面（南から）

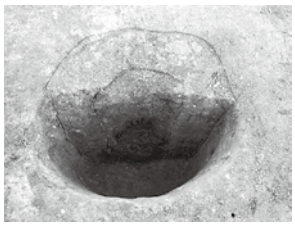
23. P133 土層断面（東から）

24. P138 土層断面（南から）

25. P143 土層断面（南から）


26. P145 土層断面（南から）

27. P146 土層断面（東から）


28. P148 土層断面（南から）

第21図　その他のピット・柱穴　（写真図版）

（３）掘立柱建物跡、その他の柱穴・ピット出土遺物（第 22～24 図、第 7 表）

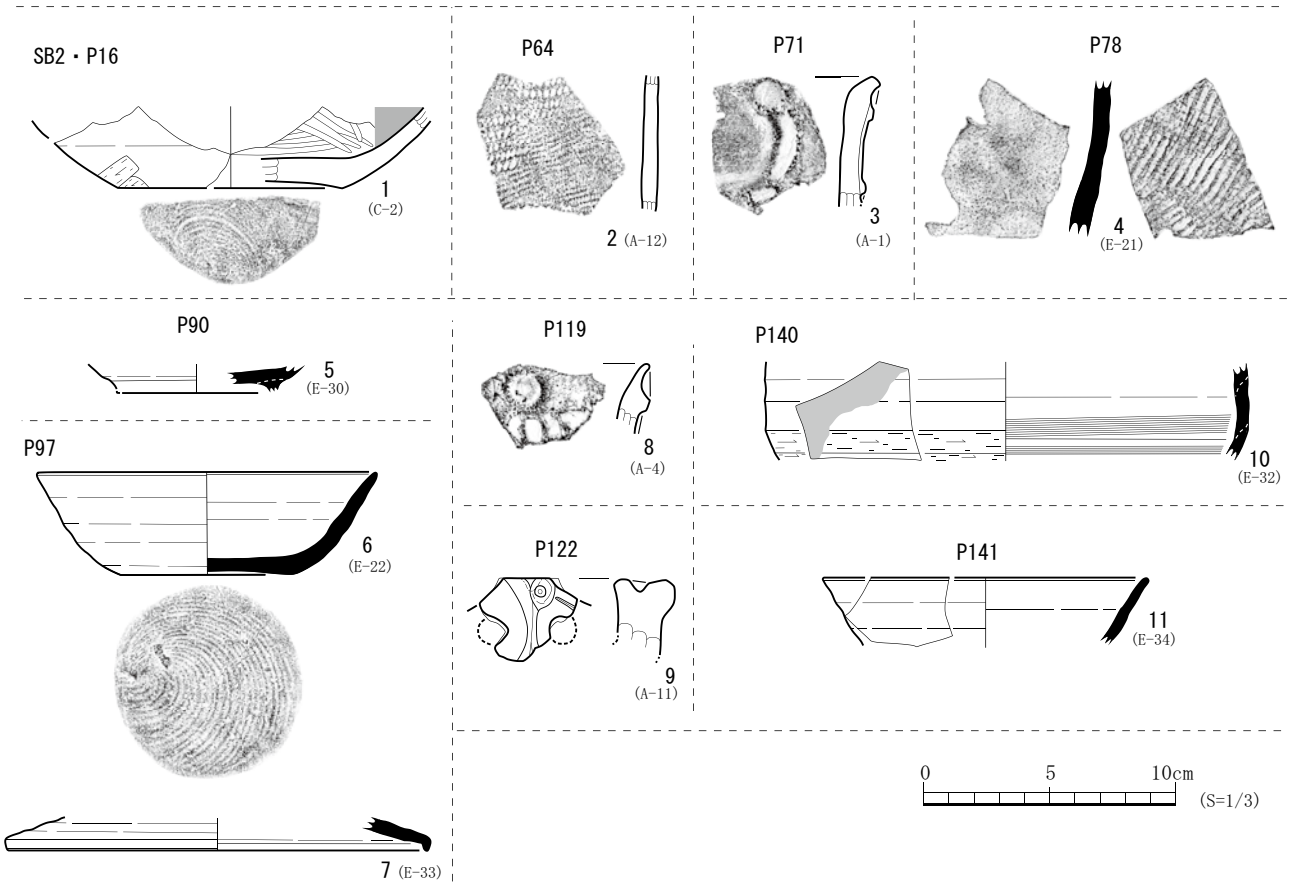
掘立柱建物跡及び建物の柱穴として認定できなかった柱穴・ピットからは、第 7 表のとおり、縄文土器 313 点[深鉢 313 点（2,340g）]、土師器 213 点[坏 71 点（365g）・高台付坏 1 点（15g）・甕 141 点（835g）]、須恵器 31 点[坏 12 点（185g）・高台付坏 2 点（15g）・蓋 2 点（15g）・瓶類 1 点（10g）・甕 14 点（375g）]、石器 11 点[剥片 11 点（206.6g）]が出土した。

第7表　谷原遺跡1次調査　掘立柱建物跡、その他の柱穴・ピット出土遺物一覧　※( )内の数値は遺物の乾燥重量(g)を示す

遺構・層位		縄文土器	土師器			須恵器					石器	小計
		深鉢	坏	高台坏	甕	坏	高台坏	蓋	瓶類	甕		
SB1	P11 底面				1 (10)							1 (10)
	P13 掘埋				2 (10)							2 (10)
	P14 掘埋				6 (45)							6 (45)
SB2	P15 柱切穴		1 (5)		9 (40)	1 (5)						11 (50)
	P16 柱切穴		3 (105)		6 (35)					3 (5)	3 (5.2)	15 (150.2)
	P17 柱切穴		1 (5)		11 (35)	1 (5)						13 (45)
	P18 柱抜穴		10 (45)		4 (30)		1 (5)			2 (35)		17 (115)
	P19 掘埋				4 (20)					2 (5)		6 (25)
	P20 柱切穴				6 (25)	1 (5)						7 (30)
SB3	P24 柱切穴	3 (20)	1 (10)									4 (30)
SB6	P36 柱抜穴				1 (5)							1 (5)
P34	掘方 埋土				2 (10)							2 (10)
P50	掘方 埋土				1 (20)							1 (20)
P51	1層				1 (5)	1 (5)						2 (10)
P53	1層				5 (15)							5 (15)
P56	掘方 埋土									1 (5)		1 (5)
P58	堆積土		2 (5)									2 (5)
P59	堆積土		3 (10)		2 (35)	1 (10)						6 (55)
P60	掘方 埋土		1 (5)		1 (15)							2 (20)
P62	掘方 埋土				4 (20)							4 (20)
P64	1層	3 (50)										3 (50)
P65	2層		1 (5)									1 (5)
P66	1層		1 (5)		9 (25)	1 (5)				1 (15)	2 (157.9)	14 (207.9)
	2層										1 (7.9)	1 (7.9)
	3層										1 (3.9)	1 (3.9)
P68	1層				1 (5)							1 (5)
P69	1層		1 (10)									1 (10)
P70	1層										1 (14.0)	1 (14.0)
	2層	4 (30)										4 (30)
P71	1層	6 (110)										6 (110)
P72	1層	4 (25)				1 (10)				1 (25)	1 (3.7)	7 (63.7)
	2層	2 (25)										2 (25)
P73	1層				5 (15)							5 (15)
P74	堆積土	4 (35)										4 (35)
P75	1層	7 (50)										7 (50)
P78	1層	4 (25)	32 (90)		18 (80)					1 (35)		55 (230)
P79	1層	4 (20)										4 (20)
P81	掘方 埋土	2 (25)										2 (25)
P83	1層	1 (20)										1 (20)
P85	1層				4 (35)			1 (10)				5 (45)
P86	1層	18 (205)										18 (205)
P88	1層	1 (5)										1 (5)
P90	掘方 埋土	1 (10)					1 (10)					2 (20)
P93	1層	11 (40)										11 (40)
	2層	6 (20)										6 (20)
P96	1層				1 (10)							1 (10)
	3層	1 (10)										1 (10)

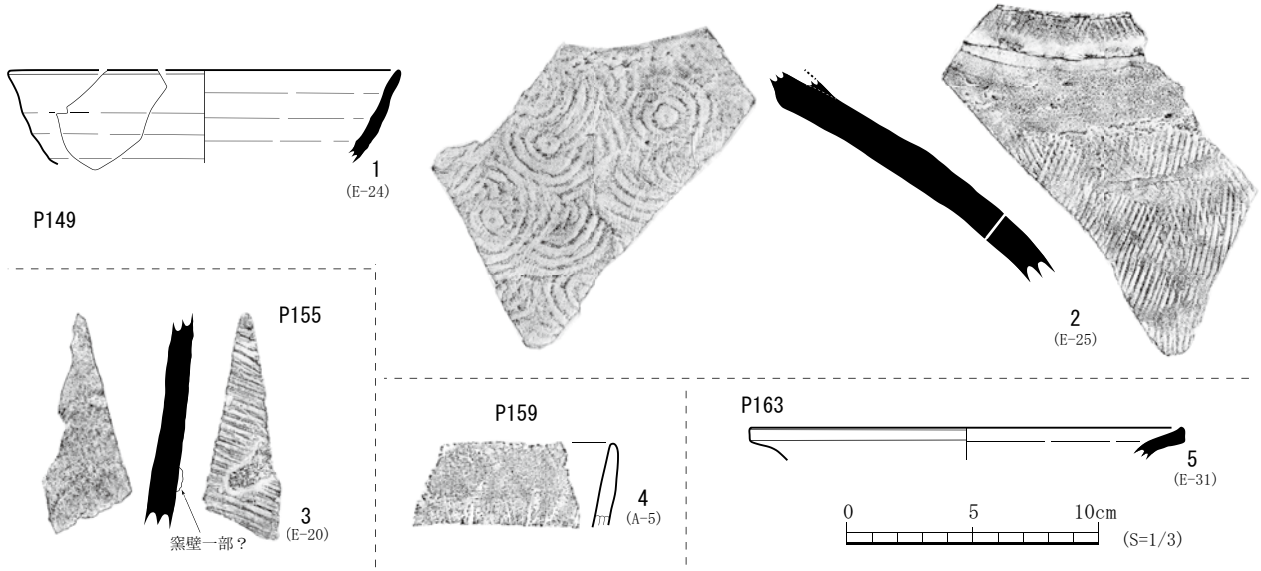
遺構・層位		縄文土器	土師器			須恵器					石器	小計
		深鉢	坏	高台坏	甕	坏	高台坏	蓋	瓶類	甕		
P97	1層	2 (15)										2 (15)
	2層					1 (115)		1 (5)				2 (120)
	3層	5 (25)										5 (25)
P98	掘方 埋土	2 (10)										2 (10)
P99	1層	3 (15)										3 (15)
P100	1･2層					1 (5)						1 (5)
P101	掘方 埋土	4 (35)										4 (35)
P103	堆積土	9 (50)										9 (50)
P105	1層	1 (40)										1 (40)
P110	堆積土		2 (5)		2 (5)							4 (10)
P113	1層	6 (50)										6 (50)
P115	堆積土	2 (45)										2 (45)
P118	1層	3 (10)										3 (10)
P119	1層	2 (40)										2 (40)
P120	掘方 埋土	17 (45)										17 (45)
P121	堆積土	6 (25)										6 (25)
P122	1層	11 (50)										11 (50)
	2層	5 (60)										5 (60)
P126	掘方 埋土	1 (15)										1 (15)
P128	1層	5 (25)										5 (25)
P129	1層	14 (110)	2 (15)		2 (20)							18 (145)
P132	1層				4 (5)							4 (5)
P135	1層										1 (2.3)	1 (2.3)
P136	1層	4 (30)	1 (5)									5 (35)
	2層	1 (5)										1 (5)
P138	掘方 埋土	1 (10)										1 (10)
P139	堆積土	10 (80)	1 (5)									11 (85)
P140	1層	5 (60)										5 (60)
	2層	2 (15)							1 (10)			3 (25)
P141	1層	2 (15)		1 (15)	3 (30)	1 (5)						7 (65)
	2層	1 (5)	1 (5)									2 (10)
	3層	2 (35)										2 (35)
P142	1層	1 (10)										1 (10)
P143	掘方 埋土	2 (10)										2 (10)
P144	1層	2 (10)			1 (15)							3 (25)
P145	掘方 埋土	2 (20)			1 (5)							3 (25)
P146	掘方 埋土					1 (10)						1 (10)
P149	1層	11 (95)	1 (5)		14 (90)	1 (5)				1 (210)		28 (405)
	2層	1 (15)	2 (10)		8 (105)							11 (130)
P150	1層				1 (10)							1 (10)
P151	堆積土	72 (380)	4 (15)									76 (395)
P154	1層	1 (10)										1 (10)
P155	1層									1 (35)		1 (35)
P157	1層	1 (20)										1 (20)
P159	1層	3 (45)			1 (5)							4 (50)
P163	堆積土	9 (80)								1 (5)	1 (11.7)	11 (96.7)
合計		313 (2340)	71 (365)	1 (15)	141 (835)	12 (185)	2 (15)	2 (15)	1 (10)	14 (375)	11 (206.6)	

柱穴・ピットから出土した遺物のほとんどは、出土状況からみて、遺構の周辺から流入もしくは柱穴造成時に埋土に混入したものと考えられ、遺構に伴うと判断できたものは少ない。このうち、図示できたものは、SB2・P16 出土の土師器坏（第 22 図 1）、P64・71・119・122・159 出土の縄文土器深鉢（第 22 図 2・3・8・9、第 23 図 4）、P90 出土の須恵器高台付坏（第 22 図 5）、P97 出土の須恵器坏（第 22 図 6）・須恵器蓋（第 22 図 7）、P140 出土の須恵器瓶類（第 22 図 10）、P141 出土の須恵器坏（第 22 図 11）、P149 出土の須恵器坏（第 23 図 1）・甕（第 23 図 2）、P78・155・163 出土の須恵器甕（第 22 図 4、第 23 図 3・5）である。



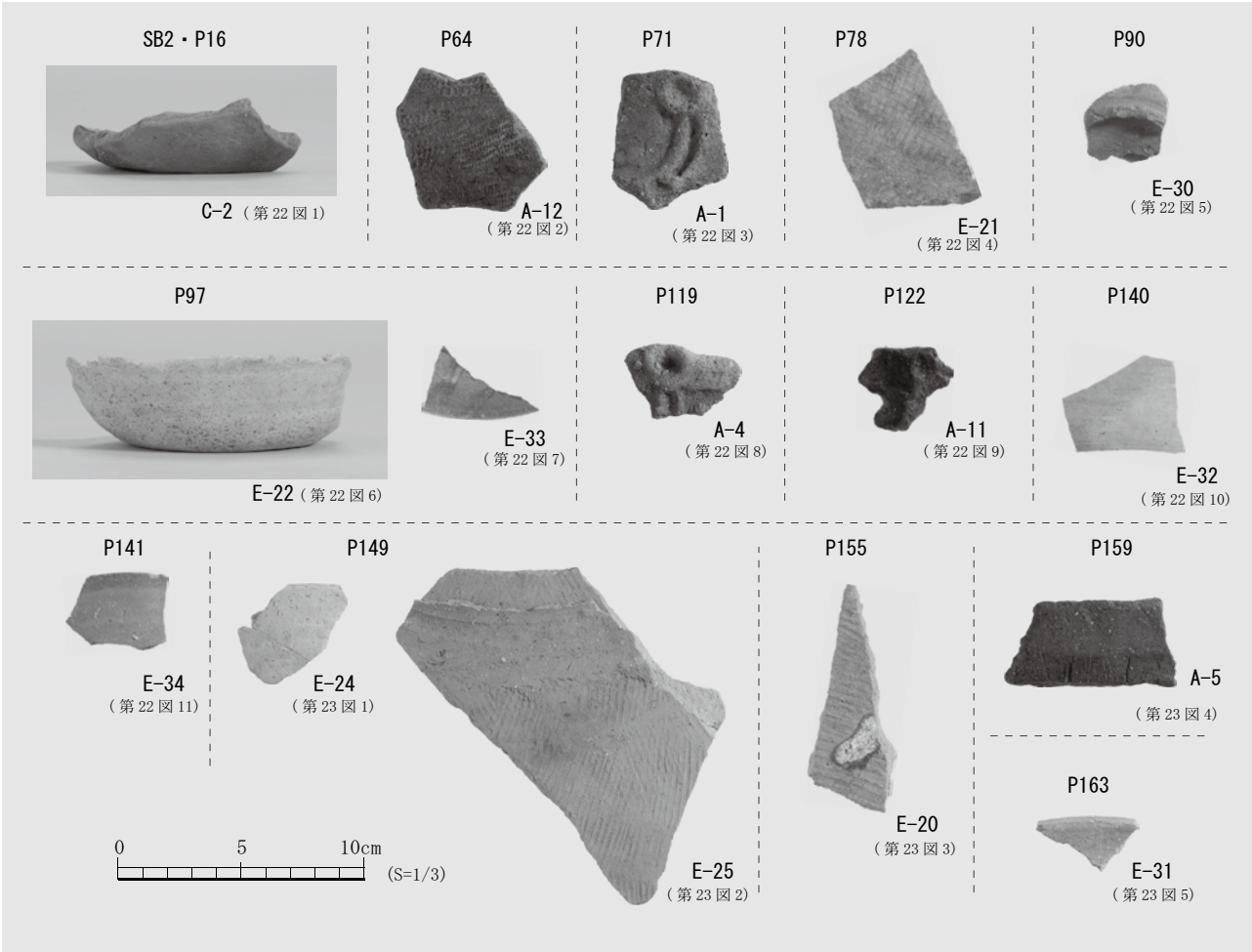
No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SB2・P16 柱切取穴	土師器	坏	胴部 ～底部	外面：胴部下端ヘラ削り・底部回転糸切り無調整・磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・褐色(7.5YR4/3)、内面・黒褐色(10YR3/1)、法量：底径(9.0)cm・残存高3.2cm・器厚0.6～1.2cm	C-2
2	P64 1層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR、内面：ナデ、色調：外面・灰褐色(5YR4/2)/黒褐色(10YR3/2)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、法量：器厚0.5～0.6cm	A-12
3	P71 1層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：隆帯＋刺突文・ノ字形貼付文＋沈線・盲孔、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、内面・にぶい赤褐色(2.5YR4/4)、法量：器厚0.9～1.0cm	A-1
4	P78 1層	須恵器	甕	胴部	外面：平行タタキ、内面：当て具→ナデ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・黄灰色(2.5Y4/1)、法量：器厚0.6～0.8cm	E-21
5	P90 掘方埋土	須恵器	高台付坏	底部	外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整、内面：ロクロナデ、色調：内外面・灰色(10Y4/1)、法量：底径(6.4)cm・残存高1.2cm・器厚0.4～0.5cm、高台部欠損	E-30
6	P97 2層	須恵器	坏	口縁部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部回転糸切り無調整、内面：ロクロナデ、色調：内外面・にぶい黄橙色(10YR6/3)、法量：口径(13.4)cm・器高4.1cm・底径6.8cm・器厚0.5～0.7cm	E-22
7	P97 2層	須恵器	蓋	口縁部	内外面：ロクロナデ、色調：外面・灰色(N5/0)、内面・灰色(7.5Y4/1)、法量：口径(16.6)cm・残存高1.3cm・器厚0.3～0.5cm	E-33
8	P119 1層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：沈線文・盲孔、内面：磨滅のため不明、色調：外面・灰赤色(2.5YR4/2)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚1.1cm	A-4
9	P122 2層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：口唇部 盲孔/口縁部 隆帯・盲孔・沈線文・貫通孔、内面：磨滅のため不明、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、法量：器厚0.7～2.1cm	A-11
10	P140 2層	須恵器	瓶類	胴部	外面：ロクロナデ・回転ヘラ削り・自然釉、内面：ロクロナデ・カキ目、色調：外面・灰黄褐色(10YR6/2)、内面・黄灰色(2.5Y5/1)、法量：胴部径19.2cm・残存高3.9cm・器厚0.4～0.5cm	E-32
11	P141 1層	須恵器	坏	口縁部	内外面：ロクロナデ、色調：内外面・灰色(10Y4/1)、法量：口径(12.8)cm・残存高2.8cm・器厚0.3～0.4cm	E-34

第22図　掘立柱建物跡、その他のピット・柱穴出土遺物（1）



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	P149 1層	須恵器	坏	口縁部 ～胴部	内外面：ロクロナデ、色調：外面・灰黄色(2.5Y6/2)、内面・灰黄褐色(10YR6/2)、法量：口径(15.4)cm・残存高3.7cm・器厚0.3～0.4cm	E-24
2	P149 1層	須恵器	甕	肩部	外面：平行タタキ→ナデ、内面：当て具痕、色調：外面・黄灰色(2.5Y4/1)、内面・灰色(5Y5/1)、法量：器厚1.0～1.4cm	E-25
3	P155 1層	須恵器	甕	胴部	外面：平行タタキ、内面：当て具→ナデ、色調：内外面・灰色(5Y4/1)、法量：器厚0.7～1.1cm、外面：礫付着(焼台の一部か？)	E-20
4	P159 1層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：櫛歯状文、内面：ナデ、色調：外面・暗赤褐色(5YR3/3)、内面・暗褐色(10YR3/3)、法量：器厚0.6～1.0cm	A-5
5	P163 1層	須恵器	甕	口縁部	内外面：ロクロナデ、色調：内外面・にぶい赤褐色(5YR5/3)、法量：口径(17.0)cm・残存高1.3cm・器厚0.6cm	E-31

第23図　掘立柱建物跡・その他のピット・柱穴出土遺物（2）



第24図　掘立柱建物跡・その他のピット・柱穴出土遺物（写真図版）

2．溝跡・土坑・焼成遺構

今回の調査（A～D 区）では、溝跡 3 条（SD1～3）、土坑 16 基（SK1～16）、焼成遺構 3 基（SX1～3）を検出した（第 25 図）。以下、遺構ごとにその特徴等について記載する。なお、各遺構の特徴・出土遺物については第 8・9 表に示したとおりである。

第8表　谷原遺跡（1次調査）溝跡（SD1～3）・土坑（SK1～16）・焼成遺構（SX1～3）一覧表

遺構No.	検出箇所	検出長(m)	方向	規模（cm）			断面形	出土遺物	備考
				上幅	下幅	深さ			
SD1	A区	5.6	北-南	40～76	26～44	27	逆台形	土師器・須恵器・鉄製品	重複：P166→SD1/底面標高：溝の南側が高く、北側が低い
SD2	A・C区	9.6	北-南	360～422	112～133	110	U字形	縄文土器・土師器・須恵器	底面標高：溝の南側が高く、北側が低い/堆積土1層が人為堆積
SD3	B区	7.1	東-西	67～90	48～50	18	逆台形	縄文土器・石器・土師器・須恵器	底面標高：溝の西側が高く、東側が低い

遺構No.	検出箇所	平面形	規模（cm）	深さ（cm）	断面形	堆積土	出土遺物	備考
SK 1	A区	楕円形？	120×(52)	27	逆台形	自然	土師器	
SK 2	A区	不整形?	(134)×122	15	皿状	自然	土師器・須恵器	
SK 3	A区	不整形	100×90	41	逆台形	自然	土師器	
SK 4	B区	楕円形?	313×(152)	27	皿状	自然	縄文土器・石器・土師器・須恵器	重複：SK4→P134・135・156・157
SK 5	B区	楕円形？	76×(52)	17	逆台形	自然	縄文土器・土師器・須恵器	
SK 6	B区	楕円形？	102×（70）	22	逆台形	自然	縄文土器・須恵器	
SK 7	B区	不整形	48×47	15	逆台形	人為	縄文土器	礫（大）を据えた土坑
SK 8	B区	楕円形？	104×(65)	18	逆台形	自然	縄文土器	
SK 9	B区	楕円形	120×117	26	U字形	自然	縄文土器・土師器・須恵器	
SK 10	B区	楕円形	140×116	18	皿状	自然	縄文土器・土師器	
SK 11	B区	不整形	70×62	10	不整形	自然	―	
SK 12	B区	円形	106×100	18	不整形	自然	縄文土器・土師器・須恵器	重複：SK12→P160・162
SK 13	B区	円形	70×60	8	皿状	自然	縄文土器	
SK 14	B区	円形	83×79	30	U字形	自然	縄文土器	
SK 15	B区	楕円形	99×95	27	U字形	自然	縄文土器	底面に礫集積
SK 16	B区	円形？	65×(56)	44	U字形	自然	縄文土器	

遺構No.	検出箇所	平面形［左：焼面/：掘方］	規模(cm)［左：焼面/右：掘方］	深さ(cm)［左：被熱範囲/右段：掘方］	掘方断面形	出土遺物	備考
SX 1	A区	円形/（円形）	28×24/(38×36)	6/（10）	皿状	縄文土器・石器	掘方有/重複:SX1→P122
SX 2	A区	楕円形/（-）	120×(96)/（-）	4/（-）	-	縄文土器・土師器	掘方無
SX 3	A区	楕円形/(隅丸長方形)	62×50/(102×81)	4/（13）	不整形	縄文土器・土師器・須恵器	掘方有/土師器甕を横位に据える

第9表　谷原遺跡1次調査　溝跡・土坑・焼成遺構　出土遺物一覧

[SD1～3] 遺構・層位		縄文土器	土師器			須恵器					石器	鉄製品	SD 遺構別合計
		深鉢・鉢	坏	高台付坏	甕	坏	蓋	鉢	壺	甕	剥片		
SD1	1層		1 (5)	1 (5)	1 (5)	1 (5)							4 (20.0)
	2層		10 (15)			1 (5)						1 (15)	12 (35)
SD2	1層		29 (190)		9 (130)	1 (5)		1 (130)		3 (185)			43 (640.0)
	3・4層		31 (120)		22 (165)	3 (25)	1 (20)			1 (85)			58 (415.0)
	6層	1 (75)	15 (115)	1 (15)	38 (185)	1 (10)				8 (310)			64 (710)
SD3	1層	7 (80)			10 (50)	6 (25)			5 (150)	14 (230)	1 (4.8)		43 (539.8)
SD・種別合計		8 (155)	86 (445)	2 (20)	80 (535)	13 (75)	1 (20)	1 (130)	5 (150)	26 (810)	1 (4.8)	1 (15)	224 (2359.8)

←総計

[SX1～3] 遺構・層位		縄文土器	土師器		須恵器	石器	SX 遺構別合計
		深鉢・鉢	坏	甕	坏	剥片	
SX1	掘方埋土	20 (110)				1 (16.0)	21 (126.0)
SX2	焼面上面	10 (50)	2 (10)				12 (60.0)
SX3	掘方埋土	1 (10)	3 (25)	73 (2160)	1 (5)		78 (2200.0)
SX・種別合計		31 (170)	5 (35)	73 (2160)	1 (5)	1 (16)	111 (2386)

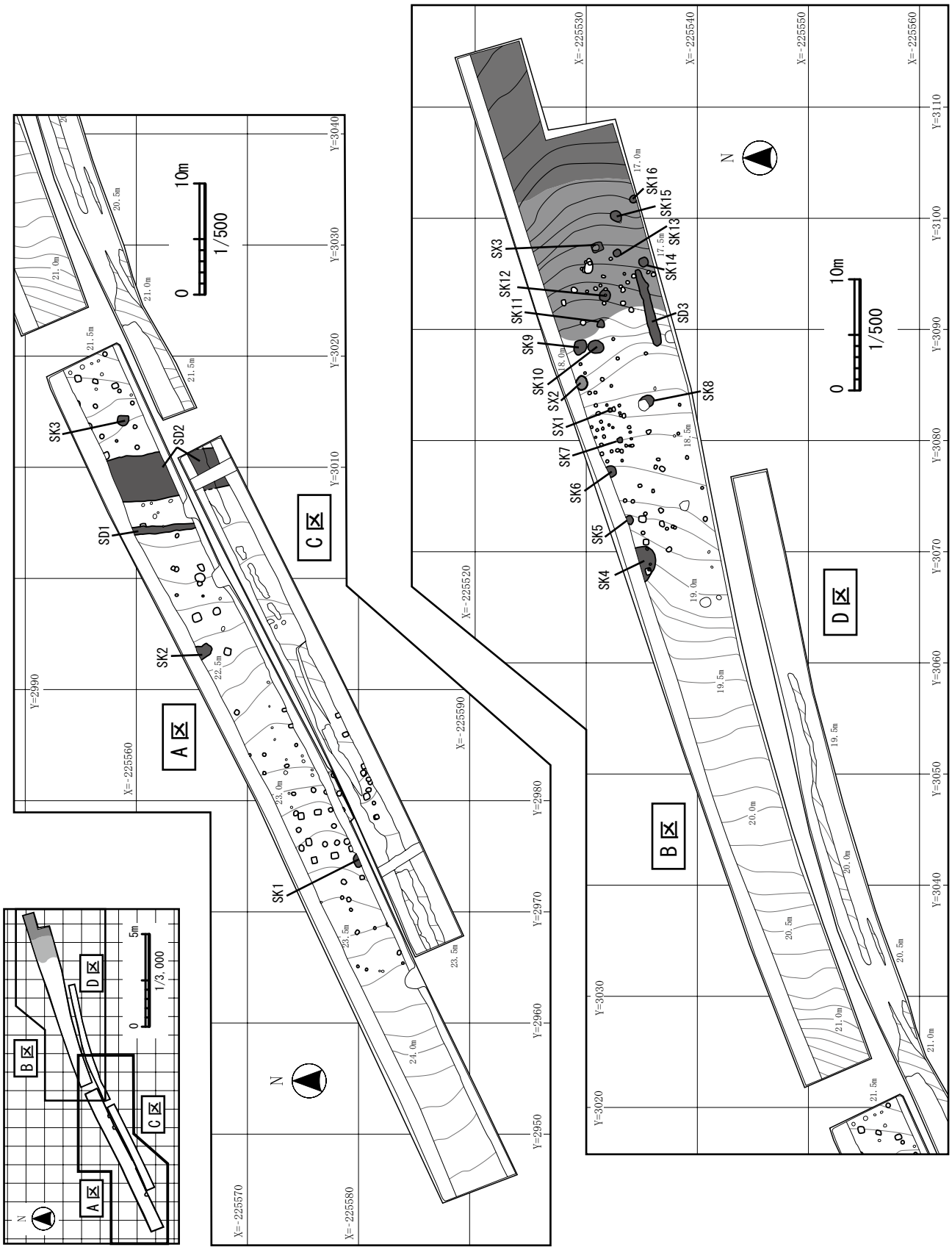
↑総計

[SK1～7] 遺構・層位		縄文土器	土師器		須恵器				石器	SK 遺構別合計
		深鉢・鉢	坏	甕	坏	蓋	壺・瓶類	甕	剥片	
SK1	堆積土		9 (35)	18 (90)						27 (125.0)
SK2	1層		3 (5)	3 (15)	1 (5)					7 (25.0)
SK3	堆積土		3 (10)	5 (15)						8 (25.0)
SK4	1層	53 (325)		2 (15)	1 (5)				3 (7.7)	59 (352.7)
	6層	3 (25)								3 (25.0)
	7層	3 (15)								3 (15.0)
	8層	1 (20)								1 (20.0)
	検出面	7 (65)								7 (65.0)
	底面	4 (60)								4 (60.0)
SK5	1層	47 (500)	6 (25)	6 (30)	1 (10)	1 (5)				61 (570.0)
	2層	4 (25)								4 (25.0)
	底面					1 (5)				1 (5.0)
SK6	2層	6 (50)						1 (15)		7 (65.0)
	3層	1 (15)								1 (15.0)
	4層	2 (30)								2 (30.0)
SK7	1層	1 (5)								1 (5.0)

[SK8～16] 遺構・層位		縄文土器	土師器		須恵器				石器	SK 遺構別合計
		深鉢・鉢	坏	甕	坏	蓋	壺・瓶類	甕	剥片	
SK8	1層	50 (580)								50 (580.0)
	2・3層	43 (310)								43 (310.0)
SK9	1層	10 (95)		1 (105)						11 (200.0)
	3層	14 (75)	1 (10)	5 (35)	1 (20)					21 (140.0)
SK10	堆積土	34 (330)	3 (15)	17 (155)						54 (500.0)
SK12	1層	12 (80)	3 (90)	4 (30)	1 (10)					20 (210.0)
	2層	10 (100)		3 (5)			1 (10)			14 (115.0)
SK13	1層	2 (125)								2 (125.0)
SK14	1層	16 (170)								16 (170.0)
	2層	15 (335)								15 (335.0)
SK15	1層	8 (65)								8 (65.0)
	2層	26 (225)								26 (225.0)
	3層	8 (55)								8 (55.0)
	堆積土	29 (355)								29 (355.0)
SK16	1層	2 (40)								2 (40.0)
	2層	43 (1380)								43 (1380.0)
SK・種別合計		454 (5455)	28 (190)	64 (495)	5 (50)	2 (10)	1 (10)	1 (15)	3 (7.7)	558 (6232.7)

↑総計

※（ ）内の数値は遺物の乾燥重量(g)を示す



第25図　谷原遺跡（1次調査）SD・SK・SX遺構配置図

（１）溝跡

【SD1 溝跡】（第 26～28 図）

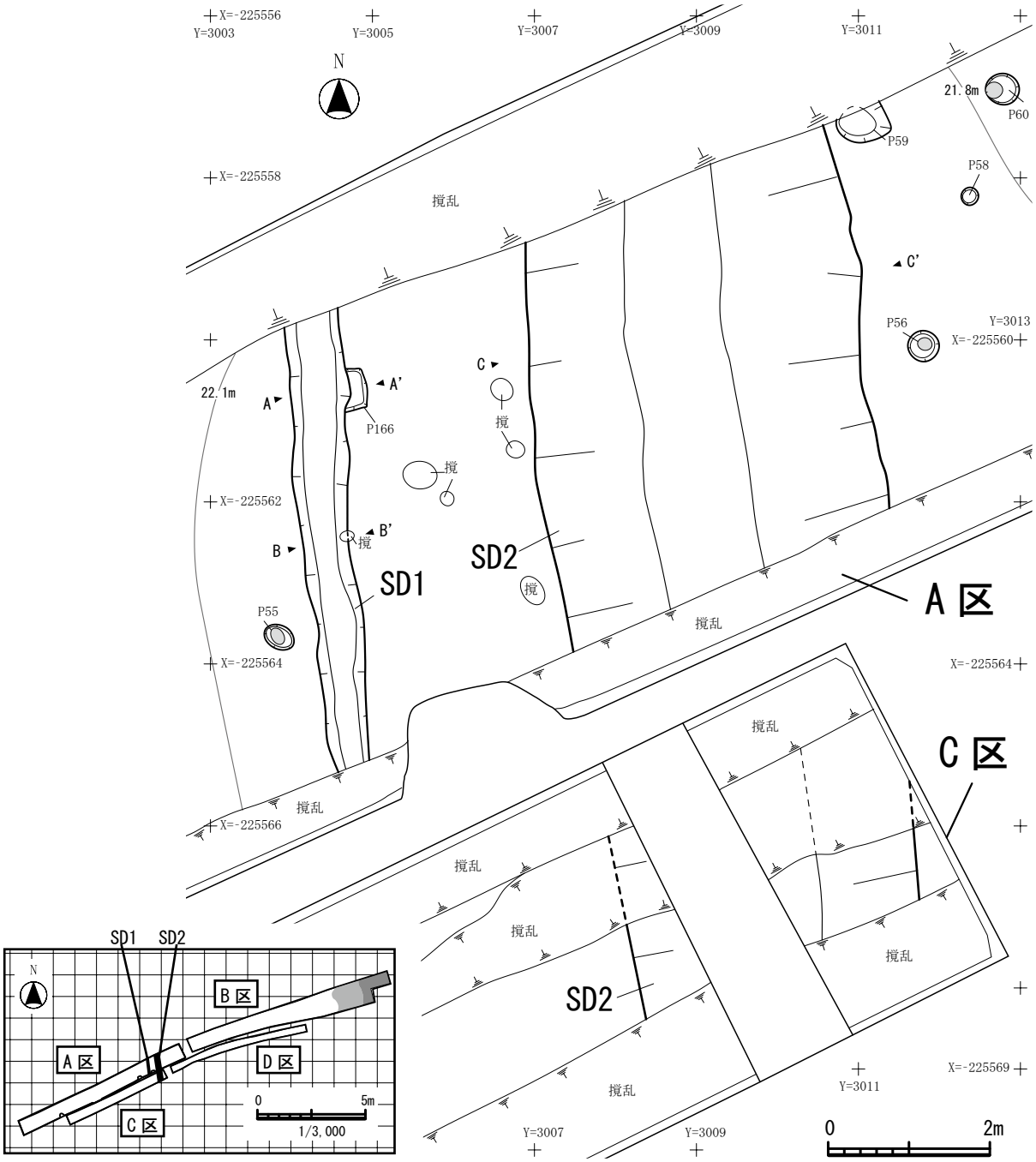
［位置］ A 区東部の標高 22.0～22.1m の平坦面で確認した。検出面はXb 層である。

［重複］ P166 と重複し、これより新しい（P166→SD1）。遺構の北端・南端は現代の撹乱により削平を受けており残存していない。

［規模・形状］ 南-北方向に延びる溝で、遺構北側は調査区外に延びるとみられる。検出長 5.6m、上幅 40～76cm、下幅 26～44cm、深さ 27cm、底面の標高は溝の南側が高く、北側が低い。溝の断面形は逆台形である。

［堆積土］ 3 層確認した。いずれも自然堆積層である。

［出土遺物］ 堆積土 1 層からロクロ成形の土師器坏破片 1 点（5g）・高台付坏破片 1 点（5g）・甕破片 1 点（5g）、須恵器坏破片 1 点（5g）、堆積土 2 層からロクロ成形の土師器坏破片 10 点（15g）、須恵器坏破片 1 点（5g）、不明鉄製品 1 点（15g）が出土した。小破片のため、図示できたものはないが、出土したロクロ成形の土師器坏の大半は赤焼土器である。



第26図　SD1・2 溝跡（1）

【SD2 溝跡】（第 26～29 図）

［位置］　A 区東部及び C 区東部の標高 21.8～22.0m の平坦面で確認した。検出面はXb 層である。

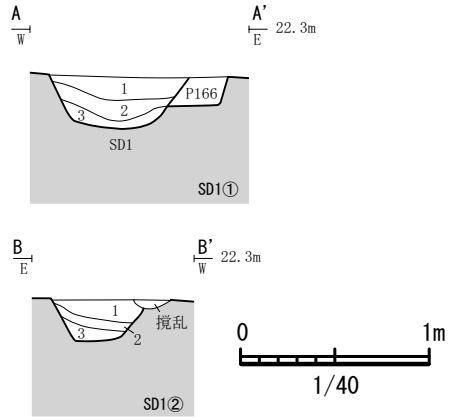
［重複］　なし。遺構の一部は現代の撹乱により削平を受けており残存していない。

［規模・形状］　南-北方向に延びる溝で、遺構南側及び北側は調査区外に延びるとみられる。検出長 9.6m、上幅 360～422cm、下幅 112～133cm、深さ 110cm、底面の標高は溝の南側が高く、北側が低い。溝の断面形はU字形である。

［堆積土］　10 層確認した。このうち、1 層は地山ブロック等が多量に含まれる人為堆積層で、それ以下の 2～10 層は自然堆積層である。2～10 層堆積後に人為的に埋め戻された溝跡であると考えられる。

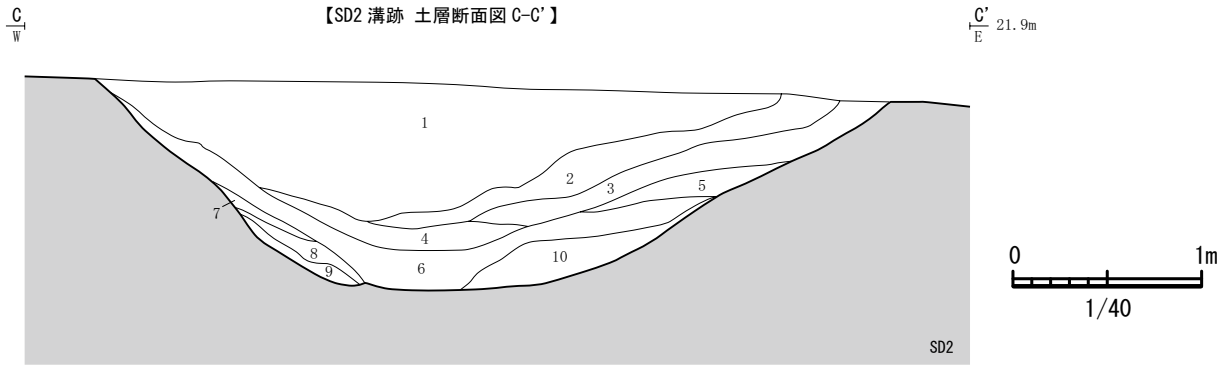
［出土遺物］　堆積土 1 層（人為堆積層）から非ロクロ成形の土師器坏破片 1 点（10g）、ロクロ成形の土師器坏破片 28 点（180g）・甕破片 9 点（130g）、須恵器坏破片 1 点（5g）・鉢破片 1 点（130g）・甕片 3 点（185g）、堆積土 3・4 層からロクロ成形の土師器坏破片 31 点（120g）・甕破片 22 点（165g）、須恵器坏破片 3 点（25g）・蓋破片 1 点（20g）・甕破片 1 点（85g）、堆積土 6 層から縄文土器破片 1 点（75g）、ロクロ成形の土師器坏破片 15 点（115g）・高台付坏 1 点（15g）・甕 38 点（185g）、須恵器坏破片 1 点（10g）・甕破片 8 点（310g）が出土した。このうち、ロクロ成形の内黒処理が施された土師器坏底部破片 1 点（第 28 図 1）、非内黒処理の土師器坏（赤焼土器）底部破片 1 点（第 28 図 2）、須恵器坏底部破片 1 点（第 28 図 3）・蓋天井部破片 1 点（第 28 図 8）・鉢底部破片 1 点（第 28 図 4）・甕口縁部破片 1 点（第 28 図 9）・甕体部破片 5 点（第 28 図 5～7・10）を図示した。

【SD1 溝跡 土層断面図 A-A' ～ B-B'】

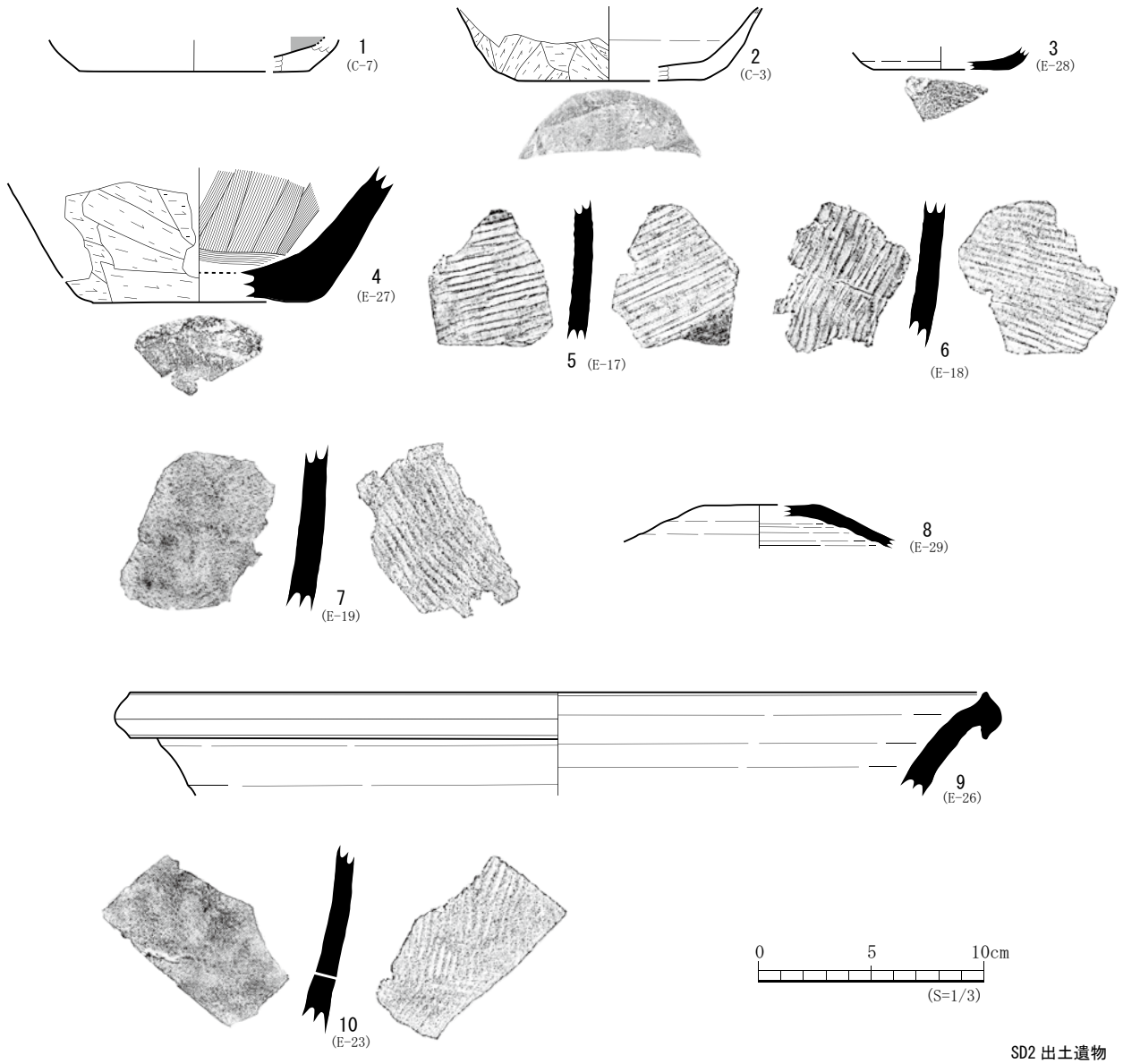


遺構	層	土色	土性	備考
SD1	1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒子・炭化物片・焼土粒子含む。
	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック含む。
	3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック多く含む。
SD2	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック・黒褐色ブロック多く含む。焼土粒子・小礫含む。人為堆積。
	2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック含む。
	3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	小礫少量含む。
	4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック・地山粒子少量含む。
	5	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山粒子多く含む。
	6	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	炭化物片・焼土ブロック・小礫含む。一部グライ化（水性堆積層）。
	7	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック多く含む。
	8	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物片・小礫含む。
	9	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	地山粒子多く含む。
	10	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	地山粒子多く含む。

【SD2 溝跡 土層断面図 C-C'】



第27図　SD1・2 溝跡（2）



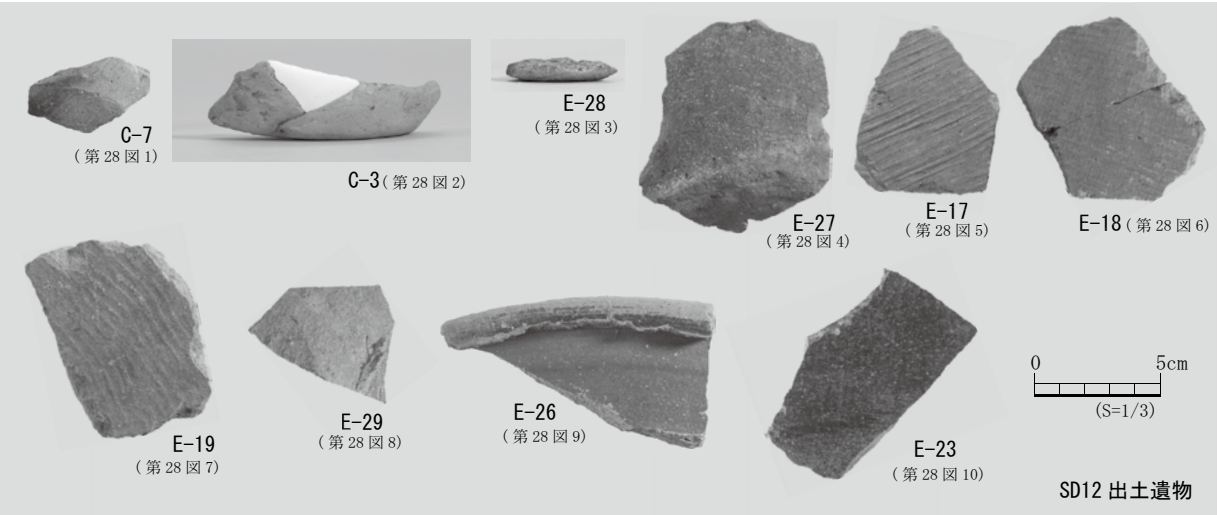
SD2 出土遺物

No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SD2 3・4層	土師器	坏	胴部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部回転糸切り無調整・磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・褐色(7.5YR4/3)/黒褐色(10YR3/1)、法量：底径(10.2)cm・残存高1.4cm・器厚0.6～1.0cm	C-7
2	SD2 6層	土師器	坏	胴部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明→手持ちヘラ削り再調整、内面：ロクロナデ、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：底径(8.0)cm・残存高3.3cm・器厚0.3～0.7cm、赤焼土器	C-3
3	SD2 1層	須恵器	坏	底部	外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整、内面：ロクロナデ、色調：外面・灰黄褐色(10YR6/2)、内面・灰黄褐色(10YR5/2)、法量：底径(6.0)cm・残存高1.0cm・器厚0.3～0.5cm	E-28
4	SD2 1層	須恵器	鉢	胴部 ～底部	外面：ヘラ削り、内面：ナデ、色調：外面・灰色(7.5Y4/1)、内面・灰色(5Y4/1)、法量：底径(9.6)cm・残存高6.1cm・器厚1.0～2.2cm	E-27
5	SD2 1層	須恵器	甕	胴部	外面：平行タタキ、内面：当て具痕、色調：外面・褐灰色(10YR4/1)、内面・灰色(10Y4/1)、法量：器厚0.7～0.8cm	E-17
6	SD2 1層	須恵器	甕	胴部	外面：平行タタキ、内面：当て具痕、色調：外面・灰色(5Y4/1)、内面・灰色(10Y4/1)、法量：器厚0.9～1.0cm	E-18
7	SD2 1層	須恵器	甕	胴部	外面：平行タタキ、内面：ナデ、色調：内外面・黄灰色(2.5Y4/1)、法量：器厚1.0～1.2cm	E-19
8	SD2 3・4層	須恵器	蓋？	天井部 ～胴部	外面：ロクロナデ・天井部再調整(技法不明)・自然釉、内面：ロクロナデ、色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)、内面・灰色(N4/0)、法量：天井径5.4cm・残存高1.9cm・器厚0.4～0.6cm	E-29
9	SD2 4層	須恵器	甕	口縁部	内外面：ロクロナデ、色調：外面・灰色(N4/0)、内面・灰色(N5/0)、法量：口径(38.0)cm・残存高4.6cm・器厚0.8～1.1cm	E-26
10	SD2 6層	須恵器	甕	胴部	外面：平行タタキ・自然釉、内面：当て具→ナデ、色調：外面・灰色(N4/0)、内面・褐灰色(10YR5/1)、法量：器厚0.9～1.1cm	E-23

第28図　SD2 出土遺物

SD1・2 溝跡 完掘状況（北から）/SD1：右・SD2：左

SD2 溝跡 土層断面（南から）



第29図　SD1・2 溝跡（3）

【SD3 溝跡】（第 30 図）

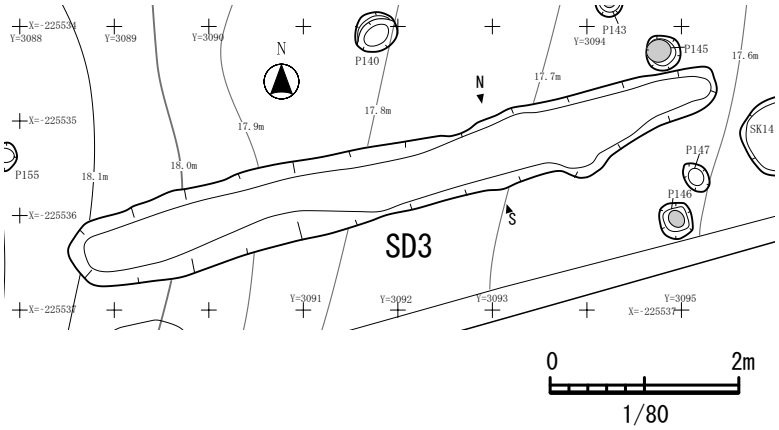
［位置］　B 区東部の標高 17.6～18.1m の平坦面で確認した。検出面はXb 層である。

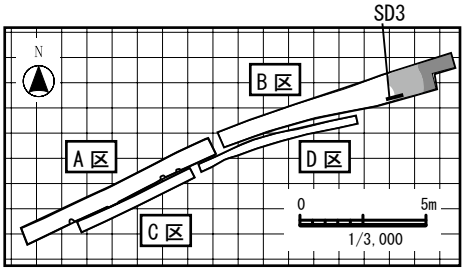
［重複］　なし。

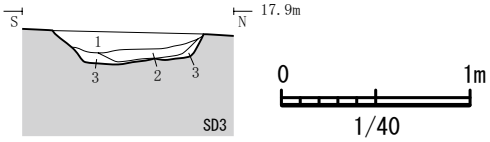
［規模・形状］　東-西方向に延びる溝で、検出長 7.10m、上幅 67～90cm、下幅 48～50cm、深さ 18cm、底面の標高は溝の西側が高く、東側が低い。溝の断面形は逆台形である。

［堆積土］　3 層確認した。いずれも自然堆積層である。

［出土遺物］　堆積土 1 層から縄文土器破片 7 点（80g）、石器剥片 1 点（4.8g）、ロクロ成形の土師器甕破片 10 点（50g）、須恵器坏破片 6 点（25g）・甕破片 14 点（230g）・壺破片 5 点（150g）が出土した。いずれも小破片のため、図示できたものはない。







層	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物片・焼土粒子含む。
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック多く含む。
3	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山粒子多く含む。

SD3 溝跡 断面（東から）

SD3 溝跡 検出状況（東から）

第30図　SD3 溝跡

（２）土坑

【SK1 土坑】（第 31・41 図）

［位置］ A 区西部の標高 23.3m の平坦面で確認した。検出面はＸb 層である。

［重複］ なし。遺構の南半は現代の撹乱により削平を受けており残存していない。

［規模・形状］ 120cm×52cm 以上の楕円形を呈するとみられる。深さ 27cm。底面は平坦で、土坑北西部がさらに窪む。断面形は逆台形である。

［堆積土］ 4 層確認した。いずれも自然堆積層である。

［出土遺物］ 堆積土からロクロ成形の土師器坏破片 9 点（35g）・甕破片 18 点（90g）が出土した。小破片のため、図示できたものはない。

【SK2 土坑】（第 31・41 図）

［位置］ A 区中央部の標高 22.4m の平坦面で確認した。検出面はＸb 層である。

［重複］ なし。遺構の北半は現代の撹乱により削平を受けており残存していない。

［規模・形状］ 長軸 134cm 以上×短軸 122cm の不整形を呈するとみられる。深さ 15cm。底面は平坦で、短軸方向の断面形は皿状である。

［堆積土］ 1 層確認した。自然堆積層である。

［出土遺物］ 堆積土 1 層からロクロ成形の土師器坏破片 3 点（5g）・甕破片 3 点（15g）、須恵器坏破片 1 点（5g）が出土した。小破片のため図示できたものはない。

【SK3 土坑】（第 31・41 図）

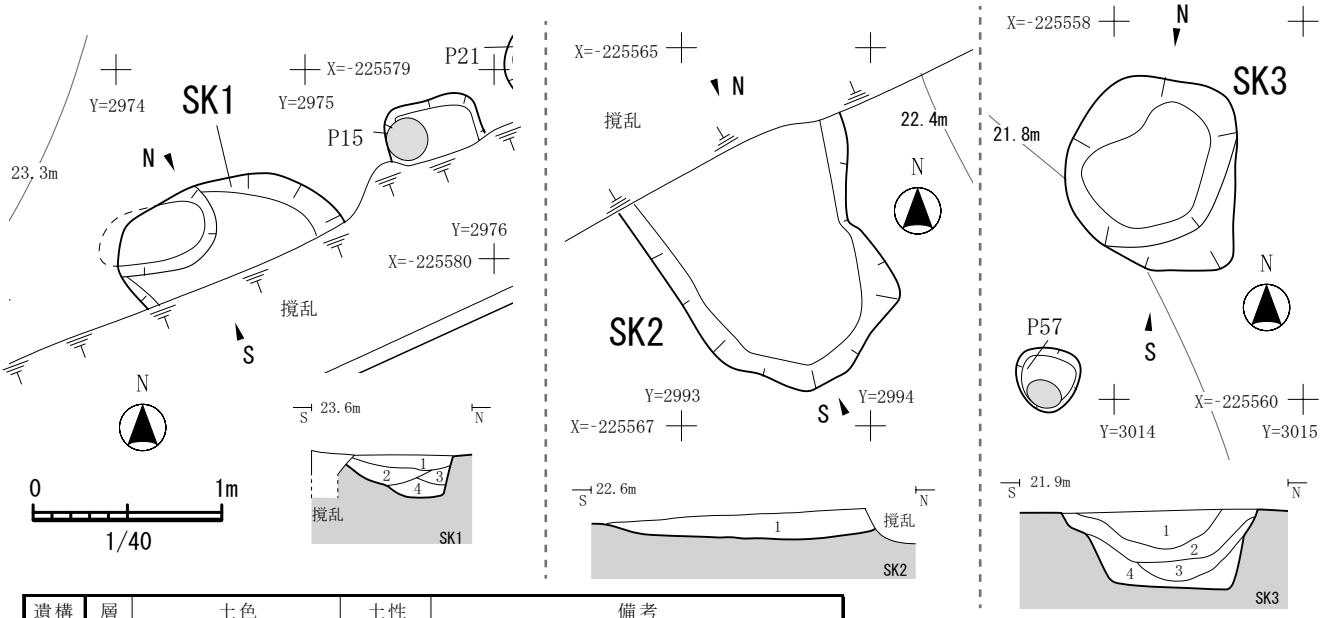
［位置］ A 区東部の標高 21.8m の平坦面で確認した。検出面はＸb 層である。

［重複］ なし。

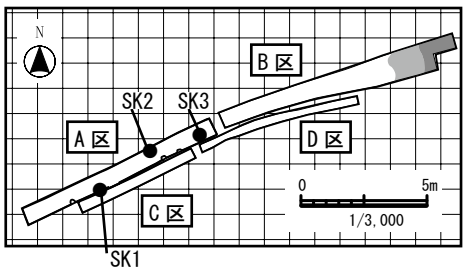
［規模・形状］ 100cm×90cm の不整形。深さ 41cm。底面は平坦で、断面形は逆台形である。

［堆積土］ 4 層確認した。いずれも自然堆積層である。

［出土遺物］ 堆積土からロクロ成形の土師器坏破片 3 点（10g）・甕破片 5 点（15g）が出土した。小破片のため、図示できたものはない。



遺構	層	土色	土性	備考
SK1	1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	炭化物片、焼土ブロック多く含む。
	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物片微量、焼土ブロック少量含む。
	3	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒子微量含む。
	4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物粒子、焼土粒子含む。
SK2	1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック、炭化物片、焼土粒子含む。
SK3	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック、炭化物片、小礫含む。
	2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック、焼土粒子、小礫含む。
	3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒子、焼土粒子少量含む。
	4	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック多く含む。



第31図　SK1～3 土坑

【SK4 土坑】（第 32・40・41 図）

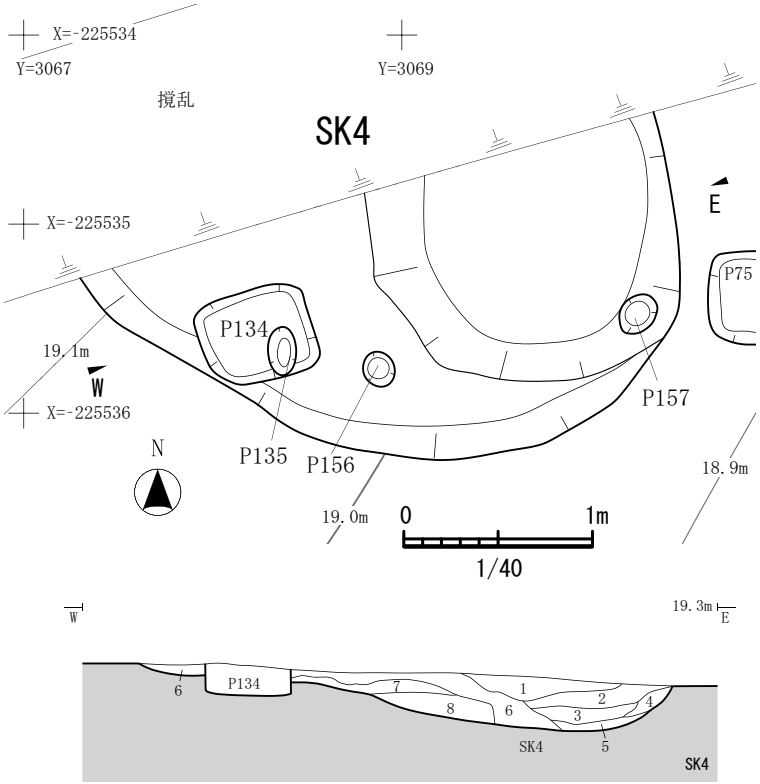
［位置］ B 区中央部の標高 18.9～19.1m の平坦面で確認した。検出面はXb 層である。

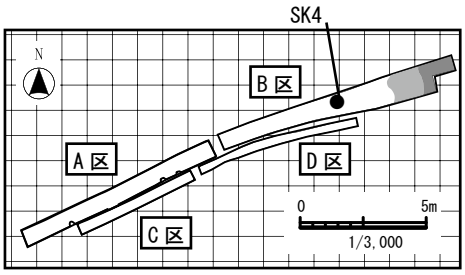
［重複］ P134・135・156・157 と重複し、これらより古い（SK4→P134・135・156・157）。遺構の北半は現在の撹乱により削平を受けており残存していない。

［規模・形状］ 長軸 313cm×短軸 152cm 以上の楕円形を呈するとみられる。深さ 27cm。底面は平坦で、遺構東側が深い。断面形は皿状である。

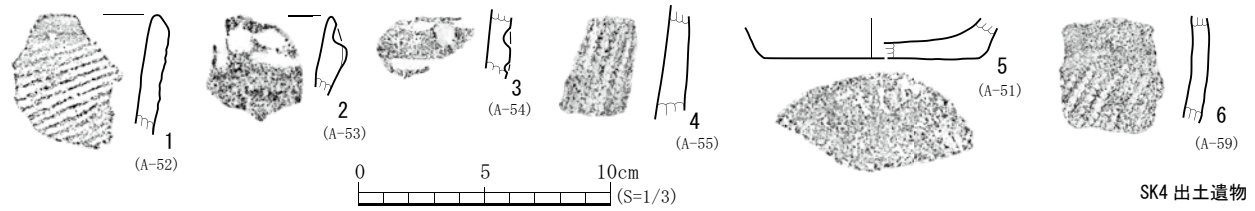
［堆積土］ 8 層確認した。いずれも自然堆積層である。

［出土遺物］ 検出面から縄文土器深鉢破片 7 点（65g）、堆積土 1 層から縄文土器深鉢破片 53 点（325g）・石器剥片 3 点（7.7g）・ロクロ成形の土師器甕破片 2 点（15g）・須恵器坏破片 1 点（5g）、堆積土 6 層から縄文土器深鉢破片 3 点（25g）、7 層から縄文土器深鉢破片 3 点（15g）、8 層から縄文土器深鉢破片 1 点（20g）、底面から縄文土器深鉢破片 4 点（60g）出土した。このうち、縄文土器深鉢口縁部破片 2 点（第 32 図 1・2）、体部破片 3 点（第 32 図 3・4・6）、底部破片 1 点（第 32 図 5）を図示した。





層	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック、炭化物粒子、焼土粒子含む。
2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロック、焼土ブロック、小礫含む。
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック少量含む。
4	褐色 (10YR4/6)	シルト	暗褐色土含む。
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック少量含む。
6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	黒色土ブロック、炭化物片、焼土粒子含む。
7	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山ブロック、焼土粒子含む。
8	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山ブロック、黒色土ブロックまだらに含む。



SK4 出土遺物

No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK4 1層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：縄文LR、内面：ナデ、色調：内外面・褐色(7.5YR4/3)、法量：器厚0.7～0.8cm	A-52
2	SK4 1層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：隆帯・沈線文・盲孔・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：器厚0.4～1.0cm	A-53
3	SK4 1層	縄文土器	深鉢	頸部	外面：沈線文・盲孔・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：器厚0.55～0.9cm	A-54
4	SK4 1層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：器厚0.7～1.0cm	A-55
5	SK4 1層	縄文土器	深鉢	底部	内外面：磨滅のため不明、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/2)/褐色(7.5YR4/3)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/4)、法量：底径(8.6)cm・残存高1.6cm・器厚0.6～1.2cm	A-51
6	SK4 8層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR、内面：ナデ、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：器厚0.6～0.7cm	A-59

第32図　SK4 土坑

【SK5 土坑】（第 33・41 図）

［位置］ B 区中央部の標高 18.8m の平坦面で確認した。検出面はXb 層である。

［重複］ なし。遺構の北半は現在の撹乱により削平を受けており残存していない。

［規模・形状］ 76cm×52cm 以上の楕円形を呈するとみられる。深さ 17cm。底面は平坦で、断面形は逆台形である。

［堆積土］ 2 層確認した。いずれも自然堆積層である。

［出土遺物］ 堆積土 1 層から縄文土器深鉢破片 47 点（500g）、ロクロ成形の土師器坏破片 6 点（25g）・甕破片 6 点(30g)、須恵器坏破片 1 点(10g)・蓋破片 1 点(5g)、堆積土 2 層から縄文土器深鉢破片 4 点(25g)、底面から須恵器蓋破片 1 点（5g）出土した。小破片のため、図示できたものはない。

【SK6 土坑】（第 33・41 図）

［位置］ B 区中央部の標高 18.6m の平坦面で確認した。検出面はXb 層である。

［重複］ なし。遺構の北半は現在の撹乱により削平を受けており残存していない。

［規模・形状］ 102cm×70cm 以上の楕円形を呈するとみられる。深さ 22cm。底面は平坦で、断面形は逆台形である。

［堆積土］ 4 層確認した。いずれも自然堆積層である。

［出土遺物］ 堆積土 2 層から縄文土器深鉢破片 6 点（50g）・須恵器甕破片 1 点（15g）、堆積土 3 層から縄文土器深鉢破片 1 点（15g）、堆積土 4 層から縄文土器深鉢破片 2 点（30g）が出土した。小破片のため、図示できたものはない。

【SK7 土坑】（第 33・41 図）

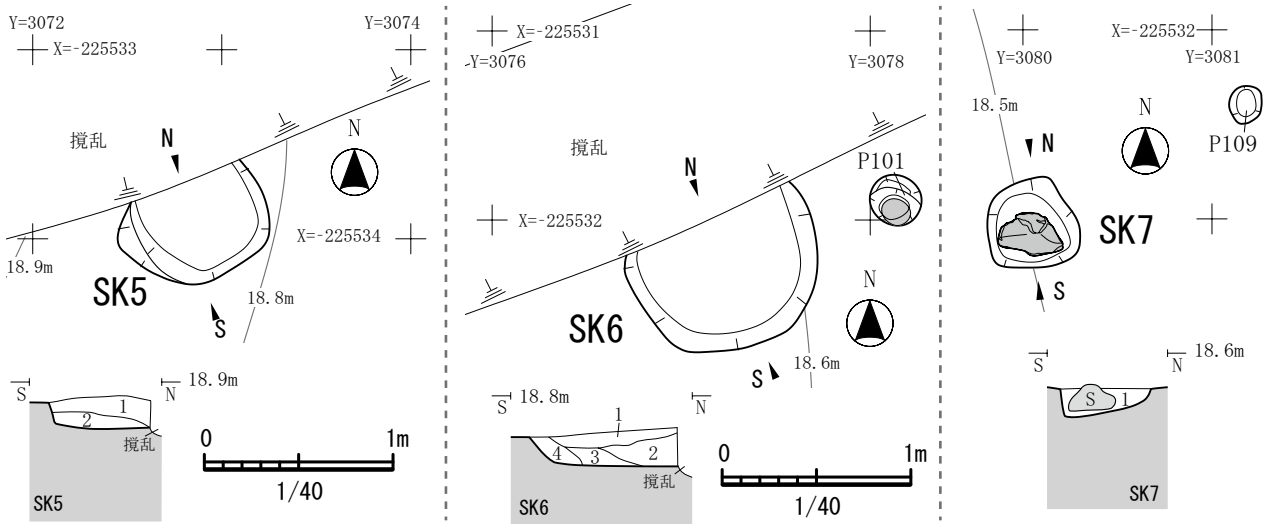
［位置］ B 区中央部の標高 18.5m の平坦面で確認した。検出面はXb 層である。

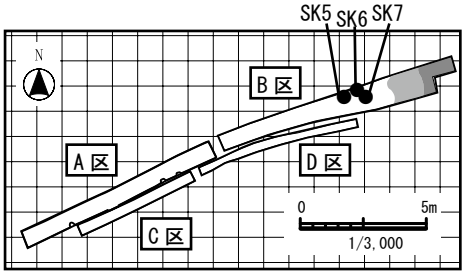
［重複］ なし。

［規模・形状］ 48cm×47cm の不整形。深さ 15cm。底面は平坦で、断面形は逆台形である。

［堆積土］ 1 層確認した。堆積土は人為堆積層で、底面付近には礫が据えられていた。掘立柱建物跡の柱穴の可能性も考えられたが、柱穴と断定できる根拠に乏しいことから、土坑として取り扱った。

［出土遺物］ 堆積土 1 層から縄文土器深鉢破片 1 点（5g）が出土した。小破片のため、図示できたものはない。





遺構	層	土色	土性	備考
SK5	1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒子、焼土ブロック含む。
	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	黒褐色土(10YR3/2)含む。
SK6	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック、焼土粒子含む。
	2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック、焼土粒子含む。
	3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	黒褐色土(10YR3/2)ブロック含む。
	4	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロック多く含む。
SK7	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	黒褐色土(10YR3/2)ブロックまだらに含む。

第33図　SK5～7 土坑

【SK8 土坑】（第 34・40・41 図）

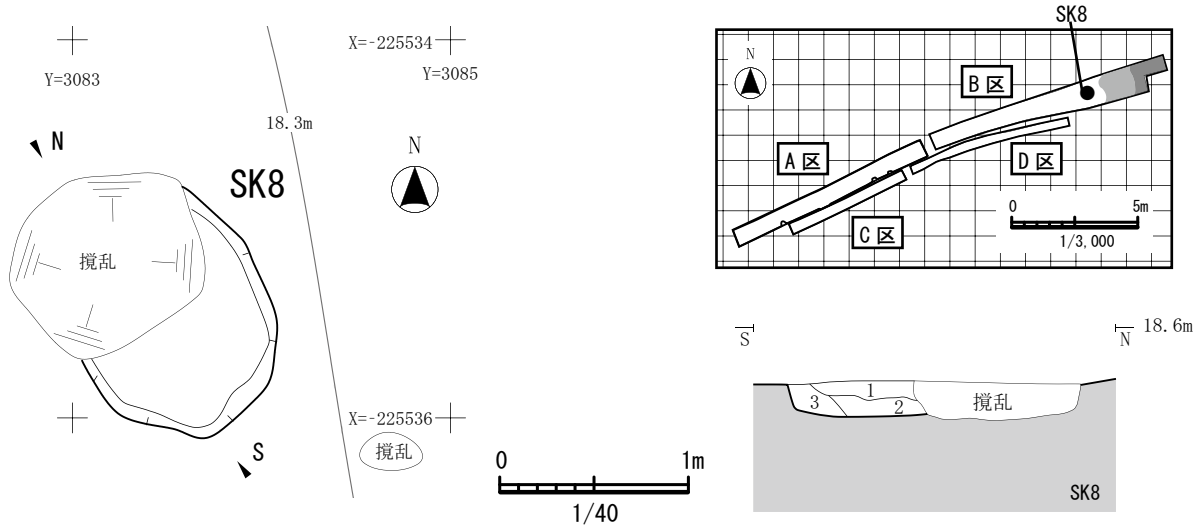
［位置］ B 区中央部の標高 18.3m の平坦面で確認した。検出面はXb 層である。

［重複］ なし。遺構の北西部分は現在の撹乱により削平を受けており残存していない。

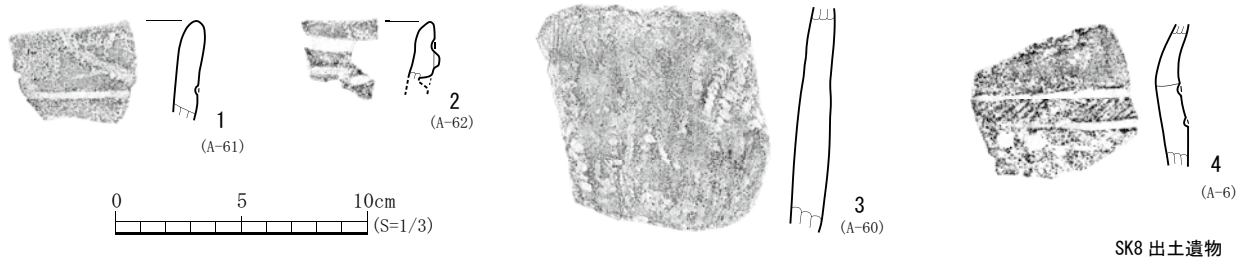
［規模・形状］ 104cm×65cm 以上の楕円形を呈するとみられる。深さ 18cm。底面は平坦で、断面形は逆台形である。

［堆積土］ 3 層確認した。いずれも自然堆積層である。

［出土遺物］ 堆積土 1 層から縄文土器深鉢破片 50 点（580g）、堆積土 2・3 層から縄文土器深鉢破片 43 点（310g）出土した。このうち、縄文土器深鉢口縁部破片 2 点（第 34 図 1・2）、体部破片 2 点（第 34 図 3・4）を図示した。



層	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土ブロック多量、黒褐色土(10YR2/3)ブロック含む。
2	黒褐色(10YR2/3)	シルト	焼土ブロック多量、地山粒子含む。
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック、地山粒子多く含む。



SK8 出土遺物

No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK8 1層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：沈線文・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/4)/褐色(7.5YR4/3)、内面・にぶい黄褐色(10YR4/3)、法量：器厚0.7～1.0cm	A-61
2	SK8 1層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：隆帯・沈線文・盲孔、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(10YR3/2)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：器厚0.7～1.0cm	A-62
3	SK8 1層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：器厚0.9～1.3cm	A-60
4	SK8 堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR・沈線文・盲孔、内面：ナデ、色調：外面・暗赤褐色(5YR3/2)、内面・暗赤褐色(2.5YR3/2)、法量：器厚0.6～1.0cm	A-6

第34図　SK8 土坑

【SK9 土坑】（第 35・40・42 図）

［位置］　B 区東部の標高 18.0m の平坦面で確認した。検出面はXb 層である。

［重複］　なし。

［規模・形状］　120cm×117cm の楕円形。深さ 26cm。底面は平坦で、断面形はU 字形である。

［堆積土］　3 層確認した。いずれも自然堆積層である。

［出土遺物］　堆積土 1 層から縄文土器深鉢破片 10 点（95g）、ロクロ成形の土師器甕破片 1 点（105g）、堆積土 3 層から縄文土器深鉢破片 14 点(75g)、ロクロ成形の土師器坏破片 1 点(10g)・土師器甕破片 5 点(35g)、須恵器坏破片 1 点（20g）が出土した。このうち、土師器甕底部破片 1 点（第 35 図 1)、土師器坏（赤焼土器）底部破片 1 点（第 35 図 2）を図示した。

【SK10 土坑】（第 35・42 図）

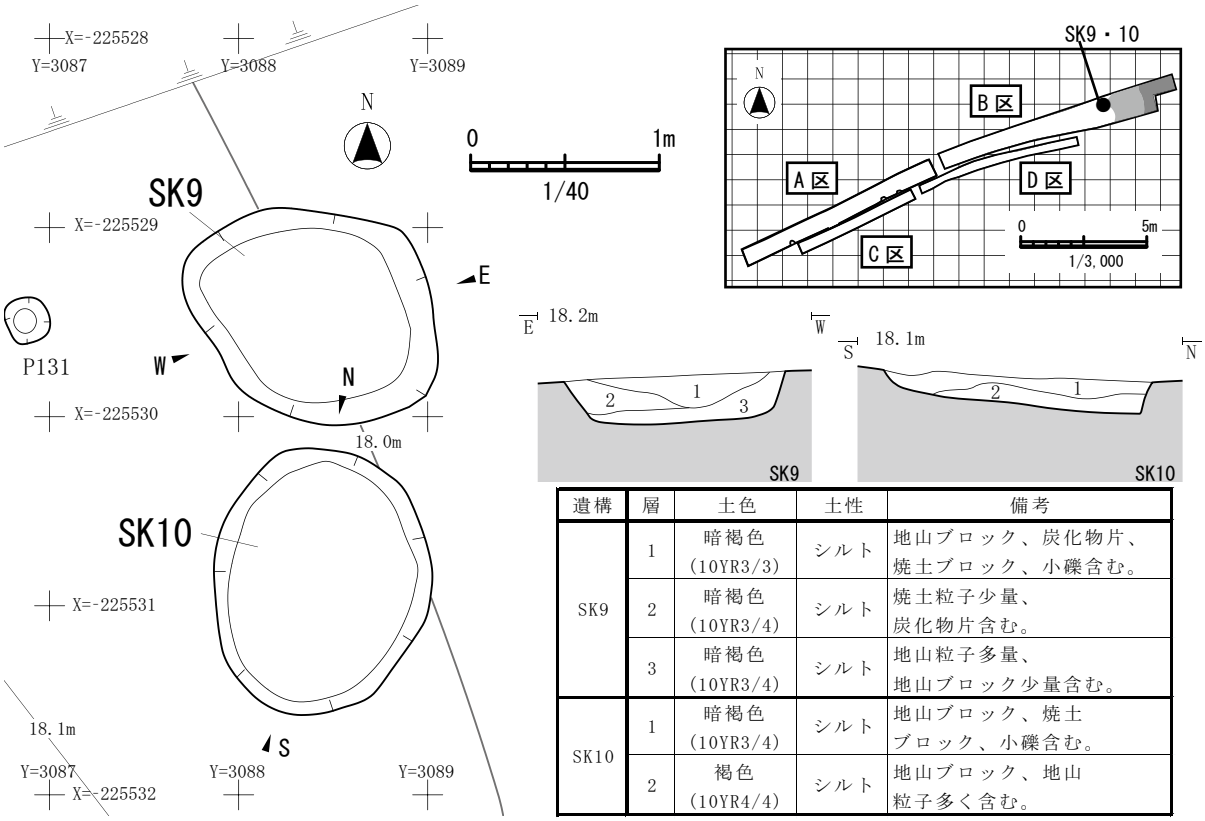
［位置］　B 区東部の標高 18.0m の平坦面で確認した。検出面はXb 層である。

［重複］　なし。

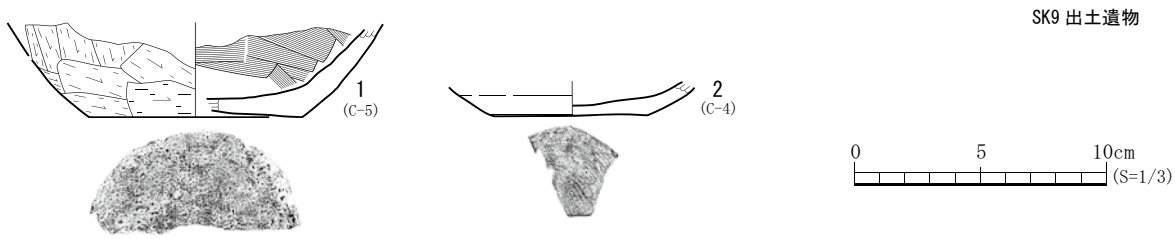
［規模・形状］　140cm×116cm の楕円形。深さ 18cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。

［堆積土］　2 層確認した。いずれも自然堆積層である。

［出土遺物］　堆積土から縄文土器深鉢破片 34 点（330g）、ロクロ成形の土師器坏破片 3 点（15g）・甕破片 17 点（155g）が出土した。小破片のため、図示できたものはない。



遺構	層	土色	土性	備考
SK9	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック、炭化物片、焼土ブロック、小礫含む。
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土粒子少量、炭化物片含む。
	3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒子多量、地山ブロック少量含む。
SK10	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロック、焼土ブロック、小礫含む。
	2	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山ブロック、地山粒子多く含む。



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK9 1層	土師器	甕	胴部 ～底部	外面：胴部ヘラ削り・底部手持ちヘラ削り、内面：ヘラナデ、色調：内外面・褐色(7.5YR4/3)、法量：底径(8.4)cm・残存高3.8cm・器厚0.5～0.9cm	C-5
2	SK9 3層	土師器	坏	胴部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部回転糸切り無調整、内面：ロクロナデ、色調：外面・橙色(7.5YR6/6)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、法量：底径(6.0)cm・残存高1.4cm・器厚0.4～0.7cm、赤焼土器	C-4

第35図　SK9・10 土坑

【SK11 土坑】（第 36・42 図）

［位置］ B 区東部の標高 17.9m の平坦面で確認した。検出面はXb 層である。

［重複］ なし。

［規模・形状］ 70cm×62cm の不整形。深さ 10cm。底面は平坦で、断面形は不整形である。

［堆積土］ 3 層確認した。いずれも自然堆積層である。

［出土遺物］ なし。

【SK12 土坑】（第 36・40・42 図）

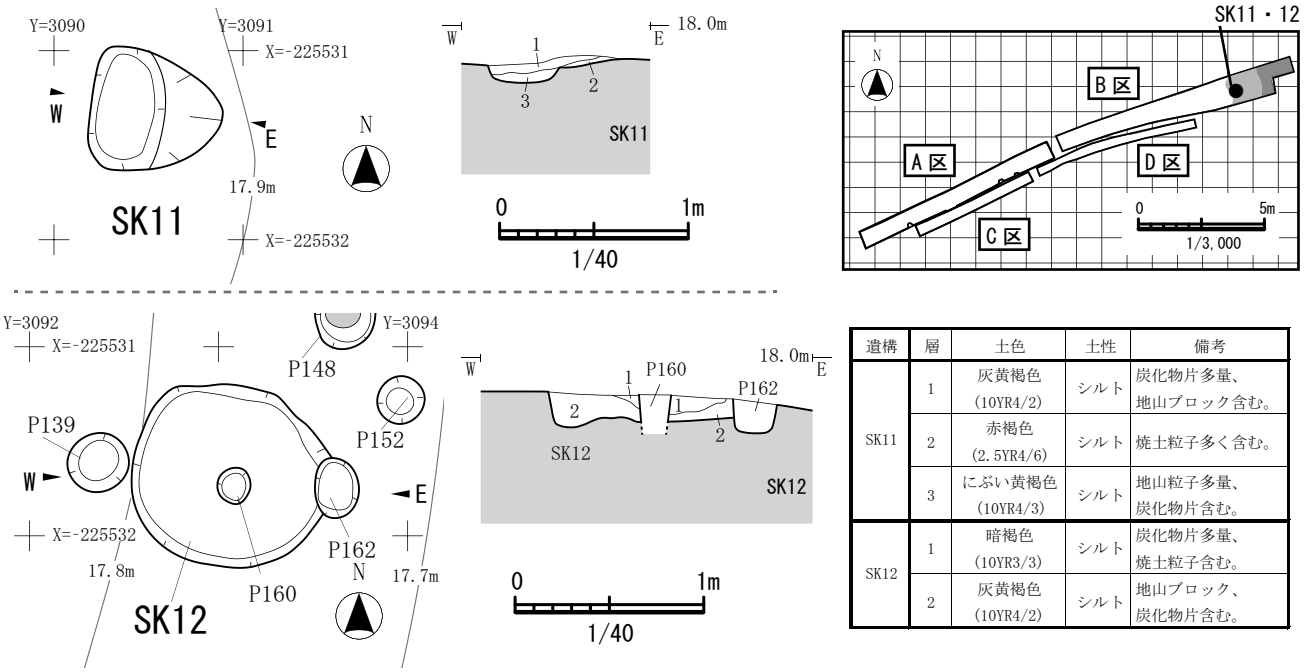
［位置］ B 区東部の標高 17.7～17.8m の平坦面で確認した。V 層中で検出した。

［重複］ P160・162 と重複し、これらより古い（SK12→P160・162）。

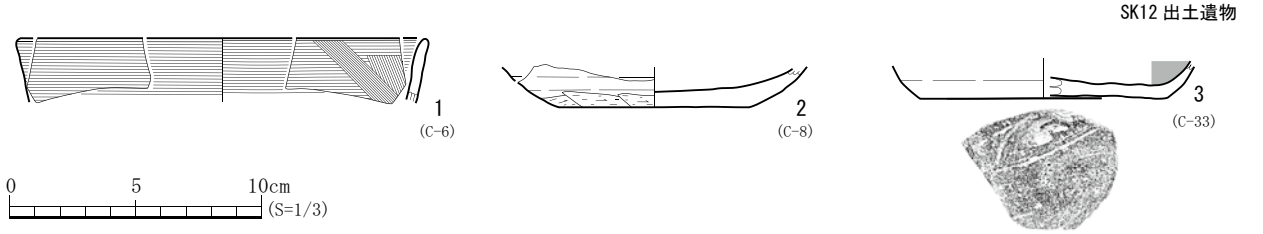
［規模・形状］ 106cm×100cm の円形。深さ 18cm。底面は平坦で、断面形は不整形である。

［堆積土］ 2 層確認した。いずれも自然堆積層である。

［出土遺物］ 堆積土 1 層から縄文土器深鉢破片 12 点（80g）、非ロクロ成形の土師器坏破片 1 点（10g）、ロクロ成形の土師器坏破片 2 点（80g）・甕破片 4 点（30g）・須恵器坏破片 1 点（10g）、堆積土 2 層から縄文土器深鉢破片 10 点（100g）、非ロクロ成形の土師器甕破片 3 点（5g）・須恵器壺破片 1 点（10g）が出土した。このうち、非ロクロ成形の土師器坏口縁部破片 1 点（第 36 図 1）、ロクロ成形の土師器坏（赤焼土器）底部破片 1 点（第 36 図 2）、ロクロ成形の内黒処理が施された土師器坏 1 点（第 36 図 3）を図示した。



遺構	層	土色	土性	備考
SK11	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物片多量、地山ブロック含む。
	2	赤褐色（2.5YR4/6）	シルト	焼土粒子多く含む。
	3	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	地山粒子多量、炭化物片含む。
SK12	1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	炭化物片多量、焼土粒子含む。
	2	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	地山ブロック、炭化物片含む。



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK12 1層	土師器	坏	口縁部	外面：ヨコナデ、内面：ナデ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・黒褐色(10YR3/2)、法量：口径(16.4)cm・残存高2.5cm・器厚0.3～0.4cm	C-6
2	SK12 1層	土師器	坏	胴部～底部	外面：ロクロナデ・胴部下端手持ちヘラ削り・底部切り離し技法不明→手持ちヘラ削り再調整、内面：ロクロナデ・磨滅、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)/にぶい黄橙色(10YR7/4)、内面・灰黄色(2.5Y6/2)、法量：底径(7.4)cm・残存高1.6cm・器厚0.4～0.9cm、赤焼土器	C-8
3	SK12 1層	土師器	坏	胴部～底部	外面：ロクロナデ・磨滅、底部切り離し技法不明→手持ちヘラ削り再調整、内面：磨滅・わずかに黒色処理の痕跡残る、色調：外面・黄灰色(2.5Y6/1)、内面・灰黄色(2.5Y6/2)、法量：底径(9.8)cm・残存高1.6cm・器厚0.3～0.7cm	C-33

第36図　SK11・12 土坑

【SK13 土坑】（第 37・40・42 図）

［位置］ B 区東部の標高 17.5m の平坦面で確認した。基本層Ⅴ層除去後のⅩa 層で検出した。

［重複］ なし。

［規模・形状］ 70cm×60cm の円形。深さ 8cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。

［堆積土］ 1 層確認した。自然堆積層である。

［出土遺物］ 堆積土 1 層下層の底面付近から縄文土器深鉢破片 2 点（125g）が出土した。このうち、縄文土器深鉢口縁部破片 1 点（第 37 図 1）を図示した。

【SK14 土坑】（第 37・40・42 図）

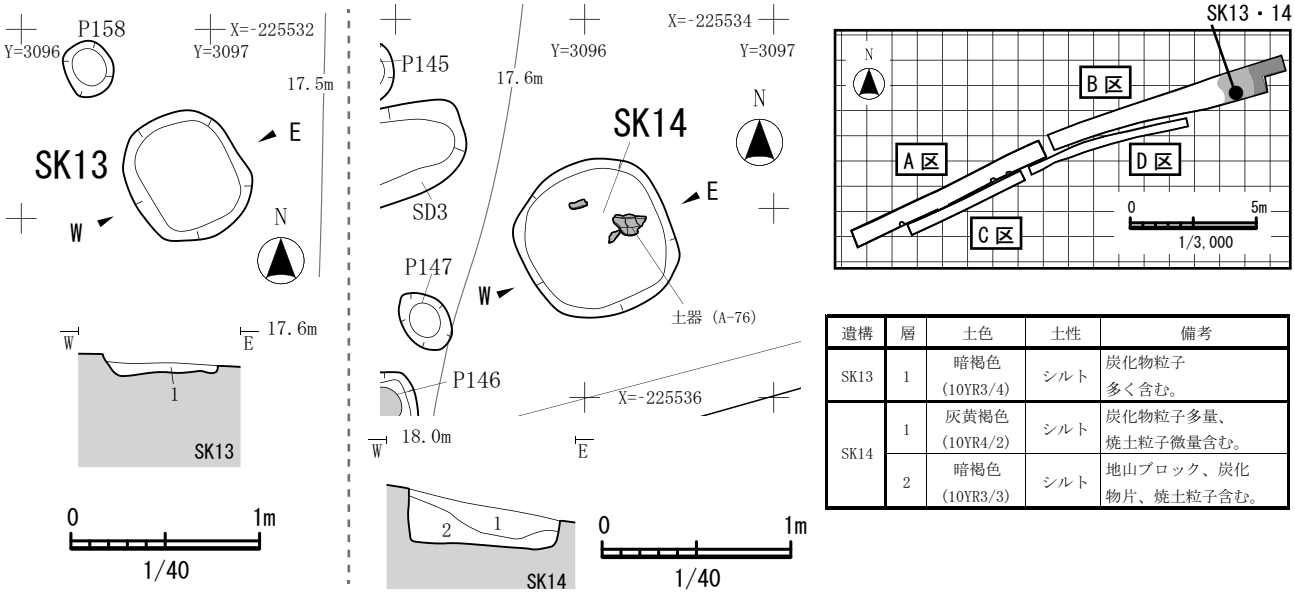
［位置］ B 区東部の標高 17.6m の平坦面で確認した。基本層Ⅴ層除去後のⅩa 層で検出した。

［重複］ なし。

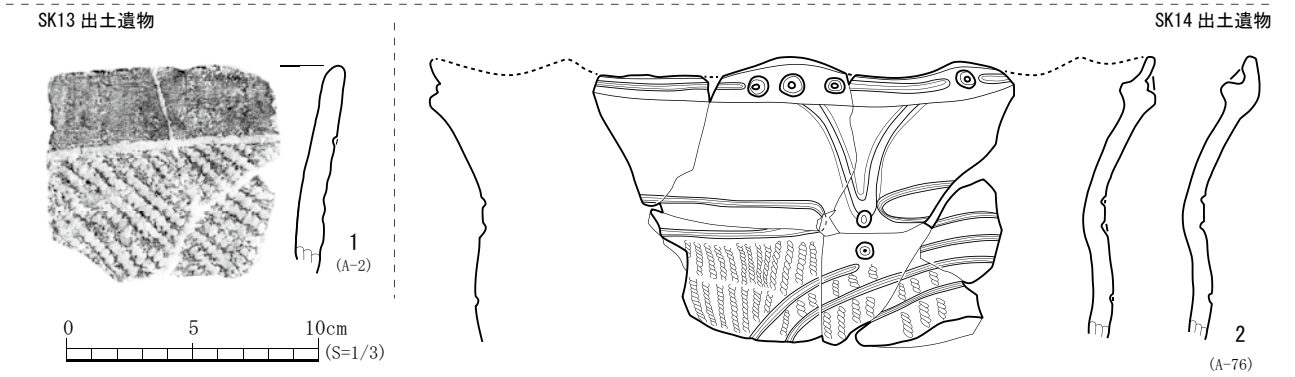
［規模・形状］ 83cm×79cm の円形。深さ 30cm。底面は平坦で、断面形はＵ字形である。

［堆積土］ 2 層確認した。いずれも自然堆積層である。

［出土遺物］ 堆積土 1 層から縄文土器深鉢破片 16 点（170g）、堆積土 2 層下層の底面付近から縄文土器深鉢破片 15 点（335g）が出土した。このうち、縄文土器深鉢口縁部～胴部破片 1 点（第 37 図 2）を図示した。



遺構	層	土色	土性	備考
SK13	1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物粒子多く含む。
SK14	1	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	炭化物粒子多量、焼土粒子微量含む。
	2	暗褐色（10YR3/3）	シルト	地山ブロック、炭化物片、焼土粒子含む。



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK13 1層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：縄文LR・沈線文、内面：ナデ、色調：外面・灰褐色(5YR4/2)/黒褐色(7.5YR3/1)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：器厚0.9～1.1cm	A-2
2	SK14 2層下層	縄文土器	深鉢	口縁部～胴部	外面：縄文LR・沈線文・盲孔、内面：ナデ・盲孔、色調：外面・暗赤褐色(5YR3/2)/黒褐色(7.5YR2/2)、内面・灰褐色(5YR4/2)、法量：口径(28.6)cm・残存高11.3cm・器厚0.35～1.5cm	A-76

第37図　SK13・14 土坑

【SK15 土坑】（第 38・40・42 図）

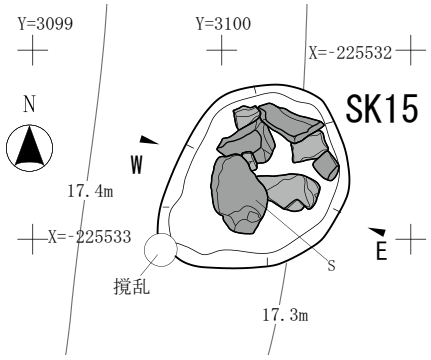
［位置］ B 区東部の標高 17.3m の平坦面で確認した。基本層Ⅶ層除去後のＸa 層で検出した。

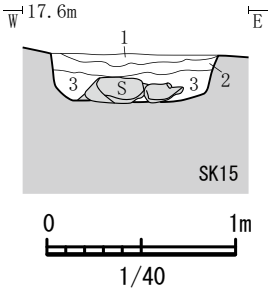
［重複］ なし。遺構南西部の一部が後世の撹乱により削平を受けている。

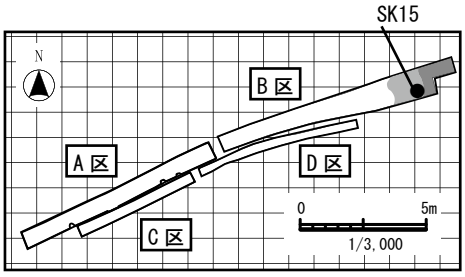
［規模・形状］ 99cm×95cm の楕円形。深さ 27cm。底面は平坦で、断面形はＵ字形である。

［堆積土］ 3 層確認した。いずれも自然堆積層である。

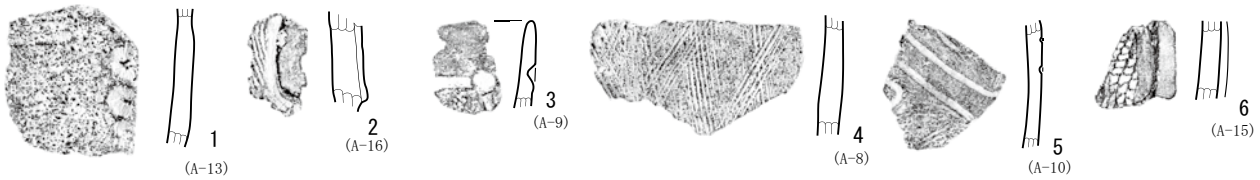
［出土遺物］ 堆積土 1～3 層から縄文土器深鉢破片 71 点（700g）が出土した。このうち、縄文土器深鉢口縁部破片 1 点（第 38 図 3）、体部破片 5 点（第 39 図 1・2・4～6）を図示した。この他、遺構の底面では礫が集積された形で出土しており、中には被熱を受けている礫も確認されている。







層	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物片、焼土ブロック含む。
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック、炭化物粒子、焼土粒子含む。
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物片、焼土ブロック多く含む。



SK15 出土遺物

0　5　10cm
(S=1/3)

No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK15 2層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：沈線文(ジグザグ文？)・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・褐色(7.5YR4/3)、内面・にぶい黄褐色(10YR5/3)、法量：器厚0.6～0.7cm	A-13
2	SK15 2層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：隆帯・縄文LR、内面：磨滅のため不明、色調：外面・暗赤褐色(5YR3/3)、内面・灰褐色(5YR4/2)、法量：器厚0.9～1.3cm	A-16
3	SK15 堆積土	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：縄文LR・沈線文・盲孔、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚0.3～0.8cm	A-9
4	SK15 堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	外面：櫛歯状文、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(10YR3/2)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：器厚0.7～0.8cm	A-8
5	SK15 堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	外面：沈線文・縄文LR？、内面：磨滅のため不明、色調：外面・暗赤褐色(5YR3/3)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、法量：器厚0.5～0.6cm	A-10
6	SK15 堆積土	縄文土器	深鉢	胴部	外面：隆帯・縄文RL、内面：磨滅のため不明、色調：内外面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、法量：器厚0.9～1.1cm	A-15

第38図　SK15 土坑

【SK16 土坑】（第 39・40・42 図）

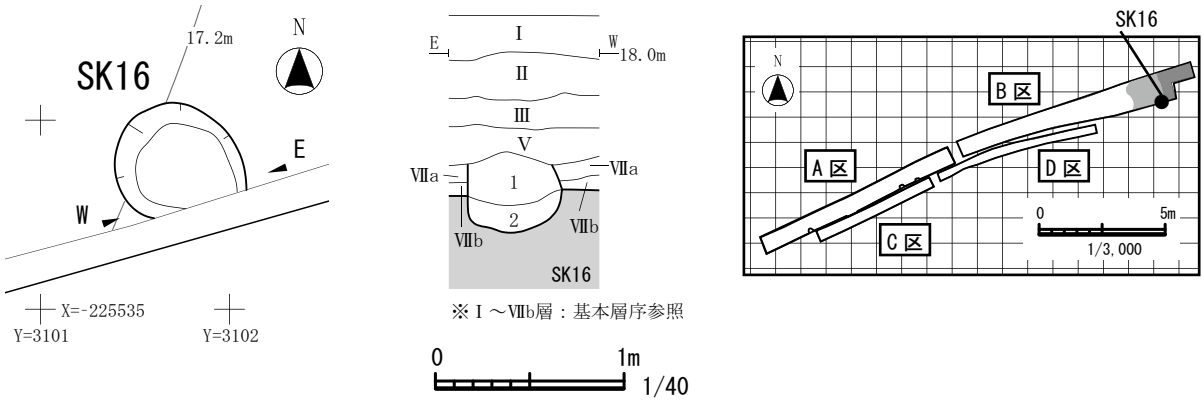
［位置］ B 区東部の標高 17.2m の平坦面で確認した。基本層Ⅴ層除去後のⅦa 層上面で検出した。

［重複］ なし。遺構の南半は調査区外に延びる。

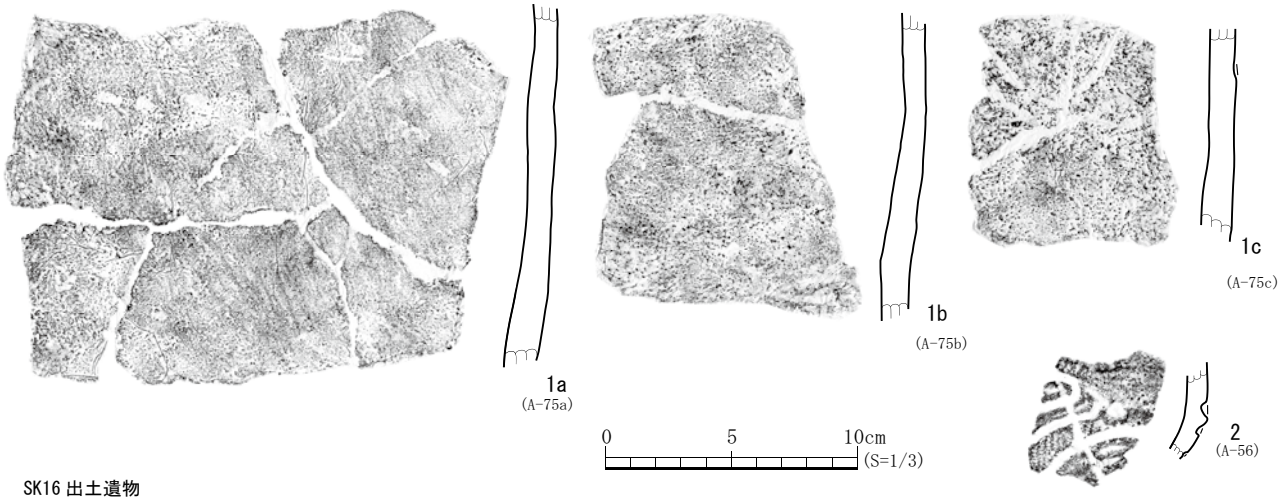
［規模・形状］ 65cm×56cm 以上の円形を呈するとみられる。深さ 44cm。底面は平坦で、断面形はＵ字形である。

［堆積土］ 2 層確認した。いずれも自然堆積層である。

［出土遺物］ 堆積土 1・2 層から縄文土器深鉢破片 45 点（1,420g）が出土した。このうち、縄文土器深鉢体部破片 4 点（第 39 図 1a～c・2）を図示した。



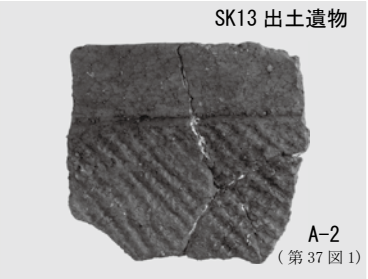
層	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック、炭化物片、焼土粒子含む。
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック含む。

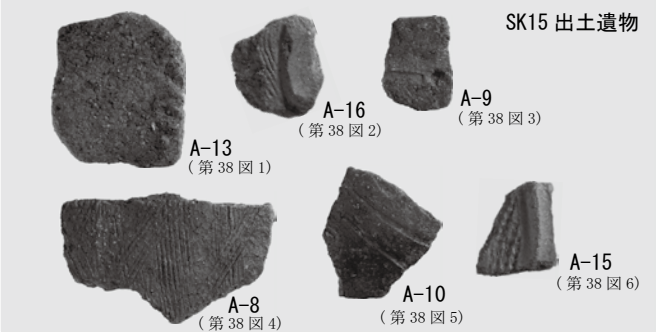


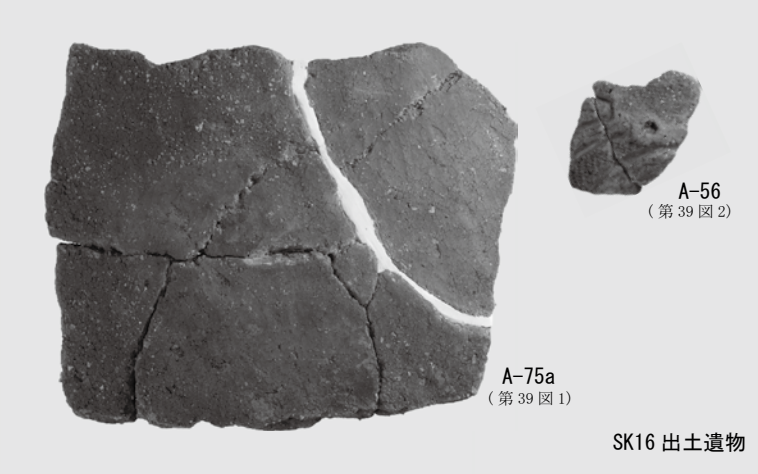
SK16 出土遺物

No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1a～1c	SK16 2層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：ミガキ、内面：ナデ、色調：外面・暗赤褐色(5YR3/3)、内面・暗赤褐色(2.5YR3/3)、法量：器厚0.9～1.3cm	A-75a～75c
2	SK16 2層上面	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR・沈線文・盲孔、内面：ナデ、色調：外面・灰黄褐色(10YR4/2)、内面・灰褐色(5YR4/2)、法量：器厚0.65～0.9cm	A-56

第39図　SK16 土坑





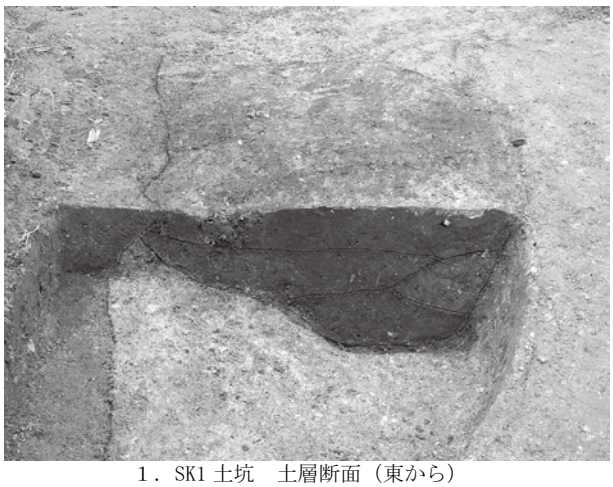


0　5　10cm
(S=1/3)

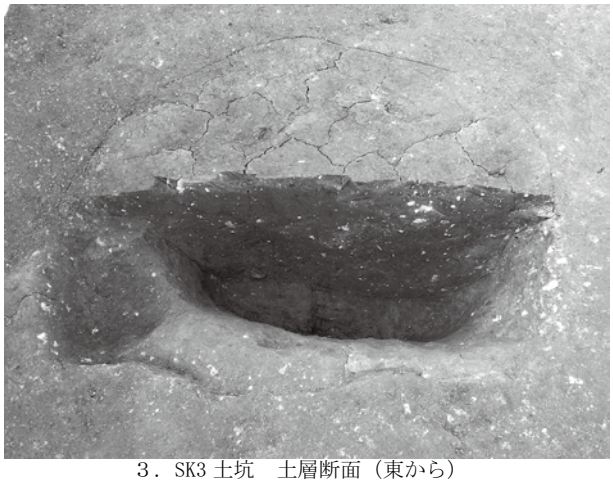
※　A：縄文土器／C：土師器

SK4 出土遺物：A-51 ～ 55・59
SK8 出土遺物：A-6・60 ～ 62
SK9 出土遺物：C-4・5
SK12 出土遺物：C-6・8・33
SK13 出土遺物：A-2
SK14 出土遺物：A-76
SK15 出土遺物：A-8 ～ 10・13・15・16
SK16 出土遺物：A-56・75a

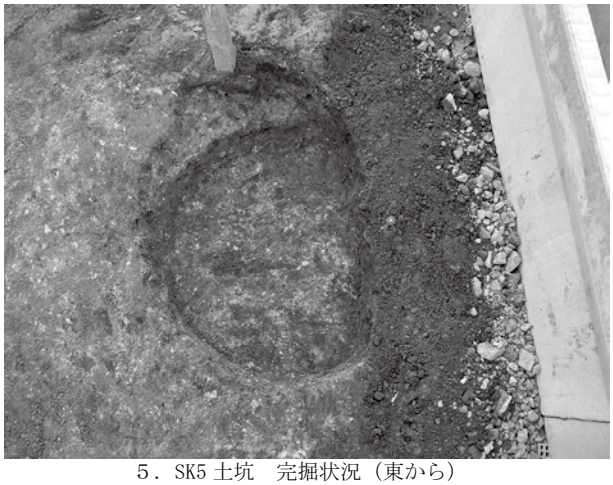
第40図　SK4・8・9・12～16 土坑出土遺物（写真図版）

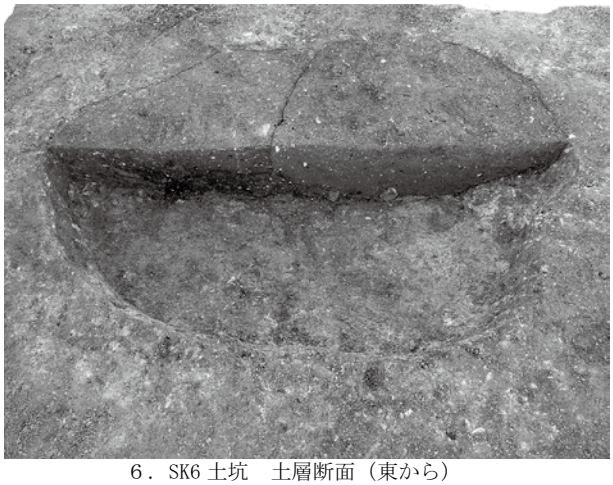

1．SK1 土坑　土層断面（東から）

2．SK2 土坑　土層断面（東から）

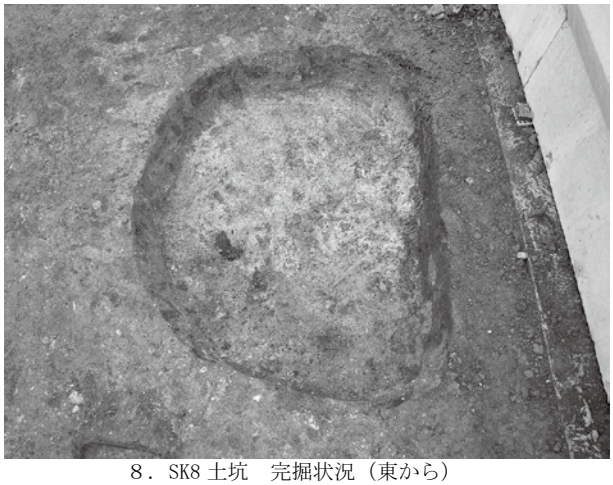

3．SK3 土坑　土層断面（東から）

4．SK4 土坑　完掘状況（南から）


5．SK5 土坑　完掘状況（東から）


6．SK6 土坑　土層断面（東から）

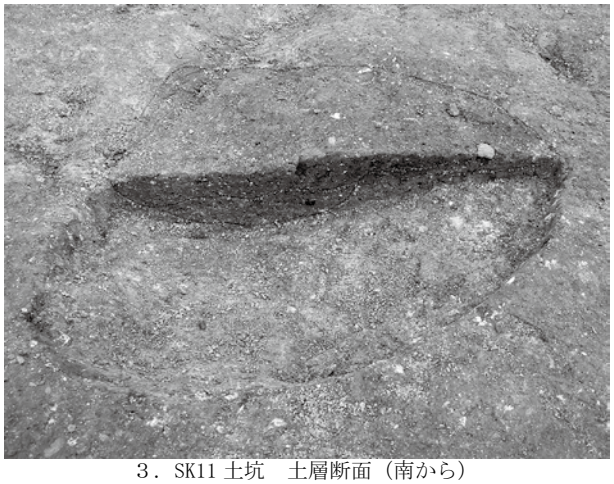
7．SK7 土坑　土層断面（東から）

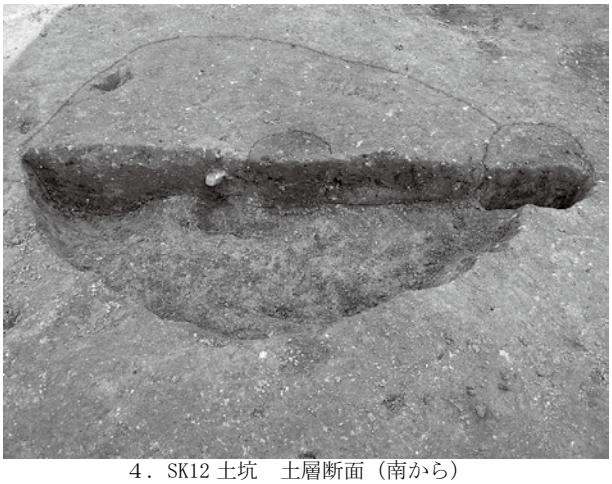

8．SK8 土坑　完掘状況（東から）

第41図　SK1～8土坑（写真図版）

1．SK9 土坑　完掘状況（北から）

2．SK10 土坑　土層断面（東から）

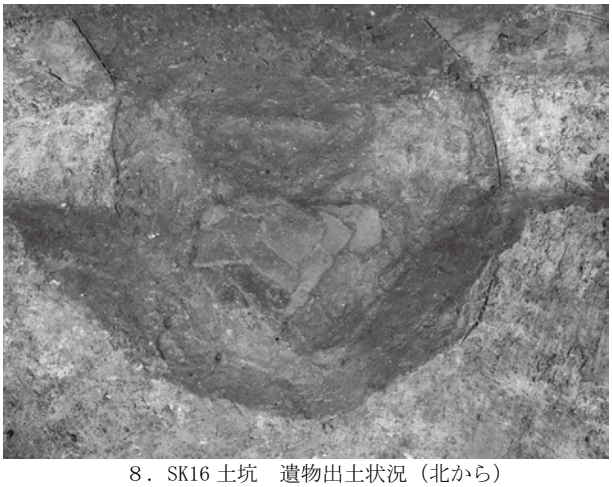

3．SK11 土坑　土層断面（南から）


4．SK12 土坑　土層断面（南から）

5．SK13 土坑　土層断面（南から）

6．SK14 土坑　完掘状況（南から）

7．SK15 土坑　完掘状況（南から）


8．SK16 土坑　遺物出土状況（北から）

第42図　SK9～16土坑（写真図版）

（３）焼成遺構

【SX1 焼成遺構】（第 43 図）

［位置］ B 区東部の標高 18.3～18.4m の平坦面で確認した。検出面はⅩb 層である。

［重複］ P122 と重複し、これより古い（SX1→P122）。

［規模・形状］ 掘方のある焼成遺構で、掘方の規模は長軸 38cm×短軸 36cm、深さ 10cm である。掘方の平面形は円形、断面形は皿状である。焼け面の範囲は 28×24cm・被熱は深さ 6cm 下まで及んでいた。

［堆積土］ 2 層確認した。1 層が掘方埋土の焼け面被熱範囲、2 層が掘方埋土（人為堆積層）である。

［出土遺物］掘方埋土から縄文土器破片 20 点（110g）、石器剥片 1 点（16g）が出土した。このうち、縄文土器深鉢口縁部破片 1 点（第 43 図 1）を図示した。

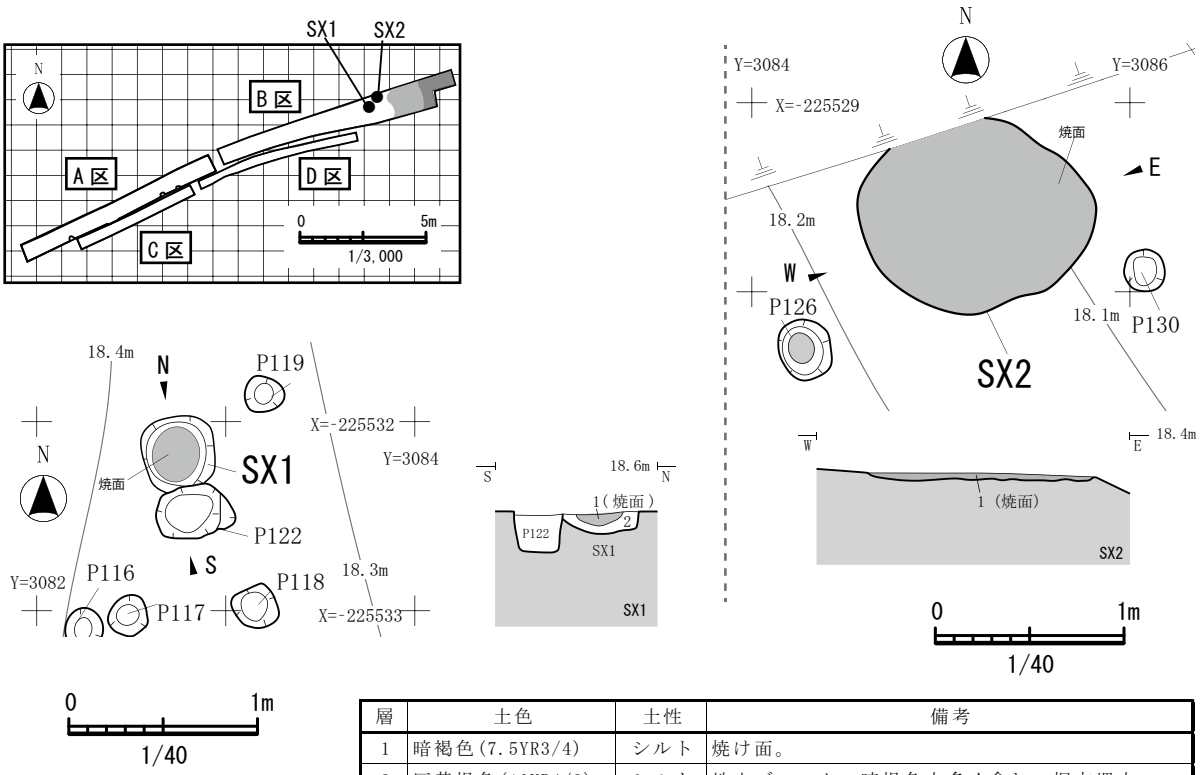
【SX2 焼成遺構】（第 43 図）

［位置］ B 区東部の標高 18.1m の平坦面で確認した。検出面はⅩb 層である。

［重複］ なし。遺構の北端部分は現在の撹乱により削平を受けており残存していない。

［規模・形状］ 焼け面の範囲は長軸 120cm×短軸 96cm 以上の楕円形を呈する。掘方は認められなかった。被熱は深さ 4cm 下まで及んでいた。

［出土遺物］焼面上面から縄文土器破片 10 点（50g）、ロクロ成形の土師器坏破片 2 点（10g）が出土した。小破片のため、図示できたものはない。



層	土色	土性	備考
1	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	焼け面。
2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック、暗褐色土多く含む。掘方埋土。
1	赤褐色(5YR4/6)	シルト	焼け面。

SX1 出土遺物

No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SX1 掘方埋土	縄文土器	深鉢	口縁部	内外面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい赤褐色(2.5YR4/3)、内面・黒褐色(7.5YR3/2)、法量：器厚0.6～0.8cm	A-3

第43図　SX1・2 焼成遺構

【SX3 焼成遺構】（第 44～46 図）

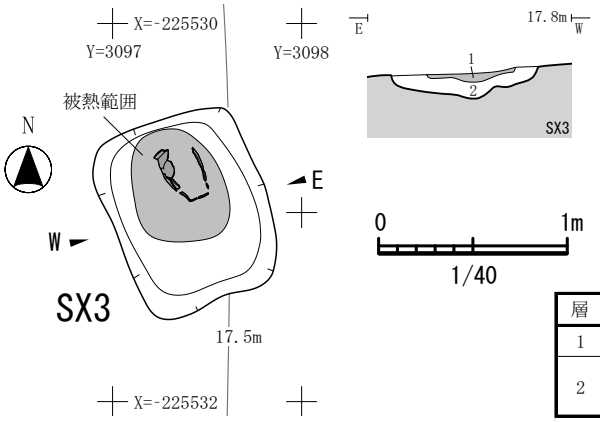
［位置］ B 区東部の標高 17.5m の平坦面で確認した。検出面はⅤ層上面である。

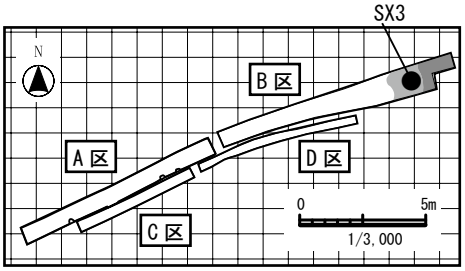
［重複］ なし。

［規模・形状］ 掘方のある焼成遺構で、掘方の規模は長軸 102cm×短軸 81cm、深さ 13cm である。掘方の平面形は隅丸長方形、断面形は不整形である。焼け面の範囲は 62×50cm・被熱は深さ 4cm 下まで及んでいた。掘方埋土内からは土師器甕が横位に据えられた状態で出土しており、甕を据えた後、焼成行為が行われたと考えられる。

［堆積土］ 2 層確認した。1 層が掘方埋土の焼け面被熱範囲、2 層が掘方埋土（人為堆積層）である。

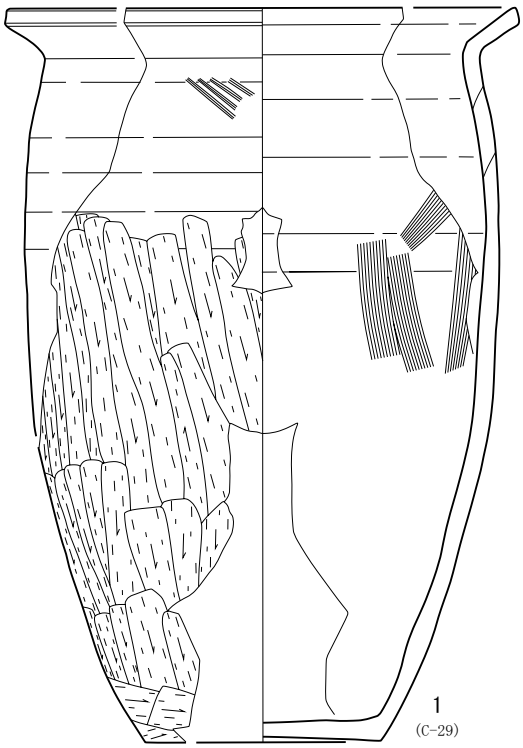
［出土遺物］ 掘方埋土から縄文土器破片 1 点（10g）、ロクロ成形の土師器坏破片 3 点（25g）・甕破片 73 点（2,160g）、須恵器坏破片 1 点（5g）が出土した。このうち、ロクロ成形の土師器甕 4 点（第 44 図 1・2a・2b、第 45 図 1・2）を図示した。

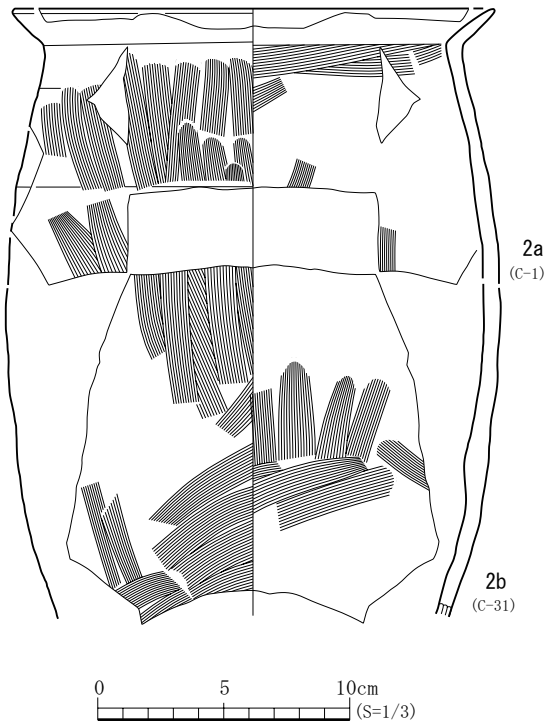




層	土色	土性	備考
1	赤褐色(5YR4/8)	シルト	焼け面。
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック、炭化物片、焼土ブロック含む。掘方埋土。

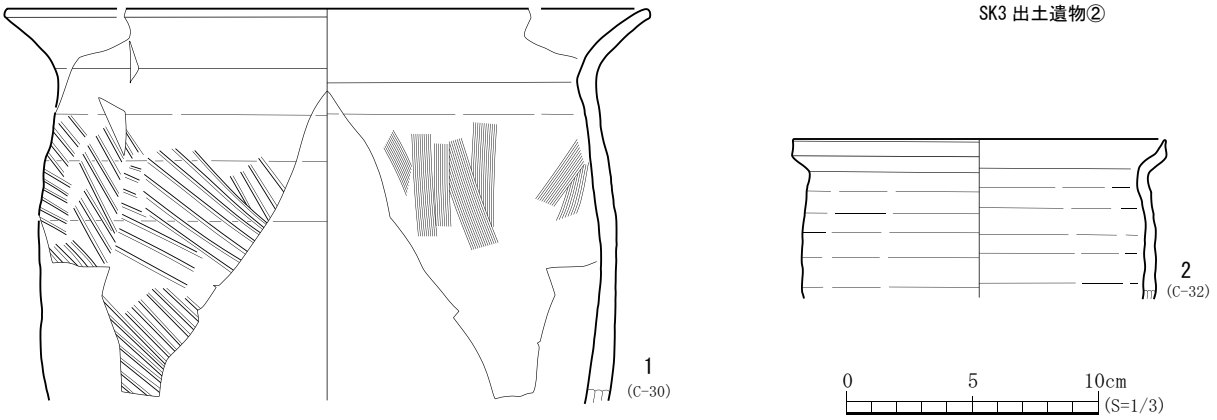
SK3 出土遺物①





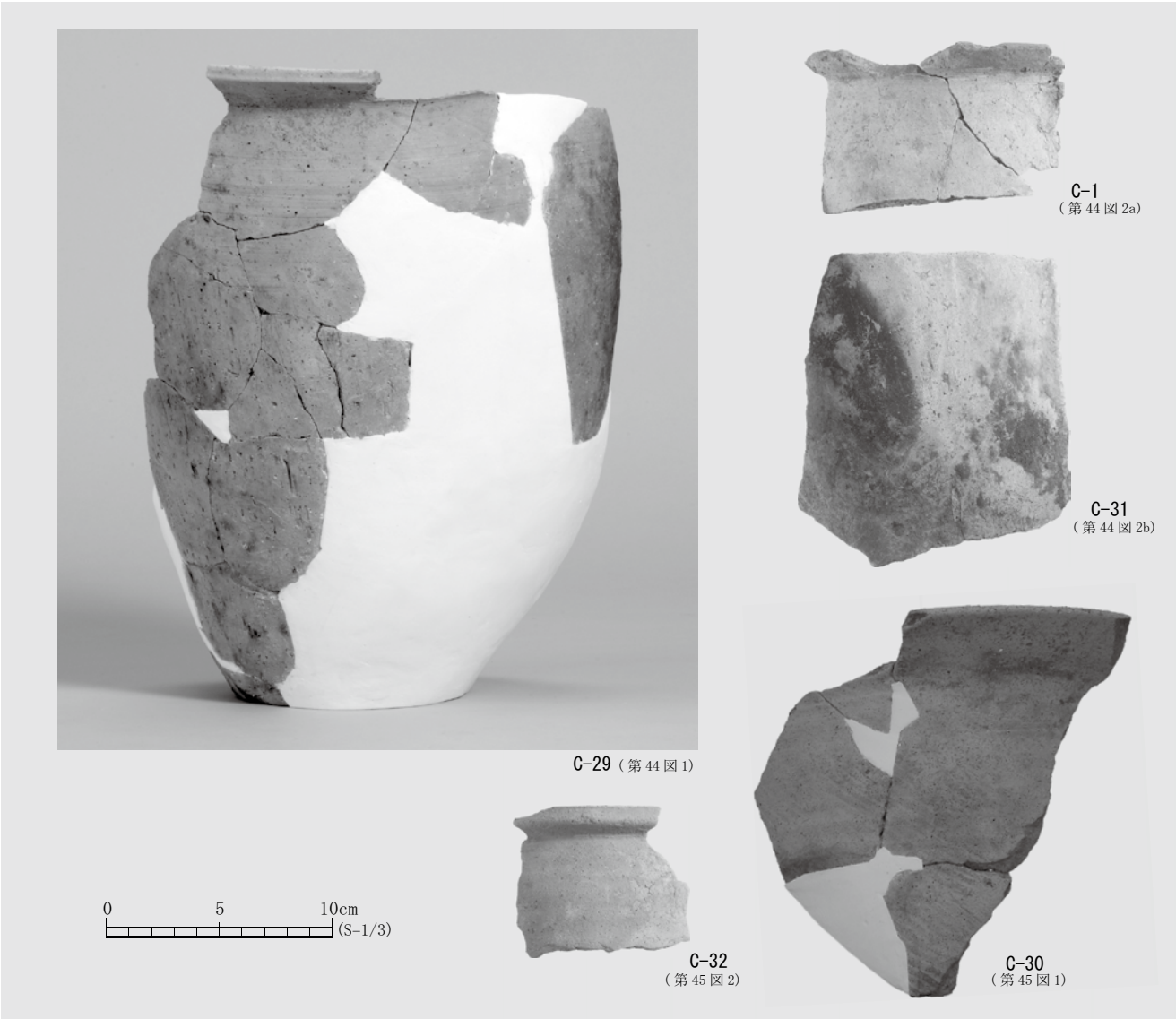
No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SX3 掘方埋土	土師器	甕	口縁部 ～底部	外面：口縁部～胴部上位ロクロナデ・胴部上位タタキ目・胴部中～下位ヘラ削り・底部手持ちヘラ削り、内面：ロクロナデ・ナデ、色調：外面・にぶい橙色(7.5YR6/4)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：口径(20.2)cm・器高29.2cm・底径9.4cm・器厚0.6～1.0cm	C-29
2a 2b	SX3 掘方埋土	土師器	甕	口縁部 ～胴部	外面：ロクロナデ・胴部上～中位ナデ・胴部下位ヘラ削り、内面：ロクロナデ・ナデ、色調：外面・にぶい黄褐色(10YR5/3)/黒褐色(2.5Y3/1)、内面・灰黄褐色(10YR4/2)/にぶい黄褐色(10YR5/3)、法量：口径(19.0)cm・残存高24.2cm・器厚0.6～1.0cm	C-1 C-31

第44図　SX3 焼成遺構（1）



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SX3 掘方埋土	土師器	甕	口縁部 ～胴部	外面：タタキ目→ロクロナデ、内面：ロクロナデ・ナデ、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR6/3)、内面・灰褐色(10YR5/2)/にぶい橙色(10YR6/4)、法量：口径(25.4)cm・残存高15.8cm・器厚0.5～0.9cm	C-30
2	SX3 掘方埋土	土師器	甕	口縁部 ～胴部	内外面：ロクロナデ、色調：外面・明赤褐色(2.5YR5/6)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、法量：口径(14.8)cm・残存高6.3cm・器厚0.3～0.4cm	C-32

第45図　SX3 焼成遺構（2）



第46図　SX3 焼成遺構（3）

３．遺物包含層（基本層出土遺物）

調査区東側の地形的に低い地点（B 区東端部）の標高 16.6～17.9m付近に堆積している基本層Ⅲ層・Ⅴ層・Ⅶ層に遺物が比較的多く含まれていたことから、この分布範囲を遺物包含層と認識し調査を行った（第 5 図、基本層の詳細は第Ⅲ章第 3 節を参照）。調査にあたっては、遺物包含層と認識された範囲にサブトレンチを設定し、土層断面で包含層の基本層序を確認した後、各層ごとに掘削を行い、遺物の取り上げを行った。

基本層Ⅲ層では縄文土器・土師器（ロクロ成形）・須恵器・中世陶器・石器・鉄滓、**基本層Ⅴ層**では縄文土器・土師器（非ロクロ成形・ロクロ成形）・須恵器・石器、**基本層Ⅶ層**では縄文土器・石器が出土した（第 10 表）。出土した遺物は、ほとんどが破片資料で、その出土状況から、遺構が多数確認された B 区などの標高の高い地点から流入または遺棄され堆積したものと考えられる。出土遺物の特徴から、基本層Ⅶ層が縄文時代、基本層Ⅴ層が古代前後、基本層Ⅲ層が中世以降に堆積した層と判断される。基本層Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ層から出土した遺物のほとんどは破片資料で、その出土状況から、遺構が多数確認された B 区東半の標高の高い地点から流入または遺棄され堆積したものと考えられる。

この他、砂礫層である**基本層ⅣA 層**で須恵器、**基本層ⅥA 層**で縄文土器（第 53 図 1・2）・石器が少量出土している（第 10 表）。基本層ⅣA 層・ⅥA 層で出土した土器の器面は非常に磨滅しているものが多い。基本層ⅣA 層・ⅥA 層は、遺跡の南を流れる山寺川の氾濫により堆積した砂礫層を考えられ、これらの遺物は河川の氾濫により周囲から流入したものと考えられる。基本層ⅣA 層・ⅥA 層の年代は、出土遺物・基本層序の関係から、ⅣA 層が古代以降・中世以前、ⅥA 層が縄文時代以降の堆積層と考えられる。

以下、遺物が多く出土した基本層Ⅲ層・Ⅴ層・Ⅶ層の遺物について概要を提示する（それぞれの遺物の特徴や年代等については第Ⅳ章第 1 節を参照）。

第10表　谷原遺跡1次調査　基本層出土遺物一覧

層位	縄文土器		土師器				須恵器						中世陶器			石器							鉄滓	基本層層位別合計
	深鉢・鉢	袖珍土器	坏	高台付坏	甕	不明	坏	高台付坏	蓋	鉢	壺瓶類	甕	鉢	壺	甕	石匙	楔形石器	不定形石器	片刃石斧	磨製石斧	石核	剥片		
基本層Ⅲ層	56 (680)		80 (200)		70 (565)						2 (35)	1 (80)	1 (30)	1 (205)	2 (165)	1 (4)						3 (63.7)	1 (25)	218 (2052.7)
基本層ⅣA1層												1 (50)												1 (50)
基本層Ⅴ層	622 (7535)	1 (55)	72 (1040)	2 (60)	206 (2620)	1 (15)	20 (625)	4 (70)	2 (170)	1 (55)	2 (825)	40 (1330)					1 (2.5)	1 (6)		1 (49)		22 (434.8)		998 (14892.3)
基本層ⅥA1層	35 (430)																					1 (5.1)		36 (435.1)
基本層ⅣA2層	2 (50)																							2 (50)
基本層Ⅶa層	452 (7315)																1 (8.7)	1 (5)	1 (159.9)		1 (265)	11 (455.6)		467 (8209.2)
基本層Ⅶb層	138 (1885)																					2 (12.9)		140 (1897.9)
種別合計	1305 (17895)	1 (55)	152 (1240)	2 (60)	276 (3185)	1 (15)	20 (625)	4 (70)	2 (170)	1 (55)	4 (860)	42 (1460)	1 (30)	1 (205)	2 (165)	1 (4)	2 (11.2)	2 (11)	1 (159.9)	1 (49)	1 (265)	39 (972.1)	1 (25)	1862 (27587.2)

※（　）内の数値は遺物の乾燥重量(g)を示す　　↑総計

（１）基本層Ⅲ層出土遺物（第 47・59 図）

基本層Ⅲ層から出土した遺物の総数は 218 点（2,052.7g）で、その内訳は縄文土器 56 点（680g）、土師器 150 点（765g）、須恵器 3 点（115g）、中世陶器 4 点（400g）、石器 4 点（67.7g）、鉄滓 1 点（25g）である（第 10 表）。Ⅲ層出土遺物のうち、図示できたのは、土師器 2 点、陶器 4 点、石器 1 点である。

［石器］（第 47 図）

石器は、石匙・剥片が出土した。このうち、石匙（第 47 図 7）を図示した。

［土師器］（第 47 図）

土師器は、ロクロ成形の坏・甕が出土した。このうち、ロクロ成形の土師器甕（第 47 図 1・2）を図示した。坏類については、小破片のため図示できるものがないが、内面黒色処理を施したものと赤焼土器の両者が出土した。

［須恵器］

須恵器は、壺・甕が出土した。小破片のため図示できたものはない。

［中世陶器］（第 47 図）

陶器は、鉢・壺・甕が出土し、すべて図示した（第 47 図 3～6）。このうち、第 47 図 4 の甕と第 47 図 5 の壺については白石窯産、第 47 図 3 の鉢と第 47 図 6 の甕は在地産のものとみられる。

（２）基本層Ⅴ層出土遺物（第 48～52・59～61 図）

基本層Ⅴ層から出土した遺物の総数は 998 点（14,892.3g）で、その内訳は縄文土器 623 点（7,590g）、土師器 281 点（3,735g）、須恵器 69 点（3,075g）、石器 25 点（492.3g）である（第 10 表）。Ⅴ層出土遺物のうち、図示できたのは、縄文土器 26 点、石器 4 点、土師器 19 点、須恵器 16 点である。

［縄文土器］（第 48・49 図）

縄文土器は深鉢・袖珍土器が出土した。出土した土器は、文様の特徴から、縄文時代中期末葉～後期前葉の土器が主体である。このうち、図示できたものは、深鉢口縁部破片（第 48 図 1～7）・胴部破片（第 48 図 8～18、第 49 図 1～6）・底部破片（第 49 図 7）、袖珍土器底部破片（第 49 図 8）である。

［石器］（第 49 図）

石器は、楔形石器・不定形石器・磨製石斧・剥片が出土した。このうち、楔形石器（第 49 図 9）・不定形石器（第 49 図 10）・磨製石斧（第 49 図 12）・剥片（第 49 図 11）を図示した。

［土師器］（第 50・51 図）

土師器は、坏・高台付坏・甕・器種不明品が出土した。このうち、非ロクロ成形の土師器坏（第 50 図 1）・甕（第 51 図 1・6）、ロクロ成形の内黒処理を施した土師器坏（第 50 図 2～7・9・11～13）・赤焼土器坏（第 50 図 8・10）・甕（第 51 図 2～5）を図示した。

［須恵器］（第 51・52 図）

須恵器は、坏・高台付坏・蓋・鉢・瓶類・壺・甕が出土した。このうち、坏（第 51 図 7～12）・高台付坏（第 52 図 1・2）・蓋（第 52 図 3）・鉢（第 52 図 4）・瓶類（第 52 図 5）・壺（第 52 図 6）・甕（第 52 図 7～10）を図示した。

（３）基本層Ⅶ層出土遺物（第 54～58・61・62 図）

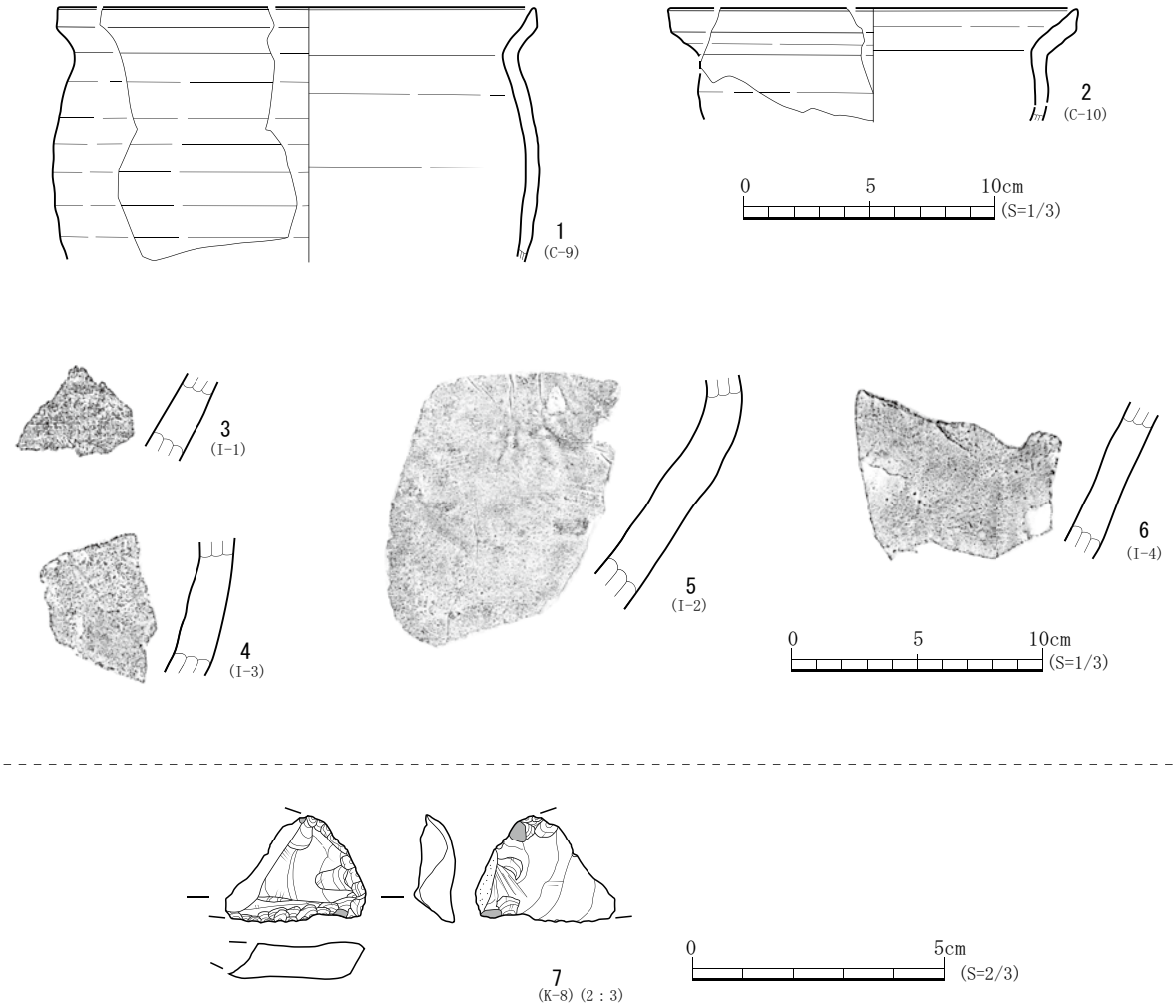
基本層Ⅶ層は、土色と混入物の違いによりさらにⅦa 層とⅦb 層に細別され（詳細については第Ⅲ章第 3 節を参照）、このうち、縄文時代の遺物は基本層Ⅶa 層に多く含まれていた。基本層Ⅶ層から出土した遺物の総数は 607 点（10,107.1g）で、その内訳は土器類 590 点（9,200g）、石器類 17 点（907.1g）である（第 10 表）。出土した土器は、破片資料がほとんどで、器面が磨滅しているものが多い。Ⅶ層出土遺物のうち、図示できたのは、縄文土器 49 点、石器 5 点である。

［縄文土器］（第 54～56 図）

縄文土器は深鉢が出土した。出土した土器は、文様の特徴から、縄文時代中期末葉～後期前葉の土器が主体である。このうち、図示できたものは、深鉢口縁部破片（第 54 図 1～9、第 55 図 1～5、第 58 図 1～3）、深鉢胴部破片（第 55 図 6～17、第 56 図 1～9、第 58 図 4～10）、深鉢底部破片（第 56 図 10～12、第 58 図 11）である。

［石器］（第 57 図）

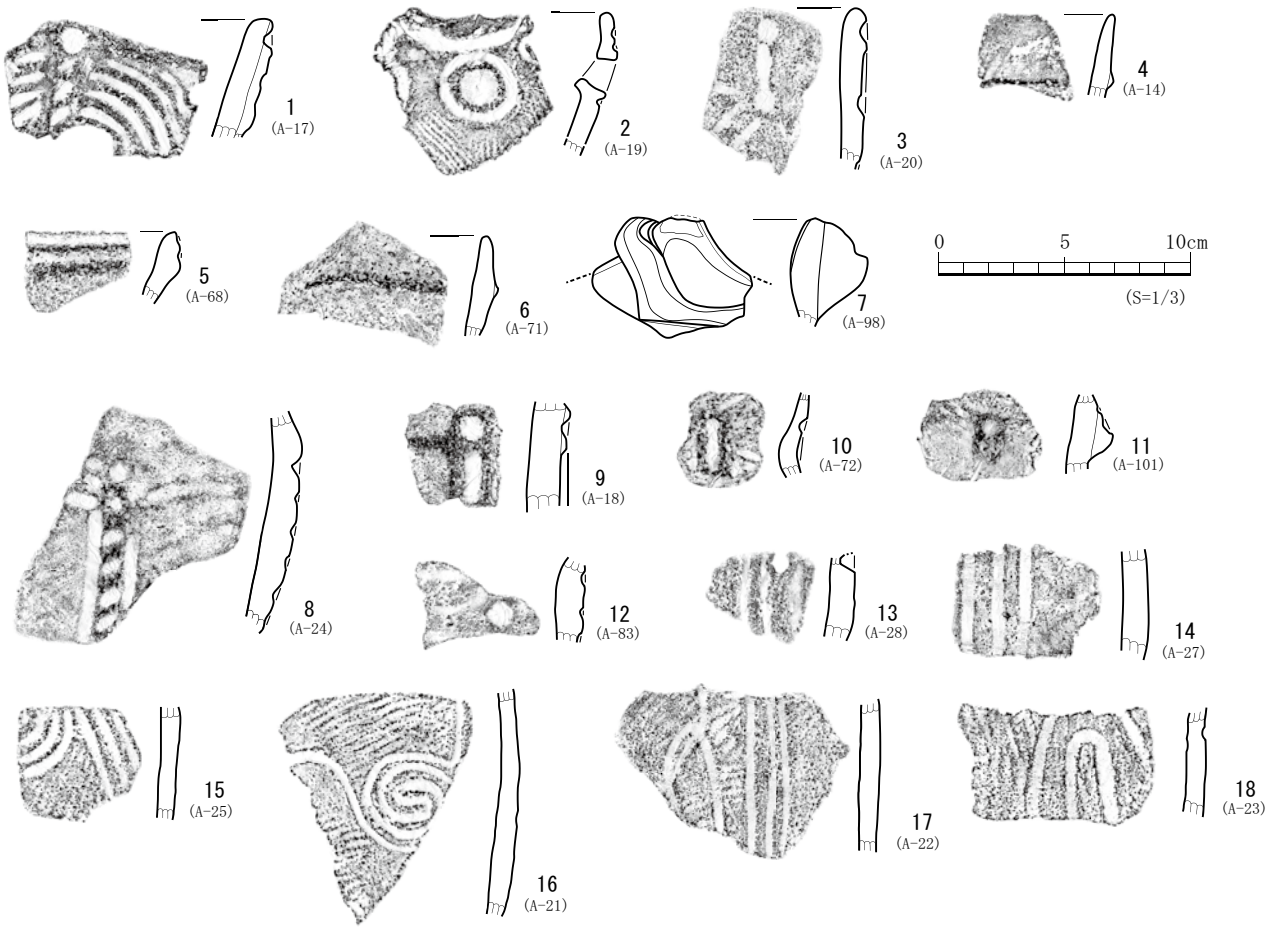
石器は、楔形石器・不定形石器・扁平片刃石斧・石核・剥片が出土した。このうち、楔形石器（第 57 図 1）・不定形石器（第 57 図 2）・石核（第 57 図 3）・扁平片刃石斧（第 57 図 4）・剥片（第 57 図 5）を図示した。



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	基本層Ⅲ層	土師器	甕	口縁部～胴部	内外面：ロクロナデ、色調：外面・赤褐色(5YR5/6)、内面・にぶい赤褐色(7.5YR4/3)、法量：口径(19.9)cm・残存高10.2cm・器厚0.4～0.6cm	C-9
2	基本層Ⅲ層	土師器	甕	口縁部～胴部	内外面：ロクロナデ、色調：外面・褐色(7.5YR4/3)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：口径(16.2)cm・残存高4.4cm・器厚0.4～0.6cm	C-10
3	基本層Ⅲ層	中世陶器	鉢	胴部	内外面：ナデ、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR5/3)、内面・にぶい赤褐色(2.5YR5/4)、法量：器厚1.2～1.45cm、産地：在地	I-1
4	基本層Ⅲ層	中世陶器	甕	胴部	内外面：ナデ、色調：内外面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚1.3～1.6cm、産地：白石窯	I-3
5	基本層Ⅲ層	中世陶器	壺？	胴部	外面：ナデ、内面：ナデ・オサエ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・黒褐色(10YR3/1)/褐灰色(10YR4/1)、法量：器厚1.3～1.8cm、産地：白石窯	I-2
6	基本層Ⅲ層	中世陶器	甕	胴部	外面：ケズリ・ナデ、内面：ナデ、色調：外面・暗赤灰色(10R4/1)/赤灰色(2.5YR4/1)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚1.2～1.4cm、産地：在地	I-4

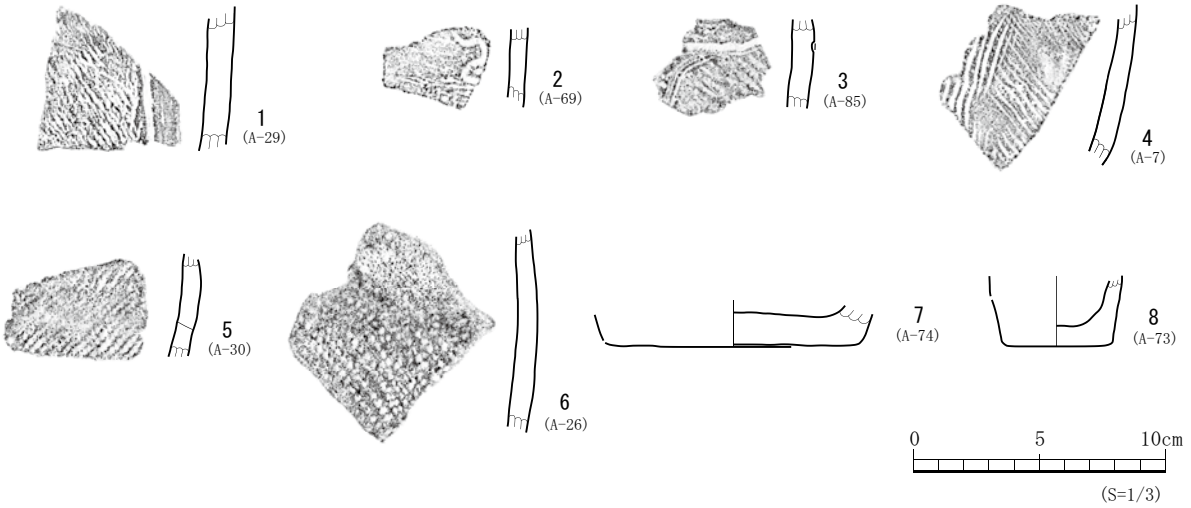
No.	層	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	登録
7	基本層Ⅲ層	石匙	珪質頁岩	2.15	2.8	0.8	4.0		K-8

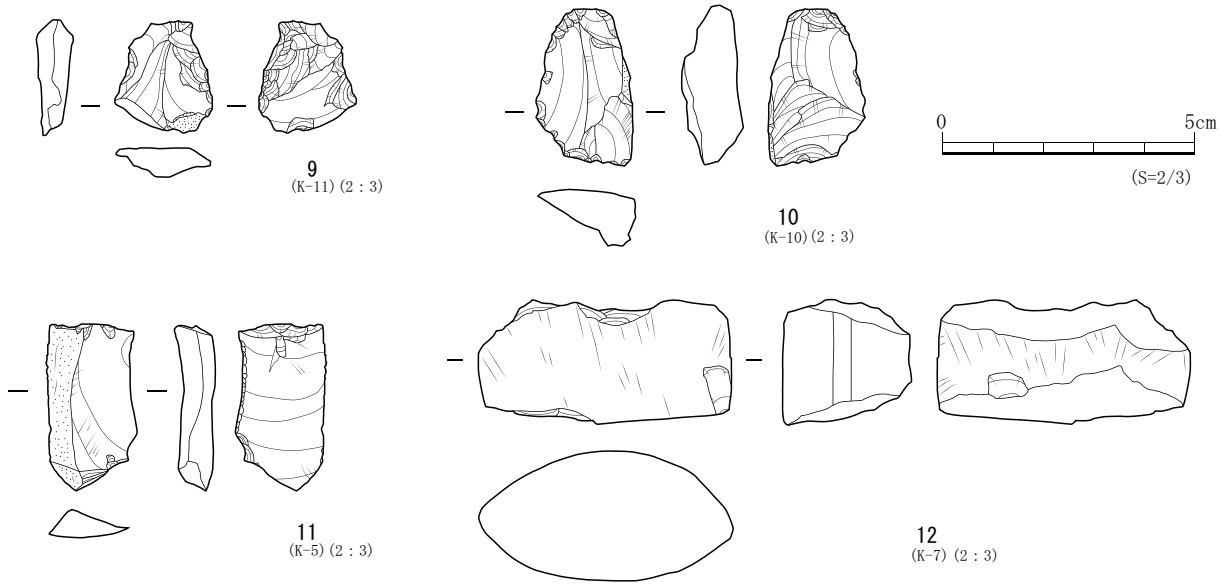
第47図　基本層Ⅲ層出土遺物



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：隆帯＋盲孔＋刻み・沈線文・盲孔、内面：ナデ、色調：外面・にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面・褐色(7.5YR4/4)、法量：器厚0.8～1.3cm	A-17
2	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢？	口縁部	外面：沈線文・縄文LR・貫通孔、内面：ナデ、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、内面・暗赤褐色(5YR3/3)、法量：器厚0.5～1.2cm	A-19
3	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：沈線文・盲孔・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・黒褐色(10YR3/2)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/4)、法量：器厚0.7～0.9cm	A-20
4	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：隆帯・縄文？、内面：ナデ、色調：内外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、法量：器厚0.5～0.9cm	A-14
5	基本層Ⅴ層	縄文土器	浅鉢	口縁部	外面：沈線文・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・赤褐色(10R4/4)、内面・暗赤褐色(5YR3/3)、法量：器厚0.6～1.0cm	A-68
6	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：隆帯・縄文RL・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：器厚0.6～1.0cm	A-71
7	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：隆帯、内面：磨滅のため不明、色調：内外面・にぶい黄褐色(10YR5/3)、法量：器厚0.7～2.9cm	A-98
8	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：隆帯＋刺突文・縄文RL・沈線文・盲孔・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/4)、法量：器厚0.9～1.1cm	A-24
9	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	頸部	外面：隆帯・盲孔・沈線文、内面：磨滅のため不明、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：器厚1.3～1.5cm	A-18
10	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	頸部	外面：隆帯＋沈線文＋盲孔・沈線文・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・暗褐色(7.5YR3/4)、内面・黒褐色(7.5YR3/1)、法量：器厚0.35～0.7cm	A-72
11	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	頸部	外面：隆帯＋盲孔・沈線文・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・暗赤褐色(5YR3/4)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/4)、法量：器厚0.9～1.6cm	A-101
12	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	頸部	外面：沈線文・盲孔、内面：ナデ、色調：外面・にぶい赤褐色(2.5YR4/4)、内面・にぶい赤褐色(2.5YR4/3)、法量：器厚0.9～1.1cm	A-83
13	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：沈線文・盲孔・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・黒褐色(2.5Y3/1)、内面・にぶい黄褐色(10YR5/3)、法量：器厚0.35～0.9cm	A-28
14	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR・沈線文、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(10YR3/2)、内面・暗赤褐色(5YR3/3)、法量：器厚0.9～1.0cm	A-27
15	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：沈線文・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・暗赤褐色(2.5YR3/3)、内面・黒色(N2/0)、法量：器厚0.6～0.7cm	A-25
16	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR・沈線文(渦巻状)、内面：ナデ、色調：外面・暗赤褐色(5YR3/3)、内面・黒褐色(7.5YR3/2)、法量：器厚0.6～0.8cm	A-21
17	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR・沈線文・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、内面・黒褐色(7.5YR3/1)、法量：器厚0.6cm	A-22
18	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文RL・沈線文・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/2)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：器厚0.5～0.7cm	A-23

第48図　基本層Ⅴ層出土遺物（1）

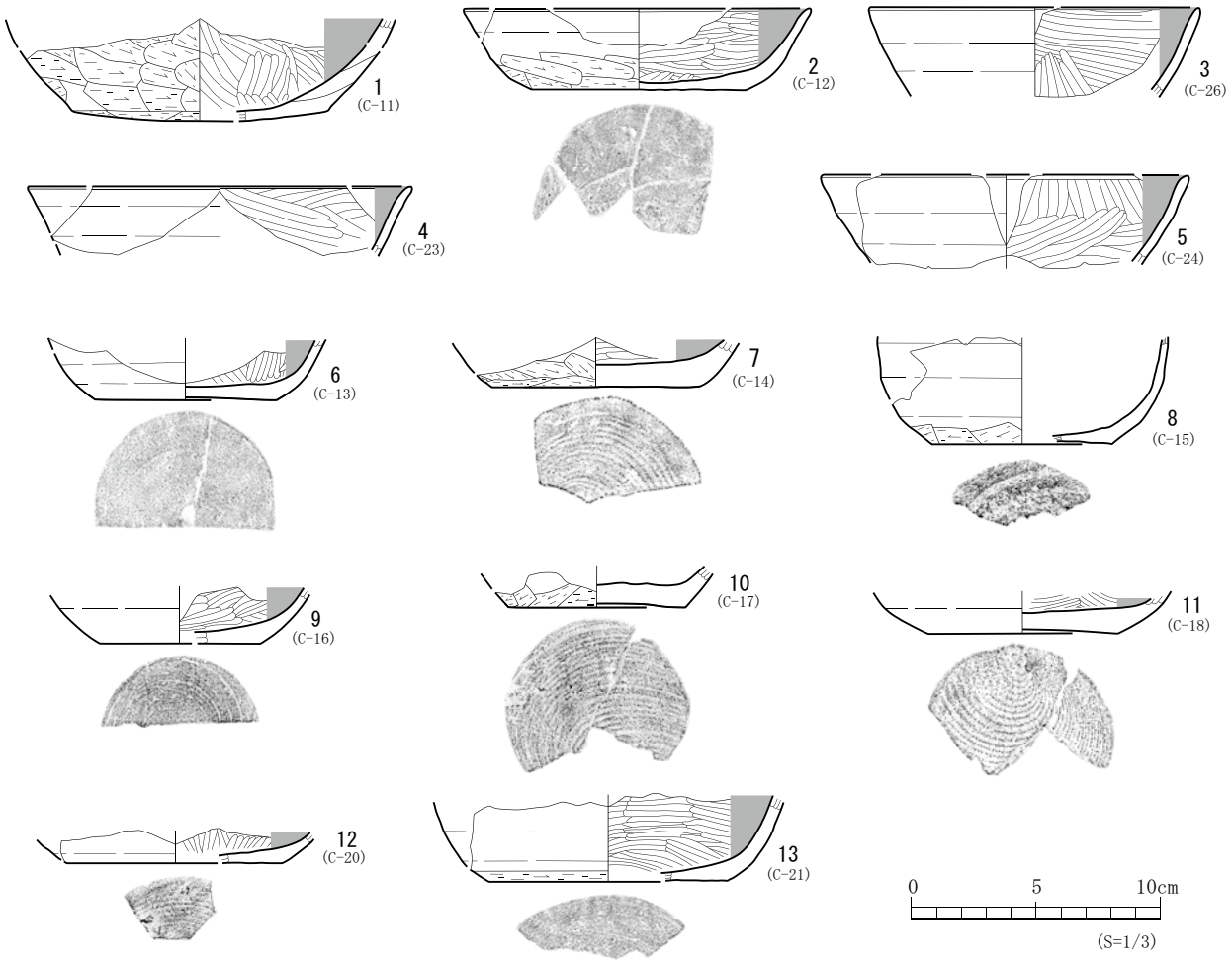




No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：撚糸文L・沈線文、内面：ミガキ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・にぶい赤褐色(5YR5/4)、法量：器厚0.9～1.2cm	A-29
2	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：撚糸文R？・沈線文(ジグザグ文？)、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)、内面・にぶい赤褐色(5YR5/4)、法量：器厚0.6～0.7cm	A-69
3	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文RL・沈線文、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/4)、法量：器厚0.8～0.9cm	A-85
4	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：撚糸文R、内面：ナデ、色調：外面・赤黒色(2.5YR2/1)/灰褐色(7.5YR4/2)、内面・灰黄褐色(10YR4/2)、法量：器厚0.7～0.8cm	A-7
5	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR、内面：ナデ、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・にぶい黄褐色(10YR5/4)、法量：器厚0.6～0.8cm	A-30
6	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文RL・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・黒色(N2/0)、内面・にぶい黄褐色(10YR4/3)、法量：器厚0.6～0.8cm	A-26
7	基本層Ⅴ層	縄文土器	深鉢	底部	内外面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい赤褐色(2.5YR4/4)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/4)、法量：底径10.2cm・残存高1.7cm・器厚1.1～1.3cm	A-74
8	基本層Ⅴ層	縄文土器	袖珍土器	底部	内外面：ナデ、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、内面・暗赤褐色(5YR3/2)、法量：底径4.0cm・残存高3.8cm・器厚0.8～1.3cm	A-73

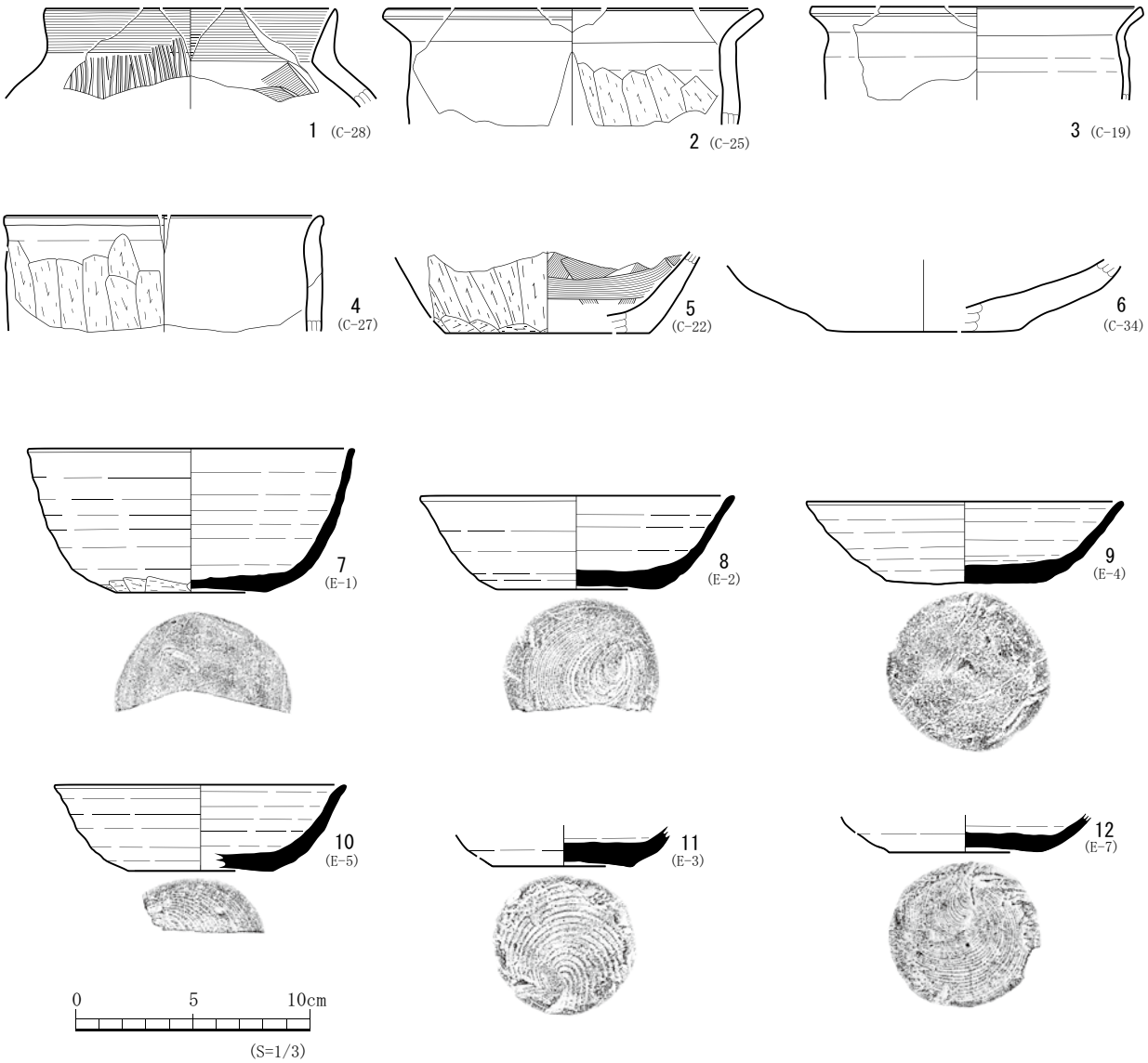
No.	層	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	登録
9	基本層Ⅴ層	楔形石器	珪質凝灰岩	2.25	1.9	0.7	2.5		K-11
10	基本層Ⅴ層	不定形石器	頁岩	3.1	1.95	1.2	6.0		K-10
11	基本層Ⅴ層	使用痕剥片	珪質頁岩	3.35	1.8	0.8	4.3		K-5
12	基本層Ⅴ層	磨製石斧？	泥岩	2.5	5.0	2.55	49.0		K-7

第49図　基本層Ⅴ層出土遺物（2）



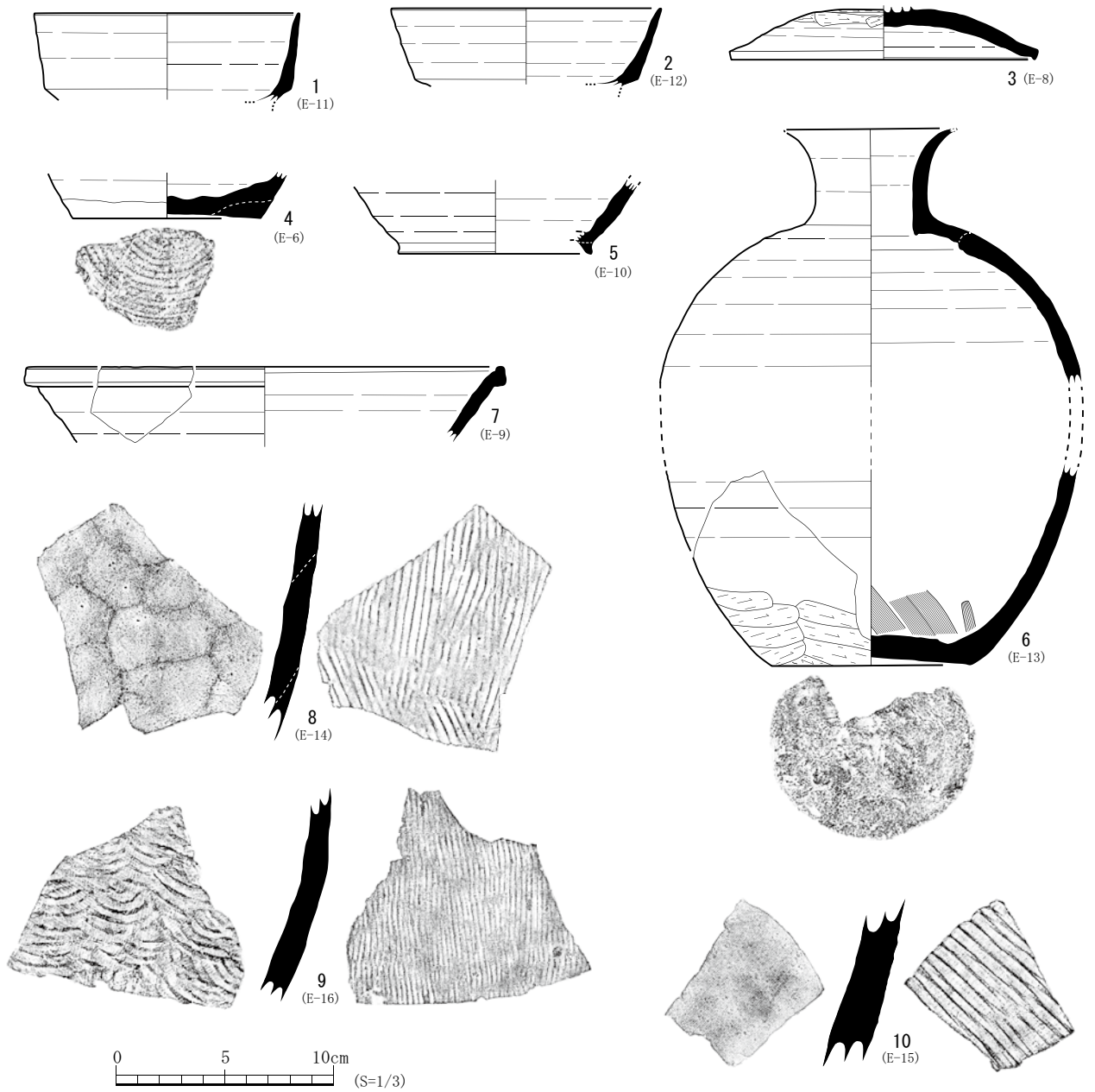
No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	基本層Ⅴ層	土師器	坏	胴部 ～底部	外面：ヘラ削り、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・暗灰色(N3/0)、法量：残存高4.1cm・器厚0.4～1.0cm	C-11
2	基本層Ⅴ層	土師器	坏	口縁部 ～底部	外面：ロクロナデ・胴部下端手持ちヘラ削り・底部切り離し技法不明→手持ちヘラ削り再調整、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・黄灰色(2.5Y4/1)、内面・黒色(N2/0)、法量：口径(14.0)cm・器高3.3cm・底径(8.6)cm・器厚0.3～0.7cm	C-12
3	基本層Ⅴ層	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・にぶい黄橙色(10YR6/3)、内面・暗灰色(N3/0)、法量：口径(13.2)cm・残存高3.7cm・器厚0.4～0.5cm	C-26
4	基本層Ⅴ層	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・黄褐色(2.5Y5/3)/暗灰色(N3/0)、内面・暗灰色(N3/0)、法量：口径(15.4)cm・残存高2.8cm・器厚0.3～0.4cm	C-23
5	基本層Ⅴ層	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・暗灰色(N3/0)、法量：口径(14.8)cm・残存高3.8cm・器厚0.3～0.4cm	C-24
6	基本層Ⅴ層	土師器	坏	胴部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)、内面・暗灰色(N3/0)、法量：底径(7.2)cm・残存高2.5cm・器厚0.4～0.7cm	C-13
7	基本層Ⅴ層	土師器	坏	胴部 ～底部	外面：ロクロナデ・胴部下端手持ちヘラ削り・底部回転糸切り無調整、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：底径(8.4)cm・残存高2.0cm・器厚0.8～1.2cm	C-14
8	基本層Ⅴ層	土師器	坏	胴部 ～底部	外面：ロクロナデ・胴部下端手持ちヘラ削り・底部回転糸切り無調整、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい橙色(7.5YR6/4)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：底径(7.2)cm・残存高4.3cm・器厚0.3～0.7cm、赤焼土器	C-15
9	基本層Ⅴ層	土師器	坏	胴部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・灰黄褐色(10YR5/2)/暗灰色(N3/0)、内面・黒色(N2/0)、法量：底径(6.4)cm・残存高2.2cm・器厚0.3～0.8cm	C-16
10	基本層Ⅴ層	土師器	坏	胴部 ～底部	外面：ロクロナデ・胴部下端ヘラ削り・底部回転糸切り無調整、内面：ロクロナデ、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR5/4)、内面・赤褐色(5YR4/6)、法量：底径7.2cm・残存高2.2cm・器厚0.6～1.0cm、赤焼土器	C-17
11	基本層Ⅴ層	土師器	坏	胴部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部回転糸切り無調整、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR5/4)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：底径(7.6)cm・残存高1.7cm・器厚0.5～1.0cm	C-18
12	基本層Ⅴ層	土師器	坏	胴部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部回転糸切り無調整、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)/黄灰色(2.5Y4/1)、内面・暗灰色(N3/0)、法量：底径(8.6)cm・残存高1.3cm・器厚0.3～0.6cm	C-20
13	基本層Ⅴ層	土師器	坏	胴部 ～底部	外面：ロクロナデ・胴部下端回転ヘラ削り・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・黒褐色(10YR3/2)、内面・黒色(N2/0)、法量：底径(9.6)cm・残存高3.5cm・器厚0.3～0.8cm	C-21

第50図　基本層Ⅴ層出土遺物（3）



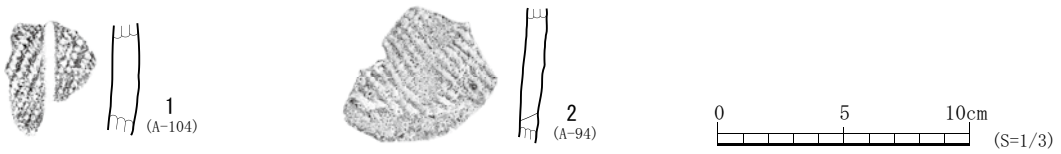
No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	基本層Ⅴ層	土師器	甕	口縁部～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・頸部～胴部ハケメ、内面：口縁部ヨコナデ・頸部～胴部ヘラナデ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)/にぶい褐色(7.5YR5/3)、内面・にぶい黄褐色(10YR5/3)、法量：器厚0.5～1.0cm	C-28
2	基本層Ⅴ層	土師器	甕	口縁部～胴部	外面：ロクロナデ・磨滅、内面：ロクロナデ・ケズリ、色調：外面・にぶい黄橙色(10YR6/3)、内面・にぶい黄褐色(10YR5/3)、法量：口径(15.8)cm・残存高5.0cm・器厚0.6～0.7cm	C-25
3	基本層Ⅴ層	土師器	甕	口縁部～胴部	内外面：ロクロナデ、色調：外面・褐灰色(7.5YR4/1)、内面・黒褐色(10YR3/1)、法量：口径(14.0)cm・残存高4.0cm・器厚0.3～0.4cm	C-19
4	基本層Ⅴ層	土師器	甕	口縁部～胴部	外面：ロクロナデ・胴部ヘラ削り、内面：ナデ？・磨滅、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR5/3)、内面・黒褐色(7.5YR3/1)、法量：口径(13.4)cm・残存高5.0cm・器厚0.4～0.75cm	C-27
5	基本層Ⅴ層	土師器	甕	胴部～底部	外面：胴部ヘラ削り・底部手持ちヘラ削り、内面：ヘラナデ、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：底径(8.8)cm・残存高3.5cm・器厚0.5～1.2cm	C-22
6	基本層Ⅴ層	土師器	甕	胴部～底部	内外面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR5/4)、内面・暗灰色(N3/0)、法量：底径(8.4)cm・残存高3.1cm・器厚1.0～1.6cm	C-34
7	基本層Ⅴ層	須恵器	坏	口縁部～底部	外面：ロクロナデ・胴部下端手持ちヘラ削り・底部切り離し技法不明→手持ちヘラ削り再調整、内面：ロクロナデ、色調：外面・褐灰色(7.5YR5/1)、内面・灰色(N4/0)、法量：口径(13.9)cm・器高6.1cm・底径(6.3)cm・器厚0.3～0.7cm	E-1
8	基本層Ⅴ層	須恵器	坏	口縁部～底部	外面：ロクロナデ・底部回転糸切り無調整、内面：ロクロナデ、色調：内外面・灰色(5Y4/1)、法量：口径(13.3)cm・器高4.0cm・底径(6.6)cm・器厚0.3～0.9cm	E-2
9	基本層Ⅴ層	須恵器	坏	口縁部～底部	外面：ロクロナデ・底部回転ヘラ切り→手持ちヘラ削り再調整、内面：ロクロナデ、色調：外面・灰色(5Y4/1)、内面・褐灰色(10YR4/1)、法量：口径13.4cm・器高3.5cm・底径6.8cm・器厚0.3～0.8cm	E-4
10	基本層Ⅴ層	須恵器	坏	口縁部～底部	外面：ロクロナデ・底部回転糸切り無調整、内面：ロクロナデ、色調：外面・灰色(N4/0)、内面・褐灰色(10YR4/1)、法量：口径(12.4)cm・器高3.7cm・底径(6.2)cm・器厚0.4～0.8cm	E-5
11	基本層Ⅴ層	須恵器	坏	胴部～底部	外面：ロクロナデ・底部回転糸切り無調整、内面：ロクロナデ、色調：外面・灰黄褐色(10YR6/2)、内面・黄灰色(2.5Y6/1)、法量：底径6.0cm・残存高1.8cm・器厚0.4～0.8cm	E-3
12	基本層Ⅴ層	須恵器	坏	胴部～底部	外面：ロクロナデ・底部回転糸切り無調整、内面：ロクロナデ、色調：外面・黄灰色(5Y4/1)、内面・灰色(5Y5/1)、法量：底径6.5cm・残存高1.6cm・器厚0.4～0.7cm	E-7

第51図　基本層Ⅴ層出土遺物（4）



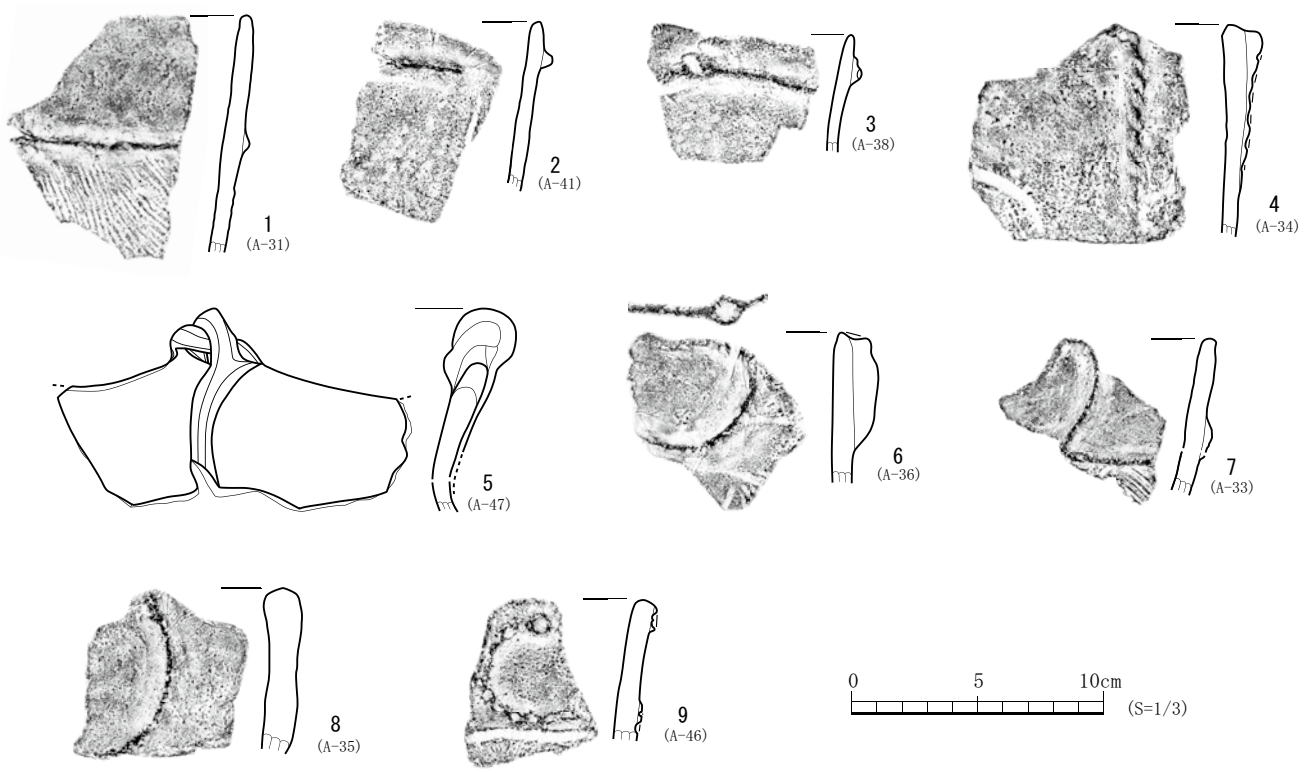
No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	基本層Ⅴ層	須恵器	高台付坏	口縁部 ～胴部	内外面：ロクロナデ、色調：外面・灰色(7.5Y5/1)、内面・褐灰色(10YR5/1)、法量：口径(12.2)cm・残存高4.0cm・器厚0.3～0.6cm、高台部欠損	E-11
2	基本層Ⅴ層	須恵器	高台付坏	口縁部 ～胴部	内外面：ロクロナデ、色調：内外面・灰色(N5/0)、法量：口径(12.4)cm・残存高3.5cm・器厚0.3～0.6cm、高台部欠損	E-12
3	基本層Ⅴ層	須恵器	蓋	天井部 ～口縁部	外面：ロクロナデ・天井部手持ちヘラ削り→回転ヘラ削り、内面：ロクロナデ、色調：外面・褐灰色(10YR5/1)、内面・褐灰色(10YR4/1)、法量：口径14.0cm・残存高2.5cm・器厚0.4～0.8cm、つまみ部欠損	E-8
4	基本層Ⅴ層	須恵器	鉢？	胴部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部回転糸切り無調整、内面：ロクロナデ・付着物有、色調：外面・灰黄褐色(10YR4/2)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、法量：底径(8.6)cm・残存高2.1cm・器厚0.6～1.5cm	E-6
5	基本層Ⅴ層	須恵器	壺？	胴部 ～底部	外面：ロクロナデ・自然釉、内面：ロクロナデ、色調：内外面・黄灰色(2.5Y4/1)、法量：底径(8.8)cm・残存高3.1cm・器厚0.5～0.6cm	E-10
6	基本層Ⅴ層	須恵器	壺	口縁～胴部 胴～底部	外面：口縁部～胴部ロクロナデ・胴部下端手持ちヘラ削り・底部切り離し技法不明→手持ちヘラ削り再調整、内面：ロクロナデ・底部ヘラナデ、色調：内外面・褐灰色(7.5YR5/1)、法量：口径(7.6)cm・器高(24.2)cm・底径9.2cm・器厚0.3～1.2cm	E-13
7	基本層Ⅴ層	須恵器	甕	口縁部	内外面：ロクロナデ、色調：外面・黄灰色(2.5Y4/1)、内面・灰色(7.5Y4/1)、法量：口径(22.0)cm・残存高3.5cm・器厚0.5～0.8cm	E-9
8	基本層Ⅴ層	須恵器	甕	胴部	外面：平行タタキ、内面：当て具痕、色調：外面・暗灰色(N3/0)、内面・褐灰色(10YR4/1)、法量：器厚0.8～1.1cm	E-14
9	基本層Ⅴ層	須恵器	甕	胴部	外面：平行タタキ、内面：当て具痕、色調：外面・黄灰色(2.5Y5/1)、内面・黄灰色(2.5Y4/1)、法量：器厚0.9～1.2cm	E-16
10	基本層Ⅴ層	須恵器	甕	胴部	外面：平行タタキ、内面：当て具→ナデ、色調：外面・黄灰色(2.5Y5/1)、内面・灰色(10Y4/1)、法量：器厚1.6～1.8cm	E-15

第52図　基本層Ⅴ層出土遺物（5）



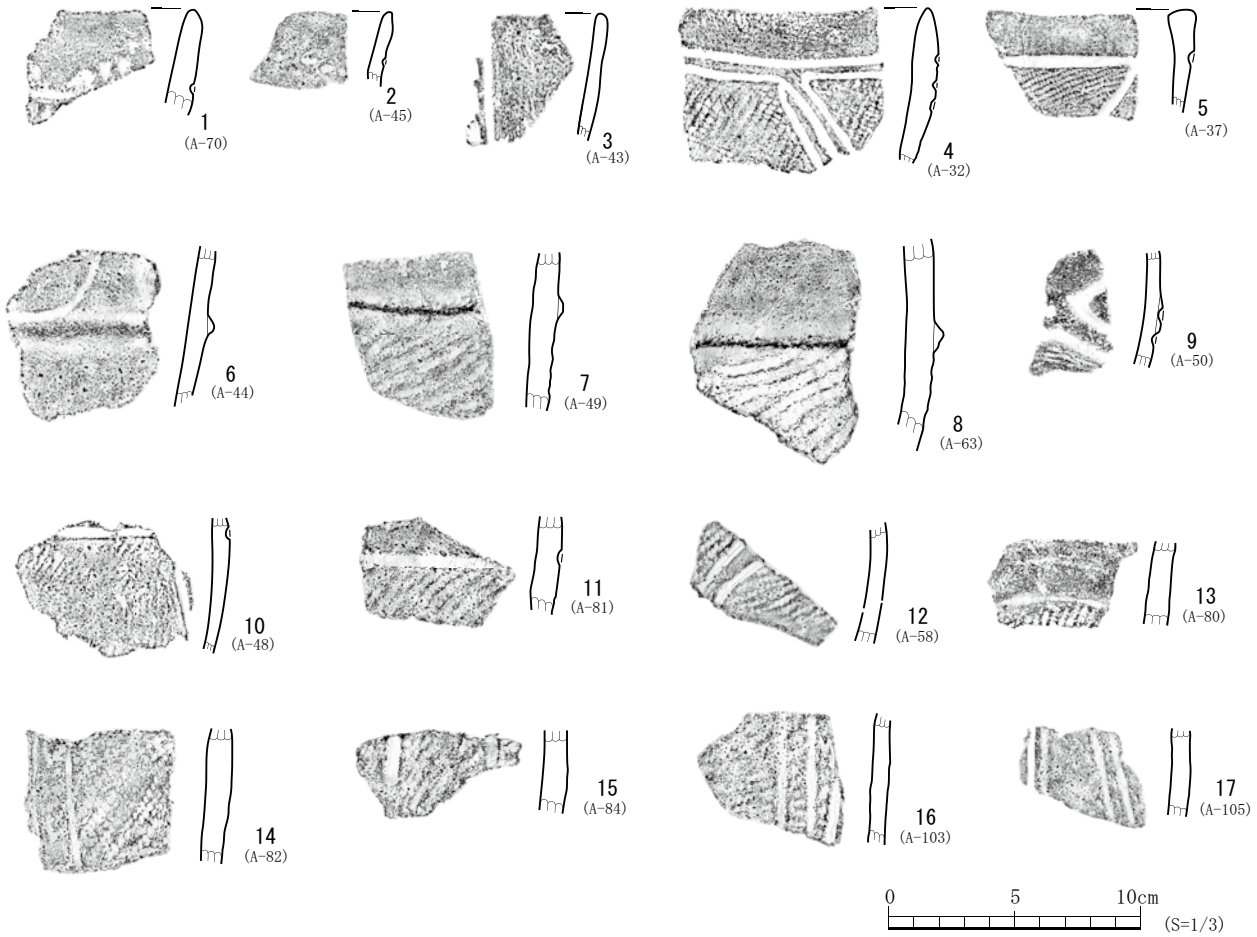
No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	基本層VIA2層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR・沈線文、内面：ナデ、色調：外面・灰黄褐色(10YR4/2)、内面・にぶい赤褐色(5YR5/4)、法量：器厚0.9～1.0cm	A-104
2	基本層VIA2層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR、内面：ナデ、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/4)/にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、法量：器厚0.6～0.7cm	A-94

第53図　基本層VIA層出土遺物



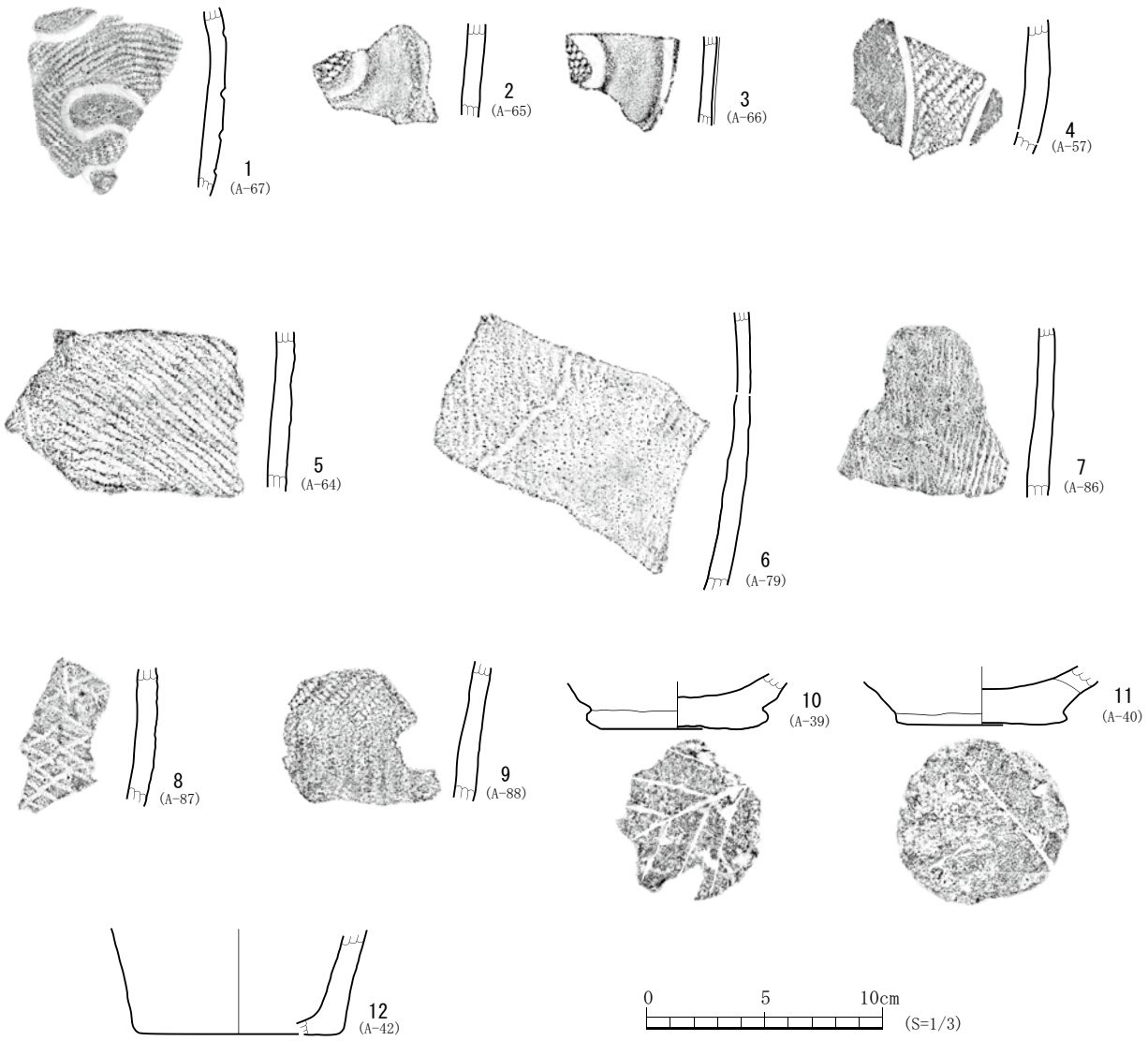
No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：隆帯・縄文LR、内面：ナデ、色調：内外面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、法量：器厚0.7～1.0cm	A-31
2	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：隆帯・縄文(原体不明)・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：内外面・暗赤褐色(5YR3/2)、法量：器厚0.5～1.0cm	A-41
3	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：隆帯＋刺突文・縄文(原体不明)・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・黒褐色(5YR3/1)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、法量：器厚0.4～0.9cm	A-38
4	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：隆帯＋刺突文・沈線文・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・褐色(7.5YR4/3)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/4)、法量：器厚0.6～1.5cm	A-34
5	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：隆帯(粘土紐巻付け)・ミガキ、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面・褐色(7.5YR4/3)/黄灰色(2.5Y4/1)、法量：器厚0.6～1.1cm	A-47
6	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：口唇部刺突文/隆帯・沈線文、内面：ナデ、色調：外面・にぶい赤褐色(2.5YR4/4)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：器厚0.9～1.7cm	A-36
7	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：隆帯・櫛歯状文、内面：ナデ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・灰黄褐色(10YR4/2)、法量：器厚0.5～1.1cm	A-33
8	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：隆帯、内面：ナデ、色調：外面・暗赤褐色(2.5YR3/3)、内面・赤色(10R4/6)、法量：器厚0.9～1.3cm	A-35
9	基本層VIIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：隆帯(C字状？)＋刺突文・沈線、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR5/4)、内面・にぶい黄褐色(10YR5/3)、法量：器厚0.7～1.0cm	A-46

第54図　基本層VII層出土遺物（1）



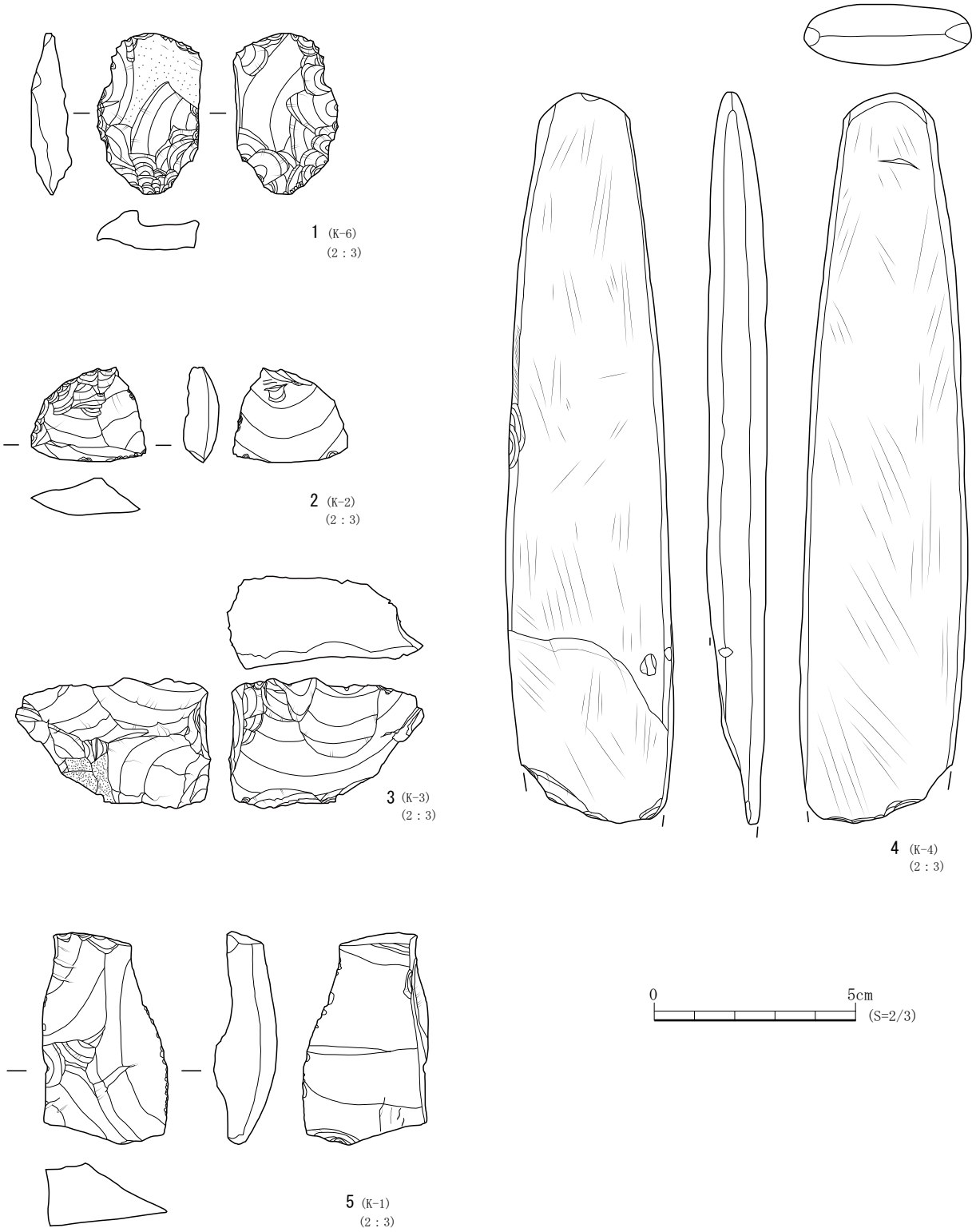
No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：沈線文・刺突文・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：内外面・にぶい赤褐色(5YR5/4)、法量：器厚0.9～1.0cm	A-70
2	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：刺突文・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：器厚0.4～0.55cm	A-45
3	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：沈線文・刺突文、内面：ナデ、色調：外面・赤色(10R4/6)、内面・黒褐色(10YR3/2)、法量：器厚0.5～0.55cm	A-43
4	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：縄文LR・沈線文、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(5YR3/1)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/4)、法量：器厚0.7～0.9cm	A-32
5	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：縄文LR・沈線文、内面：ナデ、色調：内外面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、法量：器厚0.5～1.1cm	A-37
6	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	頸部	外面：隆帯・沈線文・磨滅、内面：ナデ、色調：外面・褐色(7.5YR4/3)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚0.6～1.0cm	A-44
7	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：隆帯・縄文LR？・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、内面・にぶい黄褐色(10YR5/3)/暗灰色(N3/0)、法量：器厚0.8～1.2cm	A-49
8	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：隆帯・縄文LR、内面：ナデ、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・にぶい赤褐色(5YR5/4)、法量：器厚1.0～1.4cm	A-63
9	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：隆帯・沈線文・盲孔・縄文LR、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/4)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、法量：器厚0.4～0.6cm	A-50
10	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR・沈線文、内面：ケズリ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・灰褐色(5YR4/2)、法量：器厚0.4～0.7cm	A-48
11	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR・沈線文・磨滅、内面：ナデ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：器厚0.8～1.0cm	A-81
12	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR・沈線文・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面・灰褐色(7.5YR4/2)、法量：器厚0.6～0.8cm	A-58
13	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR・沈線文、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/4)/黒褐色(7.5YR3/1)、法量：器厚0.8～0.9cm	A-80
14	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR・沈線文、内面：磨滅のため不明、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/4)、法量：器厚0.7～0.8cm	A-82
15	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR・沈線文、内面：ナデ、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、内面・にぶい赤褐色(5YR5/4)、法量：器厚0.9～1.0cm	A-84
16	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文(原体不明)・沈線文・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・灰黄褐色(10YR4/2)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/4)、法量：器厚0.6cm	A-103
17	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文(原体不明)・沈線文・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：内外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、法量：器厚0.7cm	A-105

第55図　基本層Ⅶ層出土遺物（2）



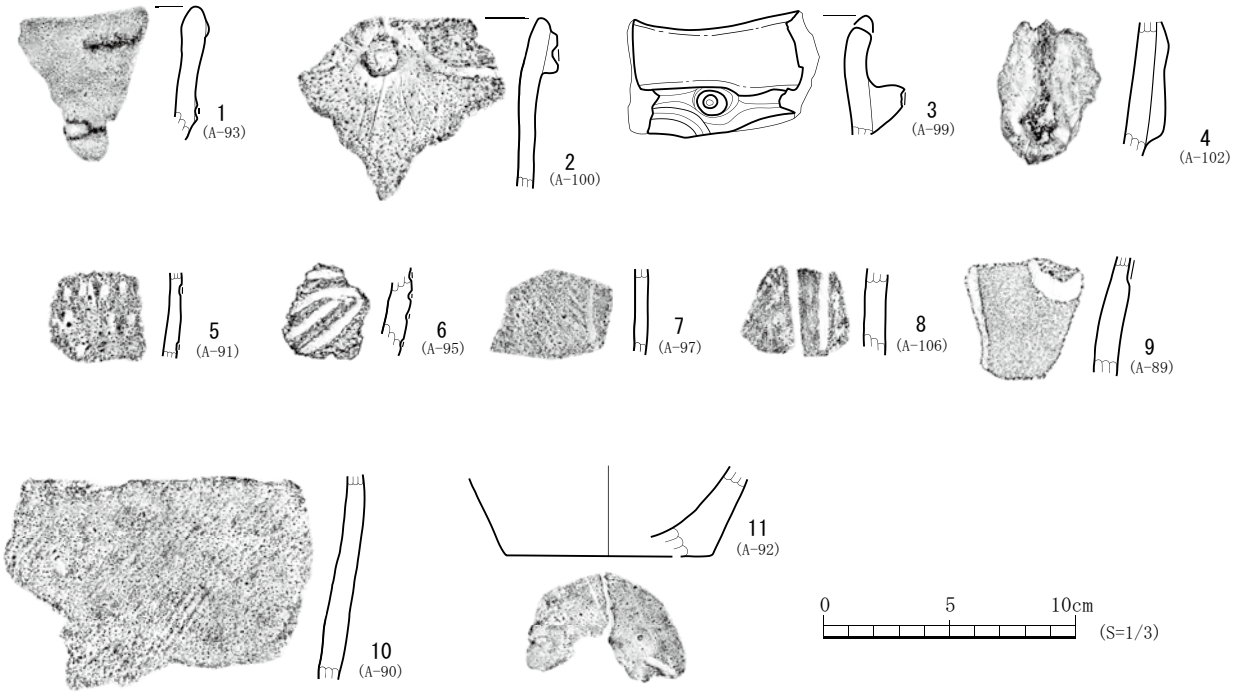
No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR・沈線文、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、法量：器厚0.6～0.8cm	A-67
2	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：隆帯・縄文RL、内面：ナデ、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/4)、内面・灰褐色(5YR4/2)、法量：器厚0.7cm	A-65
3	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：隆帯・縄文LR、内面：ナデ、色調：外面・黒色(N2/0)、内面・黒褐色(10YR3/1)、法量：器厚0.5cm	A-66
4	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR・沈線文、内面：ナデ、色調：内外面・にぶい赤褐色(5YR4/4)、法量：器厚0.8～1.0cm	A-57
5	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR・沈線文、内面：ナデ、色調：外面・褐色(7.5YR4/3)、内面・にぶい赤褐色(2.5YR4/4)、法量：器厚0.7～0.8cm	A-64
6	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文RL？・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・灰黄褐色(10YR4/2)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：器厚0.4～0.9cm	A-79
7	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：撚糸文R、内面：ナデ、色調：外面・にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、法量：器厚0.6～0.9cm	A-86
8	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：網目状撚糸文、内面：ナデ、色調：外面・灰黄褐色(10YR4/2)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、法量：器厚0.7～0.8cm	A-87
9	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR、内面：ナデ、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：器厚0.7～0.8cm	A-88
10	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	底部	外面：磨滅のため不明・底部木葉痕、内面：磨滅のため不明、色調：内外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、法量：底径(7.6)cm・残存高2.3cm・器厚1.0～1.75cm	A-39
11	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	底部	外面：磨滅のため不明・底部木葉痕、内面：磨滅のため不明、色調：内外面・赤褐色(5YR4/6)、法量：底径7.2cm・残存高2.5cm・器厚1.1～1.9cm	A-40
12	基本層Ⅶa層	縄文土器	深鉢	底部	外面：ナデ・底部木葉痕？、内面：ナデ、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR5/4)、内面・灰黄色(2.5Y4/1)、法量：底径(9.0)cm・残存高4.5cm・器厚0.6～0.9cm	A-42

第56図　基本層Ⅶ層出土遺物（3）



No.	層	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	登録
1	基本層Ⅶa層	楔形石器	頁岩	4.0	2.65	1.0	8.7		K-6
2	基本層Ⅶa層	不定形石器	珪質頁岩	2.3	2.9	0.8	5.0		K-2
3	基本層Ⅶa層	石核	玉髄	6.5	9.75	4.6	265.0		K-3
4	基本層Ⅶa層	扁平片刃石斧？	粘板岩	18.2	4.2	1.5	159.9	欠損後再利用か	K-4
5	基本層Ⅶa層	使用痕剥片	珪質頁岩	5.3	3.1	1.6	20.3		K-1

第57図　基本層Ⅶ層出土遺物（4）

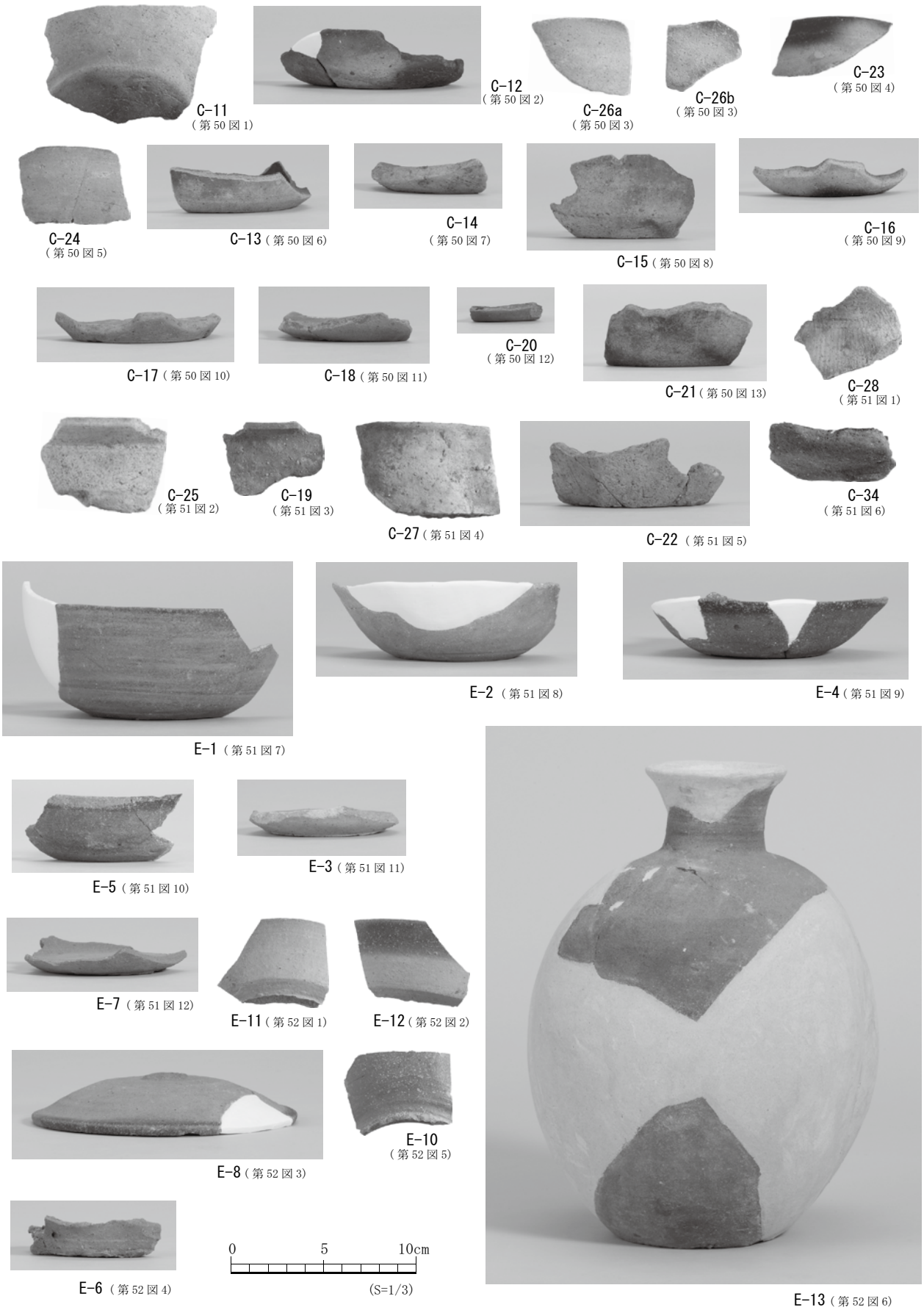


No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	基本層Ⅶb層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：隆帯・刺突文・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・褐色(7.5YR4/3)/黄灰色(2.5Y4/1)、内面・黄灰色(2.5Y4/1)、法量：器厚0.8～1.1cm	A-93
2	基本層Ⅶb層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：ボタン状貼付文・沈線文・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・黒褐色(10YR3/2)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：器厚0.8～2.2cm	A-100
3	基本層Ⅶb層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：沈線文・隆帯＋刺突文・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・褐色(7.5YR4/3)、法量：器厚0.6～1.3cm	A-99
4	基本層Ⅶb層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：隆帯、内面：ナデ、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、内面・にぶい赤褐色(5YR5/4)、法量：器厚0.7～1.5cm	A-102
5	基本層Ⅶb層	縄文土器	深鉢？	胴部	外面：刺突文・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、内面・灰黄褐色(10YR4/2)、法量：器厚0.4～0.5cm	A-91
6	基本層Ⅶb層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文(原体不明)・沈線文、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/2)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/4)、法量：器厚0.7～0.9cm	A-95
7	基本層Ⅶb層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文RL？・沈線文・磨滅、内面：ナデ、色調：外面・褐色(7.5YR4/3)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、法量：器厚0.5cm	A-97
8	基本層Ⅶb層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR・沈線文・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・にぶい赤褐色(2.5YR4/3)、法量：器厚0.8～0.9cm	A-106
9	基本層Ⅶb層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：ミガキ・沈線文、内面：ミガキ、色調：外面・黒褐色(7.5YR3/1)、内面・黒褐色(5YR3/1)、法量：0.5～0.9cm	A-89
10	基本層Ⅶb層	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文LR、内面：ナデ、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/4)/黒色(N2/0)、法量：器厚0.5～0.8cm	A-90
11	基本層Ⅶb層	縄文土器	深鉢	底部	外面：ナデ・底部木葉痕、内面：ナデ、色調：外面・黒褐色(10YR3/2)、内面・灰黄褐色(10YR4/2)、法量：底径(8.2)cm・残存高3.6cm・器厚0.9～1.8cm	A-92

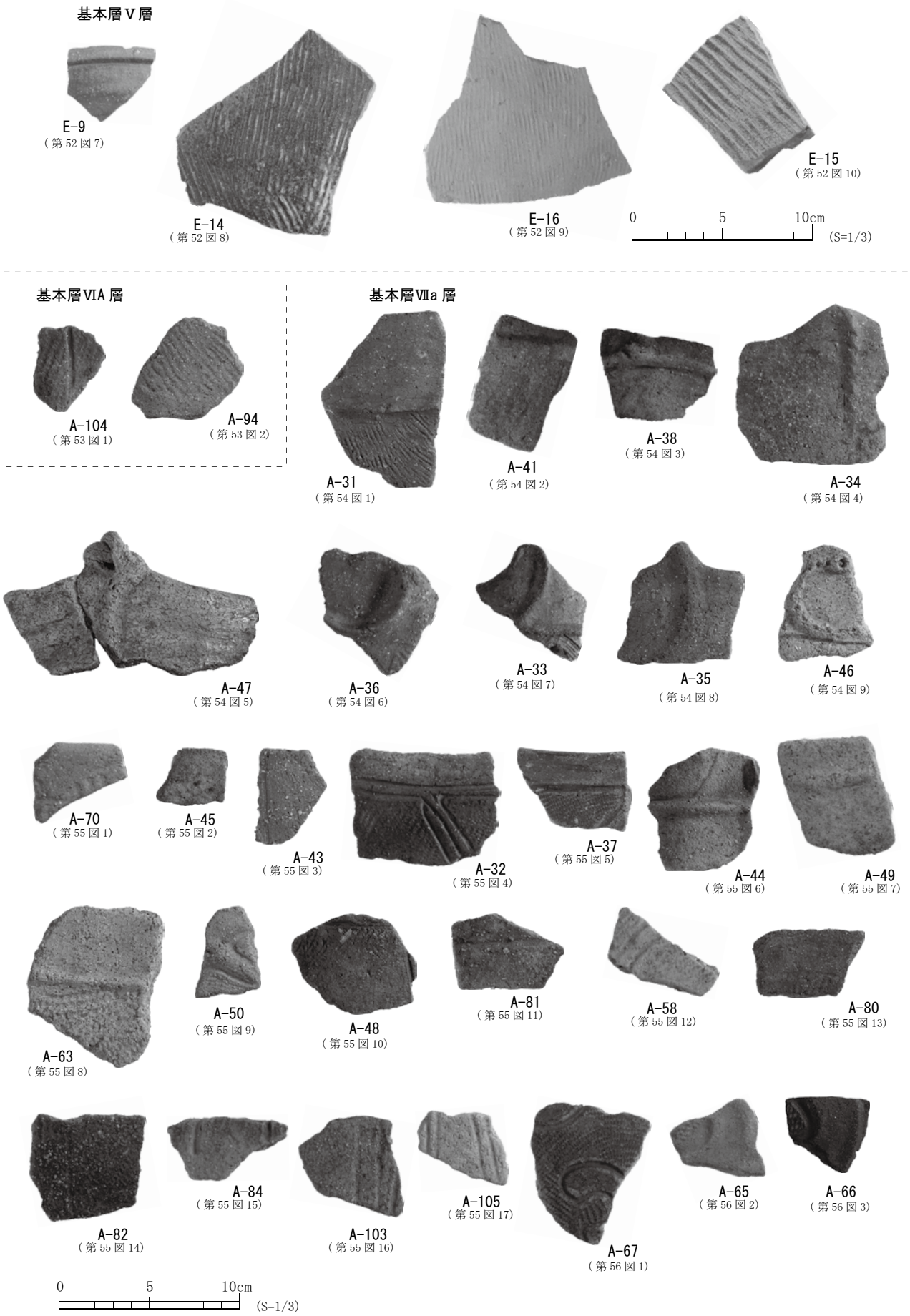
第58図　基本層Ⅶ層出土遺物（5）

第59図　基本層Ⅲ・Ⅴ層出土遺物（写真図版）

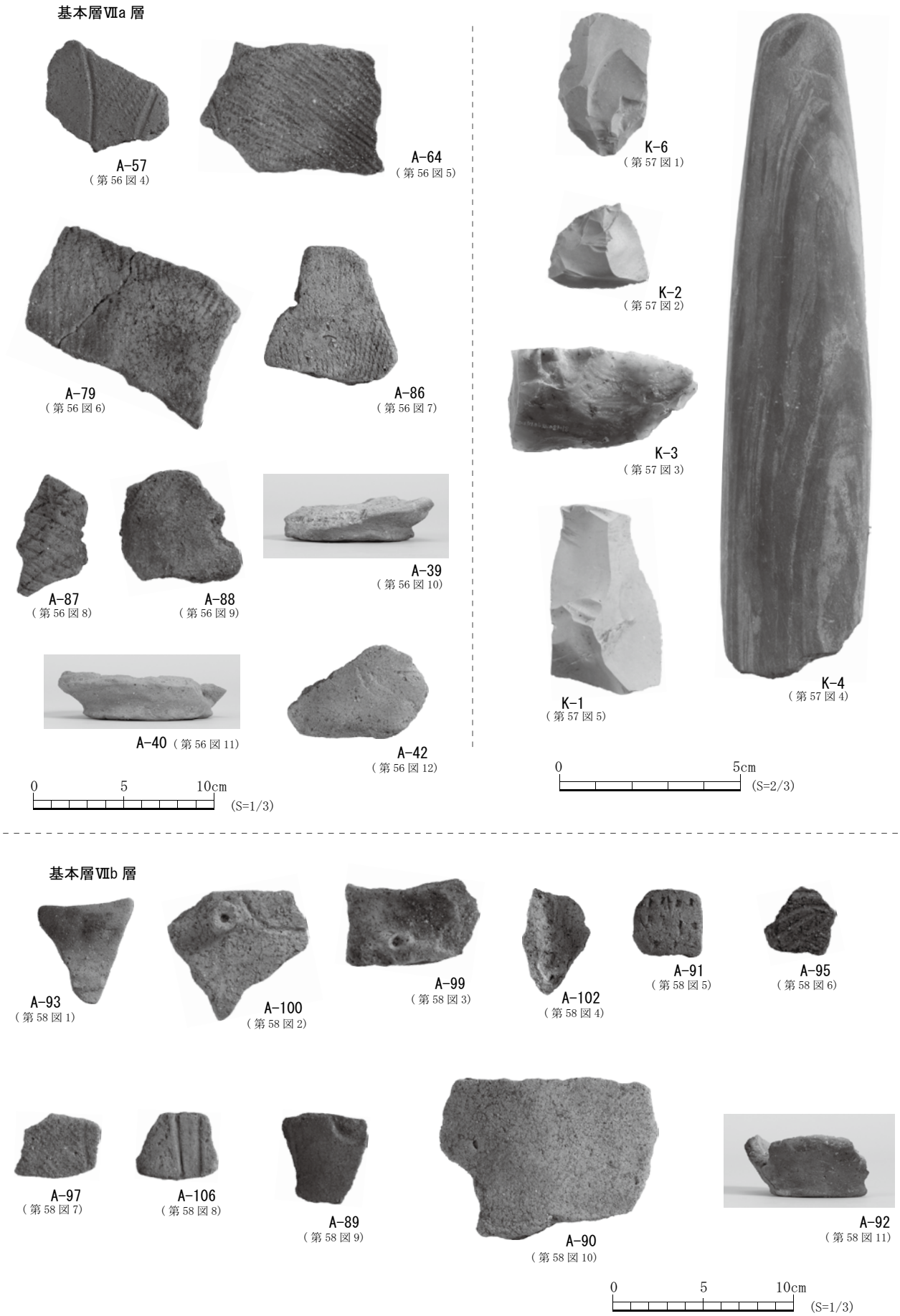
基本層Ⅴ層



第60図　基本層Ⅴ層出土遺物（写真図版）



第61図　基本層Ⅴ・ⅥA・Ⅶa層出土遺物（写真図版）



第62図　基本層Ⅶa・b層出土遺物（写真図版）

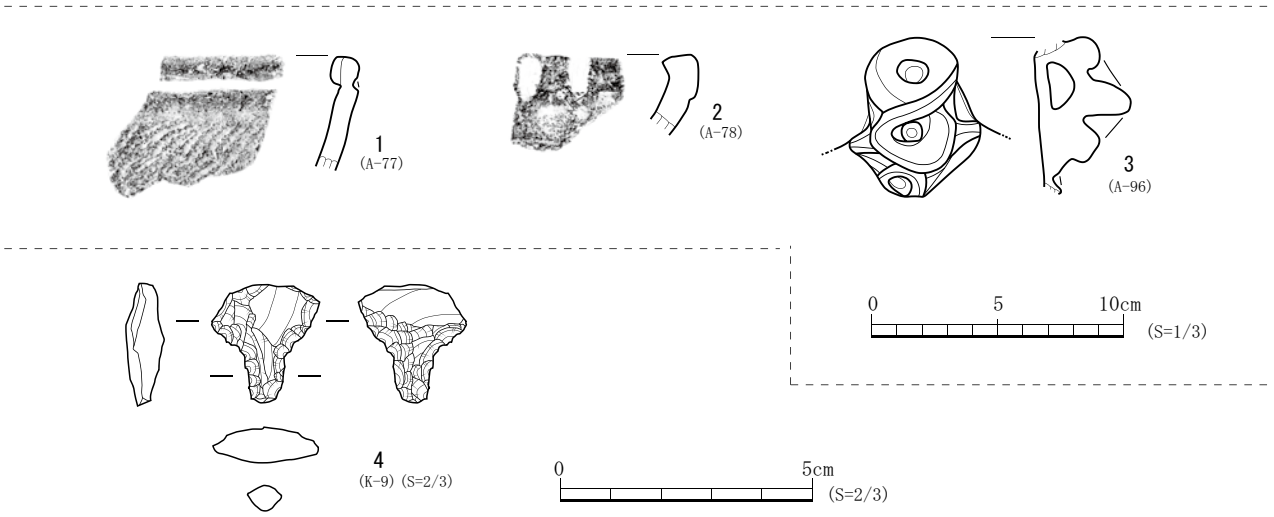
4．遺構外出土遺物

この他、今回の調査区では、遺構検出面・攪乱、調査前の踏査による表採により、縄文土器 251 点[深鉢 249 点（2,340g）・浅鉢 2 点（85g）]、土師器 33 点[坏 5 点（35g）・甕 28 点（140g）]、須恵器 13 点[坏 6 点（200g）・甕 7 点（250g）]、石器 10 点[石錐 1 点（3g）・剥片 9 点（66.6g）]が出土した（第 11 表）。このうち、図示できたものは、遺構検出面から出土した縄文土器浅鉢（第 63 図 1・2）・深鉢（第 63 図 3）、表採資料の石錐（第 63 図 4）である。

第11表　谷原遺跡1次調査　遺構外出土遺物一覧

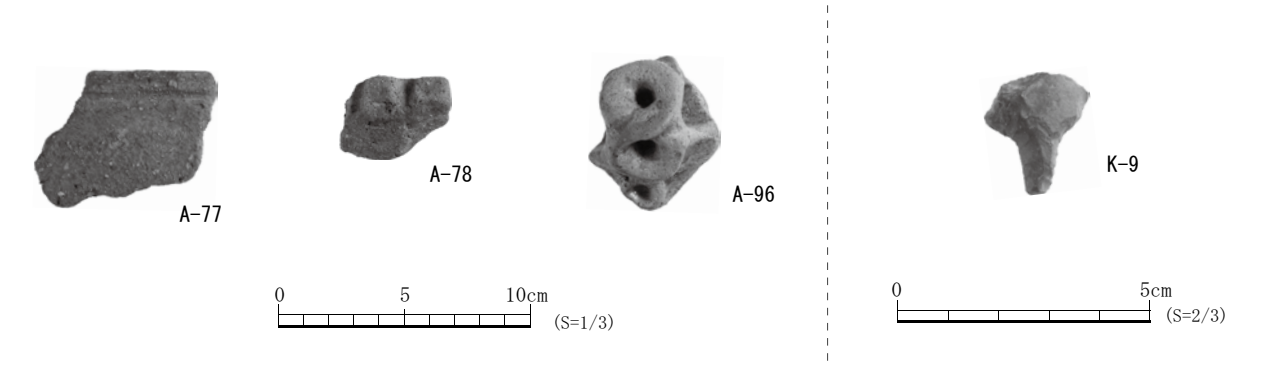
層位	縄文土器		土師器		須恵器		石器		出土地点合計
	深鉢	浅鉢	坏	甕	坏	甕	石錐	剥片	
検出面	243 (2240)	2 (85)	5 (35)	17 (100)	4 (50)	4 (175)		9 (66.6)	284 (2751.6)
攪乱	6 (100)				1 (5)				7 (105)
表採				11 (40)	1 (145)	3 (75)	1 (3)		16 (263)
種別合計	249 (2340)	2 (85)	5 (35)	28 (140)	6 (200)	7 (250)	1 (3)	9 (66.6)	307 (3119.6)

※（ ）内の数値は遺物の乾燥重量(g)を示す　　↑総計



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	B区 検出面	縄文土器	浅鉢	口縁部	外面：縄文LR・沈線文、内面：ミガキ、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/3)、内面・にぶい赤褐色(5YR4/3)/黒褐色(7.5YR3/2)、法量：器厚0.5～1.1cm	A-77
2	B区 検出面	縄文土器	浅鉢	口縁部	外面：刻み・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・灰褐色(7.5YR4/2)、内面・灰黄褐色(10YR4/2)、法量：器厚0.9～1.3cm	A-78
3	B区 検出面	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：隆帯・盲孔、内面：磨滅のため不明、色調：内外面・にぶい黄褐色(10YR5/3)	A-96

No.	層	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	登録
4	表採	石錐	頁岩	2.4	2.15	0.75	3.0		K-9



第63図　遺構外出土遺物

第Ⅳ章　総　括

今回の調査で検出した遺物・遺構について、ここでは、その特徴や時期を検討し、本遺跡における各時代の特徴をまとめる。

第１節　出土遺物の特徴と時期

谷原遺跡１次調査（A～D 区）において出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、中世陶器、鉄滓、鉄製品、石器である。その総数は 3,630 点（約 46,046.9g）である（第 12 表）。その内訳は、土器類 3,555 点（約 44,230g）、不明鉄製品 1 点（15g）、鉄滓 1 点（25g）、石器類 73 点（約 1,776.9g）である（第 12 表）。

これらの出土遺物のうち、本報告では、土器類 178 点、石器類は 11 点について図示した。以下、それぞれについて検討を行う。

第12表　谷原遺跡（1次調査）　出土遺物一覧

出土地点/種別	縄文土器	土師器	須恵器	中世陶器	石器	鉄製品	鉄滓	合計
SB・Pit	313 (2340)	213 (1215)	31 (600)		11 (206.6)			568 (4361.6)
SD	8 (155)	168 (1000)	46 (1185)		1 (4.8)	1 (15)		224 (2359.8)
SK	454 (5455)	92 (685)	9 (85)		3 (7.7)			558 (6232.7)
SX	31 (170)	78 (2195)	1 (5)		1 (16.0)			111 (2386.0)
基本層	1306 (17950)	431 (4500)	73 (3240)	4 (400)	47 (1472.2)		1 (25)	1862 (27587.2)
遺構外	251 (2425)	33 (175)	13 (450)		10 (69.6)			307 (3119.6)
合計	2363 (28495)	1015 (9770)	173 (5565)	4 (400)	73 (1776.9)	1 (15)	1 (25)	3630 (46046.9)

※詳細な出土地点・層位については、第7・9・10・11表参照

※上段の数値は出土点数、下段()内の数値は遺物の乾燥重量(g)を示す

1.　縄文土器（第 64 図）

縄文土器は 2,363 点（28,495g）出土した。このうち、図示できたものは 106 点である。出土地点の内訳は、遺構内出土が 806 点（8,120g）、遺物包含層（基本層Ⅲ～Ⅶ層）出土が 1,306 点（17,950g）、遺構外出土が 251 点（2,425g）である。出土した器種は、大半が深鉢で、その他に浅鉢（第 64 図 51・52）・袖珍土器がごく少量出土している。文様は、磨消縄文手法のものや隆帯・沈線文・貼付文・盲孔・刺突などにより施文されるものが多い。地文は単節縄文（LR）が多く、単節縄文（RL）は少量、撚糸文はごくわずか確認した。

今回出土した縄文土器は、ほとんどが破片資料で出土したため、器形や全体の文様を判別できたものは少ない。したがって、ここでは、最も多く出土した深鉢の土器器面に施されている文様を分類し、その特徴からおおよその年代について検討する。

【文様の分類】

A 類：磨消縄文手法により文様を施文するもの（第 64 図 1～6）。文様の区画には沈線によるもの（第 64 図 1・2）と隆帯によるもの（第 64 図 3～6）がある。

B 類：口縁部と胴部を横位の隆帯により区画するもの（第 64 図 7～13）。口縁部は無文帯で、胴部には縄文が施される。

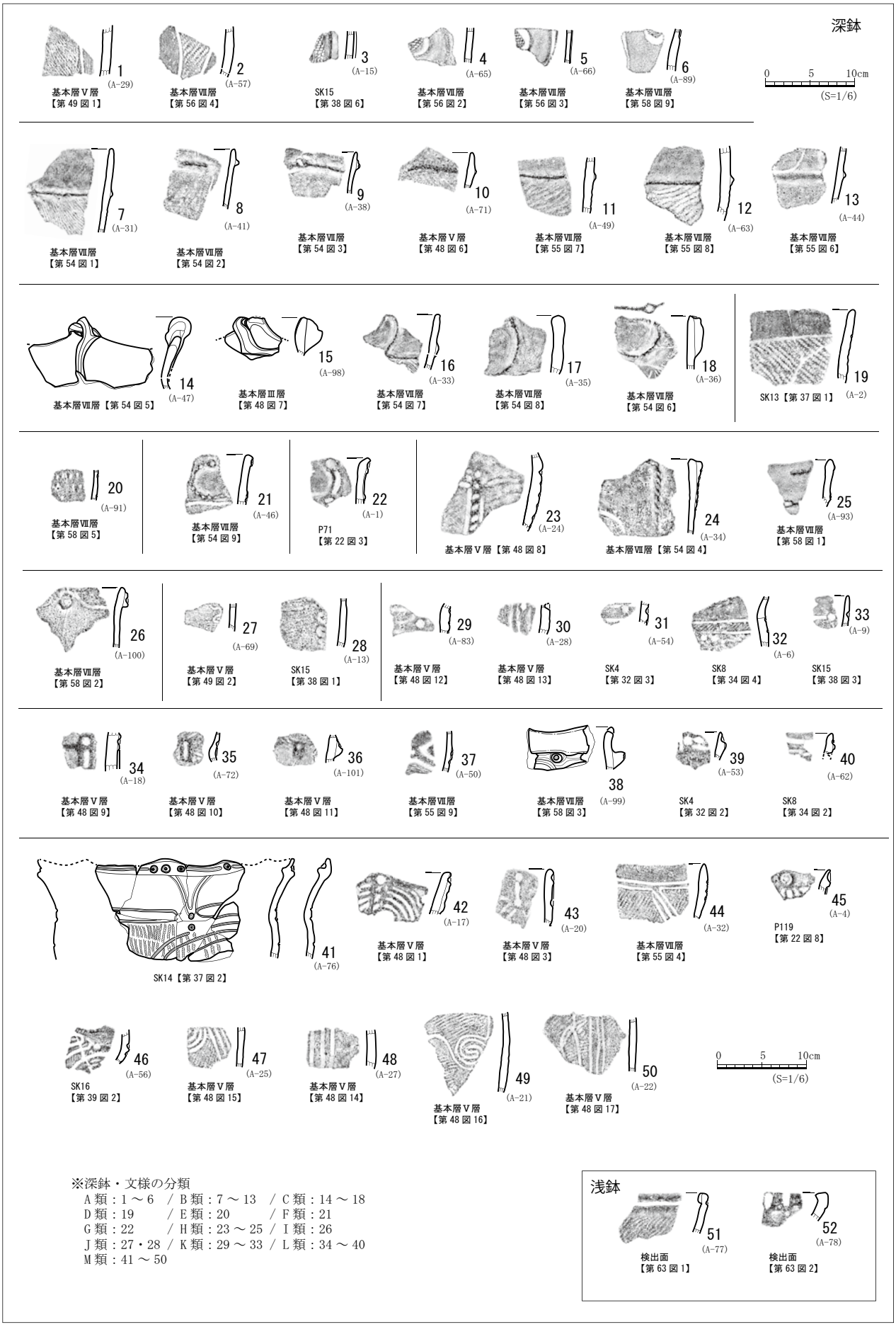
C 類：無文帯の口縁部に「ノ字状」の貼付文が施されるもの（第 64 図 14～18）。

D 類：口縁部と胴部を横位の沈線により区画するもの（第 64 図 19）。B 類と同様、口縁部は無文帯で、胴部には縄文が施される。

E 類：連続刺突文を施すもの（第 64 図 20）。

F 類：口縁部に C 字状の貼付文がつくもの（第 64 図 21）。貼付文内に刺突文・盲孔が施される。

G 類：口縁部にノ字状の貼付文がつき、貼付文内に盲孔・沈線が施されるもの（第 64 図 22）。



第64図　谷原遺跡（1次調査）出土主要縄文土器集成図

H 類：口縁部に鎖状隆帯をもつもの（第 64 図 23～25）。

I 類：ボタン状貼付文がつくもの（第 64 図 26）。

J 類：胴部に沈線によるジグザグ文が施文されるもの（第 64 図 27・28）。

K 類：沈線＋盲孔により施文されるもの（第 64 図 29～33）。

L 類：隆帯＋沈線＋盲孔により文様が描かれるもの（第 64 図 34～40）。

M 類：多条沈線により文様が描かれるもの（第 64 図 41～50）。

【縄文土器の年代的位置づけ】

A 類の磨消縄文による文様は、破片資料が多く全体の文様構成に把握できるものは少ないが、隣接する調査区（谷原遺跡第 2 次調査）においても同様の破片が出土している。2 次調査においては出土した磨消縄文による文様は、横方向に展開する文様構成で、無文帯が文様モチーフの主体となっていることから、大木 10 式のものと捉えられている（山田 2016）。したがって、今回の調査区で出土した A 類についても、同様の年代幅におさまるものと考えられる。

B 類の口縁部と胴部を隆帯で区画するもの、**C 類**の無文帯の口縁部に「ノ字状」の貼付文を付す土器は、蔵王町二屋敷遺跡（加藤 1984）、白石市菅生田遺跡（丹羽 1982）、柴田町向畑遺跡（芳賀 1983）、福島県三春町越田和遺跡（福島ほか 1996）などに類例がある。宮城県内の事例は後期前葉の二屋敷遺跡第Ⅱ群土器に先行する土器群（加藤 1984）、越田和遺跡の事例は綱取Ⅰ式に先行する土器群（本間 2008）とされている。B・C 類の土器もこの段階に相当すると考えられ、その年代はおおむね縄文時代中期末葉～後期初頭の幅で捉えておきたい。

D 類の土器は、谷原遺跡第 2 次調査においても同様の破片が出土しており、縄文時代後期初頭頃のものと推定される。**E 類**の連続刺突文が施される土器は、蔵王町二屋敷遺跡などの類例から縄文時代中期末頃のものとみておきたい。

F・G 類の口縁部に C 字状・ノ字状の貼付文を付す土器、**H 類**の鎖状隆帯を付す土器、**I 類**のボタン状貼付文を付す土器、**J 類**の胴部にジグザグ文を施す土器、**K・L 類**の沈線・盲孔により文様が描かれる土器、**M 類**の多条沈線により文様が描かれる土器は、蔵王町二屋敷遺跡（加藤 1984）、同町西浦 B 遺跡（鈴木 2011）、白石市菅生田遺跡（丹羽 1982）、仙台市六反田遺跡（佐藤ほか 1987）、同市下ノ内浦遺跡（吉岡 1996）、福島県新地町三貫地貝塚（福島県立博物館 1988）、同県大熊町上平 A・B 遺跡（松本ほか 2005、阿部ほか 2006）などに類例があり、縄文時代後期初頭～前葉の綱取式（馬目 1968）、南境式（伊東 1957）に位置付けられる。これらの類例と比較すると、本遺跡から出土した F～N 類の土器群は、宮城県南部～福島県中通り・浜通りに分布している綱取式の特徴に類似している。綱取式は、近年の研究では、綱取Ⅰ式と綱取Ⅱ式に区分され、それぞれの変遷案が検討されている（馬目 1968、押山 2002、本間 1990・2008 など）。これらの変遷案を参考にすると、口縁部の C 字状・ノ字状の単位文が貼付手法となる **F・G・I 類**は綱取Ⅰ式～綱取Ⅱ式古段階、ジグザグ文を施す **J 類**、盲孔・沈線による文様を主体とする **K・L 類**は綱取Ⅱ式古段階以降、多条沈線を施す **M 類**は綱取Ⅱ式中～新段階におおむね相当すると考えられる。この他、**H 類**の鎖状隆帯を付す土器や **I 類**のボタン状貼付文を付す土器については、小破片のため不明な点が多いが、概ね綱取Ⅱ式古段階前後のものと考えられる。

以上の検討により、今回の谷原遺跡第 1 次調査で出土した縄文土器の年代は、おおむね縄文時代中期末葉～後期前葉のものと考えられ、隣接する調査区（第 2 次調査/E・F 区　第 4 図参照）で出土した土器群とほぼ同様の年代幅におさまる。したがって、今回の調査区で出土した縄文土器は、谷原遺跡第 2 次調査で検出された環状集落内で使用された土器群とみてよいだろう。

２．土師器・須恵器

（１）土師器

土師器は 1,015 点（約 9,770g・うちロクロ土師器 779 点）出土し、このうち、34 点を図示した。出土器種は坏・高台付坏・甕である。出土地点の内訳は、遺構出土 551 点（5,095g）、遺物包含層（基本層Ⅲ～Ⅴ層）出土 431 点（4,500g）、遺構外出土 33 点（175g）である。以下、非ロクロ土師器・ロクロ土師器に分け、その特徴について示す。

①非ロクロ土師器

非ロクロ成形の土師器は 236 点出土した。出土器種は坏・甕である。いずれも破片資料で、全体の器形を復元できるものはない。このうち、図示できたものは、坏 2 点・甕 2 点である。

【坏】坏は 19 点出土し、このうち、口縁部資料 1 点、胴部～底部資料 1 点を図示した。口縁部資料（第 65 図 2）は、内外面にヨコナデを施す。胴部～底部資料（第 65 図 1）は胴部下半に稜を形成する坏で、外面にヘラ削り、内面にヘラミガキ・黒色処理を施すものである。

【甕】甕は 217 点出土し、このうち、口縁部資料（第 65 図 3）と底部資料（第 65 図 4）を図示した。口縁部資料は、口縁部の内外面にヨコナデ、頸部の外面にハケメ・内面にヘラナデを施す。底部資料は磨滅のため調整技法は不明である。

②ロクロ土師器

ロクロ成形の土師器は 779 点出土した。出土器種は坏・高台付坏・甕、赤焼土器（註 1）の坏である。このうち、図示できたものは坏 18 点・甕 12 点である。

【坏】（第 65 図 5～22）

坏は 329 点出土（うち赤焼土器 162 点）し、このうち 18 点を図示した。坏は内面に黒色処理・ヘラミガキを施したもの（第 65 図 5～17）と非内黒処理のもの（赤焼土器）（第 65 図 18～22）に分けられる。

内黒処理の坏は、器形が推定できるものはいずれも底部から外上方に直線的に立ち上がる形態のものである（第 65 図 5～8）。底部の切り離し技法は、回転糸切り無調整（第 65 図 9・11・13・14・17）、切り離し技法不明→手持ちヘラ削り再調整（第 65 図 5・16）・回転ヘラ削り再調整（第 65 図 10・12・15）がある。胴部下端の調整については、回転ヘラ削りを施すもの（第 65 図 15）、手持ちヘラ削りを施すもの（第 65 図 5・9・11）、調整を施さないもの（第 65 図 10・12～14・16・17）がある。

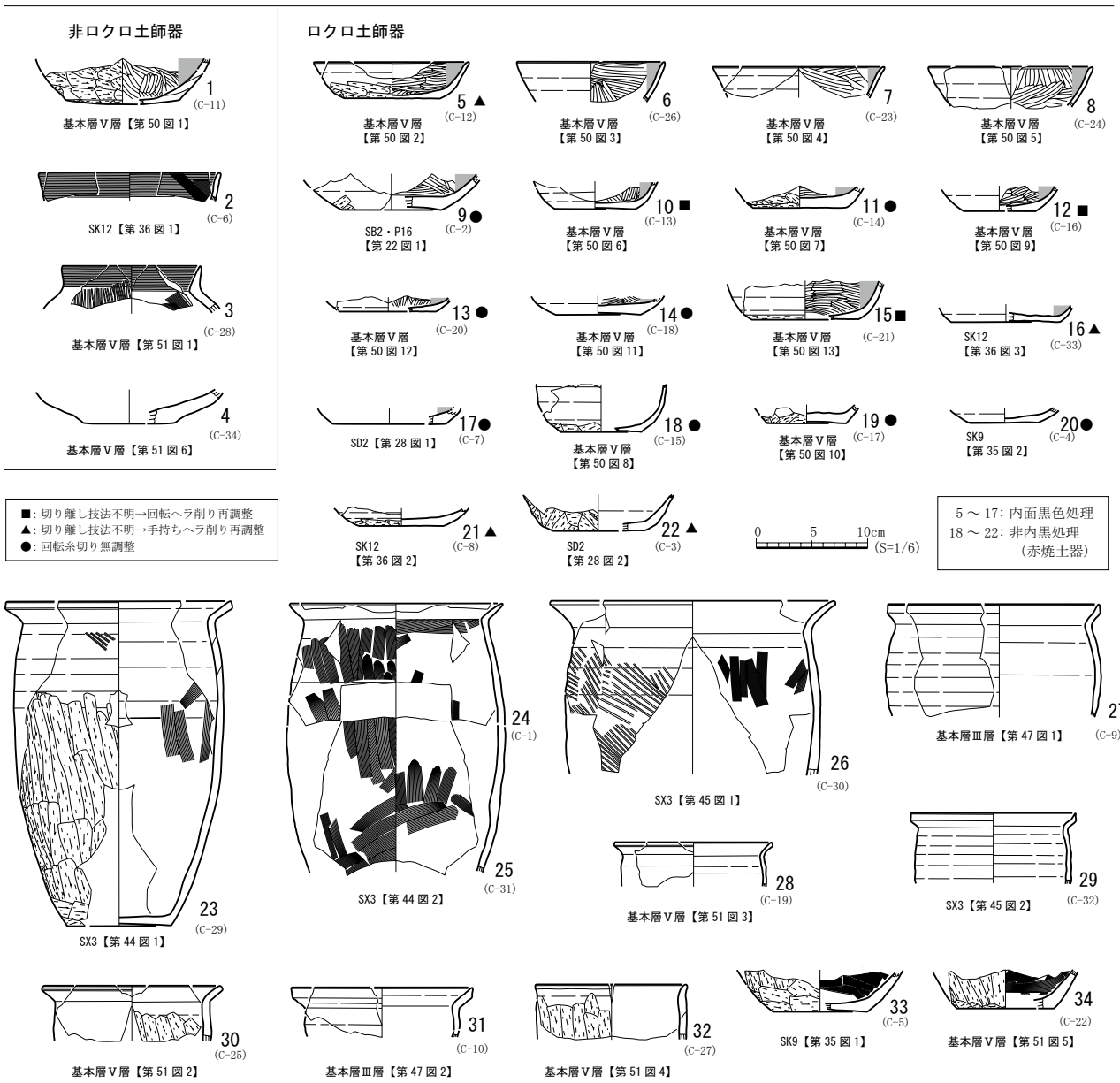
非内黒処理のもの（赤焼土器）は、すべて破片資料で器形が復元できるものはない。底部の切り離し技法には、回転糸切り無調整（第 65 図 18～20）と切り離し技法不明→手持ちヘラ削り再調整（第 65 図 21・22）がある。胴部下端の調整については、手持ちヘラ削りを施すもの（第 65 図 18・19・21・22）と施さないものがある（第 65 図 20）。

【高台付坏】

高台付坏は 5 点出土した（うち 2 点は坏部の内面に黒色処理）。小破片のため、図示できたものはない。

【甕】（第 65 図 23～34）

甕は 445 点出土し、このうち 12 点を図示した。口径約 20cm 以上のものと口径 16cm 以下のものに大きく分けられる。口縁部～頸部の形態は、頸部にくびれを持つもの（第 65 図 23～31）が主体で、この他に頸部から直線的に立ち上がるもの（第 65 図 32）も認められた。外面の調整はロクロナデ後、胴部下半にヘラ削りを施すもの（第 65 図 23・33・34）やナデ調整を施すもの（第 65 図 24・25）、頸部下にヘラ削りを施すもの（第 65 図 32）があり、口径 20cm 以上の甕では外面に叩き目が残るもの（第 65 図 23・26）もある。内面の調整は、ナデ（第 65 図 23～26）・ヘラ削り（第 65 図 30）などである。



第65図　谷原遺跡（1次調査）出土 土師器集成図

（2）須恵器

須恵器は 173 点（約 5,565g）出土し、このうち、34 点を図示した。出土地点の内訳は、遺構出土 87 点（1,875g）、基本層出土 73 点（3,240g）、遺構外出土 13 点（450g）である。出土した器種は、坏・高台付坏・蓋・鉢・壺・瓶類・甕である。以下、器種ごとにその特徴について示す。

【坏】（第 66 図 1～10）

坏は 57 点出土した。このうち 10 点を図示した。坏は、平底で、底部から口縁部までわずかに内湾しながら立ち上がる。口径に対し、器高が比較的低い皿状の器形を呈するもの（第 66 図 2～5）が多いが、器高が高く埦状の器形のものもある（第 66 図 1）。底部の切り離し技法は、回転ヘラ切り→手持ちヘラ削り再調整のもの（第 66 図 3）、切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整のもの（第 66 図 10）、切り離し技法不明→手持ちヘラ削り再調整のもの（第 66 図 1）、回転糸切り無調整のもの（第 66 図 2・4・5・8・9）がある。胴部下端の調整については、手持ちヘラ削りを施すものが 1 点（第 66 図 1）確認された。

【高台付坏】（第 66 図 11～13）

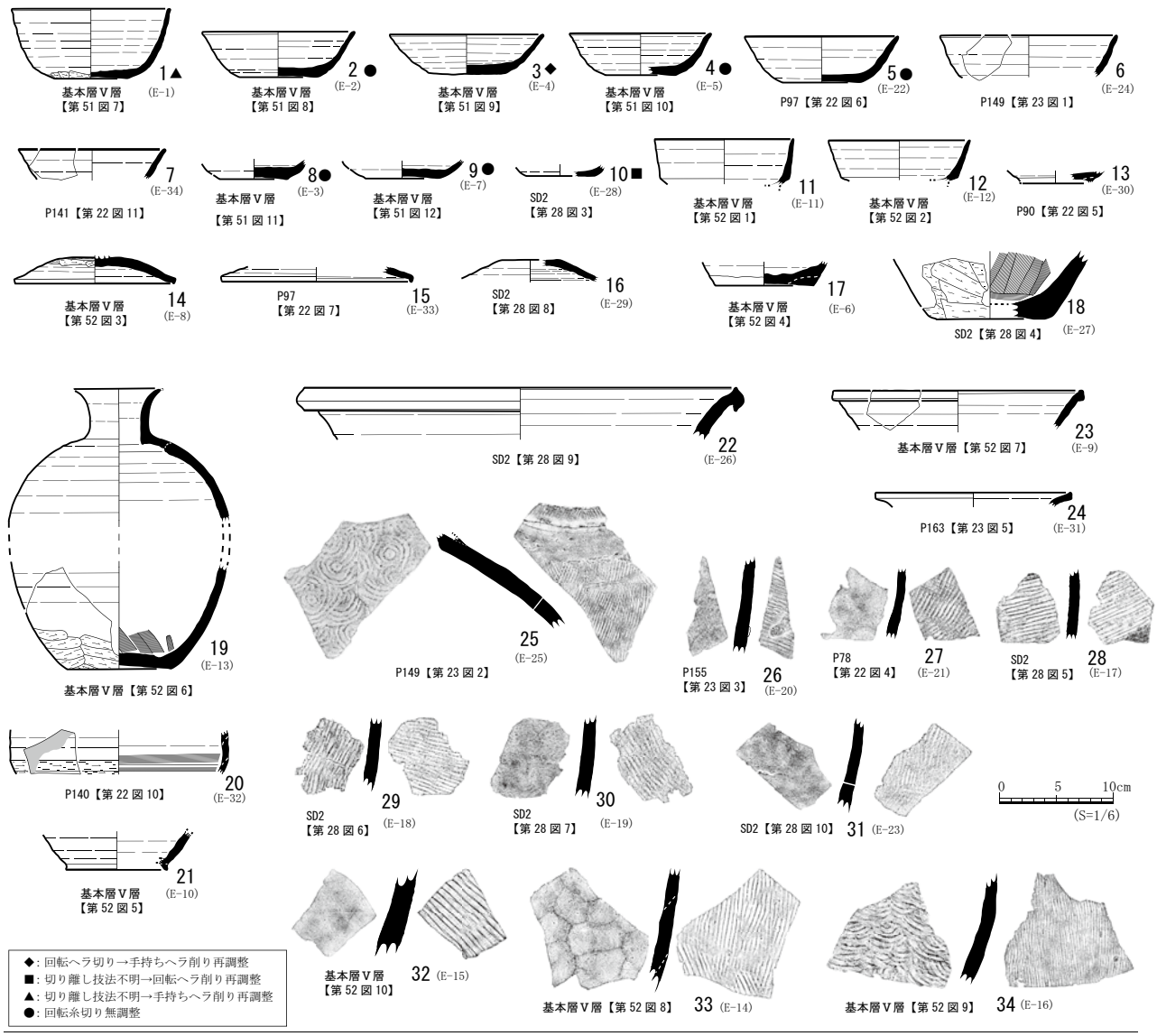
高台付坏は 6 点出土し、このうち 3 点を図示した。すべて破片資料のため、全体の器形を復元できるものはない。坏部資料（第 66 図 11・12）は、底部から外上方に直線的に立ち上がり口縁部に至る形態のもので、底部と胴部の境に稜が認められる。底部資料（第 66 図 13）は平底の底部に高台がつくもので、高台部は底部の周縁部につく。

【蓋】（第 66 図 14～16）

蓋は 7 点出土し、このうち 3 点を図示した。全体の器形を復元できるものは少ない。第 66 図 14・15 は、器高が低く口縁端部が下方に折り返されるもので、第 66 図 14 の天井部には回転ヘラ削り・手持ちヘラ削りが施される。つまみ部は欠損しているため、その形状は不明である。なお、第 66 図 14 は、つまみ欠損部と内面の器面が使用により滑らかな状態になっており、硯等に転用された可能性がある。

【鉢】（第 66 図 17・18）

鉢は 2 点出土し、すべて図示した。底部資料のため、全体の器形は不明である。第 66 図 17 は、底部切り離し技法が回転糸切り無調整である。第 66 図 18 は、外面にヘラ削り、内面にナデを施している。



第66図　谷原遺跡（1次調査）出土 須恵器集成図

【壺・瓶類】（第 66 図 19～21）

壺・瓶類は 11 点出土し、このうち 3 点を図示した。第 66 図 19 は、平底で、胴部中位に最大径をもつ球形の胴部に、比較的短い頸部が付く形態の壺である。頸部の形態は頸部上半で外反し口縁部に至る。外面の胴部下端に手持ちヘラ削り、内面の底部付近にナデを施している。第 66 図 20 は瓶類の胴部資料で、胴部外面下位に回転ヘラ削り、内面にカキ目を施す。フラスコ瓶または長頸瓶の破片の可能性がある。胎土は密で灰白色を呈し、搬入品の可能性が高い。第 66 図 21 は瓶類の底部資料で高台がつく。外面には自然釉がかかる。長頸瓶の破片の可能性がある。

【甕】（第 66 図 22～34）

甕は 90 点出土し、このうち 13 点を図示した。出土した甕は口縁部資料と胴部資料のみであり、全体の器形を復元できるものはない。口縁部資料（第 66 図 22～24）については、口縁端部は上下方向につまみ出すもの（第 66 図 22・23）、口縁端部を上方につまみ出すもの（第 66 図 24）がある。胴部資料（第 66 図 25～34）については、外面平行タタキ・内面同心円当て具痕を残すもの（第 66 図 25・34）、外面平行タタキ・内面平行状の当て具痕を残すもの（第 66 図 28・29）、外面平行タタキ・内面の当て具痕をナデ消すもの（第 66 図 26・27・30～33）がある。

（３）土師器・須恵器の所属時期

今回の調査では、各種遺構や遺物包含層（基本層Ⅲ～Ⅴ層）などから土師器・須恵器が一定量出土している。しかしながら、遺構出土遺物のほとんどは周辺から流入したものや、中世以降と考えられる遺構から出土したものが多い。また、遺物包含層出土遺物についても、その出土状況から、一括遺物として判断できる資料は少なく、破片資料が多い。したがって、ここでは、比較的器形が復元できたロクロ成形の土師器と須恵器について、それぞれの個別の特徴から、おおよその年代について検討を加えることとする。

【ロクロ土師器の年代】

今回出土したロクロ成形の土師器は、形態的特徴や製作技法から表杉ノ入式（氏家 1957）の範疇に含まれる。表杉ノ入式は、平安時代全般に対応するものと考えられており、多賀城周辺で出土している土師器坏類の様相からいくつかの段階に細分されている（白鳥 1980・1982、加藤 1989、柳澤 1994、村田 1994・1995）。これらの先行研究を参考し、今回出土した土師器の年代について検討を行う。

内黒処理の坏（第 65 図 5～17）のうち、器形が復元できた第 65 図 5 の坏は、口径 14.0cm・底径 8.6cm・器高 3.3cm で、口径に対し底径が比較的大きく（底径/口径＝0.6 前後）、器高が低い皿形（器高/口径＝0.23）の器形である。調整は手持ちヘラ削り再調整、胴部下端に手持ちヘラ削りを施す。同様の特徴を有する土器は、山元町日向遺跡 SI5 竪穴住居跡（山田ほか 2015）、亘理町堀の内遺跡 SK42 土坑（亘理町教委 1997）、宮前遺跡 20 号住居跡（丹羽 1983）に類例があり、8 世紀末～9 世紀前半頃に位置付けられる。この他の坏については、口縁部資料または底部資料で、全体の器形が不明なため詳細な年代の位置付けが難しいが、法量や調整技法の特徴から、概ね 9 世紀～10 世紀代のものとみられる。

赤焼土器の坏は、図示できたものはすべて底部資料である。その特徴は、底径が 6cm 前後のもの（第 65 図 20）と、7～8cm 前後のもの（第 65 図 18・19・21・22）に分けられる。このうち、後者の坏については、いずれも胴部下端に手持ちヘラ削りを施している（第 65 図 18・19・21・22）。底部の調整は、回転糸切り無調整のもの（18～20）、手持ちヘラ削り再調整のもの（21・22）がある。いずれも底部資料で、全体の器形が不明なため、詳細な年代を検討することは難しいが、同様の特徴を有する赤焼土器坏は、谷原遺跡周辺に位置する日

向遺跡（山田ほか 2015）、涌沢遺跡（初鹿野ほか 2015）、石垣遺跡（山田ほか 2014）の調査でも出土している。これら周辺の調査事例との比較から、今回出土した赤焼土器坏の年代は概ね 9 世紀後半～10 世紀後半の幅におさまるものと捉えておきたい。

この他、SX3 出土の外面に成形時のタタキ目が残る長胴の甕（第 65 図 24・26）は、8 世紀末～9 世紀中頃に位置付けられる（村田 2007）（註 2）。

【須恵器の年代】

須恵器坏のうち全体の器形が復元できるものとして第 66 図 1～5 の坏がある。

このうち、第 66 図 3～5 の坏は、底径/口径比が 0.5、器高/口径比が 0.30 以下の皿状の器形で、底部の調整は回転ヘラ切り→手持ちヘラ削り（第 66 図 3）、回転糸切り無調整（第 66 図 4・5）である。同様の特徴を有するものは、山元町北名生東窯跡（岩見ほか 1991、東北古代土器研究会 2008）に類例があり、8 世紀末～9 世紀前葉に位置付けられる。第 66 図 11・12 の高台付坏、第 66 図 14 の蓋も同様の年代と考えられる。

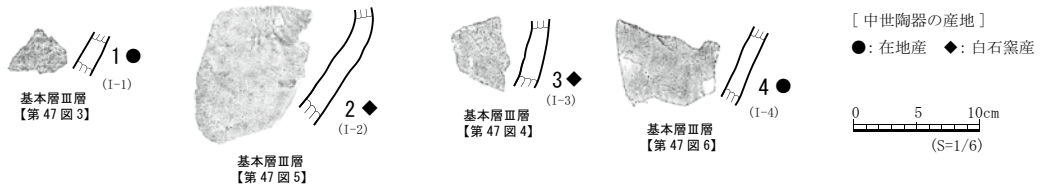
第 66 図 1 の坏は、比較的器高の高い埦状の器形で胴部下端に手持ちヘラ削り、底部は手持ちヘラ削り再調整を施す。第 66 図 2 の坏は、底径/口径比 0.49、器高/口径比 0.30 の皿状の器形で、底部は回転糸切り無調整である。これらは、山元町涌沢遺跡 SK124・127 土坑（初鹿野ほか 2015）などに類例があり、9 世紀中葉頃とみられる。第 66 図 19 の壺もこれらに近い年代の可能性がある。

この他、内面に同心円当て具痕を残す甕（第 66 図 25・34）は、周辺の調査事例から 7～8 世紀前半代頃のものとみておきたい。

３．　中世陶器（第 67 図）

中世陶器は、4 点（400g）出土し、すべて図示した。中世陶器には、鉢（第 67 図 1）・壺の可能性がある破片（第 67 図 2）・甕（第 67 図 3・4）がある。その産地の内訳は、胎土や焼成の特徴から、在地の宮城県白石市に所在する「白石窯」産と推定されるものが 2 点（第 67 図 2・3）、在地産が 2 点（第 67 図 1・4）である。

白石窯は、大きく 4 つの支群（東北支群・市ノ沢支群・黒森支群・一本杉支群）からなっており、このうち、本格的な発掘調査が実施されたのは一本杉窯跡群（菊地・早川 1996）のみである。一本杉窯跡の調査では、受け口状の口縁をもつ甕・大型壺のほか、短頸壺・無頸壺・細口壺・小壺・仏花瓶、擂鉢、皿、火鉢などが出土しており、その年代については、甕・壺の口縁部の形態から、13 世紀後半～14 世紀前半頃と推定されている。今回の谷原遺跡の 1 次調査で出土した「白石窯」産の中世陶器の所属時期については、白石市一本杉窯跡の調査成果から、概ね 13 世紀後半～14 世紀前半頃と推定される。その他の在地産の中世陶器は、すべて胴部資料であるため、その詳細な年代を検討することは難しいことから、その年代については概ね中世としておきたい。



第67図　谷原遺跡（1次調査）出土中世陶器集成図

４．鉄製品・製鉄関連遺物

鉄製品は１点（15g）、製鉄関連遺物は鉄滓１点（25g）出土した。鉄製品は破片資料のため、器種・用途ともに不明である。鉄製品・鉄滓ともに詳細な時期は不明であるが、出土遺構・層位等の関係から、概ね古代～中世以降のものと推定される。

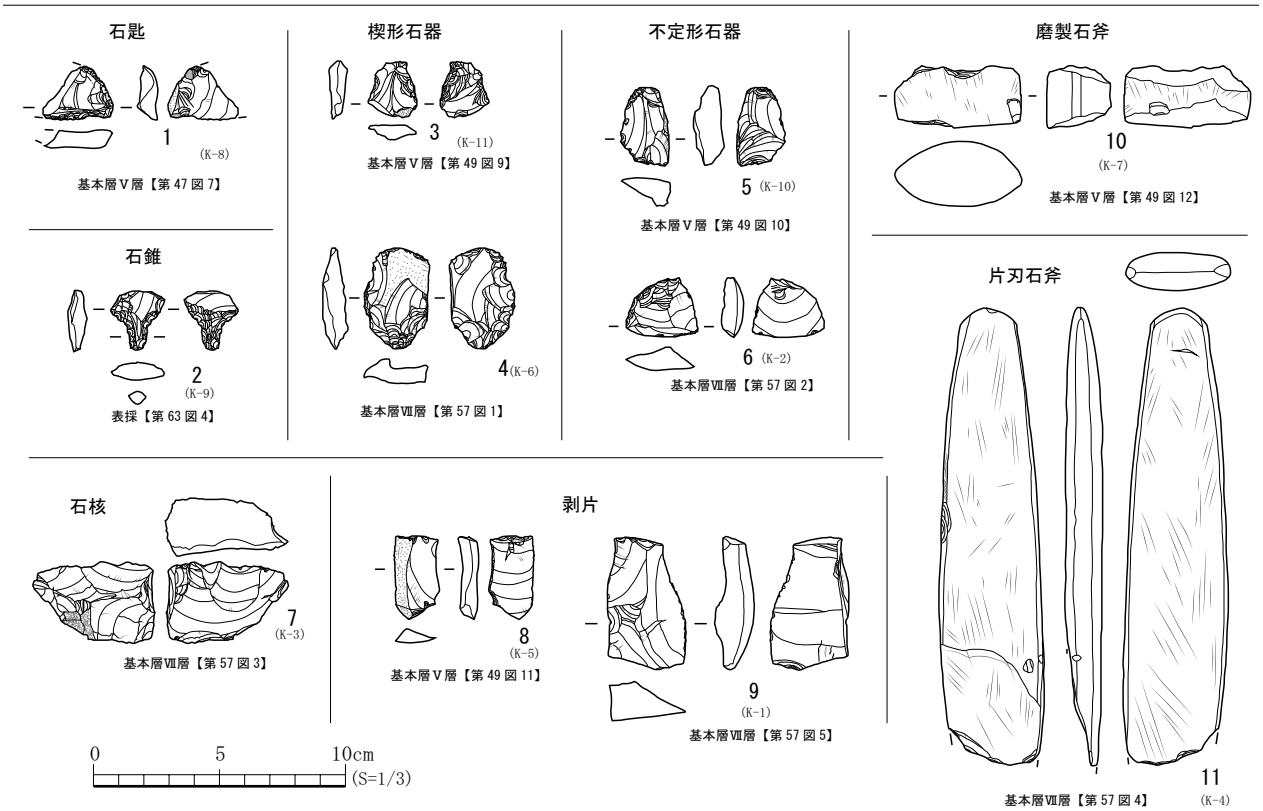
５．石器（第 68 図）

石器は 73 点（1776.9g）出土した。その内訳は、石匙１点、石錐１点、楔形石器２点、不定形石器２点、片刃石斧１点、磨製石斧１点、石核１点、剥片が 64 点で、このうち 11 点を図示した（第 68 図）。石器の石材は珪質頁岩、頁岩、砂岩、凝灰岩、珪質凝灰岩、玉髄、粘板岩、泥岩、安山岩、黒曜石、軽石である（第 13 表）。出土地点の内訳は、遺構出土 16 点（235.1g）、遺物包含層（基本層Ⅲ～Ⅴ層）出土 47 点（1,472.2g）、遺構外出土 10 点（69.6g）である（第 12 表）。これらの石器は、縄文土器の年代から、縄文時代中期末葉から後期前葉頃に利用されたものと考えられる。

第13表　谷原遺跡（1次調査）　出土石器・石材組成

器種/石材	珪質頁岩	頁岩	砂岩	凝灰岩	珪質凝灰岩	玉髄	粘板岩	泥岩	安山岩	黒曜石	軽石	合計
石匙	1 (4.0)											1 (4.0)
石錐		1 (3.0)										1 (3.0)
楔形石器		1 (8.7)			1 (2.5)							2 (11.2)
不定形石器	1 (5.0)	1 (6.0)										2 (11.0)
片刃石斧							1 (159.9)					1 (159.9)
磨製石斧								1 (49.0)				1 (49.0)
石核						1 (265.0)						1 (265.0)
剥片	39 (389.7)	4 (124.0)	2 (226.8)	1 (126.0)		14 (97.4)			2 (155.5)	1 (1.7)	1 (152.7)	64 (1273.8)
合計	41 (398.7)	7 (141.7)	2 (226.8)	1 (126.0)	1 (2.5)	15 (362.4)	1 (159.9)	1 (49.0)	2 (155.5)	1 (1.7)	1 (152.7)	73 (1776.9)

※上段の数値は出土点数、下段()内の数値は遺物の乾燥重量(g)を示す



第68図　谷原遺跡（1次調査）出土 石器集成図

第 2 節　検出遺構の特徴と時期

今回の調査で本調査を実施した A～D 区で検出した遺構は、掘立柱建物跡 6 棟、溝跡 3 条、土坑 16 基、焼成遺構 3 基、柱穴・ピット 167 個（掘立柱建物跡を構成する柱穴も含む）である。これらの遺構からは、縄文土器、土師器（非ロクロ成形・ロクロ成形）、須恵器、中世陶器、鉄滓、鉄製品、石器が出土した。

ここでは、これらの遺構の特徴・出土遺物・重複関係等から、その時期・性格について検討する。

１．今回の調査区（A～D 区）で検出した各遺構の時期

(1) 掘立柱建物跡、その他の柱穴・ピット

掘立柱建物跡は 6 棟（SB1～6）、建物として認定できなかったその他の柱穴・ピットは 129 個検出した。これらの柱穴・ピットの掘方規模は、「長軸 40～60cm 前後の隅丸方形・円形・楕円形を呈するもの」と「長軸 20～30cm 前後の円形・楕円形を呈するもの」に分けることができる。以下、それぞれの年代について検討する。

前者の柱穴には、A 区西側に分布する SB1～5 掘立柱建物跡を構成する柱穴が該当する。SB1・5 は隅丸方形と円形・楕円形の柱穴、SB2 はすべて隅丸方形の柱穴、SB3・4 はすべて円形・楕円形の柱穴で構成される。これらの建物跡からは、年代を特定できる遺物は出土していないが、**SB2** ではロクロ成形の土師器が多く出土しており、坏類の特徴（底部切り離し技法が回転糸切り無調整のものが主体）から、SB2 の年代は平安時代前半頃と考えられる。**SB1・3** においても、わずかではあるがロクロ成形の土師器が出土していることから、これらの年代についても概ね平安時代以降とみられる。**SB4・5** では遺物は出土していないが、柱穴の掘方の特徴が SB1～3 と類似していることから、その所属時期は SB1～3 に近い年代と推定される。以上のことから、SB1～5 掘立柱建物跡は、概ね平安時代を中心とする年代が想定される。次に、これらの建物の重複関係をみてみると、SB2～4 は重複関係にあり、SB2・4→SB3 の新旧が確認されている。併せて、この 3 者の建物は、ほぼ同位置に存在し、同時存在が難しい位置関係にある。そこで、SB2 と SB3 の新旧関係（SB2→SB3）を参考にすると、掘方が「隅丸方形の柱穴の建物（SB2）」→「円形・楕円形の柱穴の建物（SB3）」の順で建物が変遷したことが推定され、SB2～4 の建物は、平安時代の中で、SB2（柱穴：隅丸方形）→SB4（柱穴：円形・楕円形）→SB3（柱穴：円形・楕円形）の順に変遷した可能性が高い。

後者については、A 区東側・B 区東側に分布する。SB6 についても、この柱穴で構成される。これらの柱穴・ピットは、B 区北側に隣接する谷原遺跡 2 次調査の E・F 区で確認されている中世の掘立柱建物跡の柱穴と規模・形状の面で類似する。今回の調査で確認された柱穴・ピットからは中世の遺物は出土していないが、隣接する調査区の事例から、概ね中世の遺構とみておきたい。

(2) 溝跡

溝跡は 3 条（SD1～3）確認した。**SD1 溝跡**は隅丸方形のピット（P166）と重複し、これより新しい遺構であることが確認されている。遺物は、ロクロ成形の内黒処理の土師器坏・非内黒処理の土師器坏（赤焼土器）が出土しており、概ね平安時代以降のものと考えられる。**SD2 溝跡**は上幅 360～422cm・深さ 110cm の大溝で、人為的に埋め戻された堆積土 1 層から内黒処理の土師器坏、底面付近の 6 層からロクロ成形の内黒処理の土師器坏・非内黒処理の土師器坏（赤焼土器）などが出土している。以上の点から、SD2 溝跡は平安時代以降につくられ、その後、中世以前に人為的に埋め戻された溝跡とみられる。なお、SD1 溝跡と SD2 溝跡は、その位置関係や方向から、同時期の溝跡である可能性が考えられる。**SD3 溝跡**はロクロ成形の土師器甕破片が出土していることから、平安時代以降の遺構と考えられる。

(3) 土坑

土坑は16基（SK1～16）確認した。このうち、遺構に伴う遺物が出土したと判断された遺構は少ない。そこで、それぞれの土坑から出土した遺物の中で最も時代が新しいものを抽出し、その年代を推定することとする。

SK6・7 では縄文土器が出土していることから縄文時代以降の遺構、SK1～3・5・9・10・12 ではロクロ成形の土師器が出土していることから平安時代以降の遺構と推定される。SK4 では堆積土1層からロクロ成形の土師器2点・須恵器1点が出土しているが、層位的には1層上面からの出土である。その他の出土遺物は、縄文土器・石器のみで、これらの遺物は土坑の底面ないしその付近の層から出土しており、SK4 に伴う遺物は縄文土器と考えられる。その所属時期は、縄文土器（深鉢K類）が出土していることから縄文時代後期初頭～前葉頃とみられる。SK8 では隆帯・盲孔・沈線により文様が施文された縄文土器（深鉢L類）、SK13 では縄文土器（深鉢D類）、SK14 では底面付近から多条沈線による文様が施文された縄文土器（深鉢M類）と沈線と盲孔により施文された縄文土器（深鉢K類）、SK15 ではジグザグ文を持つ縄文土器（深鉢J類）が出土している。このことから、SK13は縄文時代後期初頭以降、SK8・14・15は縄文時代後期前葉頃とみられる。SK16では、堆積土から縄文土器深鉢が出土したが、無文のため具体的な時期の特定は難しい。縄文時代以降の遺構とみておきたい。

SK11については出土遺物がなく、かつ、他の遺構との重複関係がないため、所属時期は不明である。

(4) 焼成遺構

焼成遺構は3基（SX1～3）確認した。SX1 は掘方のある焼成遺構で、円形のピット（P122）と重複し、これより古い遺構であることが確認されている。遺物は、掘方埋土から縄文土器深鉢破片・石器剥片が出土しており、概ね縄文時代以降のものと考えられる。SX2 は焼面のみの焼成遺構で、焼面上面からロクロ成形の土師器が出土しており、平安時代以降のものとみられる。SX3 は掘方のある焼成遺構で、ロクロ成形の土師器甕が横位に据えられた状態で出土しており、遺物の特徴から8世紀末～9世紀中頃の遺構と考えられる。

(5) まとめ

以上の検討の結果をまとめると、今回の調査で検出した主な遺構の所属時期は大きく縄文時代後期前葉、平安時代前半、中世の遺構に分けることができた（第14表）。

第14表　谷原遺跡A～D区（1次調査）　主要遺構の所属時期

所属時期	遺構番号
縄文時代後期初頭～前葉	SK4・8・13～15 土坑
（縄文時代以降）	SK6・7・16 土坑／SX1 焼成遺構
平安時代	SB1～5 掘立柱建物跡、SD1・2 溝跡、SX3 焼成遺構
（平安時代以降）	SD3 溝跡、SK1～3・5・9・10・12 土坑、SX2 焼成遺構
中世	SB6 掘立柱建物跡、その他のピット
（時期不明）	SK11 土坑

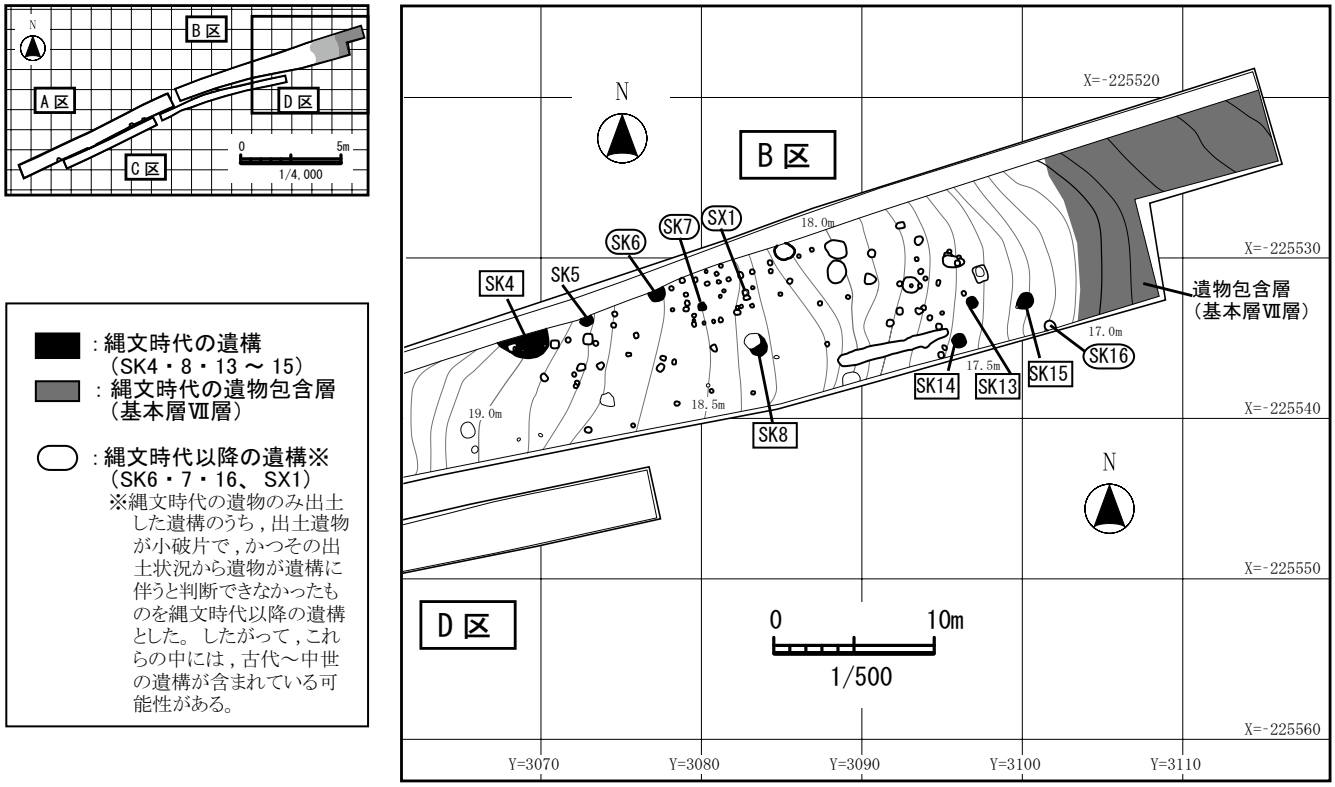
２．各時代の遺構の特徴と変遷

谷原遺跡は、阿武隈山地から東に延びる丘陵東側の谷原川と山寺川に挟まれた標高 17～20m の中低段丘上段の緩やかな平坦地に立地する。本遺跡は、平成 19・20 年度の分布調査で発見されて以降、本発掘調査・確認調査を含めると、これまで 8 度にわたる発掘調査が実施されている（第 4 図・第 2 表、平成 28 年 3 月現在）。今回の報告は、平成 20 年度に実施された 1 次調査（A～D 区）にあたる。1 次調査の調査原因は、道路工事に伴うものであり、主に縄文時代後期初頭前後、平安時代、中世の遺構が確認された。しかしながら、本調査を実施した範囲は、東西に細長い調査区であったため、遺跡の全容を把握するには至っていない。したがって、本項では、各時代の遺構について、その概要のみをまとめることとする。

(1) 縄文時代の遺構

今回の調査区（A～D 区）で発見された遺構のうち、縄文時代の遺構として認定できた遺構は土坑 5 基（SK4・8・13～15）・遺物包含層（基本層Ⅶ層）である（第 69 図）。これらの遺構は B 区東半に分布しており、出土遺物の特徴から、概ね縄文時代後期初頭前後のものとみられる。このうち、SK15 土坑については集石遺構の可能性があり、これ以外の土坑については用途不明である。遺物包含層は、B 区東端の地形的に低い地点に形成されており、当時の捨て場であったと考えられる。

以上のように、1 次調査の範囲内においては、縄文時代の遺構は B 区東半にまとまって分布していることから、当時の生活の場が B 区周辺にあったと推定される（註 3）。



第69図　谷原遺跡（1次調査）縄文時代の遺構配置図

(2) 平安時代の遺構

今回の調査区（A～D 区）において確認した平安時代に所属すると考えられる遺構は、掘立柱建物跡 5 棟（SB1～5)、溝跡 2 条（SD1・2)、焼成遺構 1 基（SX3)、遺物包含層（基本層Ⅴ層）である。掘立柱建物跡と溝跡は今回の調査箇所の西側（A 区)、焼成遺構・遺物包含層は東端（B 区東端）に分布する。

掘立柱建物跡（SB1～5）は出土遺物の特徴から、概ね平安時代前半のものとみられ、柱穴の掘方には隅丸方形のものと円形・楕円形のものがある。建物の規模は 4 間×2 間前後のものが主体で、その重複関係から、SB2（柱穴：隅丸方形）→SB4（柱穴：円形・楕円形）→SB3（柱穴：円形・楕円形）の順に変遷したとみられる。また、SB1 と SB2、SB4 と SB5 はそれぞれ棟方向が類似することから、同時期の建物である可能性が考えられる。なお、同様の特徴を持つ平安時代の掘立柱建物跡は、谷原遺跡の北に位置する館の内遺跡（引地 2002）でも確認されている。

SD1・2 溝跡は、掘立柱建物群の東側に位置する。これらの遺構からは、年代を決定しうる遺物が出土していない。しかしながら、前述の掘立柱建物と方向が揃うことから、建物群と同時期の遺構である可能性が高い。特に SD2 溝跡については上幅 3m を超える大溝であり、SD2 溝跡の西側の建物群と東側の空間を区画する溝跡であった可能性がある。

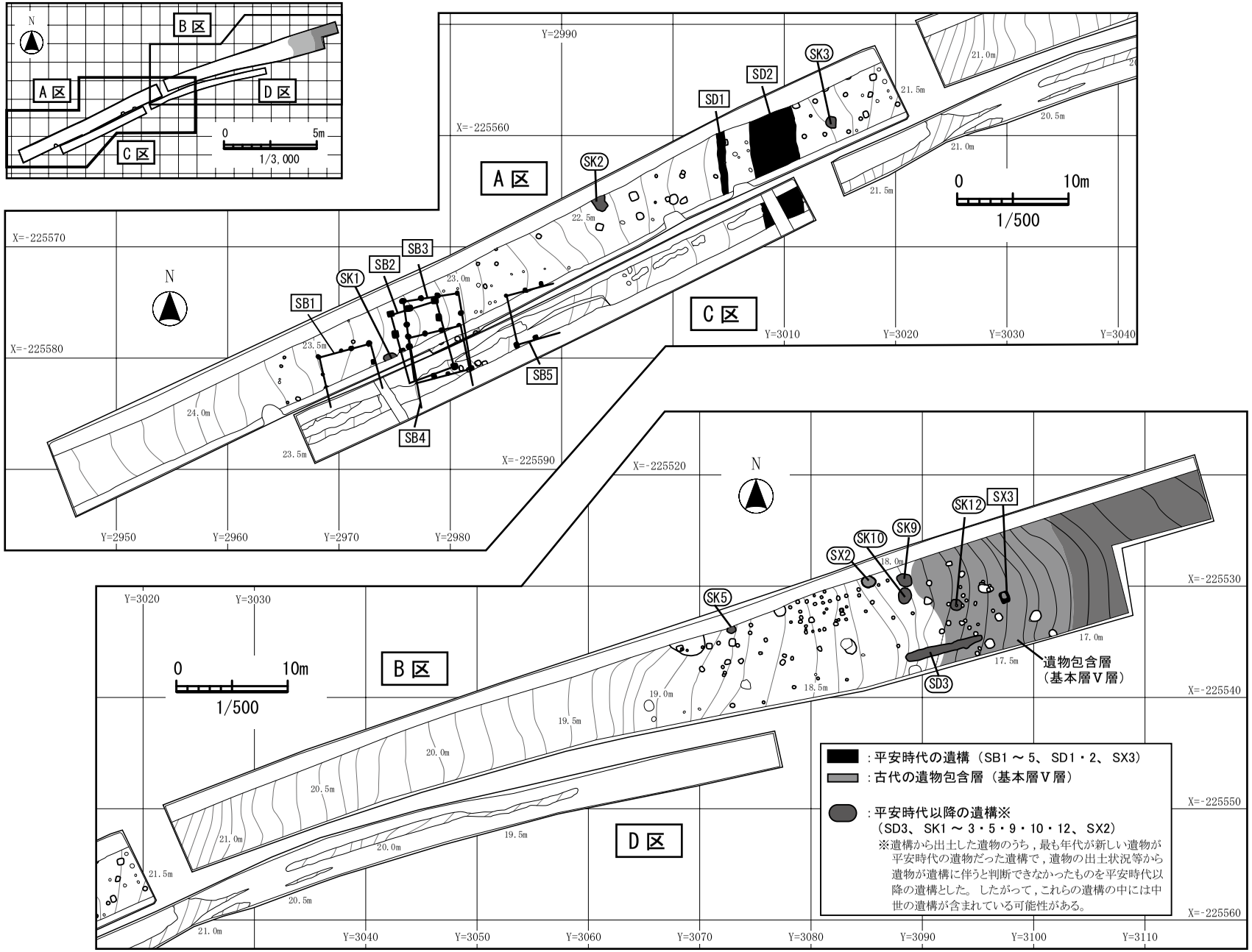
この建物群と溝跡の東側には遺構が存在しない空間があり、そのさらに東端の地形的に低い地点に至ると、ほぼ同時期の焼成遺構（SX3）と遺物包含層が分布する。したがって、今回の調査区においては、西側に掘立柱建物群と区画溝の可能性のある溝跡、中央に空間、東側に捨て場とみられる遺物包含層、焼成遺構が分布した集落構成であったと考えられる。

なお、その後の谷原遺跡の調査では、1 次調査 B 区周辺の東側地区一帯（2 次調査・7 次調査）で古代の竪穴住居跡・土坑などが発見され、陶硯や墨書土器などが出土しており（註 4)、また、掘立柱建物跡と溝跡が確認された A 区周辺地区でも柱穴の掘方が方形を基調とする掘立柱建物跡などが確認されている（4 次調査・5 次調査)。これらの調査では､奈良時代まで遡る可能性のある遺構も含まれており､谷原遺跡の古代集落の様相については、周辺の調査事例も含めて検討する必要がある。今後の報告を待って、再度検討することとしたい。

(3) 中世の遺構

今回の調査区（A～D 区）において確認した中世に所属すると考えられる遺構には、A 区の SB6 掘立柱建物跡、調査区東側（B 区）一帯で確認された柱穴・ピット群がある。これらの遺構からは中世の遺物は出土していないが、B 区東端に形成された基本層Ⅲ層から中世陶器が出土したことや周辺の調査事例等から、中世の遺構と判断した。今回の調査区は道路工事に伴うもので細長い調査区だったため、SB6 以外の建物を抽出するまでに至っていない。

その後の調査では、B 区北側に位置する調査区（2 次調査/E・F 区）で、中世の掘立柱建物跡が多数発見されている（註 5)。また、A 区周辺の調査区（4～6 次調査）においても、中世とみられる遺構が確認されており、谷原遺跡の一帯には中世の集落が広がっていたと考えられる。したがって、今回の調査区で発見された建物や柱穴・ピット群については、谷原遺跡一帯に広がる中世の集落の一部を構成する遺構であったとみられる。



第70図　谷原遺跡（1次調査）平安時代の遺構配置図

第３節　まとめ

谷原遺跡は、阿武隈山地から東に延びる丘陵東側の谷原川と山寺川に挟まれた標高 17～20m の中低段丘上段の緩やかな平坦地に立地する。今回の調査（1 次調査）で検出した遺構は、掘立柱建物跡 6 棟、溝跡 3 条、土坑 16 基、焼成遺構 3 基、柱穴・ピット 167 個（掘立柱建物跡を構成する柱穴も含む）である。これらの遺構からは、縄文土器、土師器（非ロクロ成形・ロクロ成形）、須恵器、中世陶器、鉄滓、鉄製品、石器が出土した。

以下、各時代の遺構・遺物について、その要点をまとめる。

１．縄文時代の遺構には、土坑 5 基（SK4・8・13～15）・遺物包含層（基本層Ⅶ層）がある。これらの遺構は B 区東半に分布しており、出土遺物の特徴から、概ね縄文時代後期初頭前後のものとみられる。

２．平安時代の遺構には、掘立柱建物跡 5 棟（SB1～5）、溝跡 2 条（SD1・2）、焼成遺構 1 基（SX3）、遺物包含層（基本層Ⅴ層）がある。掘立柱建物跡と溝跡は調査区西側（A 区）、焼成遺構・遺物包含層は東端（B 区東端）に分布しており、出土遺物の特徴から、概ね平安時代前半のものとみられる。

３．中世の遺構には、掘立柱建物跡 1 棟（SB6）、その他の柱穴・ピット多数がある。

４．この他、時期不明の遺構が多数残されているが、これらの多くは縄文時代・平安時代・中世のいずれかの時期に属する可能性が考えられる。

（註）

1） 宮城県内において、平安時代のロクロ成形の内黒処理されていない土師器について、「赤焼土器」・「須恵系土器」等の名称で呼ばれる場合がある（桑原 1976・小井川 1984）。本稿では、原則として内黒処理・非内黒処理のものすべてを土師器として分類したが、両者を区別する際に「赤焼土器」の名称を使用することとした。

2） 村田晃一氏によれば、ロクロ成形の土師器甕の中で、外面の上半にロクロ成形段階前のタタキが認められるロクロ長胴甕は、8 世紀末から 9 世紀中頃まで認められ、時間幅がある程度限定できると指摘されている。

3） 谷原遺跡の 2 次調査（E～L 区）では、縄文時代中期末～後期前葉の環状集落が発見されている。この環状集落が発見された地点は、B 区（1 次調査）の北側の隣接地に位置しており、1 次調査で発見された縄文時代の遺構とほぼ同時期の集落と考えられる。このことから、1 次調査で発見された縄文時代の遺構は、この環状集落に関連する遺構であったとみられる（環状集落の詳細については、山元町文化財調査報告書第 13 集を参照）。

4） 谷原遺跡の 2 次調査（E 区）では、古代の円面硯 4 点、風字硯 1 点が出土している（山元町文化財調査報告書第 13 集参照）。

5） 谷原遺跡の 2 次調査（E・F 区）では、中世の掘立柱建物跡が 150 棟以上検出されている（山元町文化財調査報告書第 13 集参照）。

引用・参考文献

相原淳一 2008「阿武隈川下流域における縄文時代後期初頭の土器編年研究序説」『蔵王東麓の郷土史-中橋彰吾先生追悼論文集-』
青山博樹ほか 2000「宮城県山元町合戦原古墳群の測量調査」『宮城考古学』第 2 号
吾妻俊典 1994「多賀城跡周辺における須恵器製作技法の変化」『古代の土器研究　律令的土器様式の西・東 6　須恵器の製作技法とその転換』
阿部知己ほか 2006「上平 A 遺跡・上平 B 遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告 45』福島県文化財調査報告書第 435 集
飯村均 2009『中世奥羽のムラとマチ　考古学が描く列島史』東京大学出版会
飯村均 2015『東北中世史叢書 8　中世奥羽の考古学』高志書院
石黒伸一朗 2005「山元町の板碑と蔵王町の中世石塔」『宮城考古学』第 7 号
伊東信雄 1957「古代史-縄文文化の変遷-」『宮城県史 1』
伊藤晶文 2006「仙台平野における歴史時代の海岸線変化」『鹿児島大学教育学部紀要自然科学編』57
岩見和泰・佐藤憲幸 1991「合戦原遺跡」『合戦原遺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第 140 集
氏家和典 1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14
岡田茂弘・桑原滋郎 1974「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所
小山正忠・竹原秀雄編 1973『新版標準土色帖』2010 年版
押山雄三 2002「東北地方南部における縄文後期前葉の土器」『第 15 回縄文セミナー　後期前半の再検討』
鍛冶一郎 1971「合戦原古窯址群」『山元町誌』
加藤道男 1984「二屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅸ』宮城県文化財調査報告書第 99 集
加藤道男 1989「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』
菊地逸夫・早川英紀 1996『一本杉窯跡群』宮城県文化財調査報告書第 172 集
菊地逸夫 2003 「一本杉窯跡」『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
窪田忍 1995『狐塚遺跡』山元町文化財調査報告書
桑原滋郎 1976「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
小井川和夫 1984「いわゆる赤焼土器について」『東北歴史資料館研究紀要』第 10 巻
佐藤洋ほか 1987『六反田遺跡Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第 102 集
佐々久・志間泰治・氏家和典 1971「井戸沢横穴古墳群発掘調査報告書」『山元町誌』
白鳥良一 1980「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所
白鳥良一 1982「土器」『多賀城跡政庁跡本文編』宮城県多賀城跡調査研究所
紫桃正隆 1974『史料 仙台領内古城・館』第四巻
志間泰治 1956「宮城県亘理郡における考古学上の遺跡」『宮城県の地理と歴史』1
志間泰治 1975『亘理の古墳』
志間泰治 2007『彙報 1　歴史を掘り起こす』
鈴木真一郎・真山悟 1988『北日ノ崎窯跡』村田町文化財調査報告書第 6 集
鈴木雅 2011『西浦 B 遺跡』蔵王町文化財調査報告書第 10 集
関敦司 2004『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 3 集
仙臺叢書出版協会 1893『仙台叢書　封内風土記　巻ノ九』
仙臺叢書刊行会 1923「仙臺古城記」『仙台叢書』第 4 巻
高橋義行 2004『大貝窯跡群』利府町文化財調査報告書第 12 集
千葉正康 1993「狐塚遺跡」『狐塚遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 157 集
辻秀人 2015「山元町の復興調査成果から古代東北の歴史を考える」『古代国家形成期の地域社会-山元町の調査から-』平成 27 年度宮城県考古学会総会・研究発表会資料
東北古代土器研究会編 2005『研究報告 2　東北古代土器集成-古墳後期～奈良・集落編-<宮城>』
東北古代土器研究会編 2008『研究報告 3　東北古代土器集成-須恵器・窯跡編-<陸奥>』
東北中世考古学会編 2001『東北中世考古学叢書 2　掘立と竪穴　中世遺構論の課題』高志書院
丹羽茂 1981「大木式土器」『縄文文化の研究』4　雄山閣
丹羽茂 1982「菅生田遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅶ』宮城県文化財調査報告書第 92 集
丹羽茂 1983「宮前遺跡」『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第 93 集
丹羽茂 1985「今熊野遺跡」『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚』宮城県文化財調査報告書第 104 集
丹羽茂 1989「中期大木式土器様式」『縄文土器大観 1　草創期・早期・前期』
芳賀寿幸 1983「向畑遺跡-考古資料-」『柴田町史　資料編Ⅰ』
初鹿野博之・山口淳・千葉直樹・大坂拓 2012『西石山原遺跡ほか-常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅰ-』宮城県文化財調査報告書第 230 集
初鹿野博之 2013a「涌沢遺跡」『発掘された日本列島 2013 新発見考古学速報』文化庁
初鹿野博之 2013b「宮城県山元町内手遺跡・上宮前北遺跡」『第 39 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
初鹿野博之 2014「宮城県山元町熊の作遺跡」『第 40 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
初鹿野博之 2015a「熊の作遺跡と亘理郡南部の遺跡群」『第 41 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
初鹿野博之 2015b「熊の作遺跡と亘理郡南部の遺跡群」『古代国家形成期の地域社会-山元町の調査から-』平成 27 年度宮城県考古学会総会・研究発表会資料
初鹿野博之 2015c「熊の作遺跡」『発掘された日本列島 2015 新発見考古学速報』文化庁
初鹿野博之・三浦秋司 2015『涌沢遺跡ほか-常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅱ-』宮城県文化財調査報告書第 239 集
引地弘行 2002「館の内遺跡」『名生館遺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第 188 集
福島県立博物館 1988『三貫地貝塚』福島県立博物館調査報告 17
福島考古学会中近世部会編 2000『福島県考古学会中近世部会平成 12 年度研究セミナー　東北地方南部における中近世集落の諸問題』
福島雅儀ほか 1988「善光寺遺跡」『国道 113 号バイパス遺跡調査報告Ⅳ』福島県文化財調査報告書第 192 集
福島雅儀ほか 1996「越田和遺跡」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告 8』福島県文化財調査報告書第 322 集
藤田至則・加納博・滝沢文教・八島隆一 1988『角田地域の地質』地域地質研究報告　地質研究
藤沼邦彦・千葉孝弥 1992「宮城県の中世窯」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』
藤沼邦彦 2010「水沼窯・伊豆沼窯・三本木窯・白石窯」『古陶の譜　中世のやきもの―六古窯とその周辺―』
藤本展子・松本秀明　2012「阿武隈川付近における浜堤列の分類とその形成時期に関する再検討」『人間情報学研究』第 17 巻
古川一明・鈴木真一郎・大和幸生 1991「舘南囲遺跡」『舘南囲遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 144 集
文化庁文化財部記念物課編 2010『発掘調査の手引き-集落遺跡発掘編-』
文化庁文化財部記念物課編 2010『発掘調査の手引き-整理・報告書編-』
本間宏 1990「東北地方南部における縄文後期前葉土器群の変遷過程」『第 4 回縄文セミナーの会　縄文後期の諸問題』
本間宏 1994「大木 10 式の考え方」『しのぶ考古』10
本間宏 2008「南境式・綱取式土器」『総覧縄文土器』
松本茂ほか 2005「上平 B 遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告書 41』福島県文化財調査報告書第 428 集
松本秀明 1984「海岸平野にみられる浜堤列と完新世後期の海水準変動」『地理学評論』57

馬目順一 1968「綱取貝塚第四地点発見の堀之内Ⅰ式土器の考察」『小名浜』
森幸彦 2008「大木 9・10 式土器」『総覧縄文土器』
宮城県考古学会編 2010『平成 22 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2011『平成 23 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2012『平成 24 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2013『平成 25 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2014『平成 26 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2015『平成 27 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県企画部土地対策課編 1988『土地分類基本調査　角田』
宮城県史編さん委員会 1970「仙台領古城書立之覚」『宮城県史』32　資料編 9
村田晃一 1992「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』
村田晃一 1994「土器からみた官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』
村田晃一 1995「宮城郡における 10 世紀前後の土器」『福島考古』第 36 号
村田晃一 2007「宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成 15-18 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書
柳澤和明 1994「東北地方の施釉陶器」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東３　施釉陶器－』
山田隆博 2008『企画展図録　亘理郡の古墳時代』山元町歴史民俗資料館
山田隆博・村上裕次・山口淳 2010『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 4 集
山田隆博・藤田祐・佐伯奈弓 2013『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 5 集
山田隆博・藤田祐・佐伯奈弓 2014『的場遺跡』山元町文化財調査報告書第 6 集
山田隆博・藤田祐 2014『石垣遺跡』山元町文化財調査報告書第 7 集
山田隆博・丹野修太 2014『日向北遺跡』山元町文化財調査報告書第 8 集
山田隆博・藤田祐 2015『日向遺跡』山元町文化財調査報告書第 9 集
山田隆博・藤田祐・佐伯奈弓 2015『中筋遺跡』山元町文化財調査報告書第 10 集
山田隆博 2015a「山元町中筋遺跡の津波痕跡」『宮城考古学』第 17 号
山田隆博 2015b「山元町の復興調査と合戦原遺跡の横穴墓群」『古代国家形成期の地域社会-山元町の調査から-』平成 27 年度宮城県考古学会総会・研究発表会資料
山田隆博 2015c『小平館跡Ⅰ』山元町文化財調査報告書第 11 集
山田隆博・藤田祐 2016『谷原遺跡Ⅱ』山元町文化財調査報告書第 13 集
山内清男 1937「縄文土器型式の細別と大別」『先史考古学』1 巻 1 号
山元町史編纂委員会編 1971『山元町誌』
山元町史編纂委員会編 1986「中島貝塚」『山元町誌 二巻』
吉岡恭平 1996『下ノ内浦・山口遺跡』仙台市文化財調査報告書第 207 集
吉野武 2015「熊の作遺跡出土の木簡と墨書土器」『第 41 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
吉田泰幸 2003「縄文時代における土製栓状耳飾の研究」『名古屋大学博物館報告』第 19 号
吉田泰幸 2007「福島県大日平遺跡出土の縄文土器と土製腕輪」『名古屋大学博物館報告』第 23 号
渡邊義顯 1917『亘理郡史』
亘理町教育委員会 1997『堀の内遺跡』亘理町文化財調査報告書第 7 集
亘理町教育委員会 2015「三十三間官衙遺跡と周辺の遺跡群」『第 41 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』

報　告　書　抄　録

ふりがな	たにはらいせき
書名	谷原遺跡
副書名	町道24号山下山寺線道路改良工事に係る発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	山元町文化財調査報告書
シリーズ番号	第12集
編著者名	山田隆博
編集機関	山元町教育委員会
所在地	〒989-2203　宮城県亘理郡山元町浅生原字日向12-1　電話0223-37-5116
発行年月日	平成28（2016）年5月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
たにはら 谷原遺跡	みやぎけん 宮城県 わたりぐん 亘理郡 やまもとちょう 山元町 やまでらあざ 山寺字 たにはら 谷原	043621	14067	37度 58分 05秒	140度 52分 06秒	2008.10.21 ～2008.12.18	1,885㎡	町道24号山下山寺線道路改良工事に係る本調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
谷原遺跡	散布地	縄文時代	土坑	縄文土器・石器	土坑5基（SK4・8・13～15） 遺物包含層（基本層Ⅶ層）
	集落	平安時代	掘立柱建物跡、溝跡、土坑 焼成遺構	土師器・須恵器	掘立柱建物跡5棟（SB1～5） 溝跡2条（SD1・2） 焼成遺構1基（SX3） 遺物包含層（基本層Ⅴ層）
	集落	中世	掘立柱建物跡、その他ピット	中世陶器	掘立柱建物跡1棟（SB6） ピット多数
	―	時期不明	土坑、溝跡、焼成遺構	縄文土器・石器・土師器・須恵器	（縄文時代以降） 土坑3基（SK6・7・16） 焼成遺構1基（SX1） （平安時代以降） 溝跡1条（SD3） 土坑7基（SK1～3・5・9・10・12） 焼成遺構1基（SX2） （時期不明） 土坑1基（SK11）

要約

谷原遺跡は、宮城県亘理郡山元町山寺字谷原に所在し、山元町役場の北北西約1.0kmに位置する。遺跡は、阿武隈山地から東に延びる丘陵東側の谷原川と山寺川に挟まれた標高17～20mの中低段丘上段に立地する。遺跡の範囲は、東西220m、南北140mほどの広がりをもち、遺跡の時期は縄文時代～中世にわたる。

今回の調査（1次調査）で検出した遺構は、掘立柱建物跡6棟、溝跡3条、土坑16基、焼成遺構3基、柱穴・ピット167個（掘立柱建物跡を構成する柱穴も含む）である。これらの遺構からは、縄文土器、土師器（非ロクロ成形・ロクロ成形）、須恵器、中世陶器、鉄滓、鉄製品、石器が出土した。

縄文時代の遺構には、土坑5基（SK4・8・13～15）・遺物包含層（基本層Ⅶ層）がある。これらの遺構はB区東半に分布しており、出土遺物の特徴から、概ね縄文時代後期初頭前後のものとみられる。

平安時代の遺構には、掘立柱建物跡5棟（SB1～5）、溝跡2条（SD1・2）、焼成遺構1基（SX3）、遺物包含層（基本層Ⅴ層）がある。掘立柱建物跡と溝跡は調査区西側（A区）、焼成遺構・遺物包含層は東端（B区東端）に分布しており、出土遺物の特徴から、概ね平安時代前半のものとみられる。

中世の遺構には、掘立柱建物跡1棟（SB6）、その他の柱穴・ピット多数がある。

この他、時期不明の遺構が多数残されているが、これらの多くは縄文時代・平安時代・中世のいずれかの時期に属する可能性が考えられる。

山元町文化財調査報告書第 12 集

谷　原　遺　跡

－町道 24 号山下山寺線道路改良工事に係る発掘調査報告書－

平成 28 年 5 月 31 日発行

発　行　山 元 町 教 育 委 員 会
宮城県亘理郡山元町浅生原字日向 12-1
TEL0223-37-5116／FAX0223-37-0119

印　刷　株式会社　東 北 プ リ ン ト
宮城県仙台市青葉区立町 24-24